
燈屑の街

がいあとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

燈屑の街

【Nコード】

N5207F

【作者名】

がいあとな

【あらすじ】

僕「八代椎奈」は靈感なんてない人間だった。少なくとも小さい頃に人外の何かを目に入れたなどというおぞましい記憶は僕にはない。せいぜいテレビの特番でやっていたUFO特集を見て「馬鹿馬鹿しい。」などという冷めた感想を持つ程度の今時の、大人受け最悪な子供だった。目の前の現実には、全て空疎な嘘の塊からできているとわかっていたからかもしれないし、そうじゃないかもしれない。だからとりわけ、『そういうもの』に対する願望ってやつは大きいものだったのだろう。――その夏。僕が出会った出来事は実に『そ

ういうもの
『だっ
た。』

幕間（前書き）

タイトルの読み方でいきなり苦勞なさるかもしれません。
作者はこういう子供じみた造語を造るのが好きなのです。
これで「とうせつのまち」と読ませようという意図があったり、な
かったり。

幕間

……そういえばさあ、八代。そうそう、あの八代。期末また一位だったよ。

また？ あいつ入学してからずっと一位じゃね？
なんかもう俺らとは次元が違うよな。

なんでこの学校にいるんだ？

さあ、だって他の高校受けなかったんだろ？
『天才』の考えてることは凡人にはわからん。

スポーツもできるんでしょ、ちよつと懂れちゃうなあ。

そーお？

確かに表面は社交的だけど、
心の中では私たちを見下してるんだよ、ああいうタイプはさ。

孤高の天才って感じ？
確かにちよつと気取ってるよね。

聞かれても点数とか答えないのもムカつくー。
結局ほとんど一位なくせにさーあ。

本当なんでこの学校いるんだろうね。

ねー。

そういう会話は本人のいないところでするものだ。

「なんの話してるの？」

静かに後ろから声をかけると、ひそひそ話に花を咲かせていた数人の男女は幽霊でも見たような顔をして散り散りに教室を出て行った。

1. プロローグ

ベクトル。

それは、大きさと向きをもった量である、と学校では習った。

勿論そんな数学的に幾何学的で非日常的な日常的事項に文句をつけたいわけではない。とりあえずのところ僕の知識でこれを活用しようと思えば、僕らの人生ベクトルは常に未来を向いている、といった感じに収まるのだろう。しかし例えば、簡素な数直線上に過去と未来を表せるとして、僕らは今どのあたりにいるということになるのだろうか？

ベクトルはどこにでも存在するし、その矢印の先がどこへ向いていようと、誰からも何も文句を言われることがない。比べて、数直線という概念を持ち出そうとすれば、そこには必然であるかのように相対性が付きまとう。こんなものは僕ら人類が地球なんていう座標上にいるからのステレオタイプの固定観念にすぎないのだろうけれど、僕らはあらゆる意味で自分の位置を特定するのに絶対座標を用いることがどうしても出来ない。人間は常に基準となる何かを、いつてもどこでも必要としているし、仮に今この瞬間唐突に『完全なる絶対性の世界』に放り込まれば、自分が自分であることさえも脆く崩れ去るだろう。多くの人間は、既に絶対的な相対性を獲得してしまっている。

ありていに言えば、時間軸だけを取り出して数直線にしてみたところ、所詮僕らの相対感覚は閉じている。

例を持ち出せば、時計が既にそうだ。

時計は常に時を刻むが、時を刻むということが既に相対性の究極である。一秒前を基準にし、基底にして、その時を刻むという躍動によってしか、僕らは時間を具体的感覚をもったものとして得ることはできない。デジタルにしる滑らかに動き続ける秒針にしる、それは同じことである。

その点ベクトルとはそういう相対性に縛られないのかといえば、全然そんなことはない。話のバイアスがものすごい勢いで四方八方に散々してしまっているが、そこはご愛敬。

畢竟。

ベクトルなんてものはマイナス記号をつけるだけで一瞬でその本質をガラリと変えてしまう。

そういうことだ。

僕の人生はこの夏。

数直線において相対性を失い、そしてそのベクトルも全くの逆ベクトルになってしまったと。

そういうことなのだ。

「おーい、起きろ」

上から降ってきたその声に反応、瞼の持ち上げが間に合わないまま立ち上がった僕は勢いよく天井に頭をぶつけ、頭蓋骨が立てた鈍い音を耳にする。決して快いとは言えない音を。

「や、八代椎奈、起きてます、ちよつと瞑想してただけで……」
教師に対する弁明の意を口から滑らせつつ、頭上感覚に違和感。天井にしてはずいぶんごつごつしている。

「授業中に瞑想してただなんて言い訳が通じるのはまあ、お前くらいだろうよ」

聞き覚えのある低い声。ていうか、あれ……これ本当に天井か？
「教室の天井がこんなに低かったら俺は入学初日から授業をボーコットだ、間違いなくな。……おい、いい加減目を開けろ」

その言葉に対して若干不興な唸り声を小さく上げてから、僕はゆっくりと目を開く。結果、僕が天井だと思ったものは、ねぼすけの頭を起立の軌道上で待ち構えていた人間の握り拳だったということ。が判明した。中指と薬指にバンドエイドが巻いてある。それを頭皮で感じれば、先ほどの声と合わせて、例えば顔を見なくてもそれが誰

のものであるかはすぐにわかった。クラスメイトの関田かんた 寛坊ひろまちだ。頭に乗った拳はそのままに見上げると、それなりに整った（崩れてはいない、という程度の意味だが）顔が見慣れた笑い顔でこちらを眺めている。

一メートル九十センチ以上はあろう高身長に、如何にもごつい筋肉質な体躯。半そでのカッターから覗く腕は、なんとも筋骨隆々としている。柔道部故の体型なのだろう。ついでに、スポーツ刈りに丸められた頭は、小学生から続くこいつのスタイルだ。

「……何時？」

一つ欠伸を打ちながら、僕はぼうと考える。が、寝起きの頭で状況を把握するのはどうにもめんどくさいので、視覚情報以外のことは関田に聞くことにした。

「一つ教えてやろう。今は授業中じゃない」

持って回る言い方をしてくれる。

となると、今は休み時間だろうか。だったらわざわざ起こしてくれることもあるまいに。

「もう一つヒントをくれてやるよ。今は休み時間でもない。ていうか、周りを見ろ、俺とお前以外に生徒はいないだろうが」

ん、じゃあ僕って今登校してきたところだったのかな。そう言われればそうだったような気はしてくる。つまり関田は授業が始まる前に起こしてくれたのか、そうなるかとありがたい。確かに、教室は朝焼け気味の色に染まっている。

いや、でもそれだとやっぱり生徒がいないのはおかしくないか。とか思い始めた時である。

『五時です。校舎に残っている生徒は速やかに下校してください。五時です……』

校内放送の滞りのない流暢な発音を右耳から左耳へ聞き流しつつ、流水の中に放り込まれたスポンジが少しずつ水を吸いこんでいくように、僕の頭にもゆっくりと涼しく澄んだ初夏の空気が回り始めて。「なんだって？」

僕は体中の血が音を立てて秒速5センチメートルくらいで退いていくのを感じた。

「五時だ。午後のな」

関田があっけらかんと述べる。待てよ、そうだ、今日は金曜日じゃないか。授業は六時間目までだから、終わったのが三時過ぎ。ということは、だ。

「僕は三時間くらい寝てたってことか」

「さらっと六時間目丸々寝てました、って言ってんじゃねーよ！一瞬考えちゃっただろうが！」

さらに強く頭にグーが押し付けられる。その痛みを皮切りに、やってしまった、という感覚が隊列を組んで押し寄せてきた。まさか授業中に夢の世界で遊んでいたなんて、僕の人生に最大の汚点を穿ってしまったのと同義である。大体、僕の席は教室の中でも前から二番目の席と夢の世界に居れば目立つほうなのだ。先生でも生徒でもよかったのに

「何で誰も起こしてくれなかったんだろう……」

「ばーか、六時間目はホームルームだ」

言われて、急速に記憶がよみがえる。そうか、そういえばそうだった。なんだ、よかった。それなら別に寝てても問題はなからう。と一安心したところで、思考が一巡し、六時間目の始めのものと完全に一致した。そしてここで思い出したことがもう一つある。

「僕は文化委員だった気がするけど」

「気がするけど。じゃねえ！ 誰もお前を起こさなかったのは、みんながみんな、お前が頼りにならないことを知っていたからだ」

理不尽な話だな。

「理不尽でもなんでもねえよ、当然だろうが」

授業が終わったのに起こしてくれないというのはさすがにどうかと思う。いくら帰宅部とはいえ、時間を無駄にし無為に過ごすことを好むほど八代椎奈という人間は堕落していない。なんて、僕は自分の責任は棚に上げて口に出さずに毒づいておいた。とはいえ、こ

ういう経験はすでに二、三度繰り返しているのもう慣れてしまっている。それはそれでどうなんだか、とも思うが。

六時間目のホームルームは確か文化祭のクラス展示物について、だったかな。僕は思考のルールを本線に戻すと関田の拳を手で払い除け、椅子に座りなおして黒板を見た。

関田のへたくそな字でいくつか挙げられている候補のほとんどには落選を示すバツ印が赤色のチョークでつけられている。残っている一つはこれ。

「『トランプ』？」

文化祭の展示物と、トランプ。互いに等号関係で結ばれるには些かジャンルが違う気がするのだが。僕の頭の上にハテナが浮かんでるのを見てか、腕組みをして僕の傍らに立つ関田が補足説明をしてくれた。

「絵の得意なやつがクラスの全員の似顔絵をトランプの図柄に合わせて描いて、それを展示するんだそうだ。勿論それだけじゃクラスの出し物じゃなくて個人展示と変わらんから、塗りは本人がやれということらしい」

ふうん。馬鹿馬鹿しいな、君が塗ってくれるか？

「今日お前と畑中の代わりをした人間が一人ここにいるんだが、そのことについてどう思う？」

うん、そうだな、だったらそいつは素晴らしい人間だ。よし、わかった。

「わかったからその臨戦態勢にある危なっかしい握り拳を僕の視界から消してくれ！」

「そうしてほしければもっと口を慎むことだな、このジョーカーめ」
僕の耳に違和感のある単語が一つ引っ掛かった。

「ジョーカー？」

思わず聞き返すと、関田は少し真剣な顔で咳払いをひとつして、バツが悪そうに左手のカバンを肩の上に持ち上げる。そんな呼ばれ方をされたことは今まで一度だってないし、されるような覚えも一

応ない。

「つてのは、まあ、なんだ。お前のことだ。出し物がトランプって決まったとき、クラス中でジョーカーは八代に決定だな、ってさ」

僕はすぐさま滑稽な恰好で一輪車を乗りこなすピエロを頭に思い浮かべた。だが、どう考えてもそういう意味での形容ではなさそうだ。

なるほどね、ジョーカーか。

「いいんじゃないか？ ジョーカーってのも」

僕が平坦にそう述べる、関田は一瞬驚いたようにもみえたが、すぐにいつもの笑い顔に戻ると言った。

「……そうかい。まあ、お前も起こしてやったし、俺もそろそろ部活行くとするかな」

そういえばお前何で教室にいるんだ。

「俗にいう補習ってやつだな、三須にえらく絞られた。こないだのテスト赤点だったし。そもそも俺は日本人だから英語は向いてないんだよ」

一応僕も日本人だけだな。

「……だからというかなんとか、お前を起こしてやったのはついでだ、気まぐれだ。目覚めの景色が夜じゃなかっただけ、ありがたく思うことだな」

それは本当にありがたい話だな。

「ありがとう」

僕の礼の言葉が聞こえるか聞こえないか、関田は自分のセリフを言いながら既に教室を出かけていた。結局、本当に気まぐれで僕を起こしてくれただけらしく、彼には奉仕の精神など欠片もないようだ。

もともと期待もしていなかったが、窓の鍵も閉めず黒板も消されていない。僕は確認の為に黒板の端に目をやったが、今日の日直はどこからどう見ても関田だった。自身の責任を全うできていないのは関田も同じじゃないか。

どうやらこの職務怠慢は、僕と畑中の代わりにホームルームを進行してやったのだから日直の仕事くらいは僕が代わりにやっておけ、という嬉しくもないメッセージだと受け取るかなさそうである。このまま休み明けまで放っておいて、書かれた文字が消えにくくなった黒板を担任に見つかる関田を想像するのもなかなか興味深かったが、結局そのあと僕に二次災害（主に打撲等）が起ることを考えるとそれは想像だけに止めておくのが賢明だろう。それに物事はギブアンドテイクだ、僕だって社会的道理くらいは弁えている。

起きてすぐ関田と話したおかげか、不自然な体制で寝ていた寝起きの気だるさは思いのほか少ない。僕は首を左右に捻った後、机の横に下げられたカバンを取ると、雑事に取り掛かった。

ジョーカーか。

五十四枚組のトランプデッキに、大抵は二枚ずつ組み込まれている特殊なカード。多様に使用され、有益にも有害にもなり得る。もつともその実、大半のゲームでは使用されることもなく、時には『ババ』として扱われ、忌避され。ジョーカーが最上位になるゲームだろうと、ジョーカーを持つプレイヤーが非難の目で見られることもしばしば。まあ、これはさすがに被害妄想かもな。

「……」

僕は『天才』という言葉が大嫌いだ。

『天才』なんて言葉はいつたい誰が作り出したのだろうか。結局今の世の中でその言葉は本質を見失っている。

天才は結果から作り上げられ得るのだ。

たとえば、全く新しいスタイルで練習とプレイを積み重ね、世界の頂点に輝き、その世界の常識を一新したスポーツプレイヤーがいたとして。その彼が天才と称賛されたとして。では逆に、そのプレイヤーが成功を収めることができていなければ、どうなる。

その場合、やはり彼は異端として扱われる他はない。天才どころか、実験的ギャンブルに身を投じて身を滅ぼした馬鹿、として扱われるかもしれない。そもそも、世間に取り上げられることすらもな

いだろう。

失敗か、成功か。結局問いの答えは結果にすぎない。失敗してしまえば、中で何が行われているか、そんなものに興味を放つ理由もない。そしてそんな結果から、天才はいくらでも作られ得る。成功をはじき出したブラックスボックスだけを拾い上げて、『天才』にしよう。今の世の中は、そういう世の中だった。

その世界に生きている僕らにとって、それではそんな言葉のどこに栄光がある？ 勿論中には本物の天才もいるだろうが、そんなものは一握りだ。大半は贋作。つまるところ。

『天才』とは、天才の為の言葉ではない。

『天才』とは、凡才の為の言葉なのだ。

『天才』とは、逃げの為の言葉なのだ。

自分たちの怠慢を、才能のせいにして、あるいは『努力の天才』などと称して、自分たちでは決してたどり着けないというラベルを掲げられた架空の立ち位置に、多少の能力を備えた人間を勝手に置いておくことで。

逃げる。逃げられる。逃げるができる。

どんな手段を使っても超えることのできない壁が目の前に立ちほだかれれば、あるいは自分とその人間はそもそも同種の生物じゃなかったとすれば。そんな感じの絶対的な理由があれば。自分が出来ないという事実を「しょうがない」ことにしてしまえるから。努力じやどうにもならない才能が、自分にはなかったと、悲観して、自分に同情して、同情されて、そういう人間同士で集まって傷口を舐め合う理由にして。

逃げる為の、言葉なのだ。

所詮『天才』なんて、そんな言葉でしかない。

だから僕は『天才』という言葉が大嫌いだ。

僕は黒板消しクリーナーの騒音がかき消してくれるのをいいことに、独り言を言ってみた。

「鶏と卵だな」

ジョーカーは？

ジョーカーはどうだろう。

黒板消しをもとあった場所に戻し、今度は窓のかぎを閉めて回る。もう暗くなりつつある校庭では、数人が走りながらサッカーボールを奪い合っていた。

「……ま、ババ抜きに便利なカードってところか」

今までの人生でつぶやいた独り言の中でも最高につまらない独り言だった。僕は言うてから、センチメンタルにすらなりきれなかった自分に対して、僕しかない教室で一人、苦笑した。

帰ろう。

綺麗になった黒板をもう一度眺め、僕は夕闇に染まる窓に背を向ける。

僕が僕であるべき世界に背を向けてしまったことにも気付かずに。そんな時だった。始まりの音が鳴ったのは。

キィ————ン

すべて深い青で統一されたブックカバーが並ぶ本棚の途中に、一冊だけ真っ赤な本が無理やり差し込まれた。最初はそんな違和感だった。遅れて全身の汗腺が開いて汗が吹き出し、さらにそのあと、それが「音」なのではないかと僕は疑いはじめた。

疑い始めた？ 音、じゃないか。それは確実に音だった。音、だった……。

音だったのか？ そうじゃなかったら、何なんだ。

何だ、今のは？

キィ————ン

つまた！

脳髓を直接ガンガン揺らす得体のしれない、縦揺れとも横揺れと

もつかぬ振動。脳みそがぐちゃぐちゃに溶けてオレンジ色の液体が今にも耳から流れだしそうな、そんな強烈な不快感と疼痛が僕を襲い続ける。決して音じゃない、音じゃないけど、音に限りなく近い何か、八代椎奈という存在にどこかの隙間から入り込んで、内側から僕を破裂させようと蠢いていた。いつもの教室が目の前でぐちゃりと歪み、何回転もするように僕の視界を揺らす。

いつの間にかそばにあった机に左手を突いていた。カバンは床に落ちている。

わからない、なんだこれは。分からない。

もう片方の空いた手が頭に信じられないほど強く押し当てられて、その痛みが内側からくる疼くような感覚を、ギリギリのところで打ち消そうとしていた。

気持ち悪い。

これは一体何なのかとか、何の超常現象が起こっているのかとか、これは自分の体の中だけで起こっている自分の命を奪う何かなのだろうかとか、そんなことは一ミリだって考えられないように脳の構造がすべて変えられていたのかもしれない。僕の思考回路が色と光をどんどん失っていくのが分かる。

ジリジリと瞳の奥が焼けて、目玉が涙のように零れ落ちる。額に当てていた掌が焼けるように熱い。服を着ている感覚が全くない。全身から煙が立ち上る。溶けていく。

僕が僕じゃなくなっていく。

もう、駄目かもしれない。そんな考えがふと脳髓に突き刺さったと思ったら。

キィ—————ン

繋がった。

三度目のそれは、一気に僕を、僕の意識を現実に近いところへと引き戻した。高波が打ち寄せた後引いて行く時の如く、今までの不

快感がたちの悪い嘘であったかのように連れ去られていく。僕の身体が、形を取り戻す。

「……何だ……？」

繋がった――あまりに自然に、言語化されたモノローグ。

確かに感じた、繋がった、と。……何とだ？

――見つけた。

今度は、音と認識できるものが僕の頭の中に響く。僕はその現象に、必要以上に反応し、全身を震わせるが、どういうわけか不快感は微塵もない。淡い光が足元から僕を包み、暖めてくれているような。そしてふわふわと浮きあがってしまいそんな神秘的な感覚。

声。

これは声だ。細く、柔らかく、小鳥がさえずるような声。これは他の人間にも聞こえているのだろうか？ そうだとしたら他の人間もさっきの音を聞いたのだろうか。

考えるべきことはいくらでもある。今が緊急事態だというのわかる。

「君は――誰だ？」

だけど気付けば、僕はその声に返事を返してしまっていた。

心だけが取り出されて、まるで宙づりにされてしまっていた。その僕の心になんじがらめにされたロープの先に、この声の持ち主がいる、確かに絶対、繋がっている。それは根拠のない自信で、確信だった。

そして僕は急に懐かしくなって。なんでだろう、なんでそんな気持ちになったのかはわからないけれど。

その誰かに、会いたくなった。

それだけが放課後の教室で僕を未知へと突き進めていた。

――美術準備室。

しかし、僕の期待に反してその感覚はあつという間に終わった。心地よい気分は急激に冷めてゆく。女のような、あるいは子供のようなその声は一つの単語だけを告げて僕との繋がりを断ってしまったのだと、僕は数瞬の間を経て意識する。

ハッとした。

頭を左右に振って、脚にちゃんと力が入ることを確認する。僕は支えにしていた手でカバンを拾い上げ、ひどく崩れた髪を整えた。ひとつ大きく深呼吸をして、手首で脈を確かめる。どうやら僕はまだ、生きているらしい。滑稽な行動だったが、今の現象が少なくとも僕に、明確な死のイメージを抱かせたというのは決して間違いではない。

「……なんだったんだ、今のは」

僕は自分の中に残る僅かな嫌悪を吐き捨てるように呟いた。そしてしばらく、ぼうっと立ち尽くす。

何もかも根こそぎ削り取られるような、正体不明の衝撃。

なんだったんだろうか、本当に。

意味が意義が趣旨が内容が、本質が本性が本体が実体が、見えな
い、分からない、解せない。

限りなく遠くて、この上なく近すぎる。

どうしようもなく日常で、あまりにも非日常。

そんな、何か。

僕は何度か深呼吸して気持ちを落ち着かせるよう努力してから、誰もいないはずの教室を見渡した。いや、やはり誰もいない。ここには、僕一人だけ。騒がしい友人も喧しい担任も、誰一人として僕の孤独に終止符を打ってはくれない。和気藹藹が危機一髪で、合縁奇縁の一人芝居。

「……いや、落ちつけ」

意味わかんないこと言ってるぞ。

僕は軽く放心状態だ。

無理やり心臓を握りつぶすようにして、考える。まずは連絡。誰かに助けを求めよう。いや、僕は生きている。助けというのは少々変だ。単純に、誰かとコンタクトをとれさえすればいい。

こういう時に携帯電話を持っていないのはすこぶる不便だった。普段はとてもしゃなく必要だとは思えないものではあるが、備えあれば憂いなしとはよく言ったものだ。

どちらにしろ階段を二階駆け降りて廊下を少し進むだけでそこにはまだ職務中の職員が何名もいる。彼らに事の詳細を聞き、返答次第では僕が病院へ足を運べばいいだけの話だ。そうだ、それだけだ。考えるのはそれからでも遅くない。

不良グループ同士での大規模な喧嘩があった、と言っても通じそうな程散乱した教室の机を、なにをどうすればこんなことになるのかと自分でも驚きながら正常な配置に直し、僕は教室を出た。だけど。

すぐに階段を降りる気にはならなかった。

「美術準備室……」

自分にしか聞こえない声でその単語を繰り返す。

体が内側からじわじわと熱くなってくる。

さっきとは違う熱さ。これは嫌いな熱さじゃない。僕の足は自然と職員室から離れていく。

気になる。気にならないはずがない。

「新手のテロだったりしてな」

言ってから、その言葉のあまりの現実感のなさに、僕は少し笑った。全然、そんな感じじゃなかったからだ。ヘタをすれば、神様なんか生まれて一度も信じたことのないこの僕でさえ、あれは神の啓示だった、とでも言ってしまうような、さっきのはまるでそんな類のものと思えなかった。

教室を出て正面に伸びる渡り廊下を進み、突き当たりで右に曲がればすぐそこに美術室がある。美術準備室はさらにその隣、まだ木造の旧校舎の一番端っこだ。そこに着くのにはゆっくり歩いて三

分とかからない。そして歩みは無意識のうちに早くなる。それにつれて、心臓の鼓動がどんどん速くなる。

理由は分からないけど、体から飛び出していきそうな自分の興奮を押さえつけることが、できそうにない。逆にどういわけか気分は驚くほどスッキリしている。先ほどの痛みや苦しみはまるつきり冗談であつたのではないかと、簡単に言葉にできそうだった。いっそそう言ってしまうえば僕は割り切って、職員室を訪ね、そして入院を決めていたのかもしれない。

だが現実はそのはならなかった。

コンクリートを打つ足音が木を打つ物に変わっているのに気づいた時、僕は既に美術準備室の古めかしいドアの前だった。そして僕は一つ息を吸った後、ほとんど躊躇いもなく美術準備室のドアを開けた。

そこにはそこにあるのが当然とでも言いたげに。

銀色の草原が広がっていた。

「……………」

絶句して、一歩だけ進んで、啞然として、再び絶句した。風が吹き抜けると地平線まで草が棚引く様がよく見える。白銀の光沢を目にしたのも勘違いではなかった。間違いなく銀色の草で覆われた地面に、空は橙色の光で満たされている異様で異質な空間。

ボタン。

無意識のうちに後ろ手にドアを閉めてしまい、僕はひどく後悔し、狼狽した。

たちまちのうちに、影も形もなくドアが消えている。

僕の前後左右にはただただしろがね色の草だけが広がっていた。見たことも聞いたこともない場所に一人取り残された不安から、ドアがあつたと思われる場所に何度も手をやる。僕の手はその度に空を切り、傍から見ているればパントマイムの練習でもしているようなユーモラスで微笑ましい光景にでも見えたかもしれない。

どうもここは美術準備室ではないようだ、僕はざわめく草の中に

立ち尽くしながらぼんやり考えた。

明らかに思考が麻痺している。

僕を惑わしている原因は、さっきのひどい不快感と種類こそ違うが、系統は同じもののように思えた。そこまで分かっているのに、頭は働く兆しを見せてくれない。狼狽も不安も再び吹き飛び、奇妙な安心感が僕の心を満たしている。それは寝起きの感覚とよく似ていた。起きようと思っっているのに、起きられない、体が動かない。そんなまどろんだ感覚。

周囲にはたくさん木があって、それらの木がつけている葉もこの空間の他の植物と同じ、例外なく銀色に発光している。こんな場所が校内にあったのか？

そしてそこには誰もいない。いないのに、人の気配は感じられないのに――声は僕の耳朵を打つ。

――手をだしなさい。

気がつけば右腕が僕の意識とは全く無関係に、何か他の見えない存在の手によって、空高く持ち上げられていた。目線の位置でそれは停止する。

――少し強引だが、許せ。

「え？」

次の瞬間、手首が燃えるような熱を帯び、そこから強い光が放射状に放たれた。

――あなたがセイサンシャなのだから。

まるで灼熱で熱したばかりの鉄を押し当てられたような熱はとっくに骨まで浸透していて、この不思議な空間のすべてを満たすかの

ような勢いで手首からの光はさらに強く、眩しくなり、四方八方に輝きを放射し始める。

「―――！」

熱さに耐えられなくなるよりも先に、僕はそれを直視していることができなくなり、自分のものとは思えない獣のような叫び声をあげながら顔をそらして目をつむった。だが肝心の右手を下げるのが、どうしてもできない。ものすごい力で何者かに掴まれて身体をどれだけ暴れさせてもびくともしない。

セイサンシャとはどういう意味なんだ？

――意味はわかる、いずれ、きっと。

その声が再び僕から離れようとしているのを唐突に感じた僕は焦り、手首の焦げるような熱さと痛みを我慢して目を見開き、前を向きなおして叫んだ。

「待ってくれっ！」

「何を待って？」

二年二組の教室の自分の机で、僕は不自然に右手を高々と掲げたまま大声をあげていた。

「か、関田……？」

教室を満たすのは、静寂のみ。僕がいて、関田がいた。立ち位置もさつきと同じ。

僕は関田と眼を合わせたまま、ぎこちなく右手を懐に引っ込める。「……あー、えー、部活に行ったんじゃないのか？」

傍らに立ち、時々声のひっくり返る科白を吐く僕を、明らかに不審そうな眼で見ていた関田は、その白い眼差しを僕から一瞬たりとも外さないまま、祈りをささげるようにして両手を胸の前でがっちりと組んだ。

「私はここにいるわよ、椎奈。部活も終わって帰ろうという時に教室からあなたの叫び声が聞こえたからまた戻ってきたの」

「関田、気持ち悪い」
即答した。

「……正直でよろしい」

「……ころなしか、彼はショックを受けているようにも見えたが、まあそれはどうでもいい。」

一呼吸おいて、僕は関田に背を向ける形で机の上に腰を落ち着けた。それを見た関田が、何があったのかと言いたげな顔で僕を見つめてくる。

「椎奈よお、今何時だと思っうね？」

僕はそれを聞くことが何故だかとてもなく恐ろしく感じ、そしてこういう時に限り、僕の直感は大抵当たるわけで。僕は問いに対して答えを返さず、だんまりを決め込む。それを見かねたのか、関田は時間を置かずにそのアンサーを口にした。

「六時だ。勿論夜のな。教室で叫び声上げるには少々適切でない時間だなあ」

時計を見上げると、確かにその短針はアラビア数字の六を少し過ぎたところを指している。教室も先ほどよりずっと暗い。

「……マジか」

「さっきの冗談に比べりゃ限りなくマジだな。むしろお前がマジに正気かどうかを俺は疑おうと思ってるところだが、まずそれについてお前自身の意見を聞かせてもらおうか？」

僕は力なく首を横に振って、右手を額に当てた。例え逆立ちして眺めてみたところで、何をどう見てもここは二年二組の教室だ。いつの間にか僕は元の位置に戻ってきているのだ。不可思議な時間はずっと終了していた。

何だ、これ。

何が一体どうなってるっていうんだ？

「そうだな、僕は気が狂ってるのかもしれない。だから一人にして

くれないか、気持ちの整理が必要なんだ」

それを聞いた関田は変に勘違いをしたようで、

「おお友よ！　そういう時は一人のため込まない方がいい、勉強も出来て運動も出来て、その上顔がよくたって、振られることはある。ドントマインド、気にするな。飯行くか？　今日くらいは奢ってやつてもいいぜ」

うん、違う。君はクイズ番組の早押し問題でまだ問題文が読まれていないのに回答ボタンを押してしまったのと同じくらいの過ちを犯したと考えていい。

「違う、っってお前。帰宅部で勉強机がお友達みたいな奴が放課後の教室で六時過ぎまで馬鹿みたいに残るのに他にどんな理由が……ん？」

僕の右手首を見て、関田は目を丸くした。――右手首？

「ははあ、なるほどなるほど。一方的にプレゼントだけされて逃げられたと、そうだな？　凶星か」

腕を組み大げさにうなづく関田。

「なんだかんだいってモテるんじゃないか、俺も親として嬉しいぞ椎奈」

だれがいつお前に育てられたっていうんだ、ふざけるな。それよりもプレゼントってなんのことだ？　僕は恐る恐る自分の右手首を凝視した。凝視するまでもなかった。

「……なんだこれ？」

「おいおい、なんだこれ？　じゃねえだろうが」

とかなんとか言い残すと、関田は僕の肩を二回叩いて無駄にいいスマイルを残し、無言で教室を出て行った。それはそれでとりあえずはいいとして。

僕は混乱した。

僕の右手首に幅三センチ程の、青い半透明の腕輪がはめられていたのだ。

こうして僕は、すべての意味がわからないままにそれまで思い描

いていた人生の設計図を捨てることを余儀なくされた。

それが夏の始まりで。

それがすべての始まりで。

それが六月三十日の出来事だったことを、僕はたぶんずっと覚えていたのだろう。

そしてその悪夢のような現実がまだまだ続くということを知り、その時の僕は知る由もなかった。

2. 始まりの始まり

夕空は見た目にはまだ大分赤く照っているものの、電気の点いていない教室は東向きなので、既にほとんど「真っ暗」と形容して有り余るまでの暗さになっていた。僕は再び椅子に座る気にもならず教室の外に出る。そして夜になって点灯された薄明かりの下、教室の壁を背もたれにして初夏にしては冷えたコンクリートの廊下に座り込んだ。

夢、だったのだろうか。

考える僕。しかしその安直かつ楽な考えを真っ先に否定してしまう存在が右手首にあるわけで。半透明に思えたがよく見ると肌まで透き通って見えているわけではないようで、見れば見るほど不思議な色合いだった。

それは手の甲側から見れば、なんの装飾もない青いガラスか何かで作られただけの安っぽい腕輪に見えるが、手首を返して反対側から目を凝らすとそこにはなにやら文字のようなものが彫つてある。

「なんなんだよ、これ」

しかしながらそれを読もうなどという気力は欠片もない僕は、腕輪が視界に入らないように腕を下げた。

首輪を付けられた犬の気分ってこんな感じだろうか。何故かそんな風に思えたりして、みじめにもなり。

この腕輪は明日になった程度で都合よく消えてなくなったりしないだろう。こいつはさっきの幻聴や幻覚のようなものより、ずっと確実な存在感を持っている。そのことが逆に、気味が悪さを強調しているとも言えた。冷静になった今思い返すと、一連の体験がどれだけ常軌を逸していたかが実によく理解できる。

少なくとも校内に草原はないですからね。

音や声だって考えれば考えるほど幻聴や幻覚の類に思えたし、というかそうでなければなんだというのだ、加えてあんなに頭が回ら

なかったのも何か内的要因があるように思えてならない。だからこそ気味が悪いのだ。

それらの考えは、すべてこの腕輪の存在が却下してしまうからに他ならない。

しかも一番厄介なのは、外す方法が分からないということだった。腕輪なんて物は生まれてこのかた身に付けたことはなかったが、腕時計と同列に考える程僕はおめでたくは出来ていない。それをどうやって付け外しするか、大体の見当くらいはつく。だけどこれには外すためのスイッチもなければ、切れ目一つすら見当たらない。言うなれば指輪をそのまま巨大化させたような代物で、下手な知恵の輪よりずっと難解だ。一見して、素人に取り外すのは無理なようにも思えてくる。

これを付けた人間の意図も解らなければ、付けられた方法も解らず、外す方法も当然のように解らない。

これでは、いつまでも何が何だか解らない。

突き詰めた究極的な手段として、超強力なカッターか何かで無理やり切り離せばさすがにこの腕輪も音を上げるだろうが、そこまでいくと逆に病的だし、今の僕にはそれ以外を思いつくだけの余裕もない。このまま帰宅しても構わないが、やはり確かな恐怖は依然として残る。

僕は深く項垂れた。

しかしながら頭を抱えているだけでは何も始まらないということもまた確かな事実だった。ここで座っていて解決策がひとりで飛んでくることなどあり得ないだろう。自分で確かめられることは自分で確かめるのが一番てっとり早いし、それによって誰かの手を煩わせることもない。

だったら僕の行動は決定していると言ってい。

「もう一度美術準備室へ、か」

ぶっちゃけ、気が進まないよ。

しかもこれでまた草原だったらその時は掛け値なくどうしようも

ない。

それに草原で済めばまだいい方だ。いや、よくはないが、現状、さっきの出来事以前の物差しで今の世界を見測るのは様々な意味で安直すぎるし、危難である。今からは、学校にいる間だけでも、警戒心を怠るべきではないだろう。何にしろこれ以上何か訳のわからないことが起こったりすれば、僕自身がいつまで冷静を保てるかも幾分怪しいところだ。

ここまで考えてみて、一つ伸びをする。

とりあえずのところ、自分の体験談を他人に語って助けを求めるつもりは毛頭なかった。それは確かに自身の身を守るためでもあるのだが（こんなことを安直に他人に語ったりすれば、その先の展開はベタすぎる程見えているからね）単純にそうしたくないという欲求がある。

それはつまり、うんざりすることではあるけれど反面これで興奮しないなんていうのは僕じゃない、ということ。少し落ち着いた今はこの状況を楽しむ余裕がほんの少しだけ出てきたらしい。

などと言っているその余裕とやらは、結果的に僕がもう一度美術準備室を訪れるまでの数分間だけのものだった。

僕は適当に思考を打ち切り、腰が重くなる前にカバンを手にしちあがって、教室の正面に伸びる渡り廊下を歩きだした。旧校舎は電気の系統が違っていいのか、まだ明かりが灯っていないようだ。普段こんな時間に学校にいること自体滅多にない僕が「まだ」という副詞を使えるのかどうかはともかくとして。

部活も大半がその活動を終了し、昼間のにぎやかさを失った誰もいない校舎を一人分の足音だけが静かに通り抜ける。

そしてあつけないほど何事もなく、再び美術準備室の前の扉へとたどり着いた。次は何が起こるのかと、半ば期待しながらドアノブに手をかけかけた、その時。

それは起こった。

起こってしまった。

トス。

頭のすぐ左横で、そんな感じの尖った音がした。見れば、ドアに何かが刺さっている。

ダーツの矢だった。

一瞬にして複雑に絡み合った思考がその念動を停止する。

明らかに異常。僕の動きはドアノブに手をかける直前で、一時停止したビデオテープのように固まった。一日のうちにこんなに何度も嫌な汗を掻いた日はこれまでになかった、あつて欲しいと願ったつもりなんかもっとない。だったらこれは誰の嫌がらせなんだろうか。

そんなことを考える余裕すら、もはや僕には残されていないかった。木製の枠のガラス窓から差し込む西日を背中に受けながら、振り返らずにそこに人がいるのがわかる。一人分の影が僕の足元に伸びているのが見えたからだ。

「実は私、ダーツが得意なんですよ」

そして、穏やかな、聞き覚えのある女の声が人のいない廊下に響いた。

「……畑中？」

喉がかさかさ乾いて、声がしわがれる。返事はない。僕はそれを無言の肯定と受け取った。

少なからず驚く僕。驚愕から驚愕をはじき出すのには十分すぎるほど、その声の主は意外な人物だったのだ。文化委員の相方、畑中だ。何故クラスメイトの女子が放課後の美術準備室の前でドアに向ってダーツを投げているのかという理由を考える前に、真っ先に浮かんだ疑問を一つ、彼女にぶつけてみる。

「まだ学校にいたのか？」

トス。

それは僕の右耳の5ミリ横にもう一本ダーツが刺さった音だった。刹那の遅れを経て、頭が状況を理解し始める。

「私の家はそこですから、八代君がどいて下さらないと」

「……………」

いやまて、自分の耳を疑ってみたところで、自分の耳がいたって正常であることを再確認するだけなのは分かりきっていることなので、疑うなら畑中の頭のほうということになるが、そのところどうなんだ？　まず、振り返らないと彼女の姿は見えないけど、おそらく手にはまだ何本ものダーツがあるはずである。そう考えると、今の電波な発言に対して無闇な返答はすべきでないというのが模範回答に違いない。

そのふざけたセリフには無言を返す。

頭の残ったスペースでは、畑中が僕を襲う理由を探すのが検索スピードは一向に上がる気配がない。そんな風に頭が鈍るのは決して今の状況に焦ってるからではなかった。焦りがないはずはないのだが、一番の原因はそれになんとなく予想がつくからだ。

嫌な予想が。

「なあ畑中、僕はさ、ダーツってのは人に向って投げるもんじゃないと思ってたけど？」

僕が言い終わる前に、影が動いて投擲の姿勢に入るのが視界に入り、僕はあわてて後ろを振り向いて、一驚した。

日本人離れして色素の薄い、しかし艶のある明るい栗色の、ところどころ撥ねた長髪。夕焼けに映えて亜麻色になった彼女の髪は、飴細工の透明度でキラキラと輝く。そして穏やかな瞼は平生と変わらず、髪と同じ栗色の濁りのない双眸が僕をまっすぐに捕捉している。

人形みたく綺麗に整った顔立ちの畑中は、その顔が勿体ないくらいの無表情でそこに立っていた。ワインレッドのネクタイが目立つ、制服を身に纏って。

いつも教室での影が薄い彼女を正面からしっかりとみた感想は、思っていたよりもかなりかわいい、である。確かに、驚きだ。いや、僕が驚叫したのはそんなことに対してじゃない。

彼女は手に何も持っていないのである。

「なかなか面白い顔ですね、八代君」

何の不備もないといった手つきで、畑中が指だけを数センチ動かして虚空にある何かをつかみ、ダーツを投げるようにこちらに向かつて手を振った。

トス。

まさか、と思う間もなく、僕の頭のすぐ上のドアにどこからともなく現れたダーツがもう一本、綺麗に突き刺さった。

僕は今、起こり得ない、起こってはいけない現象を目の当たりにしている。

「き……君は一体何を、」

声が上がった。だめだ、冷静さを欠くな。落ちつけ。

「次は当てますよ八代君——目にね」

その発言と畑中の表情に僕はぞっとした。穏やかな眼だったが、その奥底に宿るのは、確実に——本気の色。二人の間には数メートルほどの距離があるはずで、彼女は手に何も持っていない。だが今やそんなものは安心材料としてまるで藁ほどの意味をもなさなかった。僕はおそらく畑中から、のど元に冷えたナイフを突き付けられているのだろう。

僕としても我慢の限界だった。もうそろそろこの質問を繰り出してもいいだろう。目の端で右手首に残存する腕輪の存在を確認し、恐る恐る口を開く。

「——これのことか？」

右手を持ち上げてそれを見せながら言った。乾いた唇がぱさぱさする。畑中は、相変わらず空中でこちらに狙いを定めるような形で手を止めたまま、今日初めて僕と正しく会話を成立させた。

「ええ……その通りです。だったら話は早いでしょう？ 私に手荒な真似をさせる前にそれをこちらに渡してください、ジョーカー君」僕はその発言にかすかな違和感を覚えた。

むしろ違和感だらけだったとも言えるが、それは無防備な僕を背後から奇襲してる時点で既にだいぶ手荒だと思ったからかもしれない

いと適当な理由をつけて納得しておく。しかし、こんな内実不明な腕輪にかかわっている時点で何か起こるとは思っていたが、まさかドアを開ける前からこんなことになるなんて予想外もいいところだ。「残念だけど、僕はこれの外し方がわからない。即ちこれを今君に渡すことはできないってことだ」

すでに沈んでしまった太陽の余光のおかげで、かろうじて確認できる畑中の顔は相変わらず無表情に見える。実際、そうなのだろう。無表情程相手ににくい顔はない。

「ふうん。ではどうしてあなたの右手にそれが装着されているのでしょうかね」

ドスが効いている。正直効き過ぎだ。普段の柔らかい、温和そうなイメージとは全くかけ離れたやりとりに、僕は動揺を隠しきれない。だが、それが言葉に表れぬよう、出来るだけ強気に言葉を組み立てる。

「それは僕が知りたいくらいだよ。君は何か知ってるのか？ この腕輪のことを」

だが今の僕の発言に向こうも違和感を覚えたらしかった。

「……すべて知っての上かと思ってましたが。違うのですか？」

今度は何を言い出すのかと思えば、なんだ、さらに訳が解らないことを言い出したぞ。

「君が何を言ってるのか僕にはさっ、っぱり！」

中途半端なところで発言を切った理由は、右手のカバンを顔の防御に回すためだ。

トス。トス。

ほとんど間隔なく二つの音と軽い衝撃が僕のカバンの前面から響く。

畑中は迷いなど微塵もなく僕の両目をつぶそうとしていた。カバンがなければ間違いなくヒットだ。これ以上の会話も望めなさそうである。

——これは、殺されるな。

僕の本能が理性へとそう訴えかけ、僕の理性は1秒と経たずあつけなく陥落した。

張りつめた空気を壊すべく、ある意味で開き直った僕はカバンを首と後頭部のカバーに回して、本能に身体の操縦を任せ走りだす。ごちゃごちゃ言っても仕方がない。だったらこの状況には立ち向かうの一手しか残されていない。

とった行動は逃げだけど。

「あ、待ちなさい！」

もはや完全に日の光の差し込まなくなった闇の廊下を、目的地なんて設定せずにめちゃくちゃに駆け抜ける。畑中の方も僕のこの行動には虚を突かれたようで、追ってくるのにタイムラグがあった。

予定はない。目標もない。当然ながら余裕もない。だがこれから何をするにしても、とにかく彼女の目の届かないところにいないと生きている心地がしないのは確実に確固を重ねた上でさらに明確だ。「待ってください！　じゃない、待ちなさい！　痛い目を見ますよ！」

後ろから聞こえる畑中の声は、威勢はよくてもだんだん遠ざかっていく。50メートル走6秒4の脚は伊達じゃない、確かに変な姿勢で走ってはいるが同じ帰宅部なら女子に追いつかれる道理もないだろう。それでも今は何も考えずに脚だけを動かす。畑中のあのダートの射程から逃れなければ安心などできない。僕がさらに加速して旧校舎の階段を駆け降りようとしたその時。

「シエロフューズ！」

畑中が発したその単語の意味を理解しようとする前に、僕はひんやりとした手で、右足首を掴まれた。

「うわあっ！」

そのまま動かない右足。一段目を左足で踏んだ後、次の一步が出ない僕は階段を派手に転がり落ちる。視界のすべてが回転ののち、暗転。痛いと考える暇もなく、次の瞬間僕は一階と二階の間のフロアに頭と身体を瞬間的に強打し、のたうち回った。

ん？

がんがん痛む頭や、息苦しい肺をいたわるよりも、ある違和をひとつ覚える。確かに右足をつかまれたと思ったのに、畑中の姿はまだ僕の視界にすら入らない。じゃあ右足は何故急に動かなくなっただ？ 改めて右足に感覚を集中する。

右足がない。

「え……？」

ない。なかった。あるという感覚が全くない。僕は暗闇の中、上体起こしを即行し恐るべき現状を目を凝らして確かめた。

右足はある。

「え……？」

ある。あった。僕の右足は変わらず僕についていた。ひどい認知的不協和が僕の中で起こる。しかしどう動かそうとしても僕の右足はピクリともしない。月並みだが、まるで右足だけ僕の体じゃないみたいだ。

などと、そんな悠長な感懷を述べている場合ではなかった。

「そのままそこにへたりこんで居てください」

そうこうしているうちに、追いついた畑中が癖のある栗色の長髪を揺らしながら階段を降りてくる。ゆっくりと、一段ずつ踏みしめるようにして、彼女と僕の距離はどんどん詰められていく。

「僕の右足に何をしたんだ！」

「別に……ちょっと動かないようにしただけです」

それじゃ全然答えになってない！僕はそう叫びたかったが、感情の高ぶりのせいか開いた口から出た声はしっかりとした言葉を形作ろうとしない。

何故僕はこんなことに？

僕はここでのどうなるんだ。訳の解らない変な腕輪を勝手につけられ、僕の知りもしない身勝手な理由でクラスメイトに殺されるのか？

そんなのはごめんだよ、絶対に。

詰まる所このままだと、明日の朝刊の見出しが『高校生殺害事件。容疑者は同級生、同機は失恋か?』なんてことになりかねず、少なくともその動機が失恋なんて生ぬるいものでないことだけは現在進行形で確かだった。

「あっけない終わりですね」

必死でダーツが二本刺さっているカバンの中をまさぐる、何か、何か武器になるようなものはないか?

「……あなた本当にジョーカーなんですか?」

何もない。教科書や筆箱を投げつけてみたところで、この状況を打破するには至らないだろう。どうせ足掻くなら、悪くない足掻きをすべきだ。コツ、と畑中が最後の一段を踏み降り、二人の間にはもう1メートルも距離がない。

まずい、このままだと何をされるかわからない、せめて右足が動けばまだ逃げられるだけの体力は残っているのに、いや、だめだ、たとえばもう一度右足が動くようになって逃げられたとしてもまた動かないようにされるだけじゃないのか、結局ここで彼女を足止めしていないと僕の逃げは成立しない、だったらここで彼女に対処する方法が必要になるがそれはないことを今確認した、素手でさっきの手に立ち向かえるとは到底思えない——ど、どうする!

「さようなら、八代君……いえ、ジョーカー君」

僕を薄汚い下等生物のごとく見下すその立ち姿は、さながら獲物を追う狩人で。

僕は獲物か? 狩られる側なのか。狩られる獲物にはその理由さえ与えられないってのかよ、畜生。

畑中が前かがみになり、左手を僕に向かって突き出す。激烈な恐怖感が僕の身体を緊縛し、その手を払うことさえ許さない。

——やられる!

『死を覚悟するにはまだ早すぎるな』

それが誰の声かという思考に達する前に、自分の右手が蒼白の輝きを放つのを僕は見た。畑中はそれに気が付かない。ふと思いいさ

れる一つの諺。

「追い詰められた鼠は……本当に猫を噛むんだろうか、なあ畑中」
そんな僕の呟きなどはなから気に留めるつもりのないだろう畑中は、じわりじわりと僕へ左手を伸ばす。

そして自分でも何故そうしたのか未だに分からないが、僕は無我夢中で差し向けられた畑中の左手を右手で、指をからめて、掴んだ。今まさに。その言葉通り、窮鼠は猫をかんだのだと。僕は瞬間に理解した。

もつとも、彼女が猫なのはいいとして、僕が鼠だなんて死んでも認めないが。

「な……っ？」

畑中は小さく声を上げ、全世界が停止した次の瞬間。

僕と畑中の間で小さな爆発が起き、繋がれた腕の中を高圧電流が走りぬけた。

「っ！ な、何——これはっ！」

僕の手から発せられる光と、畑中の手から発せられる光が混じり合って腕から順に二人を真っ白に包み込み、夜の階段をいやに明るく照らす。痛みとは別次元の衝撃。繋がれた右手と左手を起点にして、ビリビリと空間ごと揺さぶる震動。目をあけているのがやっとの状況で、僕の顔も畑中の顔も苦痛と驚愕に歪む。僕は上半身を起こしたままでいることができず、床に背中を付けた。それに連れられて畑中も膝と右手をつく。だけどそれでも。

「離しなさい！ このままだと何が起こるか……」

「だけどこの手は絶対に離さない。」

「離しちやいけないんだ！」

何が起こったって離してやるもんか。その思いだけが、僕の頭を占めていて、僕の手に万力のような力を与えていた。

一瞬のうちに放出されたエネルギーは、今度は逆に収束していく。そしてそれが二人の中心に集まり終わると、一気に畑中の側へと流れ込むのがわかった。

「や——いやあっ！」

畑中は、僕の一度も聞いたことがない大きな声で叫び声をあげた。
バチッ！

また小さな白い爆発と共に感電したような音が響いた後、しっかりと握っていたはずの僕と畑中の手はいとも簡単に解けてしまう。にわかには畑中は両膝をつくと、仰向けになった僕の上にそのままぱっさりと倒れこんだ。

僕は空いていた左手で彼女をなんとか受け止める。

体積の八割がたが僕の上に乗っかっているとは信じられない軽さだ。ふわふわの髪が顔にかかり、女性特有のいい香りが鼻腔をつく。

「……畑中？」

弱弱しく声をかけるも、やはり、気を失っているのか返事がない。普段ならそれはもう理性を正常に保つのも困難な状況なのだろうけど、僕も僕で全身の力が抜けてしまい指一本微動だにすることができない。その上少しでも気を抜けば自分の意識も簡単に手放してしまいそうになる。

不自然な恰好で廊下に横たわり、再び闇を取り戻した暗がりの中、ほとんど何も見えない状況で畑中の体温だけを感じ、散り散りになった意識のかけらをかき集めてなんとか形にすると、かろうじて頭を回転させた。

助かった。……のか？

さっきの声は一体誰のものだったんだ、聞き覚えのある声ではなかったけど。

僕は一体これからどうすればいいんだろうか。とりあえず、動けない。

今日の晩御飯、なんだろうな。

……、眠い。

何か考えてないと……寝てしまう。

……………寝ちゃだめだ。

……………。

結局そんな努力は徒労に終わり、
勘考はまどろみと人肌のぬくも
りの中に落ちていった。

3. 魔法なんだ

目を覚まして最初に視界を占めたのは、記憶にない薄汚れた大理石の天井だった。

まず右足を動かしてみる。問題なく動く。

それに関して深く考えるよりもまず、ありったけの不安が泉の如く湧きだした。

今は何時で、ここはどこで、そして僕はどうなった。

起き上がってみるとベッドの上というわけでもない。どうやらソファーの上らしいが、ところどころ黒ずんだり破けて中の綿が飛び出したりしているぼろぼろの鼠色の布は、ざらざらして決して気持ちがいいと言える感触ではない。

次に右手を見る。縹色の腕輪は変わらずそこにあった。それを確認してほっとしたのもつかの間、ぶつけようのない怒りが沸き起こり、僕は右手で拳を作ってソファーに叩きつけた。この腕輪のせいだ。

あまりに理不尽。あまりに不可抗力。この腕輪のせいだ。

今この瞬間自分が危険か安全かはともかくとして、僕が通常通りの生活を送れていないのは目に見えて明らかだ。どれもこれも、この腕輪のせいだ。

この腕輪に持ち主がいるのなら、いやいなくても、こんなものはさっさと手放してしまうのが目下僕が幸福に近づくための最善の策に違いない。

服は制服のままだった。シャツが若干湿っているのはおそらく、寝ているうちに掻いたものではなく、さっきの畑中とのごたごたのせいだろう。空調設備の類は見当たらないが、部屋の中は十分すぎるほど涼しかった。どれだけ眠っていたかはわからないが、ひよっとしたら時間はあまり経っていないのかもしれない。

ていうか、なんで寝てたんだ？ 僕。

寝起きということもあってか頭がぼうつとしていて、畑中に追いかけられたあたりまでしかハッキリとは思いだせない。必死で何かをつかんだような気はするけれど、何がどうなって僕が今ここに横たわっているのか得心出来るほどの記憶が累積していなかった。

「……！」

そうだ、畑中はどこだ。

見渡すと、そこは五メートル四方程度の小部屋のようだった。僕の乗っているソファアの他にはパイプ椅子が二脚と丸い大理石のテーブルが反対の壁寄りに一つ、そしてその上にコップが三個とポットが一つ。椅子が二つしかないのにコップは三つあるのというのが生理的に気に入らなかったが、些細なことは無視して立ちあがる。運動靴が大理石の床を踏みしめてコツンと静かな音をたてた。

どうやら部屋の中には畑中はいないようである。見逃すほどのスペースはこの小部屋にはない。それを理解し、無意識のうちにほとと息が洩れた。

となると僕は勝手にこの部屋を出てもいいものなのか。天井四隅の無機質なライトに照らされて浮かび上がる床まで白い部屋には、ソファアも机も接していない壁が二つある。首を回して見るまでもなく、その両方に同じような金属製のドアが付いていた。この部屋は、正面の机を眺めていても両側の壁が視界のギリギリに入る程度の広さだ。

歩き寄って一つのドアの前に立って前屈みになって見ると、そのドアの右横のちょうど目線の位置に、小さな字で「表」と彫られている。窓のない部屋だから方角が書いてるのならわからなくもないが、表ってなんだ？ 外に出るためのドアということなのか。

変な部屋だな。とか思いつつ僕は冷たいノブに手をかけた。警戒していたダーツが後ろから飛んでくるということもなく、動作は実にスムーズに行われる。まわして引いてみるが、どうにも開く様子がない。ガチャガチャと押したり引いたりしてみるが、カギがかかってるらしい。

ま、不用心じゃないのは結構なことだ。

それを開けるのは諦めて反対側に行ってみると、今度はドアの横に「裏」と彫られていた。反対側のドアのものと呼応する文字なのだろう。ドア自体は何の変哲もない無機質な光沢を放つ開き戸で、怪しもうにも不審点と言えるようなところはみつからない。首を一つ捻って、「裏」という言葉の意味がわからないまま、僕はまたノブに手をかけた。まわして引いてみるが、開かない。

開かない。

「……ちよつとまって」

焦って押したり引いたり、仕舞いには引き戸のように手をかけて開けようと試みたがドアはびくともしない。

軟禁。誘拐。殺人。

そんな物騒な言葉たちがが愉快そうに笑いながら、颯爽と脳裏を駆け抜ける。いや、冗談ではすまされないかもしれないのだ。しばらく呆然とした後、僕はソファアへ懦弱に座りなおした。相変わらずの固いクッションが腰を受け止める。

携帯も腕時計も持っていない上に部屋の中にも時計は見当たらないが、いつもなら夕飯を食べている時間なのだろう、腹の虫がなんとも空しく情けない鳴き声を上げた。これではドアを強行突破しようにも気力不足甚だしい。

通学カバンも手元に存在しないという事実にそこで気づく。これってよくよく考えると、いやよく考えなくても結構やばい状況なんじゃないのか？ そうは思うのだが、折れかけた心には実感が追い付いてこない。

困った時のいつもの癖で右手を額に当て、何度目になるのか僕は腕輪の存在を知覚した。ふと思いついて手首を裏返し、掌を自分の側に向けてみる。

K i l l e r i s n o w g o d .

「殺し屋は今、神である。か？」

腕輪にはこれまたずいぶんと奇怪で意味不明な詞が、目をこらさなければ読めないほど細かい文字で彫られていた。「一人殺せば犯罪者だが、百人殺せば英雄になる」とかなんとか、そんな感じの格言がぽつと頭に浮かんだが、これとそれとはおそらく無関係だ。そもそも腕輪に彫られている文のほうは「神」だし、その理論で行くならば神になるまで何人殺せばいいのだという話になる。大体、人を殺して神になるだなんてそんな不謹慎な話があったたまるか。大目に見てみたところで、これが脱出のカギになるとはどうにも考えにくい。

要するに手詰まりというわけで。

体を横にしてソファーに預けながら僕は途方に暮れた。不自然なまでに冷静でいられるのも思考力が低下しているからだろうか。例えばそうじゃなくても既に流れに身を任せる覚悟はできている体である、今更焦って見たところでこの状況がどうにかなる訳もないだろう。

することもない僕はぼんやりと、天井から降る光に腕輪を透かしていた。白く無機質な光が蒼い腕輪を通ると、それはまるで光のジエネレータであるかのようにキラキラと有機質な輝きを放つ。神秘的なそれを見ていると綺麗だ、と思えた。もう少し憎たらしくない出会い方をしていれば素直に好きになれただろうに。もし店にでも並んでいれば、値段にもよるが部屋に飾っていただろう。

でもなんだろうな、この彫られている文字の筆跡、どこか見覚えがあるような。どこで見たんだろう――

「……思いだせないな」

諦めが早いのは大して熟考する気もないからであり、余裕があるならばもっとじっくり眺めて、記憶の棚の引き出しを端から端までひっかきまわしていただろうけど、それをするには僕は落ち込み過ぎていた。もうしばらくだけそれを眺めてから、しびれてきた腕の力を抜いて体側にブラリと垂らす。反対側にあった机の横のパイプ

椅子に男が座っていた。

「……………」

時を移さずしてソファから跳ね起きる。

あんなとこに人がいたか、否、いなかった。だとしたらドアを開けて入ってきたのだろう、それで僕が一人でソファを独占しているのを発見しパイプ椅子に座ったということになる。だがそれに気づかないまでに集中して腕輪を眺めていたつもりはこれっぽっちもない。

「あ……の」

とつさに口を開いてはみたが、何も言葉にすることができずに、僕は頭を掻いた。

「やあ、元気そうじゃない。お兄さんも安心したよ」

普段ならソファに座ったままというのは無礼だと立ち上がるところだが、だらしなく机に頬杖をついたまま、どうも立とうという気を起させない独特のテンポで話しかけてくる金髪の男。

変な奴だ。

何かを特別に見るまでもなく、聞くまでもなく、僕はそう思った。六月だというのにファスナー付きの長袖トレーナーを着用し、それなのに下は半ズボンで、さらに靴下も履かずに革靴を履いている。ハーフなのか外人なのかはわからないが、量の多い綺麗な金髪がミスマッチさを助長していて、見れば見るほどヘンテコな恰好だった。その上流暢に日本語を話されると聴覚的にもズレを感じるわけで、僕の記憶が正しい限りではこんな人間に今まで出会った覚えは一切ない。ファーストインプレッションのみで、警察関係者の線は消去できる。こんな人間が警察関係者にいるなんて、嫌だ。国家権力は威厳のある組織であってほしいというのは一日本国民としての至望である。

細い眼の中に光るグレーがかった深緑の瞳が、じつくりとこちらを眺めている。いや、こういうのはただ眺めるというより、何かを観察するような目つきと言った方が正しいだろうか。じろじろと、

舐め回すような視線。

「あの、失礼ですが」

「ああ！ 失礼失礼、全く失礼だよ初対面の相手をじろじろ見るなんて実に失礼なことだ、本当失礼だよねえ、ごめんよっ！」

にこやかに早口で畳みかけるように返すなり、男は僕の目に視線を固定した。

う、これはこれでやりにくいぞ。というかまだ僕の発言は途中だったんだけど。さらにどうでもいいが、今何回失礼って言ったんだ？ 思い返しているうちに「失礼」という単語に対してゲシュタルト崩壊を起こしかけた僕は、そこから気を引き剥がすべくもう一度発言を試みた。

「あの、すいません」

「ああ！ そういえば君のカバンだけどね、ちゃんと保管してあるから安心しなよ」

狙ってるとしか思えないタイミングで僕の発言にかぶせてきやがった。インパクトのある喋り出しのせいで、思わず口から出かけた言葉がひっこんでしまう。

めげずにもう一度。

「あの」

「ああ！ ……っと、なんだっけ、にやはは。何か言おうとしたんだけどなー」

なんだろうか、これは。

「あ」

「ああ！」

「いうえおおおっ！」

ちなみに最後のは、懊悩の蓄積の結果爆裂した僕の柔な精神崩壊の具現である。ああ！ に対抗してやったぞという荒唐無稽な優越感に浸りながら、僕はその意味不明なセリフと共に立ちあがった。

「にやはははー、冗談だよ、冗談！ いやあ、若いいいよなあ、怒らせても怖くないもんねえ」

笑いながら何言ってるんだろう、この人。軽くどついてもいいだろうか。

しかし、警察でないとしたら僕をこんな部屋に閉じ込めている実行犯かとも思ったが、今の会話（会話か？）から見るに、その線も薄いような肩すかしの印象を受けた。いずれにしろ正体のわからない人間を見た目だけで判定するのは軽率である。

「ま、立てるんだろ？　だったらこんな所にいないでこっちにきなよ。話はそれからしよう、ね？」

金髪の男は、頬杖をついたまま爽やかなウインクを一つ飛ばすという珍技を見せた。

ヘタに関田あたりが同じように振る舞うようなことがあれば、僕と関田との友情が永遠に失われることになりかねないような動作だ。そして彼は頬杖を解除し、パイプ椅子から立ち上がると、「裏」側の鍵のかかっていたはずのドアに歩み寄って、存外厚みのないそれをあっけなく開ける。やはり彼は鍵を開けてドアから入ってきたということだろうか？

「ごめんねー、なんか閉じ込めるような真似しちゃってさ」

それにしても初対面の僕相手によく喋る男だ。思いつつ、警戒心を解かぬままに僕もソファから立ち上がり、彼の後ろについて行く。

開かれたドアの先にはここよりもう一回り大きい程度の部屋が見えた。やはり床も天井も大理石続きだったが、それ以外は天井の高さも奥行きも2LDKのリビングといった感じだろうか。入ってすぐの手前側に本棚が設置してあり、部屋の中央には向かって右手に伸びる横長の机が一つ置かれていた。これもご丁寧に大理石製のドアから出た左手伝いにはこれまたしつこく大理石の壁が続いており、5メートルほど行った突き当たりの対する側には、今ぐり抜けたものと同じような型の鉄製のドアが見える。その右隣には食器棚らしきものがあった。

徹底的なまでに、見慣れた物が一つもない部屋。

この無機質な小部屋に今自分がいることでも、既に随分気を張り詰めさせられている。自分がどんな状況かに置かれているかも理解しないまま、そんな部屋にほいほいと踏み込むのは気が退けた。

「ほらほらあ、ぼーっとしてないで入る入る」

先に入った男がぱたぱたと手まねきする。だが、入らないわけにはいかない。僕は思い切ってその部屋に一步踏み入れ、ようやく僕の日常を一つ見つけることができた。ただ、それが僕にとって精神安定剤になるかどうかは微妙なところだったが。

ダブルのドアのすぐ横にあるでかい本棚の死角になっていた所に、私服に着替えた畑中がついている。

やはり考えなしに部屋に入ったのは迂闊だったかもしれないな、と僕は苦々しく考えた。

一步踏み込み、そこで足が止まる。見ると、涼しそうな向日葵色のタンクトップだ。制服姿しか見たことがないので視的にも新鮮さを感じる。だがそんなことにはお構いなしに、折り合いの悪いムードが一瞬にして場を支配してしまう。

「あの、畑中」

名前を呼ばれた当人はこちらをチラと見ただけで視線をそっぽへと向けた。なんだ、やや不快感を感じるしぐさだぞ。

「ほらほら、座って座って」

そんな場の空気など髪の毛一本ほども気にとめない様子で金髪の男が畑中に対する位置の椅子に僕を座らせようとしやがったので、僕はそれを断わって一つ左の席につき、代わりにその男が畑中と対面するように座った。座面は重ね重ね大理石製だった。鉄製の脚が三本ついていて背もたれはなく、当然のように固いため座り心地はよろしくない。いくらインテリアに統一感を出すにしても椅子まで大理石製なのは正直どうなのかな。

ふと目線を下げて、ちょうどその椅子の下に僕の学生カバンが置いてあることに気づく。

この男、僕が結局はここに座ることが分かっている僕をからかつ

たのか？

男の顔を見るが、そんなことは読み取らせてくれない笑みだった。笑ってはいるが、それはポーカーフェイスの仮面の役割を果たしている。男はニコニコしながら僕と畑中の顔を交互に見ると、再び口を開いた。

「さて。とりあえず二人とも、ケガとかはないかい？」

畑中が相変わらず下を向いたまま口を小さく動かして「ありません」と言い、状況は尚解らないままに一応僕も頷いておいた。少なくともこの男は僕に対して無害に見える。だったら話を聞くくらいは大丈夫だろう、問題ない。

と、そう思ったのがそもその間違いだったのだろう。

「そう、よかったよかった。聞きたいことがたくさんあるんだ、八代くん」

教えた覚えのない名前を呼ばれ、僕は小さく驚いた。その様子を察してくれたのか、彼は僕に説明を付け加える。

「ああ！ 名前ね、穂波ちゃんから聞いたよ。君のことは知ってる」穂波ちゃんというのは畑中のことか。名前で呼ばれるような親しい間柄の男というと家族かボーイフレンドくらいしか思いつかないが、この人がそのどちらかに当てはまるかと言われれば、そのどちらでもないような気がした。

改めて金髪の男を入念に観察する。年齢は二十代前半といったところだろう。畑中は、今まで僕が見ていた限りではだが、そんな年の離れた男性と交遊するようなタイプだとは思えない。父というのはもっと無茶があるし。兄なら通るかもしれないが、そもそもこの人は日本人には見えない。

ぼんやり頭の裏側でそんなことを考えつつも、僕はまた遮られやしないだろうかと恐る恐る口を開いた。

「あー、貴方の名前も教えていただけるとやりやすいのですが」

「ああ！ お兄さんの名前はね、牧埜宮まきのみや 清瀧せいらん。難しい漢字ばかりだからね、軽ーく龍ちゃんって呼んでくれればいいんだよー」

ああ！ が口癖らしい金髪の男は、軽く自己紹介を済ませてくれた。名前だけ聞くと日本人であるようだ。

「まあ僕のことはいいいからさ、まずは君のこといろいろ聞かせてよ。幸いまだ時間もあるしね。穂波ちゃんに聞いてもほとんど全然教えてくれないしさー、イエスカノー程度でいいから質問に答えてくれないかな？」

「は……？ はあ、構いませんけど」

僕は呆気なく流された。どうせ取り留めもないことを2、3聞かれる程度だろう。なんて。

甘かった。

牧埜宮 清龍という人間を、当たり前だが僕は知らなかったのだ。折れるのが早すぎたと後悔したのは少し時間が経過してからであるが、そんなものは後の祭もいいところだった。

「んじゃまずはね、名前は？ ああ！ フルネームで」

「八代 椎奈です」

そこからですか。

「歳は？ 今年年生？」

「一七歳で、高校二年生です」

いや、それはわかるだろ、畑中と同級生なんだし。僕はつい突っ込みたくなったが、押さえておく。

「高校は空が岬高校だね、さすがにそれは知ってるよお。趣味とかはあるの？」

「し、趣味ですか……はあ、まあ、読書とか、ですかね」

なんか訳の分かんない横道に逸れてきたけど、どうすんだろうこれ。

「ああ！ 僕と一緒にだー、いいねー趣味読書。なかなか陰キャラな感じだよな！」

「そんなこと言わないで下さいよ！」

平然と酷いこというなこの人！ 思わず突っ込んでしまったじゃないか。

「何読むの？ 武者小路とか好きだけどなー、お兄さんは。まあいいや、それについては後回し。話し出すと長いしね」

後回しにもしてほしくはなかったが、話が延々伸びないという点においてその延期はありがたいと言えるものだった。

「見た感じ結構華奢だけど実はスポーツは出来る人なんじゃない？
そうでしょ？」

「ええ……まあ、出来なくはないですけど」
どこまで行けばいいんだろう。

「カバディとか得意？」

なんか超マニアックなところ突いてきた！

「え、いや……そんな耳慣れないスポーツはやりませんが」

「だよねー、というかカバディって何？」

逆に聞かれたよ。

「まあ、いいや。たぶんゴディバの仲間かなんだよね」
もはやそれはスポーツですらない。

「なかなかマルチな人間だね君。勉強もできるでしょ？」

その質問に答えるのに僕は一瞬躊躇し、そしてこう答えた。

「出来ません」

「――へえ」

淀みなく動かされていた口がピタリと止まり、僕は内心ほっとすると同時に僕は冷やりとした。

「初対面の人間に嘘をつくのは、お兄さんはまあアリだとは思うけどね。別に勉強が出来ることは隠すようなことじゃないんじゃないのかい？」

きっぱりとしたものの言いに僕はいささか動転する。が、それは心のうち深くに押し込めて。

「……別に嘘なんか」

「ああ！ いいんだよー、気にしなくて、全然っ。ごめんね」

謝罪の対象が不鮮明ではあるが、何故か本当に心から悪く思っている様子で謝る龍ちゃんを前にして、僕は話題の切り替えを試みて

みた。

「あの、牧埜宮さん。そのことはいいいので僕からもいくつか質」

「ああ！　だめだめ、質問は構わないけど、そんな堅っ苦しい呼び方されるとテンション下がっちゃうよ、そりゃもううなぎ下がりさ。龍ちゃんって呼んでくれて言ったじゃない」

うなぎ下がりがりってなんだろう。あえてそれには突っ込まないでいると、牧埜宮さんは「ほらほら」とか言いながら僕の横腹を肘でつついてくる。なんともやりにくい、なんだろうこの馴れ馴れしさは。初対面だぞ、この人と僕。というか畑中黙って俯いてるのやめてくれないかな、加えてさらにやりにくいんだけど。

「じゃあ牧……龍、ちゃん。質問をさせて頂いてもよろしいですね？」

「うーん、やっぱり敬語も禁止。堅苦しいのはなしで行こう、ね？」

これはこれで僕の緊張をほぐそうと気を使ってくれているのだろうか。もしそのつもりならその試みは盛大に大失敗なのだが、そのことを牧埜宮さん本人に気付かせるほうがよっぽど骨の折れる話だろうと僕は直感的に理解していた。半分自棄になりながら、牧埜宮さんともい龍ちゃんに会話を合わせることにする。とにかく今はうだうだ言うよりもまず情報が欲しい。

「畑中、君にも聞きたいことはあるけど」

その声にわずかながら反応を見せ顔を上げた畑中だったが、一秒もしないうちに再び俯く。それを目の端でとらえつつ、僕のほうは顔を龍ちゃんの方へと向けなおした。

「とりあえず、大まかで構いませんから」

「敬語」

龍ちゃんが半目になりながらだるそうに指摘をする。絶対僕のほうが数百倍はだるいと思うんだけど、それはまあ口にしない。

「大まかで構わないから、今の僕の状況を説明してくれませんか。くれないか」

肘でつつかれ敬語を訂正する。なんとも珍妙な光景だった。確か

にだるいのはだるいのだが、これでイライラしないのだから不思議なものだ。自分がそこまで忍耐強かったとは記憶していない、むしろこの場合は気が長いとでも表現すべきなのだろうけど。ならばこれはこの人の力なのだろうか、ある意味で。

「んー、そうだねえ。今の状況、か」

細い眼をさらに目を細め、うーんと唸りつつ龍ちゃんは左手の人差し指をおでこに当てた。

「そうだなあ」

そのままのポーズで僕に言葉を差し向ける。

「君はさ、ここがどこだかわかる？」

わかっていたら苦労はしない。そもそも目が覚めた時点では、僕は軟禁されていたようなもので身動きがとれない状況下にいたわけなんだ。そのままを口にする。

「わかりません」

「ああ！　だよねえ、やっぱり」

予想通り、といった風に金髪をたなびかせうなづく龍ちゃん。今のは敬語でよかったのだろうか。そしてこの人の『ああ！』にはいったいどれだけバリエーションがあるのだろうか。もうむしろ『ああ！』だけで世界中の人々と通じ合えそうな気さえする。ああ！　なんてグローバルな言葉なんだ。なんてそんなことを数多く頭に巡らせて、心の淵に浮かんでは消える憐憫の色を紛らしていると、龍ちゃんは確かに椅子から立ち上がり、机の周囲にそって歩きだした。「まずね、全然話は飛ぶんだけど。そうだな、まあこれでいいか。説明の前にもう一つだけ質問をさせてもらうね」

言いながら龍ちゃんは本棚（大理石製）の前で立ち止まり、その中から深緑のブックカバーの本を一冊取り出す。

「見ての通り、何の変哲もない本だよ。昨日買ってきたばかりで、お兄さんはまだページも中身を読んでない。実のところ早く読みたくてうずうずしているんだけどね、ああ、ちなみに推理小説だよ。シリーズ物だから君も名前くらい知ってるかな？　まあそんなこと

は」

話しながらそれを目線の高さまで持ち上げる。

「どうでもいいんだけどね」

次に龍ちゃんは目を瞑った。

しばらくそのまま動かない彼を見て、いったい何をしているのだろう、と思い始めたころ。

「私に必要なのは懺悔と後悔だ。——うん、最初の一文はこれ」
「どうということだ？」

「そういうことだよ、八代君。最初は自分での手で開けたかったけど、いいよ。カバーを外して読んでみてごらん」

横目で畑中の顔色を窺うと、さっきまでの暗い表情はすっかり消え去り、龍ちゃんの持つ本へと熱心な視線が注がれていた。いったいなんだって言うんだろう？ 僕は立ち上がり、言われたとおりに本を受け取る。そしてブックカバーから「とある女の軌跡と奇跡」と表紙に書かれた分厚い本を取り出し、一ページ目を開いた。

私に必要なのは懺悔と後悔だ。

一行目にはその文が記されている。

「これはね、ちょっとした」

そして僕が驚くその前に発せられた次の龍ちゃんの発言は、僕の頭に一生残る数少ない言葉の一つになった。

「魔法なんだよ」

4. 僕は僕を壊す

僕がその時どんな顔をしていたか、自分ではわからない。

それがどんな顔であったにしろ、僕は言葉を形成することができずにいた。それを堺にして、穏やかだった場の空気が一瞬にして張りつめたものに変わり、痛い静寂が場を覆い尽くす。龍ちゃんのグリーンが目が静かに僕の目を見た。目は口ほどに物を言うが、その目は僕に何も言ってはこなかった。その代り、心の底の隅から隅まで見透かされそうな、そんな恐ろしさを刻みつける目つき。それでいて、目を逸らすことなど許さない圧倒的な掌握感。

「……魔法？」

やっとのことで僕はその言葉を、思考を伴わないうわ言のように反芻していた。

本の最初の一行を当てたからって。

それがなんだ？

そうだ、それがなんだって言うんだよ。

そんなもの、ただのマジックだ。タネもあるし、仕掛けもある。それが分かれば僕だってできるようなことに過ぎない。今のは魔法なんかじゃないはずだ。魔法なんてものはこの世に存在しない。表層には表れない僕の心の奥底が、外界から押し寄せる得体のしれない圧力を跳ね除けようとそう叫ぶ。

「そう、魔法。君は信じることができかい？ 魔法を。奇蹟をさ」

魔法を信じるか、だって？　これが質問なのか？　だとすれば飛

躍しすぎている。

なんでこんな話になったんだ。僕は今の状況を聞いたはずだぞ。

この問いがこれからの話に一体どれほどの意味をもたらす？

気を失う前の状況だとか、そんな程度のことを聞かれることとばかり思っていた僕にとって、それは不意を突かれた衝撃的な質問だった。不快な汗が一筋、首を伝う。息が詰まり、苦しくなる。すが

るように畑中の顔色を窺ってみるも、その形相は僕を冷たく突き放すように無表情だ。

「信じるのか、信じないのか」

問い詰めるように強くなる龍ちゃんの語気。信じるのか、信じないのか。

答えなんか、決まっている。

——でももしあるとしたら？

信じないに決まっている。

——魔法が。

信じない。

——本当にあるとしたら。

馬鹿な！ 何を考えているんだ僕は。

「ちょ……ちょっと待ってくれ、なんだよ、それは」

「ああ、何？ もうちょっと魔法らしいことやってあげようか？」

魔法らしいこと、だと？

「ああ！ でもだめだね、例えば君のカバンから教科書がびゅーんと僕の手飞到ってきたって、それは手品でも出来ることだろうし。仕掛けをする機会はいくらでもあった、って君は信じないかもしれないもんねえ。にやははは、困ったなあ。いやね、質問に答えてくれないとお兄さんも困るんだけどさ」

目の前の金髪男の話す言葉が、まるっきり別の言語のものだったらどれだけ幸せだったろうか。彼の扱うすべての単語を理解できる自分の頭がこれほど憎いと思ったことはない。気が滅入りそうだ。この質問。「魔法を信じるか」というもの。平素ならどの角度から眺めても「サンタクロースを信じるか」といったものと同列の、いかにも無邪気で子供じみた設問だと割り切って、娯楽の範囲で軽く答えればいい。

だけど今この場で、この僕に対してこの問の持つ質量は計り知れない。

魔法。それはここまでの局面になりながら、僕が最後まで口にす

るのを恐れていた、それを言ってしまうえば僕の世界のすべてを狂わせ得る言葉だ。

「魔法、なんて……そんなものは」

謎の音。腕輪を手に入れたときの光景、銀色の草原。畑中から逃れようとした際の現象。黙考のほんの小さな隙間にも、近しく起きた摩訶不思議な出来事が走馬燈の如くフラッシュバックし、入りこむ。

なんなんだ。

今日という一日は僕をどこまで壊す気なんだよ？

「……その問には今答えないとだめなのか？」

「今の状況を知りたいんだろう？ それなら今じゃないとだめだねー」

言葉は無力だ。僕が何を言おうと、龍ちゃんの口元に浮かぶ笑みは変わらない無色である。

魔法の存在を認めることにどんな意味があるかはわからない。だけれど意味はあるのだ。何らかの意味が。だからこそその狼狽、だからこそその周章、だからこそその恐慌。

頭を絞る。僕は、今まで僕が居たはずの、居なきやいなかったはずの世界からは、おそらくもう完全に外れてしまったのだろう。でも、だったら魔法を信じるのか？ 違う、そんな等式が成り立つてなるものか。すべての事象に対して、現実の可能性はいくらでもある。それこそ、 $A \neq B$ だからと言ってそれが即 $A \parallel C$ とするような奴は数学のできない馬鹿だけだ。世の中は都合のいい背理法的になんか造られていない。そんなものを信じるなんて馬鹿げてる、あり得ない。

僕は今まで普通の、普遍的な生活を送ってきた。事実がどうあれ、少なくともそう自負している。

昨日も今日も、そして明日だって、明後日だって、そうあるべきだし、あるべきだった。

普通の高校生を演じ、普通の一六歳を演じ、普通の息子を演じ。

……演じる？

そうじゃないか。僕はずっと演じ続けてきた。演じていただけだった。

普通であらうとしただけ。

そうか。そういうことなのか。やっぱり。僕は。僕だった。

何も変わっちゃいなかったんだ。

『あの日』から、何も。

——だけど。これは逃げだ。明確な逃げだ。僕が僕であるべき世界から、僕は逃げようとしている。

『天才』と同じ。僕は所詮凡才で、そのくせ逃げる腰抜けになり下がるうとしているんだ。

だけれども。

ちよつとくらいいいんじゃないか？

なんて、そんな風に思った、そんな些細な隙間に僕の答えが転がっている気がした。心の奥底で僕のすべてを巻き込んで混じりに混じり合った真っ黒な塊、その中からなんとか摘みあげた一本のまっさらな糸は、次に僕が言うべき事柄を示していた。

言ってしまえよ。

「僕は……」

大きく深呼吸をする。そして。

言ってしまえ。どうせ僕は。

僕のままだ。

「——魔法を信じる」

そう口走っていた。静けさの中に畑中が息をのむ音が聞こえる。

ここまでできたら信じるさ、信じりゃいいんだろう？

たまにはいいじゃないか、本当に自分のしたいようにしたって。本当に自分のしたいようにしたって。

空気ダーツを飛ばしてくるヘンテコな同級生とセットで本の透視をする見るからに怪しい金髪男が同時に介在するこの状況下なら、魔法なんてものを信じるからと言って僕が狂人にカテゴライズされ

るようなこともあるまい。

魔法は神秘的だ。子供の夢だ。希望だ。そして幸い僕は無宗教だし。こうなってしまうている以上、付き合ってやるのが大人のノリってやつじゃないのか。そんな風に自分に対する言い訳を連ねつつも、結局は自分の好奇心を押さえつけることが出来なかっただけで、それは理解しているつもりだった。現実的で嫌な子供だったけど、それでも興味を持ったことから関心をそらせない。僕はそういう人間でいい。

「そうかい。だってさ、穂波ちゃんに美鈴姉え」

振り向くこともなく、穏やかにうなづく龍ちゃん。そのセリフの中に耳慣れない名前を聞いた。

「美鈴姉……いつからそこに？」

僕よりも早くそれに反応したのは久しぶりに聞く畑中の声だった。それに若干驚きの色が混じるのを感じ、畑中の視線の先を追う。本棚の横、龍ちゃんの真後ろ辺りに黒髪の女性が立っていた。って、僕はずっと龍ちゃんの方を見ていたわけだから、人が入ってくればそれに気付かないなんてことは……？

「いつから何も、今きたところよ。だってさ、とか言われても訳わかんない」

両手の平を天井に向けながら肩の高さまで持ち上げ、わからないというジェスチャーをしてみせるその女性は白衣のようなものを身に纏っていた。丁度理科の先生が実験の時に着るような、足首ほどまで丈があるやつだ。

「ああ……そのガキ、起きたの」

鋭い眼光をこちらに向け、女性はあからさまに嫌悪感を顕わにしておつづやいた。なんだか、何気にひどい呼ばれ方をされたような気がしたのだが。

「私、寝てる。ただでさえ雑用みたいなこととしてやってきたんだから少しくらい休ませて。まあお礼くれるって言うんなら、部屋の前にも置いておいてくれれば受け取ってやらないこともないけど」

よく通る強気な声でそう言うなり、女性は靴の音を床に響かせ髪をたなびかせながら颯爽と部屋を横切ると、僕や彼女がこの部屋への侵入に使ったと思われるドアとは反対側のドアに手をかけた。

「ああ！ ちょっとちよつとちよつと！ 結局新しい鍵はどうなったのさ？」

それを龍ちゃんが慌てて引きとめる。なんだかまたややこしそうな人間がでてきたなあと、遅れていた思考がようやく現実に追いついてきた。

「だから、つけ終わったってーのよ……おい、ガキ」

美鈴ネエと呼ばれている女性は首から上だけ振り向くと、見るからにイライラしながらこちらを睨みつけて言う。見れば、目は切れ長で鼻筋がすつと通っており、顔のパーツだけで言えばかなりの美人に分類できそうだ。長く伸ばされた黒髪も相まって大和撫子と言えなくもない。強いて言うならば、胸囲にもう少しボリュームがあっても悪くはないかな、うん、悪くはない。だがその目の鋭さには鳥肌が立つような洗練された凄みがある。もっと端的に表すとすれば、怖い。ところでガキってやっぱり僕のことかなあ。

「あんたのせいだから。こんな面倒なことになったのはい？」

「な、何の話ですか？」

あっけに取られる僕を綺麗にスルーし、女性は開きかけだったドアの中に入るとパタンと閉めた。

「……龍。私は美鈴姉と話をします」

口少なくそれを見ていた畑中も同じく立ち上がり、声をかける間もなく早々とドアの中へと消える。またもや僕はスルーである。

「ああ！ ……もー。にやつはは、まいったなあ、すっかり話の腰を折られちゃった。美鈴姉えに話を振ったのがそもその間違いだったかな」

龍ちゃんはぽりぽりと頬を掻いた。僕は全くおいてけぼりで、その思考は再び周回遅れにされてしまった。それにしても僕のせい

ていったい何が？ それについてのフォローはないのだろうか。

「案外すんなり答えてくれたねえ。お兄さん意外だよ」

龍ちゃんはニコニコしながら僕に向かって数回手を叩いた。でも、確かに魔法を信じるとは言ったが心の底からかと聞かれればまだそこはあやふやな色合いである。一体今から彼はどんなことをして見せてくれるのか？ 僕はいつそ吹っ切れて、ワクワクしてきた。

「えと、それでどこまで話したんだったかな」

再開された龍ちゃんの話に、僕は男二人きりになった部屋で急いで耳を傾ける。

「あ、それはもう持ってくれてなくてもいいよ」

と、龍ちゃんが苦笑しながら僕の手を指した。言われて両手にそれぞれブックカバーと本を持っていたままだったのを思い出し、それは机の上に置いておく。結局さっきの透視のようなものの詳細が語られることはなさそうだ。胸に抱えた希望の風船が少し萎む。

というか、なんだろう。エントロピーは増大するということでいいのだろうか、現下解消されるべき疑問は減るところか増えている気がするのだが。

「まー、あー、そうだねえ」

龍ちゃんは言いつつ再び机の周りを歩きだした。彼は話をするとき、立ち歩かないとだめなのか？

「ネタばらしというか、タネをばらすというか。こういうある意味観念的なものを言語化するっていうのは不可逆なプレゼンテーションというか、ある意味ロゴスなんだなあこれ。わかりやすく言葉にするのは結構難しいんだ。齟齬が発生しないようにするにはどうすればいいのかな」

歩きながら、何やらいかにも小難しい単語をざっと言い並べる。

「うん、面倒くさい。よし、決めたっ」

難解な語群とは対照的なすっぱりとしたものの言い方で、龍ちゃんは美鈴ネエとやらが消えたドアの前でおもむろにこちらへ振り返る。そして胸の前で勢いよく両手の指を組み合わせた。石造りの部屋に

乾いた音が反響する。

「セット！」

その謎の言葉を合図に、下から風が吹いたかのように金髪がふわりと浮きあがり、青とオレンジの配色のトレーナーがはためく。だがしばらくするとそれはおさまり、詰まる所それだけだった。

「……………」

なんだったんだ？

「んー、やっぱりマナが足りないなあこの部屋。今度どっかから持ってこようかな。さてと、八代くん」

ぶつぶつと呟くと、龍ちゃんはニコッと笑った。

「とりあえずここを出よう。そうすれば君の置かれている状況はすぐわかる」

今のに対する説明はないのだろうか。

「ああ！ 今のはただの起動さ。だから気にしないでいいんだよ、全然っ」

全然説明になってない説明を受けながら、もはや世間一般に納得と呼ばれる事象を放棄した僕は椅子の下からカバンを手にとり龍ちゃんの傍へと歩み寄る。

「とりあえずさっきの部屋に戻ろう。そこからじゃないと外には出られないんだ」

龍ちゃんは僕の先を行き、僕や美鈴ネエとやらが出てきた金属製のドアを開くと、スタスタとその中へはいっていった。それについて僕も狭い部屋へと戻る。

「アーサー」

中に入り僕がドアを閉めるなり、龍ちゃんは低い声でささやく。狭い上に二人しかいない大理石の部屋にはその短い声がよく反響した。次に彼は左手を天井に向けて突き出した。

「リアルクイール」

その声の残響が僕の耳に届いた次の瞬間、龍ちゃんの手には犬の形をした、台座付きの小さな木彫りの像が握られていた。

「これ……完全に美鈴姉えの趣味じゃないか。しかもやっぱり合言葉はそのまんまだし」

それを見て龍ちゃんは困ったような顔をして溜息をついた。僕は、別の意味で息が漏れた。

何もない空間からいきなり物体をとり出したのだ。十分驚くに値する。

「今のは……魔法？」

「うん、まあそうだね。と言ってもこれくらいなら大したアーティストじゃなくてもできるんだけどさ」

アーティスト？ 再三にわたって飛び交う謎の単語群。

「ああ！ こういう風に魔法が使える人間の呼び名なんだ。誰が言い出したのかはお兄さんも知らないけど。もちろん魔導師って言い方でも十分通じるよ。ただ、これから何度も耳にするだろうし覚えておいて損はないかもね」

あまりにあっけらかんと答える龍ちゃん存在はなんとなく僕に安心感をもたらした。

魔法はたぶん。本当にあるんだろう。

だがしかしそれを覚えておくことと一体どういうことに役立つというのだろうか。正直そんな知識を振りかざす光景など一瞬たりとも想像したくはないけど。

「にやはは、まあとりあえず出よっ」

横の壁に「裏」と彫られている扉を背にし、おんぼろソファアとパイプ椅子付き丸テーブルの間を通り抜け（なんでこの部屋の椅子はパイプ椅子なんだろう）、「表」側のドアの前に僕たち二人は立った。龍ちゃんは手に握る犬の彫刻を、その台座の裏側を突き出すようにしてドアノブに近づける。底に穴でもあいていたのかそれはしっかりとノブにはまったようで、彼が手を放してもそのままだ。

「八代くんが開けなよ」

これをこのまま回せばいいんですね？ 滑稽に感じながら僕はその犬の顔に手をかける。

「ん、多分」

多分かよ！ 心の中で突っ込みを入れながら、半信半疑のままに僕はゴツゴツして握りにくいそれを回して、引く。

ガチャリ。

それはまるで嘘のように何の問題もなく開いた。そして僕はようやく現在地を把握するに至ったのである。

「ここは……」

踏みしめる床は大理石ではなく、木目の廊下。長い年月を経た床板は、重心をほんの少し移動させるだけで古めかしい音をたてて軋んだ。

「そ。案外狭いもんでしょ、世界ってやつはさ」

いつの間にかドアをくぐり隣に立っていた龍ちゃんが何やら感慨深げに言葉を紡ぐ。木製のドアを閉めると、そこはなお一層、今までの何の変哲もない世界に戻ったように思われた。

ここ、学校じゃないか。あたりは既に夜深く、教師たちも帰ってしまったのか肅として静まり返っている。窓から差し込む月明かりだけが唯一の光だったが、そんな中でもこの光景にはどこか見覚えがあった。

それも当然のこと、もはやお馴染みとなった美術準備室の前に僕たち二人は立っていた。このドアはどういう仕組みになってるんだ？ 僕は疑問のままに振り返り、含みのある笑みで僕を眺める龍ちゃんを目の端に、木製のドアを開く。

だが、予想に反してそのドアが繋がっていたのは、学校の間取りそのままの美術準備室だった。生徒の描きかけの絵が網棚においてあったり、絵具や筆やパレットや、その他名前も知らない美術道具でゴった返している。さまざまな匂いが混じり合って美術室特有のかび臭い香りを漂わせていた。思わず振り返り、困惑の表情を龍ちゃんに向ける。

「そりゃまあ、そうなるよね」

龍ちゃんは僕の右手首を指差して言った。

「それ、その腕輪。まあ今はそれをどうやって手に入れたかったのは敢えて聞かないけど、とにかくそれね。それが前のカギだったんだ」

カギってというのは？

「さっき木彫りのワンちゃんをドアノブにつけたでしょ？ そのまんま過ぎるけど、あれだよ。あれをドアノブにつけるとあっちへ行けるんだ」

あっちというのは、おそらくあの部屋のことなんだろうな。と僕は想像で省略部分を補間した。

「でまあ、その鍵ってのを手に入れるためには、この部屋の中で合言葉と簡単な呪文を唱えなきゃだめなんだよ、さっきお兄さんがしたみたいだね。そういうわけで君がそれを持つてるのは不思議でならないわけだけど、ま、今はいいんだよーそれは、全然っ」

今は、という言葉が嫌なくらい耳についたが、それはそれとして僕はまたドアを閉めた。

「確かに僕がどこにいるかはわかった。でもまだそれだけだな」

疲れの滲み出るような声を上げる僕を横目に、それをこれから説明してあげるのさ、と言いつつ龍ちゃんは月明かりの差し込む古めいた窓枠にもたれかかる。

そしてそこはかとなくしみじみとした口ぶりで語り始めた。

5. 始まりの終わり

「世界には表と裏がある。これはね、大昔からの話さ。表というのは今ここ、こっちの世界のこと。裏というのは」

龍ちゃんは顎で美術準備室のドアをさした。

「さっきの世界だ。表と裏って言うのはもちろん比喩的な表現なんだけど、この辺の説明は詳しくすると面倒臭いし、今はとりあえずニュアンスとフィーリングでなんとなく理解しておいてもらえると助かるかな。今までは君が見たことも聞いたこともなかった反面世界がもう一つあるっていう認識を持つだけで十分」

二つの世界がある。だって？ 表と裏？

ある一つの著しいズレが、僕の頭の中を駆け巡る。

だがそれは口にしない、顔にも出さない。長くなりそうだと踏んだ僕はそのドアにもたれかかり、龍ちゃんと廊下をはさんで対面する形となった。

「ああ！ 言うタイミングを失しちゃいそうだから言っとくけど、気絶してた君と穂波ちゃんを部屋まで連れて行ったのは美鈴姉えなんだ。後でお礼言っておきなよお？」

そうだったのか、あの女性が。第一印象からして勝手に性格の悪いイメージを持っていたが、実はいい人なのかもしれない。人は見た目によらないからな。

「君を拾ってきた理由くらいは話したほうがいいのかな……んー、あそこに倒れてたまま放っておいたらいろんな意味で危なかったかもしれないんだよね。あの状況はお兄さんたちにとっても中々不測の事態だったんだよ。その腕輪のこともあったし」

なんだか都合よく色々曖昧にされている気がする。

「それで君は僕たちに連れてこられた、わけなんだけど。ああ！ 随分短くまとっちゃったなあ。つまるところこんなものなんだけど、特別に疑問に思うことは何かあるかい？」

まだ疑問尽くしだ。何よりこの腕輪についてほとんど触れられていないのは、意図的に重要なものを避けて通られているような気がして気分的に不安定なものがある。だが逆に言えばそれについて語ることは相当に難解な要素を孕んでいるということだ、それは想像に難くない。まだ真実のしの字も見えてこない腕輪を前にして、素性の知れないそれが如何に厄介なものであるかを思う。

神は不平等な世を造ったものだ。

僕だけがこんなに楽しい目をみていいものだろうか。

なんてな。馬鹿げた冗句だ。

何にしろ、おおまかな事のあらましについて相当な理解を得たことは確かだった。おぼろげだった僕の現実には、再びしっかりと輪郭が与えられていく。

「うん……まずは、ありがとう」

僕の礼に、月光によく映える金髪が窓枠から僕を見降ろしてにこやかに微笑んだ。

「そうだな、まずはあなたたちが一体何者なのか教えてほしい」

そして言葉を選びつつ疑問文を作り上げる。

「ああ！ いい質問っ！ たぶんそれは穂波ちゃんだったり、美鈴姉えだったり、果てにはお兄さんのことを聞いてるんだねー？」

その通り、と僕はうなずいた。龍ちゃんはそれにまたニツコリと微笑み返してくる。

「お兄さんたちはね、『封じ屋』なんだ」

またもや聞き覚えのない単語だった。

「『封じ屋』ってのはね、簡単に言っちゃうと表の世界と裏の世界のバランスを保つ人たちが集う組織なんだよ。まず君たち表の人間は世界に裏表があることなんて知らないでしょ？ まずそれが第一。裏の存在を表に悟られないようにする。勿論その理由はある」

一息ついて、龍ちゃんはその理由とやらを並べだした。

「僕たちはマイノリティなのさ。魔導師なんて、今の人口比率からいえば世界に数えるほどしかないんだ。そこで……ああ、うん。」

ちょっと待ってね」

何故か嬉々として語る龍ちゃんは、そこでまた言葉を切った。どうしたんだろう？

「黒板があったほうがいいんだ、ちょっとわかりにくくなるからね。まあ、術は使わなくてもいいかな」

「……？」

黒板？ 何をする気だろうか。

と、龍ちゃんは眼を瞑り、何かを乗せているようにして右手の掌を上にした。間を置かずしてその掌には異変が生じ、水が沸騰した時のごとく紅い泡が湧き出す。

注視しているとその小さな泡から、短いが何百本という紅い水の柱が突き出し彼の掌で踊り出した。どこか楽しそうにはね回るそれは、リズムの激しい邦楽を彩るイコライザーを彷彿とさせる。そして血よりもずっと鮮やかで恐ろしいほど明るい紅の柱は、しばらくすると再びその躍動を緩やかにし龍ちゃんの掌の中へゆっくりと落ちていく。

一時の静けさ。

「……さあ、来い！」

何が来るんだ？ 僕は息を吞んで、月光に照らされる彼の掌に目を奪われていた。

が、5秒ほど経っても何も起こらない。何も来ない。

あれ？ ひょっとしてもう何か来ちゃってる？ と、思った次の瞬間。

龍ちゃんの右掌は爆発した。

間欠泉のようにして、燃えたぎる炎のように熱く、鮮血がほとばしるがごとく紅い水の柱が、廊下の空間を天井まで一気に貫く。その光景はまさに、荒れ狂う龍が池から天を目指して飛び出す様そのものだ。

圧倒される。

これが……魔法！

全然違う！ マジックなんかじゃない。手品なんてもんじゃないぞ、これは！

暴れる柱はやがて歪曲し、勢いを落とすと、彼の人差し指へと凝集していく。そして、彼の掌から湧き出たすべての朱が右人差し指に集められると、それは嘘のように小さな球状になって安定していた。宇宙から送られてきた映像などで無重力状態の中、水が球になって宙浮いている風にして、脂ぎって紅く光る球が彼の人差し指を起点にふよふよと揺れ動いている。

「おお……」

「にゃっはー！ どうようようー、ちよつとわざわざ派手にしてみちゃったりしちゃったよー！ すごい？ すごいよねっ！」

ポーカーフェイスの笑みが聞いてあきれる、今の龍ちゃんはまるで子供のようにはしゃいでいた。純粹に、好きなものを好きだということを隠そうともしない。そんな無邪気すぎる笑みに僕は少し興を削がれたけど、まあそれは顔には出さないでにおいてやることにした。

「ほーら、これでこういうことができるんだ」

龍ちゃんが人差し指で宙をひつかくとそこには、龍ちゃんの動かしただけのままに紅く光る、細い軌跡が残っていた。

夜の学校に、紅く光る魔術のロープ。幻想的とまではいかないが、不思議と心を奪われるな光景だ。

「さって、そろそろ説明を再開しようかな」

龍ちゃんが左手でその軌跡を払うと、それはすうっと消えてなくなる。左手はさながら黒板消しの役割を果たしているらしい。

「まず、君みたいに魔法を素直に受け入れられる人間なんてごく少数なんだ。それにこんなことが知れ渡れば世界中が大混乱に陥るだろうね。まあ別にこっちが混乱に陥るくらいなら――くらいって表現はいささか不謹慎だけどさ――それは別にたいした問題じゃないんだよね。表世界と裏世界、なんていう言い方をしてるけど実際その通りで、問題はこちらの世界が不安定になればそれに同調するよ

うに裏も不安定になるってとこなんだ。しかもその上裏の世界は表のそれよりずっと脆い」

そこで龍ちゃんは胸のあたりに一本、赤光の線を描いて見せた。

「んー地面に水平にした一枚板の上下に、立体物を張り付けているっていうイメージがわかりやすいかなー」

その線はどうやら板のようだ。そしてその上側と下側に、それぞれ棒人間を描く。どうもこの人、絵心はないと評さざるを得ない。

「例えば、板の上側で戦争があって爆弾が落とされたとする。そうになると当然上より下の方が剥がれ落ちやすいよね。板の上半分側ではそこにある物体が剥がれてしまっても、地面に落ちてしまわなければ再びくっつけることができる。けどね、都合の悪いことに落ちてしまったものを拾うことはできないんだね」

龍ちゃんが下側の棒人間の線をなぞると、なぞられた箇所だけ線は青色になり、そして地面にしていた線から離れ、垂直に木目の廊下へと落下する。そして落下したそれは、床に触れた瞬間バラバラにはじけとび、消えてしまった。

「こう。だから、表世界の不穏な錯綜で裏世界が崩壊しないようにすること、これが僕たち『封じ屋』と呼ばれるアーティスト組織の最も重大かつ重要な理念で、そして目的なのさ」

言いつつ、龍ちゃんは先が紅く光る人差し指をぴんと立てるジェスチャーを交えた。そしてその指は二本に増える。

「そして二つ目。ある程度の想像はしてるだろうし、実際そんな内容を描いてる本っていうのは今のこの世界に少くない。つまり簡単に言うると裏の世界には、表の世界で悪さをしようとするようなやつらがいるわけだね」

左手で先ほどの絵を消し去ると、今度はバイ菌(?)のような絵を、光るインクで空中に描く。

「でもまあ、例えその存在が意識的にこちらの世界に害を及ぼすものでなくても、それが存在していることによって第一の理念が侵されるような場合にはその不穏分子を速やかに排除する」

隣れにも、その絵は左手であつという間に消滅させられた。

「それが僕たちの主な任務なんだ」

建てられた指はさらに一本追加され、3本になった。よく見ると、人差し指の魔法のインクはほとんどなくなつて、もう消えかけている。

「さらに三つ目。裏ではなく、こちらの世界で発生するイレギュラーを除去する。これはそうだね、わかりやすく例えると消防士さんみたいな役どころになるかもしれない。イレギュラーっていうのは……そう、まさに君みたいだね」

立てられた三本の指が、迷いなく僕へと向けられる。除去、という物騒な言葉に背中がゾクリとし、体が強張った。

「にゃはっ、除去とか排除とか、その持つ意味はその場その時によつて様々だよ。だからそんなに緊張しなくても大丈夫、君はもう僕たちによつて処理された後だ。あるいは現在進行形かもしれないねえ」

現在進行形ね、なるほど。

「わかったかな？ 僕たちが一体どういう存在かつてことはさ」

言うのと、龍ちゃんは右手を振つて残りのインクを指から離散させた。僕はドアに背をつけて木のぬくもりを感じたまま手を組んで下を向き、考える。話の内容が余りに現実離れしすぎていて、能動的な理解を伴わせるにはまだ当分かかるだろう。

だが現実とはなんだ？ 今の僕にとって現実の定義は相当に不鮮明になっている。目に見えているものを僕の世界とするならば、そこにある現実はまさしく今この場の不思議そのものなのだから。

「もう一つ聞きたいことがある」

「いくらでもどうぞ」

「どうしてこの腕輪のことについて僕に聞かないんだ？」

僕は右手首を左手で指さした。龍ちゃんが目を細くする。上っ面だけの笑みじゃない、無邪気な笑いでもない、遊興の色が怪しげにその瞳に浮かぶ。

「……にやはは、今日は家に帰りなさい」

だがその表情とは裏腹に、彼のセリフはいささか冷めたものだった。

「どうして？」

「今何時だと思う？ にやははは」

言われてハッとする。なんかこのセリフ今日三回目の気がするのだが、いい加減僕は時間にもっと関心を寄せるべきなのかもしれない。

「なんと、あと一分で明日になっちゃう時間なのさっ」

……ああ、なんとなくだけどわかつてはいたさ。だって真っ暗だし、本館も消灯されている。だけどまさかもうそんな時間だったとは、さすがに自分の体内時計の不正確さには嫌気がさす。

「でもまだ話したいことがたくさんある」

「ああ！ そうだね、それは勿論。お兄さんだって聞きたいことはあるさ。だけどそれは今日じゃなきゃいけないということはないんじゃないかな？ 月曜日になったからといってお兄さんは居なくなったりしないからね。それに今こうして君は立っていられてるみたいだけど、実際は相当なダメージを受けてるんだよ、八代くん」

全身に意識を走らせるが、相当ななどと形容されるほどのダメージを受けているようには到底思えない。どの部位も自分は正常だと声高らかに叫んでいる。

「身体的な損傷は大したことないんだ。だけど君は魔法を使った。精神的に相当つらいはずだよ」

その言葉に僕はいぶかしむ。

「僕が何を使ったって？」

「魔法だよ。だから穂波ちゃんと相打ち、なんてことになっちゃったんじゃない」

そのとき不意に白い記憶が鮮明に蘇る。そうだ、僕が握ったのは畑中の手だったじゃないか。

「でもあれは僕がやったんじゃないと思うな」

龍ちゃんの顔に純粹な「？」が浮かぶ。

「僕に向けられた畑中の手を握っただけだったんだ。少年漫画的安直な主観論を述べさせてもらえば、きっと畑中の魔法の発動の邪魔をした、とかそんなことだったからあんなことになったんだと思う」

「握っただけ？ ふうん、そんなケースは聞いたことがないなあ。僕はてっきりいきなり魔法を使えるようになった君がその力を使って何事か悪事を働いたものだとはかり思っていたからね。にゃっははは！」

そのセリフの大半は胡散臭さで満ち溢れていた。完全にからかいの語調だ。

「……とにかく、僕に魔法なんてものを扱える力があるはずはない。つい数時間前まで僕は表の世界に生きるごくごく普通の学生だったんだ」

言い終わると、龍ちゃんの顔に浮かぶ笑みが再び仮面に戻る。

「にゃはは、そうかな？ まあ、とりあえず帰りなさい。帰って寝なさい。学校の校舎と門のカギはお兄さんが開けておいてあげたから」

いつの間にそんなことを。存外に抜け目のないキャラだなこの人。言いつつも、それはありがたい話だった。

「だけど、本当に帰っていいのか？」

当然これ以上拘束されるような状況を望んでいるわけではないが、どうもここであっさり解放というのにはなんとなく一抹の不安が走る。それにこの腕輪だ。

「これはあなたたちに返すべきじゃないのか」

「いいよ、もうそれ君にあげる」

あ、そうですか。じゃなくて。

「外し方がわからないんだけど、これ」

その発言は孤独な廊下に一人で響いた。

龍ちゃんがない。

思わずドアから背を離し、辺りを見まわす。窓枠から一筋の月光が

おりて床板を白く輝かせていた。それだけだった。

「……なんなんだよ……」

僕はもう一度美術準備室の木製のドアを開けたい衝動に強く駆られた。だけどそれはせずに、足元のカバンを手に取り廊下を歩きだす。龍ちゃんの言ったとおり、僕が学校の外に出るための要所のカギはすべて開けられていた。戸締り担当の先生は不用心だと怒られるだろうな、と一瞬だけ気の毒な教師のことを考えたがそんな些事はすぐに頭から失せた。

重々しい鉄製の正門を全身を使って押し開くと公道に一步踏み出し、車のほとんど通らない車道を前に、向かって左に歩を進める。広々と続く学校の敷地を左手に歩きながら、僕は星のない現代の夜空を見上げた。

流れてここまで来てしまったが本当によかったのだろうか。今更ながらそんな思いが頭蓋をかすめる。無邪気に手放して現状を楽しめる程おめでたい人間ではないのが、僕だ。脳内で好奇心とぶつかり合い激しい軋轢を発生させている警戒心は、未だ心のしがらみとなって思考を鈍らせる。重要なことは殊の外たくさんあるが、現今の最重要事項は間違いなくこの腕輪だろう。この腕輪こそが僕をこのヘンテコな世界へ引きずり込んだ。

それとも世界の正しい形を知るきっかけになった、とでも言うべきか。

とにもかくにも、僕は底なし沼に片足を突っ込んでしまっているようなものだ。まだ棺桶じゃないだけマシだとは言えるかもしれないが。しかし逆にいえば結論を急ぐ必要もさしてないのかもしれない。楽観視するわけではないが、今はまだ大して深刻に考えるべき要素は存在しない。

世界は二つあって。

魔法使いがいる。

ああ、アーティストとかっていったか？

それだけだ。

それを知ったからと言って、僕の平々凡々な日常生活に大規模な変遷を生ずることはない。失意と落胆で満たされた平素にほんの少しの刺激と高揚が加わるだけだ。明日明後日と学校に行かなければ、高揚に至ってはほとんどその役割を果たさぬままに慣れという名の魔物に食われて消え失せるだろう。だったら騒ぐことなんて何もないに等しい。

不思議と、危機感も全くと言っていいほど感じない。

だったら僕が今すべきは自室のベッドで惰眠を貪ることだけではない。

まとまらない数多の思考回路を全て道中キャンプさせてから、僕は自分が自宅の前にいることを認識し歩みを止めた。とりわけ大きいわけでもない、普通の一軒家である。部屋の電気は消えている、だが家の中に睡眠中の人間は一人もいない。正確には、睡眠中に限らず、人間は一人もいないのだ。

僕は父の手一つでここまで育てられた。母は物心ついたときから居なかった。父からは母は僕を産んだ時に亡くなったのだと、それを不思議に思うような年齢になってようやく聞かされた。だがその時既に僕の中に出来上がった常識、僕の親は父しかない、という常識がその程度でどうにかなることもなく、僕には何の感慨もなかった。

父は、なんというか変な人だった。平時は穏やかであるのに、妙なところにこだわりを持つ。好きになれる面もあれば、どう頑張っても好くことのできない面もある。例えば、いろんなことを自作でやりたがるところとか。

ダンスや本棚といった家具はもちろんほとんど全てが彼の手作りだったし、挙句の果てにはフライパンと鍋をわざわざ製造工場に見学に行つてまで作り上げたこともある。だからと言って決して飛びぬけて器用というわけでもなく、全自動洗濯機を作ろうとし出したときには、宥めるのがそれはもう大変だった。それ故に生傷の絶えないある意味かなり迷惑な父なのである。

そんな風変わりな父だが、男手一つで子供を養うというのには厳しいものがあるのも当たり前で、仕事柄彼が一晩帰ってこないなんてことも月に五、六度。もはや日常茶飯事だった。僕としては一人分食費が減っているのだから逆に仕事量は減ってしかるべきではと思うのだが、大人の世界と言うのはどうも一筋縄ではいかないらしい。

そして今日もその日なのである。登校前、今日は帰らないということ告げられていた僕は何の問題もなく、玄関のカギを開けて人気がない自宅に入り込んだ。

「ただいま」

靴を脱ぎ、廊下の電気をつけながら言う。返事はない。あつたら怖いさ。この帰りの挨拶は、いつでも例外なく僕を待ってくれているこの家に向けたものだ。静まり返ったリビングを通り過ぎ、フロアリングを軋ませながら階段をのぼる。

「あ……飯食べてないな、結局」

部屋のドアを開けて電気をつけてから、その事実気づく。いろいろあったし、いい加減お腹がすいた。

丸一日空けていたわけですらないのに、なんだかとても懐かしい僕の部屋だった。嗅ぎなれた自宅の香を胸一杯に吸い込んで安心してから、荷物を勉強机の椅子の上にどかりと降ろすと、僕は再び部屋を出て階段を下りた。

リビングの電気をつけると、食卓の上に一枚走り書きのメモが無造作に置かれてあった。それを手に取り、読み上げる。

「冷蔵庫にボルシチと味噌汁。ご飯は炊いてある。おかずは適当にとりあえず、何故汁物をかぶらせるんだ？　これは選択を許すということだろうか。だが残念なことに今までの経験から行くと、どちらかを食べなかった場合確実に怒られる。わけがわからない、怒るなら汁物は一食に一種類にしてほしい。その要望は常日頃から申し上げているのはいるのだが、遺憾にもそれは今日も通らなかったということらしい。そもそも暦の上では夏だというのにボルシチと

いうのもどうかと存じ上げる。

ていうか適当なおかずってなんだ。今日のごはんはなに？ と聞いて、なんでもいいよ。と返される母親の気持ちがわかってしまうような言い回しするなよ。

一つ溜息をついて、悪態をつきながらも結局僕は父が用意した夕食を机の上に並べると、それをきれいに平らげ、長きに渡る空腹に苦しんだ胃を食物で満たした。毎度のことながら美味だった。ボルシチは敢えて温めずに食べた。思っていたほどまズくはなかったのだ、というかむしろ普通に美味しかったので、こういう食べ方を開拓してもいいんじゃないだろうか、と食べながら思う。先入観にとらわれるのは人の悪い癖だ。とにかく、料理だけは美味しい、もとい上手い父である。

ごちそうさまでした。

食べ終わると、時計の短針は一二と一の間を、長針は三の辺りを指している。もうこんな時間かと、食器を洗いながら、大きな欠伸が出てしまう。いつもなら机について勉強している時間だ。だが、とてもじゃないが今日はそんな気にはなれないな。カタリ、と最後の一枚を水切りに並べると食事のためだけに降りてきたリビングとはさっさとおさらばし、もう一度階段をのぼる。

部屋に入ると共に、立っていられないほどの眠気がどっと押し寄せてきた。身体的にはそんなに大層なことはしていないはずなのに、吸い込まれるようにしてふわふわのベッドに僕は倒れこむ。

着替えなきゃいけない、このまま制服で寝るなんて、だめだ。だらしない。せめてズボンだけでもはきかえないとほこりまみれになっちまう。

着替えなければ。

そう思ったのを最後に、長い長い六月三十日の僕の記憶は途切れた。

「……………」

わけだが。

一文で状況を書き表すと、ブルーの髪を伸ばしたぬいぐるみが僕の枕を座布団替わりに胡坐をかいて座っていた。

『ようやく起きたか、早く飯にしろ』

そして僕は自分の体勢を確認するまでもなく、当然のように固いフローリングに横になっている。

もはやこの手のセリフに回す語彙が僕には足りなくなってきたいることを痛切に感じつつ、言わせてもらいたい。

何だこの状況。

「……なんだ、君は」

体を起こしてぼんやりと、目は覚めているのだがまだ夢の中にいる気分で呟く。少なくとも目の前の蒼髪人形が僕の父親でないのは明白だけど。いや、多分人間じゃないよな？　こいつ。

『お前に危害を加える存在ではない、安心しろ。そして飯を食え』
流暢な日本語を話しながら悠長に食事を要求してくる、ずいぶんとフレンドリーな人形だった。

危害を加えてこないなら、さして焦る必要はないな。などと既に頭のねじが数本外れたような納得を得る僕。

……おい、寝起きから発生してほしくもない強制イベントか。

フラグはどこで立ったのだろう、とか考えるまでもなく昨日不必要に乱立しているので、それに関しては焦る必要も、まして意味すらもない。

しかし一六年と八か月の人生を過ごしてきた僕であるが、自分がエマーゼンシーに対してここまで楽観的な対処をできる存在だということには、自身に畏敬の念をすら覚える。これは決して『鈍感』だとか『能天気』などという無粋な単語で置き換えてはいけない、僕の新たな長所と捉えるべきだな。

大きな目と、低い鼻に、小さめの口。長髪を上げるためかカチューシャらしきものをつけている。着ている服はベストのようなもの

に半ズボンと体育会系のものだけど、子供のように高い声と見た目から性別を判断するなら、目の前の不吉な有機物はどうかやらのようにみえなくもない。人形に雌雄の別があるならの話だが。

じゃなくて。

「僕はもうちょっとやそつとのことじゃ驚かないと思っていたが……今現在の自分の心理状態を驚愕以外の言葉で言い表せる自信がないよ」

『その割には落ち着いているな』

「……ああ。おそらく驚天動地に対する抗体が有り余るほどできたんだろう」

『一日足らずでそれを作りだすお前の精神のほうにこそ仰天だ』

ナチュラルに人形と会話を交わす僕。

これってどうなんだろう、なんつーか人格的に。

これは、なんだ、古典的にほったを抓る必要性も感じられない程度にはわかる。とりあえず夢じゃあないということが。先ほどの夢の話に基づくならば、僕の記憶にこんな人形は現存していないし、僕にはこんな見た目だけがかわいらしい小人を脳内で造り上げられるような殊勝な妄想力も備わっていないのだから。だけどなんだろう。なんとなく、だけど。

——僕はこいつに会ったことがある？

気だるく体を起こすが、固いフローリングで寝ていたせいで体のあちこちが凝り固まった痛みを訴える。そして自分がまだ制服を着ていることを思い出す。だらしないうちにカーテンすらも閉められていない部屋には、さわやかな陽光がさんさんと降り注いでいる。

ああ、そうか。こいつは。

会ったことがあるんじゃない。

声に聞き覚えがあったんだ。僕の脳裏に呼び起される先日のワンシーン。

——死を覚悟するにはまだ早すぎるな。

このセリフ。それと脳内声紋照合でぴったり一致する目の前の声。

間違いない。そうだと分かった瞬間、僕は完全に警戒心を解いた。どういう形であれ、恐らく助けてくれたんだ、コイツは僕を。

道理で寝起きとは言え、気が入らなかったはずだ。無意識下でなんとなくだけどそれをわかっていたからなのだろう。必要以上に気を置く必要など初めからなかったのだから。

そして窓から入るこの光の感じ。……どうもこれは朝じゃない気がするな。物語の開始から数えて既に四度目か五度目になるこの疑問なんだけど。

「……今、何時かな？」

机の上に設置してある目覚まし時計に目をやる。

おや。

「なんだよ、この時計壊れてるぜ。もしくは電池が切れてるのか……」

『都合のいい状況解釈は時として人に思わぬ不幸をもたらすものだ。その時計はいたって正常な状態に置かれていてだけ言ってやろう』
人形がえらく平坦な口調で真実を告げた。

壊れてるのは初めから僕の体内時計のほうなんだろう、これはもう間違いない。

「……十五時間睡眠なんて生まれて初めてだ」

こんなもの、出来るなら通りたくない通過点だったけど。時計の短針はどんな捻くれた見方をしててもアラビア数字の3を指している。そしてこの光に満ち満ちた部屋。PMじゃないとなればAMなのだろうな。

『だから腹が減っていると言っとうろが』

「だから僕のリフだ……自己紹介くらいしたらどうなんだよ？ お前が普通の人間じゃないことくらいはわかるが、僕だって窓からお前を放り出すくらい未知に対する防衛策は持ち合わせているぞ」

『大した防衛策だな、やれるものならやってみろ』

僕は迷いなく人形の服の首根っこを掴み、窓を開いて投げ捨てた。

『この鬼ー。悪魔ー』

窓から身を乗り出し庭を覗く僕に、地面から聞こえるはずの棒読みのセリフは真横から聞こえてきた。

『自分の半身をぞんざいに扱うのは褒められたことではないな、椎奈』

僕の右肩に腰掛けながら、耳元でささやく小人。重みはほとんど感じない。

一応名前を知られているようだが、僕の部屋に易々と忍び込んでいる時点で、それを知ることの難易度はガクツと下がっている。机の上に無防備に散乱している教科書の裏面を一目でもちらりと目にすれば、そこにマジックで律儀に書かれた僕のフルネームを発見することはいとも容易い。まあ名前を知られていたからと言って、この世界にはデスノートは存在しないわけだから別に深刻な話でもないし。

まさか、ないだろうな？ デスノートなんて物騒なもの。

だって魔法使いがいるんだぞ。

ない、よな。

「……もう好きにしてくれ、って感じだよ」

さらりとした長髪が首筋を撫でる。気持ちいいような、悪いような。

で、なんだって？

『私はお前の半身だ』

「あー、なんだ。冗談は休み休み言ってください。頭が痛くなるからやめてほしいんだけど」

『よく冗談だと見破ったな』

冗談だったのか？

『当たり前だ、私の半身がこんな冴えない顔をした上に制服のままフロアリングで寝るようなだらしのない学生風情ではテンションもうなぎ下がりだ』

ひどい言われようだった。

……全部事実なんだけど。

「ていうかなんだ、その日本語がおかしい感じの表現はひょっとして今巷で流行ったりしちゃってるのか？」

『なんだ、うなぎ下がりはもう時代遅れなのか』

いや、その時代は始ってすらいない。

会話中の引っ掛かりに一々引っ掛かってはそれこそ再び一日の終わりを迎えかねないので、すべてを力ずくで無視しつつ適当に会話をこなしながら、僕は一階へ降りた。

いい加減自分の適応力の高さには逆に呆れかえられる物があるな、と自分で自分の冷静さを幾度に渡り褒め称えつつ、洗面所で顔を洗い、歯を磨く。のだが。

「……………」

僕はもう一度肩の上の小人に目をやった。そいつは素知らぬ顔でそこにいる。髪とお揃いのブルーの瞳が美しく輝いた。

僕は鏡を見た。

僕は小人を見た。

僕はもう一度鏡を見た。

「……なるほど」

そして口をすすいだ。

『納得が早いな』

「ああ、まあね。こういう変化に強いのか、あるいは疎いのか、それかただ単に鈍感なんだろう。別に朝起きて幻覚が見えていたところで、私生活には影響がないしな。必要なら病院に行くさ」

『なるほどな。ってそうじゃねーだろ』

ペチン。と。頬を叩かれる。かわいらしい裏拳で。

祝・今日は僕が幻覚から初ノリツツコミを受けた日になった。

うわあ、全然嬉しくないや！

「だってお前、鏡に映らないってなんなんだよ……まさか吸血鬼か？ お前」

朝起きたら吸血鬼が僕の枕の上で胡坐をかいていた、なんてのも

かなり嫌だけど。

『吸血鬼よりはまだ幻覚のほうが近い。が、とりあえずお前は飯を食え。いい加減我慢できない空腹度だぞ。不思議なダンジョンシリズなら一歩歩くごとにヒットポイントがどんどん減りゆくくらいの空腹だ。しかもこういう時に限っておにぎりが出ないのがミソだな』

満腹度0%だ！ 死んじゃうよ！

ていうか、またそれか。確かにお腹は減ってるけど、急かさずにまず自己紹介くらいしてくれないか。ご飯は逃げたりしないし。

『だめだ。我慢できん。すぐに食わなくてもいいが何か飲め』

僕は耳元で喚く人形の言い回しがいい加減耳についたので反論する。

「飲めとか食えとかなんなんだ？ 腹が減ってるのはお前なんだろう、だったら用意してやるからお前が食えばいいじゃないか」

とはいいつつも、僕だってお腹は空いていた。まあ、ほぼ一五時間飲まず食わずなんだ、当然と言えば当然である。

どこことなく重くなりゆく足取りで床を鳴らして、リビングへと踏み込む。

『半身というのは真っ赤な、むしろ真っ青な嘘だが、私の生理的感覚のほとんどはお前のものをシェアしているのだ。例えば食欲。だから腹が減っているのは私であると同時にそもそもお前なのだぞ。お前が食えば私も満たされる。言ってみれば私はお前のビュアーであるがごとき存在なのだ。簡単かつ明朗快活な話だろう』

なるほど言っている意味はよくわかるけど、いや、やっぱりよくわからないな。というか理解したくない。

真っ青な嘘ってどんな嘘だ。僕のほうがよっぽど真っ青だったの。

ついでに、明快と言いたかったのだろうが、明快は明朗快活の短縮系じゃない。全然意味が違うよ。

カーテンは閉められていたが、電気をつけずとも十分に明るい三

時のリビングはそれが当たり前であるかのように無人だった。あの親父はいつ帰ってくるつもりなんだろうか。

とりあえず冷蔵庫を開け、適当な飲み物のパックを一本取り出した。洗ったまま流しに置きっぱなしだった昨日のコップにそれを注ぐ。

『理解するもしないもお前の勝手だ。……実は私はお前がすごく気になっているその腕輪に関わる存在なのだが、まあ話を信じないならしてやる価値もない』

危うく口に含んでいたオレンジジュースで、ダイニングキッチン
の床に芸術を描くところだった。

……まさか腕輪の精だとか言いだすんじゃないだろうな。

『私はその腕輪の精だ』

言いだしたぞ、おい！

『無論、冗談だ』

「お前は何をするよりも先にもっとわかりやすい冗談のメイキングを体得すべきだ！」

『お前の理解力がないのが悪いのだ、ガキンチョ』

会話が全く成り立たないよ。

『平たく言うと、私はお前が導力を得たことで顕現している』

「……頼むから、わかるように説明してくれよ」

僕はオレンジジュース入りのコップを机の上に置き、まだ食べられる物があつただろうかともう一度冷蔵庫の戸を開いた。

『聞く態度というものを知らんのかお前は。まあいい、というか話す
と長いからもう腕輪の精霊でいい』

「いや、さすがにそれはおざなり過ぎるだろ！」

『あーお腹すいたなあ。話す気力がないなあ』

「わかった、わかったよ！ わかったから、僕がなんか食べればいい
んだろ？ 食べるから、だからさっさと話せ」

言いつつ、朝ご飯——いや、これはもうどう考えても昼ご飯だけど、
気分的にあえてそう表記する——の準備を済ませていた。昨日

冷蔵庫を開けた時に、ラップに包まれたサンドイッチを見かけたことを思い出したのである。なんだかんだいって準備の良い父だ、その辺は抜かりがない。これが僕の朝食用だなんて保証はないのだが、飢え死にしては説教も受けられない。食べることにした。

食卓に付き、それとなしにテレビをつける。軽快なアナウンサーの声がリビングに響いた。食事時にかかわらず一人で家にいる時はBGMがあった方がなんとなく安心できるのだ。電気代を考慮すれば家計的にはよろしくないのだけど、まあそんなことを気にする子供は可愛げがないので気にしない。

『人の話を聞く態度というものを知らんのだな、貴様は』

断定されてしまった。その上二人称が『お前』から『貴様』へと、もともと高くもなかったのにさらに格下げされていた。口調には先ほどからびつくりするほど起伏がないが、その辺から地味な怒りを読み取れなくもない。

「いいじゃないか、別にお前の話を集中して聴かないわけじゃない。言ってみればテレビはただのBGMさ。それにお前は人じゃないだろ」

『そういうのを詭弁というのだガキンチョが。人のなりをして人の言葉を喋る、これがなにゆえ人でないと言えるのだ？』

「人にしては小さすぎる。それに人間というのは基本的に鏡に映るもんだ」

『む……それもそうか』

あっさり論破されてんじゃねえか。

『まあいい。私は簡単に言えば、貴様が魔法を使えるようになったからここに存在しているように見える。そんな感じの存在だ』

「そんな感じのって……またえらく曖昧だな」

まあ、何が起こったって不思議じゃないと言う心構えは装備しておいて正解だったのかもしれないけどさ。じゃなきゃ僕は警察呼んで、今頃精神病院送りだ。だがしかし。

「そもそも、僕は魔法なんて使えないぞ？」

『だから、なった、と過去形で言っとうろが。お前は昨日の一連の出来事のせいで魔法が使えるようになったのだ。その過程に本人の意思は介入出来ない』

そんなことだろうとは思ってたけど。やっぱり龍ちゃんの言ってたことは本当だったのか。

全くもって迷惑な話だ。

異能の力というものに対する、いや、それが異能の力じゃないとしても。陸上競技であろうと、水泳であろうと、シンクロナイズドスイミングであろうと、はたまた美しいバレエであろうと、オーケストラの演奏だろうと、すばらしい絵画だろうと、書道だろうと。

僕の好奇心はあくまで傍観者としての好奇心だったのだ。

パフォーマンス側に回りたいといった好奇心では、決してなかった。

サンドイッチで口をもぐもぐさせながらそこはかとなく不快に思う。まあ、結局は自分の責任で、自分の意思で踏み込んだことだ。後悔はしてないさ。だが軽率に諸々の行動を取った自分に対して、腹ぐらい立てたって誰も構わないだろう。

そして不快に思うが、その感情をすら凌いで口の中に広がるおいしさ。卵とマヨネーズ、そしてパセリのバランスが絶妙すぎる。おそらく他にも隠し味やら手の込んだ作り方があるのだろう。この親父、シェフになってレストラン開いたらどうだ？ とたまに真剣に思うことがあるくらいだ。それ程までおいしい、三時に食べるには勿体ないくらい贅沢な食事だった。

「まあ……それはそうとして、実際そうなんだとして。仮定して、だ。それがどうお前と繋がるんだ」

『そうだな』

肩からひらりと、まるで質量がないかのように机に飛び移る。

『まず』

「ちよっと」

僕がその説明口調に待ったをかけた。

『なんだ』

「名前だ、お前の名前を教えろ。やりにくい」

背丈の小さな人形だか吸血鬼だか幻覚だかは、その発言の意味をわかりかねる、といった風に小首を傾げ、僕の顔を見上げる。

『昨日もそんなことを言っていたな、貴様。別にそんなもの必要ないだろう』

昨日？ ……ああ、龍ちゃんに対してそんな発言をしてたかもな。

「呼び名がないといざという時にやりにくいんだよ。って言うか、そんなときから居たのか？ お前」

『居たものにも、貴様が昨日あの部屋で目を覚ました時からずっと見ていた。ただ、今日の朝になるまで顕現できなかっただけだ』

なんだかよくわからないが、結局名前はなんなんだ？

『好きなように呼ぶがいい。決まった名前はないからな』

そうなのか？

『ああ、ない。案がないならカギを召喚する合言葉だったか、アーサーとでも呼べばいい』

「それはだめだろ、お前女の子っぽいし」

その発言にも、小人は理解を示さないようだった。

『私に性別の概念は存在しない』

反応を見る限りそうだろうとは思ったが、やっぱりアーサーはだめだと思っぜ。

『ならとつとと決めるのだな』

もともと平坦な調子だったが、そこにさらに『興味がない』というあからさま過ぎるスパイスが加わったせいで、その声は果てしなく味気ないものになっていた。スパイスが加わったのに味気ないとはこれいかに。

僕はサンドイッチの最後のひとかけらを口に押し込み、テレビの天気予報を見つめ、今日は一日晴れか、と半分以上過ぎ去った土曜日のこれからを考えつつも、口を動かしながらうーんと唸った。

「とはいえ……」

面倒臭い。という言葉をハムサンドと一緒になんとか飲み込む。
提案者がそんな無責任な愚痴をこぼすわけにもいかないからな。
しかし、なんというか特徴らしき特徴もないし。再び上から下までその容姿を眺めるが、相も変わらずかわいらしいという月並みな感想しか湧いてこない。今はそっぽを向いているせいで、そのかわいらしさすらも消え失せそうな不遜な雰囲気を放っている。まさか『そっぽ』とか『不遜』だなんて名前をつけるわけにもいくまい。それでは『やりにくいから名前をつける』という当初の目的から大きく外れ、本末転倒どころか起承転結だった。

誰なんだよ、お前。

ふむ——誰、か。

「よし」

僕はオレンジジュースで最後のカツサンドを胃に流し込み、その呼び名を高らかに宣言した。

「『フー』ってのはどうだ」

『そうか、では』

「なんて美しいスルーなんでしょうか!？」

『では、何でそんな捻りのない名前になったのか聞いてやろう』

一言余計だし、せめてセリフに感情のひとかけらでも込めてくれと言いたいがそこまでの要求は少々贅沢だろうか。

「しかし……。なんとまあ」

『どうした、どうしてそんなに捻りのない名前に決定したのかさっさと言え』

一々捻りのないって言うな。

「ああ、うん。いや、知り合って間もない話し相手に質問をさせておいて、それに答えるってのがこれだけバツが悪いとは思ってもみなかったよ……。まあ捻りがないっていうのも間違っていないけどな、間違っていないどころか実に的を射てるけど。英語のWHOからとっただけだし」

いやあ。

口にしてみると本当に捻りがないな、我ながら。

ふうん、の相槌もなく、美麗な容姿を持つ蒼髪人形もといフーは僕を睨みつける。

『……まあいい、これからはそのように呼ぶがいい』

ああ、そうさせてもらうよ。

『時に椎奈、理科は得意か？』

7. コップとコインの正体みたり

理科？ 理科ってやっぱり理科だよな。

「まあ、そうだな。得意かどうか一概には言えないけど、ある程度理解はしてるつもりだよ。でも理科って括りだと範囲が広すぎないかな？」

『そうか。とりわけ突っ込んだことを喋るつもりはないからいいのだ、理科で。では、コップとコインの実験はしたことがあるか？』

コップとコイン？ 頭の中にそれらのイメージを作り出す。その二つを使って出来ることなんぞ知れてるが、それと『実験』というワードだけでは想像に限りがある。憶測なら立つけど。フーは裸足でペタペタとサンドイッチの乗っていた皿の周りを歩いて、オレنجジュースの入っているガラスのコップの元へとたどり着いた。

「どんな実験だ？」

『コップの底にコインを置き、それに水を注いでいくことによって視線を変えずにコインが見えるようになる。大体そんな感じのやつだ』

ふむ、どうやらフーが言っているのは光の屈折について説明する時とかにしばしば用いられるあれだな。

水中と空気中では光の相対屈折率が違うので、光は水面で屈折する。つまりコップの中に水を注ぐと、コップの側壁にさえぎられて見えなかったコインがまるで浮かび上がるようにして見えてくるのである。

その実験を授業で行った覚えはないが、小学生の自由研究等でも頻繁に取り上げられるお題目ではないだろうか。その内容を目にする回数は多かったように記憶している。内容自体は小・中学生レベルだから、確かに『理科』という大雑把な括りで問題はないと言えるよう。

「うん、わかるよ」

僕は答えた。

『そういうことだ』

「うん、わかんねえ」

『思っていたより物わかりが悪いな、貴様は』

それだけで解るやつが居てたまるか！

『そうだな、この場合、コップは腕輪。水はお前の導力、と置き換える』

フーは普通の人間の親指くらいしかない小さな手を握りしめてコップの表面をコツコツと叩いた。

『その腕輪は現在、所謂魔具として機能している』

魔具——という漢字を当てはめるのだろうか。僕は聞きながら漢字を思い浮かべる。よもやマグカップのことではないだろう。

『元々腕輪なのだから当然腕につけるのがちゃんとした役割だったのだが、その腕輪を拾ったあいつらは、それを二つの世界を結ぶドアのカギとして利用したのだ。お前も見えていただろうが、あいつらがカギとして使う時以外、この腕輪は一時的な異次元に隔離されていた』

異次元っていうのは世界の裏側のことなのか？

『その理解で構わない。まるで無防備に保管されているのを見つけて、そこに私が住みついた。カギとして呼びだされても、もともと何も満たされていなかった空っぽの器だ。私が入っていても奴らは気付かなかった』

住みついた、という言葉ではイメージが湧きづらい。そもそも腕輪に入るって意味がわからない。どう見積もっても、この腕輪よりは目の前で雄弁を振るうフーのほうが数倍でかいんですけど。

『当然、私はこの世界において物理的に実態のある生き物じゃあない。言ってみれば精神生物。アーティスト共はメルシングとか呼んでいるな。お前の導力を借りれば軽い実体化程度なら可能だが』

精神生物、物理的な実態がない。幻覚の方が近い、といったのはそういうことなのか。

メルシング。現在進行形なのか、はたまたメルという人が歌っているのか。

何しようもないこと考えてるんだろなあ、僕。と、自己嫌悪に走ろうかどうか迷っていた僕の目にあまり好ましくない光景が写った。

「ちよちよ、おい！ 何やってんだ！」

次の瞬間にはポチャン！ と、まだ半分くらいオレンジジュースが入っているコップの中に、フーの手によって僕の食べ残したプチトマトが水没した。ただでさえ嫌いなのに、これで食べる気がさらさら失せたぞ。

『濁っている水だと、逆にコップの中身は見えない』

いや、確かにその通りだけど、少しは自分の行為を悪びれろよ。そもそもそれはガラスのコップだから実験には使えないし。

『そういうわけで、私がお前のもとにいる』

「説明のステップを一気に三つくらい飛ばした気がするんだけどそれは僕の気のせいかな？」

『ここまでくればもう大体わかるだろう。残りは貴様の口から言うてみる、私に理解度を示せ』

いや、わかるだろう、と言われてもなあ。

哀れにもオレンジジュースに浸されたプチトマトは、さながら水死体のように水面へ浮き上がってくる。我ながら的確な比喻だった。僕は（主にトマトの件で）困ってフーを見るが、同じく見返すフーの瞳には、お前はもうわかってるに違いない、と言わんばかりの、どこか言い逃れできない気迫があった。

アイ・コンタクト失敗。

昼のワイドショーに切り替わった賑やかなテレビ画面をちらりとみて、僕は渋々口を開く。

「……さっきお前は言った。この腕輪はもともと空っぽだった器。それに入っても全然気付かなかった、って。でもこれは普通に考えればおかしい話だ。もともと空っぽだったのなら、それに何

かが入れば違和感がないはずがない。つまりは——そこでさっきの例え話が生きてくるんだろう？」

僕は話の合間に嫌々、プチトマトを飲み込まないようにオレンジジュースを飲み干し、コップの中に残ったそれを睨み倒した挙句口に放り込む。口の中で混じりあうオレンジとトマトの味のコラボレーションを出来るだけ味わわないようにして机の上の食器を持ち去ると、それを流しに置いた。気付けば、またフーは僕の左肩に乗っかっている。

「つ……、こりゃひどい味だよ」

『いいから続きを話してみろ』

さっきまでこちらが受け手だったはずなのにいつの間にか立場が逆転している。こんな得体のしれない存在から話の催促を食らうとは、どうも昨日から自分のペースで話を進められないな。僕は食器を洗いながらどこを見つめるわけでもなく、喉越し最悪のオレンジトマトを吞んで語る。

「コップに入ったのがコインだったら。それを持ち上げたところでそんな微妙な質量の変化には気付けない。ましてやコップを、本来の使い方ではなく、例えばただの重しとか、インテリアか何かに使っていたなら、なおさら。つまり、腕輪に住みついたお前はそれだけの存在で、彼ら——『封じ屋』とか言ったか——にはお前の存在に気付くだけの術がなかった、ということでもいいんじゃないかな？
——先生？」

洗った食器は再び水切りに並べ、代わりに放置されていた昨日の食器を食器棚へと返却する。行動自体は毎朝のそれだけど、今は三時だ。時にあまりにも似つかわしくない行為である。

『いいだろう、ほぼ正解だ。多少の理解力はあるようだな』

余計な御世話だ。

『だが一つだけ誤りがある。確かに奴らに気付かれはしなかったが、私はコインのごとき軟な存在ではない。それは頭に叩き込んでおくことだ』

「ああ……？ はいはい」

フーの話は右から左に受け流し、僕は頭をかきながら風呂場に向かった。昨日は風呂にも入らなかったし、服だっていい加減着替えないとまずいよな。

「で、次に出てくるのが……なんだ、どうりき？ だっけ？」

『ミチビクチカラ、と書いて導力だ。^{どうりき}わかりやすく言えば準自然固有魔導優力のことだ』

あー、うん。なんていうか。

「全然解り易くなってない」

『そうか？ では貴様ら表の人間がよく読むマンガとやらの頻出る単語で言いかえよう。そうだな、それなら魔力、というのがそれに一番近いニュアンスを持つ』

魔力。

「ゲームで言うMPみたいな？」

『正しくもあり、間違ってもいるがほとんどそういうものだと考えていいだろう』

魔法の源。バトル物やファンタジーのお話にはそれこそ頻出の便利な言葉だ。

このままじゃ魔力が足りない。

あいつは魔力が強すぎる。

魔力を使うまでもない。

こんな風に並べると、なんとなくそれっぽい。あくまでも「ぽい」ところがミソである。

「コップに注がれる水がそれってことでいいんだな」

『そう。つまり器たるこの腕輪を貴様の導力が満たしたから、私が貴様に見えている。例え話を使った説明はこれにて終了だ』

終了らしかった。結局こいつが僕に見えているということは、僕に『導力』などと言うけつたいな力が宿ってしまったということの証明に他ならない。だけど、その導力とやらが一体どういう代物なのかは今はまだ聞かないでおくことにした。それに、聞かないまま、

使わないまま終わるのなら、それが一番に決まっている。問題は、『終わり』という単語をこの際どう定義すべきか、であったが。

まあいいや、そのうちなんとかなるだろう。

風呂場に着いた僕は、フーを肩から払い落して洗面台に寄せ、制服を脱いで洗濯機に投げ込んでいく。

「なあ、一つ聞いていいか」

『なんだ』

シャツに手をかけ、まくり上げる。

「世界ってのは――2つだけなのか？」

僕が服を脱ぐ衣ずれの音だけが、聞こえる。

『――貴様は昨日の金髪の話を知っていたのか？』

ヒンヤリと冷えた洗面台の上に胡坐を掻きながら、フーが相変わらず平坦な口調で応えた。その背中が写るはずの背後の鏡には、淡々と服を脱ぐ僕の姿だけが映し出されている。さっきと同じ光景だ。「いや、そうじゃないさ。そうじゃないけど、お前は知ってるんじゃないのか？ あの学校で見た草原のことを」

なんでもないように口にする、最大の疑問。

銀の草原。僕がこの腕輪を付けられた場所。

これは勘だ、他の何でもない。

でも。あの世界はなんだ。

裏か。表か。

『さあな。私は知らん』

「……そうか」

別に過度の期待もしていなかったが、実際聞くとやはり期待外れの返答をフーはした。幸せが逃げないよう、溜息だけはつかないようにする。だが、今それを知らなければまずいということもない。その疑問に言うほどのこだわりは持たなくていい。

その失望は思考から切り離し、ズボンは洗わなくてもいいよな、そう思って僕が制服のズボンに手をかけて降ろそうとしたら。

ピンポン。

玄関の呼び鈴が鳴った。

「あー、親父かな？」

まったく、なんでこういう面倒臭いタイミングで帰ってくるかな。そう文句を垂れつつズボンも脱ぐと、玄関に向かうついでにリビングに寄って、壁のハンガーにそれをかける。やっぱりズボンは酷いしわになっていた。最悪だ。

「おい、フー」

『なんだ』

玄関へ歩きつつ、確認するまでもなく僕の肩の上に腰掛けているフーに聞いた。

「さっきのたとえ話を使った説明だけだと判別しかねるんだが、結局のところお前の姿は僕以外の人間にも見えるのか？」

『導力を持たない人間には見えない。持つ人間には見える。安心しろ、おそらくお前の父親に私を視認することはできない』

そうか。と、その返答を軽く頭に入れておいて、僕はトランクス一丁で玄関のドアの鍵を開けた。

「はいはい」

と、いつものように軽い調子で裸足のまま三和土たたきに足を付き、玄関のドアを開け放つ。

「おかえ、り……………」

いつものように。

だがそこに親父は居ず。

私服姿の畑中が立っていた。

え？

親父はいない。畑中がいる。もう一度その事実を頭の中で繰り返す。玄関先には畑中が立っていて、僕はトランクスしか身につけていない。畑中は薄めの桃色の長袖ティーシャツに半そで皮ジャンを羽織り、同系色のプリーツスカートを身に纏っている。なかなか似合っている。小柄な畑中とその服の組み合わせは、小動物のかわいらしさを彷彿とさせた。

ここでもう一度確認してみよう。僕は裸同然の格好をしている。

「……………」

これは僕の沈黙。

「……………」

これは畑中の沈黙。

『……………』

ついでにこれはフーの沈黙。

え、なにこれ。なんですか。

やばい。いや、やばいというか、まずいというか、きついというか。

沈黙が痛い。痛過ぎる。死すら覚悟できるこの冷やかさ。何だよ、この間は。

——とりあえず挨拶でもしとくか？

「や、やあ。こんに」

「……………ってーな、くそ」

あんなに勢いよくドアを閉めることはないじゃないか、と。僕は額を氷で冷やしながらぼやいた。とりあえず、クラクラした頭で部屋まで戻り適当にチヨイスした服を着た僕は、白い眼差しを向ける彼女をなんとかリビングまで通し、朝食をとった机に座らせていた。

「ごめんなさい」

「いや、いいよ。僕も悪かった」

しおらしく謝る畑中に、僕も詫びを入れる。それと同時にやかましいテレビの電源を落とした。

「その……知らなかったんです。八代君……」

確かに、僕がパンツ一丁で家に居てしかも親父を待機中だなんてことが畑中にわかるはずはない。

「八代君にあんな変態趣味があったなんて」

「そっちかよ！」

セリフに失望した感じを乗せるのはやめてくれ！

『まあ、見られるのが好き、という個人的趣向を否定はしないがな』
お前少し黙ってろよ。

フーに続いて、畑中は僕の出したお茶のコップを静かに机に置いて、言った。

「安心してください、誰にも言いませんから」

「……ああ、そうだな。是非ともそうしてくれ。あれは不幸な事故だった」

「八代君がドMなんてことは」

「話がねじれてるし！」

僕はドMじゃない。というか、どちらかと言えばSだ。

『ドSでなおかつ見せるのが好きとなるとこれは将来露出魔になる可能性も出てきたな』

「そんな馬鹿げた可能性は出てこない！」

というか、いちいち「ド」をつけるのはやめてくれ。なんでそんなに極端な性癖持ちなんだよ僕。

「まあ、お馬鹿なお話はこの辺りにしておきましょうか」

もう一杯お茶を口に含むと、畑中は少し真剣な面持ちで僕を見た。

「……本題に入る前に、その肩に乗ってるものは何ですか？ なかなかのギャクセンスをお持ちのようですが」

畑中の目線が僕の左肩にちょこんと腰かける小人に移る。ああ、こいつね。

「この腕輪の精霊」

「それは嘘ですか？」

すごい切り返し方だなおい。か？ ってなんだよ、か？ って。嘘ですよ、とか本当ですか？ ならまだわかるけど。

「そうだなあ、嘘なようで本当なようで、ごめんなさい、嘘でした。だからやめてくれ畑中そのダーツを投げるような構えは」

畑中は見えない「何か」をつかんだ手で僕に照準を合わせる。思

わず手に持つ保冷剤を目のガードに回してしまった。

「そういえば昨日は当たりませんでしたよね。当ってみると案外結構気持ちいいかもしれませんよ?」

重ねて言うが僕はMじゃないぞ。

「というか、何で君はこういう得体のしれないのが僕の傍らに居ることについてそんなに落ち着きはらっていられるわけだ?」

「あなたが落ち着いているからに他なりません。例えばこの家のドアを開けた瞬間に八代君の悲鳴が聞こえてきたとしたら私ももう少し気をおいたでしょうけれど」

ああ、なるほどね。さすがに、こういう光景には慣れていると見える。

「実際あなたは裸同然の信じられないくらい変態的、それももし私が思慮分別のない器の小さな人間だったら迷いなく警察をお呼びしてご自宅からご退去頂いているでしょう程度の変態的な格好で私の前に姿を現しましたから、その心配はないと判断しました」

「……………」

変態的って二回も言っちゃった!

というかそのセリフを一息で言えることに關心するぜ、逆に。

「それで、何なんですか? それは」

『それ、とは失礼な』

しばらく口を閉じて傍観していたフーが反論する。

『私はこの腕輪を住処にしていたら、たまたまこんな騒動に巻き込まれてしまった不幸なメルシングだ。何か文句でもあるか』

何で喧嘩腰だよ。

「そうですか。ならばとっとと裏の世界に帰るか、それとも私に強制送還させられるか、どちらかを選んで下さい」

まるでなんでもない雑談をこなすかのような畑中の声の軽い調子に、一瞬僕は彼女が何を言っているのか理解できなかった。だが、字面を見る限りでは畑中はフーにあらん限りの敵意を向けているようだ。

「お、おい……何を物騒な」

「八代君」

一転、畑中のセリフが昨日学校で対峙した時の、ナイフのような鋭さを帯びる。圧力をはらんだ、低い、脅しをかけるような呼びかけ。ただ名前を呼ばれた、それだけなのに口をつぐんでしまう。

「昨日龍から聞いたのではないのですか？ 『封じ屋』のことを」

封じ屋。その単語が昨夜の龍ちゃんの発言を喚起した。ワンテンポ遅れながらも、気圧されないよう気丈に返す。

「もちろん聞いたさ。——その存在が意識的にこちらの世界に害を及ぼすものでなくても、それが存在していることによって第一の理念が侵されるような場合にはその不穏分子を速やかに排除する。だろ？」

龍ちゃんのセリフを引用する。一字一句間違えることなく、そのまま完璧に。心の中で自嘲が洩れた。僕なりの嫌みのつもりではあったが、そんなことはわかるはずもない畑中はとりたてて驚いた様子もなく、また目の奥に冷たい色を称える。

「それで、あなたはそれが『そういう存在』ではない、と？」

「それはわからないけど、今のところ見る限りこいつが世界に与える影響なんてコップの中のオレンジジュースにプチトマトが落ちるくらいのもんだぜ」

本当はそれだけじゃないかもしれないし、それを知る術などあるはずもない。でも無駄な争いごとは好きじゃないからな。僕は適当に返したが実際、そんなところなんじゃないだろうか。それを聞いた畑中は黙ったままだったが、やがて言った。

「……まあ、いいでしょう。今日はそのことで来たわけではありません。それに、この家に入って姿を見るまでそのメルシングの存在は感知できませんでした。それ程に弱い存在なら放っておいても問題はありません」

『私はお前のことが嫌いになったぞ、封印術師。不愉快だ』
せつかく穏便に終わりそうだったのに何故そう絡むかな。しかも

畑中は『不愉快』をそのまま声に乗せて飛ばしたようなフーの発言を露骨に無視するという芸当を見せてくれた。余裕で聞こえているのに、フーの方を見向きもしない。僕が口を挟む隙など1ナノメートルもなさそうである。

『結構だ。それならば私は消えていよう』
え？

と声を出す間もなく、フーは僕の視界から消えていなくなった。裏の世界に帰ったのだろうか。表裏の出入りっていうのはそんなに気軽なものなのか？ そうだろうとそうでなかりと、僕は自宅のリビングに畑中と二人きりになってしまったことになる。

何を隠そう、僕は昨日、今日の前にいる少女にダーツを投げつけられた少年だ。

そう考えるとフーのような存在でもないよりはマシだったと思えてくるから不思議である。

「……なんだかなあ」

僕は嘆息した。せざるを得なかった。

「私のいるところであれを呼ぶようなことは金輪際御遠慮頂きたいのですが」

僕の意味でどうこうできることじゃないから約束はできないけどな。

「とにかく。本題に入ります」

僕ら二人の話声を除けば、音らしい音のないリビングは嫌なくらいにしんと静まり返っていた。僕を襲った女子と同じ空間で二人きり、ということを意識するのには十分すぎるくらいに。

十分すぎるくらいに。

なあ、畑中。無駄に間をとるのはやめてくれないかな、心なしか心臓に悪いんだけど。それを口にしようかどうか思い迷っている間に溶けてきた保冷剤を机の上に置いてみたところ、意を決したように顔をあげた畑中の方から沈黙を破ってくれた。

予想外な言動を振り回して。

「今日からあなたの護衛をしなければならなくなりました」
はい？

8. 仔リスのような

「責任がすべて私にあるなどと言うつもりはありません。九割くらいはあなたに責任があってもおかしくないですから」

遠慮した感じの言い方してるけど、それじゃほとんど僕の責任だからな。いや、責任云々の前に。

「話が見えないんだけど」

思わず声が上ずる。正直、結構これは予想外だ。

「あなたは、現在進行形で命を狙われています」

「よ、予想外すぎる！」

さらに思わず声に出ていた。

「と言っても正確には狙われているのはあなた自身ではなく、あなたのつけているその腕輪のほう、なのです」

またこの腕輪か。

「……なあ。この腕輪、一体何なんだ？ 殺してでも奪い取ろう、なんて思い起こさせるほどの代物には、僕にはとても見えないが」
僕が右手を上げ、そこにある腕輪を見せつける。と、畑中はそれをまじまじと見つめて、なんてことのないように言った。

「何って、何の変哲もないフツウの腕輪ですよ」

「馬鹿な」

何の変哲もないフツウの腕輪のために命を狙われていては堪らない。

「実際馬鹿なんでしょう」

「誰がだ」

「誰がですか？」

「僕が聞いているんだよ！」

くそ、何だ、この会話の成り立たなさはいさつき味わったものとはまた違う成り立たなさだ。

「まあ、とにかくです」

「とにかくじゃない！ 僕はもう誤魔化されないぞ、この腕輪が実は国宝級のお宝でルパ○3世が狙ってるとかいう話なんだったら僕は喜んで手首ごとこれを手放してやる。右手より命の方が大事だからな！」

「ル○ンは人を殺してまでお宝とりません。解ってないですね」

「そ、そうか……じゃなくて！ 隠すところは揃えろよ！」

はっ、しまった、これじゃ完全に畑中のペースじゃないか！ 口からひとりで息が洩れる。やれやれと右手を頭に当てると、先ほど強打した額に鈍痛が走った。

「……あのなあ、畑中。君にはないのか、いきなりこんな意味のわからない非日常に引きずり込まれた同級生を憐れんでやろうという寛大な心持は」

「しんでください」

「いくら何でもそれは酷くないですか！」

「喜ばば気分も晴れるかなと思いますて。私なりの気遣いです」

だからMじゃねえつつってんだろうが！

「ついさっきだってドアに打ち付けた額に手を当てて心の安定を図っていたではないですか」

「君はせっかく鋭い観察眼を持っているのに、その目が捉えたことを解釈する能力が著しく欠けているな」

っていつの間にか話が超横道に逸れてる。

「では、話を本筋に戻して正直に言いますよう」

言いつつ、畑中は椅子から立ち上がった。そして親指を立てた握りこぶしを僕に向ける。

「私はSもMもいけます」

「何を正直に言っただ君！」

君と錯綜した性的趣向について語り合う気は毛頭ないぞ。というかそれを本気で本筋だと思ってるのならば君はこの家から早々に出ていくがいい。

「冗談です。本当のことを言いますよう」

もうSMについては結構だからな。

「違います。ふざけないで下さい」

……怒られてしまった。

「少々引っ張っておいてこんなことを言うのも申し訳ないのですが、私はその腕輪のことについては何の情報も持ってません。そうですね、強いて挙げるとすればその腕輪が以前カギとして使われていたということオンリーです」

畑中はきっぱりとした口調でそう言い切った。

「——本当なのか？」

考えるよりも先に、当然のごとく疑いの言葉が口をついて出てしまう。

「八代君には悪いですが、本当です」

窓際に歩き寄ってカーテンを開け、そう返す畑中の言葉の真偽は僕にはわからなかった。ただ、疑うという行為を良しとしないならばそれを真実と信じる他はない。

「……そうか」

少なくとも今は変に疑心暗鬼になるべきではないだろう。自分の精神状態をわざわざ悪化させるようなことをするのは馬鹿だけだ。

夕方にさしかかって朱の混じりはじめた射光を全身に浴びながら、畑中は窓に手を当て我が家の庭を眺める。改めて観察するとやはり小柄なその後ろ姿は、栗色の長髪も相まってどこことなくリスを連想させた。

言葉づかいは不必要なほど丁寧で、顔だって派手じゃなく、どちらかといえはおとなしめの娘だと認識していたはずである。だけど、今その女の子らしい背中からは、隠しきれない天真爛漫さがにじみ出ているように見える。なんだかそんな女の子が僕の家について、すぐそこに立っているのは不思議な感じがした。

それを見ていたら、いつの間にか。僕は何の根拠もなく当面彼女を信用することに決めてしまっていたのだ。

なにはともあれ、現在重要なのは腕輪がどれだけの価値を持って

いるかではなく、それを付けられている僕の命が狙われているなどという驚愕の事実の方で。

「この腕輪のことは解らない、それは結構。誰かがその訳のわからない腕輪を狙ってるせいで僕は危険な状況下にある、上等だ」

腕輪を狙って僕を襲ったのは畑中じゃないのかという考えが湧かないこともないが、一先ずそれは置いておこう。

「とりあえずそれだけあれば情報は十分だよ、話を進めよう。君が僕を護衛するっていうのは具体的にどういうことなんだ？」

椅子の背に手をかけてリビングを一望する形で体を畑中の方へと向きなおし、今度こそ話を本筋に戻す。畑中也窓に手をつけたままこちらを振り返って、そして。

これまたとんでもないことを口にした。

「今日からここに泊らせて頂きます」

一瞬、全世界から音が消え失せたかのような錯覚を覚え、そして無音なる世界の中でその彼女の言の葉が僕の耳朶を打った瞬間、僕は大いに思った。思ったというよりも、反射的に感じたというほうが近いかもしれない。

これだったんだ、朝の嫌な予感はいったんだ、と。

「は？」

ごめん、もう一度言ってくれないか。

「今日から八代君のご自宅に宿泊させていただく、と言いました」
言いました。

「いや、」

そこでつばを飲み込み、続ける。

「だめだよ」

「どうしてです？」

どうしてですだって？ どうしてって、あんた。

「だめだろ」

「なぜ？」

僕は両手を思い切り広げ、若干前かがみの姿勢をとり、

「だめなものはだめだっ！」

叫んだ。いや、まて。今畑中なんつった？ まてまて、ちょっと待て。凍結しかかった思考エンジンをからげんきで溶かしつつ、エンジンストしないように一氣にそれを全開にする。

「私、別に八代君のことを襲ったりしませんよ？」

「え、僕襲われる側確定なの？ ひょっとしてまだ僕がMっていう設定引きずってるんじゃないだろうな！」

体半分こちらを振り向いた畑中は如何にもキョトンとした様子で僕を見つめている。まさか確信犯じゃないだろうなこの娘。実は確信犯という単語に「確信して犯行に及ぶ」といった意味はないのだが、それはそれ、これはこれだ。

「寢床はまだいい、母さんの部屋があるからそれを貸せば問題ないかもしれない。飯くらいならどうにでもなるかもしれないし、衣服だって例に従ってなんとかなるだろうが、それでも問題はあるだろう」

出来るだけ早口で捲し立てる。

「年端もいかぬ男と女が一つ屋根の下で寢食を共にするってことは精神衛生上推奨されるべきことじゃないはずだ」

「別にやましい気持ちがあるわけでも不埒な考えがあるわけでもないのですよ？ 正当な理由があって泊まらせていただくわけですから、そこまで懸念する必要はないのです。それに私はあなたを襲いませんし」

存外正論だった。こうもピシヤリと言われると逆に焦りが増してしまっじゃないか。そして畑中、君が僕を襲わないことはいい加減解ったから。

「だが、しかしだな。親父にはどう説明すればいい？ うまい言い訳を考えることは不得意じゃないが実の父親に嘘をつき通すのはやぶさかだ。大体急にそんなことを言って親父が許可をくれるとも思えない」

それを聞いた畑中は、なにやら嫌らしく口の端を歪める。何だよ

その不穏な笑いは。

「安心してください。あなたのお父さんには既に連絡を済ませて許可をいただいています。ついでに言わせていただきますと、あなたのお父さんはこれから一週間は家に帰ってこないでしょう」

おい……そりやどういう意味だ。

「おしごとですこしめんどろなことがあったらしいのです」

「なんでセリフが棒読みだ!？」

一体全体どんな恐ろしいことが起きたんだろうか、想像もつかないが一週間帰ってこれないようなことをやらかすとは恐るべし畑中。親父。申し訳ない。

なんで僕が心中謝罪の意を述べているのかよくわからない。わからないけど、とりあえずごめんとっておかなければいけない気がしたので言うておく。

「しかし八代君。こうまで強く拒絶を食らうとは私も言外にショックです。心にズキンと来ました」

畑中はセリフの割に大して悲痛そうな顔も作らず、むしろ興に乗った表情であっけらかんと述べた。

「私は中学生の時からお泊り、してましたよ? お友達のみなさんは快く私の申し出を受け入れて下さいました」

言いつつ、彼女はいつの間にか僕とソファアの間を通り過ぎ、リビングを出るドアへと足を運びながら続ける。

「あ、わかりました」

そしてドアの前で足を止めるとくるりと回れ右、僕へと向き直った。僕も億劫に身体を回しそちらを向く。

「何が？」

そして畑中は悪戯に目を笑わせ、言葉を放った。

「恥ずかしいんですね? 女の子を家に泊めるのが」

「なっ……!」

そう言われると、何故か急に顔が火照った。すぐに「それは違どうぞ」と言い返せなかったのがいけなかったのだろうか。

「違うんですか？」

僕はその質問で言葉に詰まってしまった。畑中はニヤニヤしている。

「違……違う」

出来るだけ冷静を装って返したはずだったのに声に変に裏返ってしまい、畑中が心中さぞかし笑っていることだろうと思うと頬がまた熱くなる。こういうのを悪循環というのだろう。

「へえ。ではどうしてダメなんです？」

へーえ。と。畑中は間延びした声をだす。わかりやすいからかい方だった。からかわれているのが僕じゃなければなかなか興味深い光景だと笑えたかもしれないが、からかわれているのは僕だった。ああ、それは僕だ僕ですよ。イラつき、というのとはまたちよつと別の、何と云うか痒いところに手の届かないような感じである。

しかし僕よ、である、とか第三者的に自己分析している余裕はないぞ。

「どうしてダメって……それは」

それは……何だ？ 言いかけて、唐突に僕は二の句が継げない、という諺を作った昔の偉い人は本当に偉い人だとしみじみ感じる羽目に陥った。全く次のセリフが頭の中に湧いてこない。なんてこった。言われてみれば僕が彼女の宿泊を拒否する明白な理由など初めからどこにも存在しなかったのだから、当たり前と言えば当たり前ではあるが。

「それはだな」

それでも何とか言葉をひねり出そうと頭と口を絞る。

「顔が真っ赤ですよ
なっ？」

「うるさいな！」

顔を彼女からそらしつつ反射的に、ムキになって言い返してしまう。

「ガキですね」

二文字の中に、今の僕の姿を如実に描写しきった感想だった。というか、描写しきられてしまった、ショック。

「結構かわいいところあるんですね、八代君も」

「きっ……君は想像していたよりも全然かわいくない」

精一杯に言い返したつもりだった。

すると畑中は人差し指を頬に当て、少し上目づかいになって僕を見つめる。

「かわいくないですか？」

瞳を潤ませて、声を震わせて。若干中腰になって、椅子に座る僕の顔を覗き込むように視線をしっかりと合わせる。

か、かわ……

ぐう、こんなの反則だ！

「見た目の話はしていない！」

大失言だったと気づいたのはもちろんその言葉が完全に口から離れてしまったからのこと。

「じゃあ見た目は可愛いってことなんですか？」

畑中は何もなかったかのように無愛想な対応でそれをあしらうとさつと腰をのばし、傍らで僕を見下ろした。そして、あの笑みを作る。

「ふうん」

やめろ、そんな目で僕を見るな！

「なあ謝るから頼むからもう何も文句言わないから、この羞恥プレイを即刻中止してくれないか」

「見た目は可愛いってことでよろしいんですね？」

「もうそれでよろしいよ！ 君が可愛いことは認める！」

顔から日が出そうだった。間違いなく日の出である。自分で自分の言っていることの意味が解りません。

僕に今まで生きてきた中で確実に最も恥ずかしいセリフを吐かせておいて、心なしか嬉しそうな畑中はきやらきやらと笑うと廊下に通ずるドアノブに手をかけた。

「つておい。……どこに行くつもりだ？」

再び足を止めた彼女は首だけで振り返ると、付け足すように短く言う。

「外です」

外？

「ええ、私の見た目は可愛いと思って下さっている八代君は私をご自宅に泊めることで八代君と私の容姿のあまりの釣り合わなさに恥と絶望をすら抱くということですので、気を利かせた私は昨日と同じくお庭でキャンプさせていただくことにすると申しているのです」

「待つんだ」

いろいろと突っ込みたいところがあったりするんだけど、その認識間違いの毒舌にはあえて突っ込みを入れない方針で行きたいと思う。

「庭に出たいならその窓から出ればいい。というかその前に、昨日と同じくってどういうことだ？ まさか僕が寝てる間君はずっと庭でキャンプしてたとも言うつもりか」

「ええ。それが何か？」

……平然と言い切りやがったぞこの娘。もはや不法侵入どうのいうほうが馬鹿らしいとさえ思えてくる。

「君さ、何と言うか、いろいろとズレてるよ」

口を緩めると自然と流れ出てしまったその言葉をどうとらえたのか、畑中はさも意外そうに目を丸くした。

「八代君にそれを言われると傷つきますよ」

どういう意味だ。

「そういう意味です」

龍ちゃんも、いやフーにしたってそういう傾向はあったが、魔法に携わる連中はなんでみんなそういう悟ったような面倒臭い言い回しをするんだろう？ 実直にわかりにくいぞ、そういうの。

「わかりにくいように言ってるんです」

「どうして」

「どうしてでしょう？」

「僕が聞いてるんだよ！」

「今のよう聞き手をイライラさせる為でもありますね」
はあ？ その意味を考えようとして、どんどん話が本題からそれ
ていつていることに気づく。

なんでこの娘と話してるとこうなっちゃうんだろうか。

「それで、僕のどこがズレてるって？」

「すべてです」

「……………」

すべてだそうだ。

……すべてって君。ALLか、全部か？

「どう見ても普遍的な人間とはあらゆる点で一線を画しています」

「月並みに聞き返してやるよ。それは褒めてるのか、けなし」

「けなしてますよ」

即答された！ まだ僕全部言い終わってなかったのに！

「少なくとも」

僕がそのノータイムコメントに素直に動揺していると、畑中がポ
ツリと言った。

「少なくとも――魔法に出会って一日目ですんなり魔法使いを受け
入れるような人は、あなたが初めてでした。それだけで大ズレです」
畑中は僕から顔をそむけ、ドアのほうを向き直ると、どこことなく
ペーソスを感じさせるもの言いをする。

「あなたはこんな世界に関わるべきじゃなかったんです。……あの
時、あそこで。素直に私に倒されていればよかったんですよ」

ディミヌエンドでもかかったかのように、その言葉は最後には消
え入りそうなくらいに小さくなっていった。

「……畑中？」

リビングにまた静けさが舞い降り、二人ともが口を開かなくなっ
た。時計が秒針を動かす音が微かに聴こえるか聴こえないか。その
程度の雑音は、逆にこの静けさを作り出すのを手伝っているように

すら感じられる。

僕にも、畑中にも、言葉のない時間が静けさを埋めていった。実際は十秒かそこらだったのだろうが、僕に背を向けたまま呼びかけにも答えなかった畑中はその時間をドアの前に立ち尽くし、

「なあんて、冗談ですけどね」

三度振り返ると、声の調子だけ明るく一言そう言い残して、癖っ毛気味の栗色の髪を揺らしリビングから出ていった。

そんな顔するなよ。と声をかけるだけのタイミングがつかめないままに。

9.ズレた人

「……窓から出ればいい、つつってんのに」

ひとり残された僕は、ぼそりとそう呟いてみた。

そもそも引き留めるべきだったのだろうか。今更ながら罪悪感がなくもない。夕食くらいは一緒に食べようと誘ってやろうかな。

と、その夕ご飯だが、どうしようか。親父が帰ってこないとなると作るのは僕ということになる。冷蔵庫に十分な食糧が残ってるかどうかとも怪しいところだし、というかそもそも一週間も朝昼晩を自炊しろというつもりか。

畑中が親父を遠ざける理由くらいはおぼろげにわかる。面倒事に巻き込まないよう気を使ってくれたのだろうということも。

しかしそれでもこう言わざるを得ない、なんてことをしてくれたんだ、と。

僕が自炊を決行しなければならないことについては大したことはないし、問題はそこじゃない。いったい親父にどんなハプニングが発生してしまったのかは考えるだけでもおぞましいことだが、ただでさえ毎日の仕事疲れがある中年男性にそこまでの過労を期待するのは少々酷な話ではないだろうか。という一点に尽きる。そりゃあ僕にだって落ち度はあるのかもしれないが。

やはりごめん、親父。

ここで一つ、考えのベクトルをシフトしてみる。龍ちゃんの話や畑中の話からすれば、かなり組織的な動きがあるようである。勿論魔導師とやらのやることだ、確実にそうとは言いきれないだろう。個人で起こせることの範囲など僕にわかる由もない。

しかし、僕を狙うやつらとて裏の人間だ。僕を襲うにしろあからさまに裏の世界の存在やら魔法の存在が露呈するような真似をするはずがない。だったら僕一人程度、放っておいたところで『封じ屋』にとってそこまでの重荷になるとは考えにくいからな。彼らが一体

何をそこまで懸念しているのか、暇なうちに少し考えてみるのも面白い。

僕は机の上の保冷剤を手に椅子から立ち上がり、腫れてたんこぶになってしまっている額を左手でさすりながら、それを再び冷凍庫に入れ直す。

僕、表の人間が裏の人間と深く関わりを持つことが表の世界に甚大な影響を及ぼすことになりかねないということだろうか。表の世界のスタビリティを崩すことを彼らは恐れているらしい。だからか？　だがそうだとして、それは僕という人間一人のためだけにここまで気を回す理由にしては少々薄弱に思える。というか、既にその仮定は成り立たないだろう。畑中や龍ちゃんはもう十分すぎるほど僕と関わりを持っているはずだ。

だったらやはりこの腕輪が？　しかしこの腕輪はフーの話によると相当ぞんざいな扱いを受けていたという。そんな風に扱っていたとすれば、それを今更盗られることを気にするなんてことはなんだかおかしい話だ。

だとすれば。やはりそういうことなのだろう。

僕は何気なく、半分だけカーテンの開けられた窓の隙間から庭を見た。もう時間は四時半近く、手入れの行き届いていない庭の木々やブロック塀が紅に染まりつつあるのが目に入る。キャンプというからにはテントだとかそれに準ずる何かがあるのかとも思ったが、それらしきものは見当たらない。

キッチンの端っこで冷蔵庫の前に立ち、なんとなく庭を見続けていると、窓枠に切り取られた視界の横からセミロングの髪を揺らして畑中が現れた。

畑中は何やら僕に向って口を開いている。しかしその声は僕に届く前に窓に遮蔽されてしまいうらしく、何も聞こえない。

「聞こえないよ」

近づきつつ、少し大きめの声で僕も窓越しに畑中へ話しかける。畑中も窓の方へと寄ってきて、もう一度口を開く。しかし聞こえない

い。

うちの窓ってこんなに防音性能高かったっけな。

「聞ーこーえーなーいーよ」

口に手を当て、さらにボリュームを上げる。

「――」

だめだ、聞こえない。窓ガラスをはさんで畑中と対面するが、相変わらず彼女の声は僕に届く気配がない。

「――」

口の動きだけで言葉を読み取ろうとするが、向こうが一息で多くものを言いすぎるせいでそれも厳しい。もう一度大声を張り上げようとして、はっとする。まったく、何をやってるんだか。窓を開ければいいだけの話じゃないか。一步步み寄り、窓枠に手をかけ、それを右に引いて開ける。

窓は開いた。はずだった。

確かに開いた手ごたえ、右手が綺麗にスライドする感覚を得たのにもかかわらず、僕は再び同じ窓ガラスを前にしていた。

「……？」

なんだ？ もう一度窓を開けようと試みる。が、先ほどと同じ現象が、僕がその動作を完了することを妨げた。明らかに不自然だ。僕自身には「開けた」という確かな感触が訪れるのに、何度やってもその窓は僕と畑中を隔て続けるがごとく、目の前に立ちはだかる。この窓、一般的な家ならどこにでもある、いたって普通のガラス窓のはずなのだが。親父だってさすがにこれにまでは手を加えていない。

「……………」

畑中は、解せない現象を前にして眉をひそめる僕を不動の硝子越しにしげしげと眺め、満足げに一瞥をくれると歩いて再び視界から消えた。

困惑しつつ、一度手を離した窓枠へ再び手をかけようとして、そこに不可思議な文字が刻みつけられていることに気づく。さっきは

こんなものはなかったはずだけど。思いつつ、顔を近づけ、その正体を見極める。

文字。

僕には一文字足りとも解読できないが、どうもこれは文字以外の何物でもなさそうだ。うねりのある筆跡で書きつけられた2センチ足らずの文字列と思しき物は、揃って紅色の輝きを放っている。

と、玄関の開く音がして、廊下をぱたと踏みならす足音が聞こえたと思ったら、リビングに畑中が戻ってきた。ドアを開け放って第一声。

「窓は開きましたか？ 八代君」

どことなく解りきった調子で、上からの発言の色が見て取れた。この場合聞いて取れたとでも言うべきだろうか。僕は若干呆れて振り返り、先ほどとは逆の立ち位置で、また畑中と対峙する形となる。

「君も見ただら？ 開かないよ」

「そうですか。それは大いに結構です」

畑中はそう言いつつフロアリングを踏みならし、リビングを渡って窓辺の僕に歩み寄ってくる。

「何が大いに結構なんだ。全然結構じゃないぞ」

僕の隣まで来て足を止めた畑中は、僕が先ほどしたように膝に手を当てて腰をかがめ、窓枠の文字をにらんだ。

「きちんと動いてるようですね」

動いてる、って魔法が？

「ええ、そうです。簡単な隠ぺい術ですが、何もないよりはマシかと思いましたが勝手ながら施させていただきました」

「隠ぺい術……ね、ふうん」

呟いて反芻し、その要となっているのだろう窓枠の文字列にもう一度目をやる。少しでも目との距離が遠くなると、それに比例するようにして紅い光りは薄れていくらしい。メートルも離れていないここからでは、既に目を凝らさないと何かが刻まれているということにすら気づけなさそうだ。

「しかし畑中、隠ぺい術なら隠ぺい術で、別に中から開けることが出来たって構わないんじゃないのか？」

畑中は腰を伸ばして此方を向くと、右手の人差し指をぴんと立てて見せた。その姿が昨日の金髪の男のものとダブる。

「それはダメです。今私がこの家を対象にかけている魔術は、隠ぺい術と言っても、相手方の索敵網を直接ジャミングするタイプのもではありません。この家を覆うように結界を張る、いわば八代君宅をステルス化するようなタイプのものなんです。ですから、特定の一部を除いてこの空間への出入りは出来ないようにしてあります」ステルス化、か。そういう言い方をされるとなんだか近代的な親近感が沸くな。

「特定の一部、というのは、この場合玄関になりますね」

いちいち玄関から外に出てたのもそういうことだったらしい。

でもいつの間にかこんなことを？ 魔法というのは10分そこらで手続き可能なほどお手軽な物なのだろうか。

「いいえ、決してそんなことはありません。この魔術は先ほど八代君と楽しく会話のキャッチボールをしていた時に、最後のトリガーを引かせて頂いたんです。大方の仕掛けは昨日のうちに済ませてましたから」

なるほど、あの時か。そう言えば意味もなく窓際に居たな。それらを頭に入れて畑中の一連の行動を振り返ると、確かにいろいろ合点がいった。裏を返せば油断も隙もあったものじゃない、とも言えるが。

「家の外側には昨晚に、それと今念のために内側にも数か所に術式を記述して、簡易ですが二重結界にしてあります。私はこの分野の専門ではありませんから魔術単体の術式はごく単純なものです、即席の隠れ蓑としてはそれなりに機能すると思いますよ」

術式。二重結界。いくつかのキーワードを耳に引っ掛けつつ、適当に相槌を打つ。当たり前ながら昨日の今日で僕が魔法なんてものに詳しいわけもないので、理解の程度もそれなりで打ち止めにはせ

るを得ない。

畑中が一体どういうジャンルの魔法を専攻しているのか、それは解りかねるが、少なくともこういう術——隠ぺい術でいいのか——は専門ではないということらしい。

……ふうん。

それで、結局畑中は魔術の動作確認以外には僕にそれを言うために戻ってきたのだろうか。

「で、八代君。気は変わりましたか？」

「気、とは？」

「女の子をご自宅にご宿泊させる算段は付きましたかと聞いているのです」

敢えて『女の子』と表現するあたり、意地が悪いよな。

「外でキャンプするんじゃないかったのか？」

本当は泊めてやったって構わない、というのが心境の推移の実ではあるが、このまま折れるのもなんだか体裁悪いし、とりあえずここはノリを考慮してあくまでもそう言うてみることにした。畑中は大変わざとらしく嘆息し、頭を垂れる。

「うら若き乙女が野ざらしで二晩連続夜を越さなければならぬというのに、八代君は心配はおろか同情すらしてくださらないのですね。私、少し八代君を過大評価しすぎていたのかもしれませんが。失礼ながら、ガツカリですよ」

おい、急にキャラが変わったな。

「ああ、今夜は雪が降るでしょうか、槍が降るでしょうか……外は寒いですねえ」

「今は夏だから外は生ぬるいし、雪は降らないよ。そして夏でも冬でも槍は降らない！ ていうか、今は夏だし！」

しまった、つい勢いで夏であることを二回も口にしてしまった！

「そうですか？ では、今夜は八代君の血が降るでしょう」

「平然とした顔で淡々と恐ろしいこと言わないでくれ！」

君が言うど普通に怖いから。というかそれは脅しですか、畑中さ

ん！

「脅しだなんて、私はただ」

「僕はMじゃない」

スキル「発言の先読み」を発動してみた。

「そうですか……そうなんですよ。こんな風に女の子を外に閉めだそうとするくらいです。DSなんですね、やっぱり」

いや、だからなんでドをつけるかな。

「あんな、なんなんだよさっきから」

「八代君がおこったー、こわいですー」

「セリフの棒読みはやめなさい！」

畑中は僕から顔を背け、指の背で「よよよ」とかいう感じの効果音が入りそうな動作で涙をぬぐう。ふりをした。僕は冷ややかな目でそれを見つめる。

そしたらどうだ、啜り泣きを始めやがったぞこの娘。

「うっわ、ちょ、わかった、わかったから！」

泣き真似と解っていても、それを止めないわけにはいかなかった。元来男は女に弱いものなのだという。肉体的には男が勝るが、身体の耐久力だとか、頭の出来一つ取って見ても女性が男性に勝る要素は多いらしい。それは生物学的にもそうだし、あるいはかかあ天下とかいう俗語からそれを読み取ることも容易だろう。結論として、女の涙というものは男心を動かす最強かつ最悪の武器であるのだ。

そう納得しないことにはやってられない。僕は早くもこの年にしてこの世の真理の一つを獲得してしまったのかもしれないな。

しょうがない、変に意地を張るのはやめよう。

僕は深く肩を落とす、ついでに深くため息もつくと、力なく顔をあげる。そこには泣き真似を繕おうともしない、もはやふてぶてしい笑顔を浮かべた畑中が立っていた。

「ついてきなよ、母の部屋まで案内するから」

「はい」

返事だけはいいい奴だな。しぶしぶ畑中を後ろに連れて夕日の差し

込むリビングを後にすると、二階への階段を上る。

「広いうちですね」

後ろにつく畑中が感心したように言った。

「ああ、二人……いや、一人のほうが多いかな。にしては確かに少し広いと思うことはあるよ」

一段ごとにぎいぎい鳴る階段を上り終わると、大して散らかってもない簡素な廊下を数歩進む。自分の部屋を通り過ぎ、素っ気のない字で「希未の部屋」と書かれたプレートが下げられたドアを開けた。

このドアを開けるのも久しぶりだ。半年振りくらいだろうか。中に踏み込むと、やわらかい絨毯の毛がふさふさと裸足の裏をくすぐった。結局冬の間に片付けるのが億劫だったものが、そのまま敷いてあるのだ。なんだか懐かしい香りを一人堪能しながら、壁伝いに手をやり電気をつける。明かりがついて部屋の全貌が明らかになると、ますます懐かしさが込み上げてくる。

「ほら、ここだよ。入りな」

少し声高に言って、僕は中に畑中を招き入れた。

「母の部屋だ。勝手に引き出しを開けてものを弄ったりしない限りで自由に使っていいよ。ま、君がそんなことをするなんて思っていないけどな」

彼女は部屋に入っていくらか進むと、ベッドと洋服ダンスの置かれた、そして角の丸い机の上にちょこんと座るライオンのぬいぐるみ以外には女性らしいものほとんどない、6畳ほどのシンプルな部屋を見回した。白い絨毯と桃色の壁紙が、今日の畑中の服装にちょうどよくマッチしている。

「綺麗なお部屋です」

そりゃそうだろうな。この部屋で何かをすることなんて最近ではめっきり減ってしまった。それにもし何かに使ったとしても次の日には親父が必ずこの状態に片付けるから、この部屋が散らかっていたことなど過去に一度たりともないはずだ。

「……これで満足でございますか、姫」

右手を胸の前に、僕のイメージの中にある執事のポーズをとりつつ、言ってみる。

「うむ、よはまんぞくじゃ」

ノるならノるで棒読みはやめろよ。

「どうか、さっそくベッドに寝転がるな」

「んー、んんー、ふかふかですう……」

小さな体軀を丸めて、羽毛の掛け布団の上をごろごろと転がる姿は、姿は正直、なんだ、かわいいと言えなくもない。

そして危ういよ、その格好は。

見えるよ、それ。

そのかわいらしいひらひらのスカート、皺になるし、っていうか、見えるし。

「八代君」

話しかけられて目のやり場に困ったので、僕はあさっての方向を見た。向かって右側の壁、タンスの上にある、見なれた文字盤のないシンプルな掛け時計がほんの少し僕に冷静を取り戻してくれる。

「なに？」

「ころしますよ」

「なんでそんな物騒なセリフが君の口からっ！」

「見える、とか思ってたでしょう、今」

まさかとは思っていたが魔法使いは人の心が読めたりしちゃうのか!?

「あなたのような単純な人間の心など、魔法を使わなくとも容易く読めます。誰でも読めます。病院の待合室にある雑誌のように」

それは暗に、読んでもつまらない、ということも示唆しているのか。

「ご名答」

嬉しくない！

「さてと」

枕を抱きかかえるようにしてうつぶせになる畑中は、そう前置きして寝返りを打ち、今度は仰向けになった。ふわりと、つやのあるセミロングの髪の毛が複雑な軌道を描いてベッドの上に広がる。だからその動き、危ういってば。

じゃなくてだな、結局直接的に見るなとは言わないんですか、君は。まさか僕の人間としての器をそれで量るつもりか。

「とりあえず私はこれで、今日すべき任務をすべて全うしたことになります」

「え？ え、ああ、うん。そうなのか」

あまり露骨に発言にうろたえを出すと、小さい人間だと見られてしまうかもしれない。僕は自分を無理やり理性の淵へと沈め、彼女の言葉に耳を傾ける。

「全く……八代君がもっと早く起きて居ればこんなに時間がかかることもありませんでしたのに。どんだけ寝坊ですか、あなた」

畑中は天井を見つめながら、僕の痛い点をついた。

「勘弁してくれよ。寝起きにはいろいろあったんだよ。フリーにも……」

と言いかけて、フリーと畑中はあまり仲が芳しくなかったということを思い出し、慌ててそれを打ち切る。

「いや、そうだな、僕が悪かった。謝る」

ちらりと顔色をうかがうが、大丈夫そうだが、さすがにフリーという単語を口にしただけで怒るような娘じゃない。

「やっぱり。そう言うと思いました」

やっぱり、という言葉が彼女の口から出たときには一瞬フリー関連のことかとドキリとしたが、口調から察するにそうではないらしい。なんだ、僕の心ってそんなに読みやすいのか？ そうだとすればそれは少々心外だけだ。

「そうじゃないです。八代君のそういうところ、私は嫌いじゃないけど、直した方がいいと思います」

そういうところって？

「本当に自分の責任かどうかともよく考えずに物事を背負い込んで、仕舞いには謝罪まで述べちゃうようなところですよ」

そうかな？ 僕自身、自分がそんな性格だと意識したことはないけど。それにもしそうだとして、それは僕が現代社会の中を生き抜くために編み出した人との円滑な付き合い方という奴だろう。別に直す必要はない。

「……まあ、八代君のことなんか私には関係ありませんし。お好きにどうぞ」

相変わらず彼女は天井からぶら下がる電球を眺めながら、拗ねたように言った。なんでそんな言い方をされなければならないのか僕にはよくわからないが。

「昨日のことですが、覚えてますか？」

昨日はいろいろありすぎた日だったが、おそらくベッドの上の桃色仔リスが僕に思い出させようと意図していることは。

「あれか、放課後の校舎で追いかけてこをしたやつ」
これだろうな。

「追いかけて……そういうことにおきましようか。私は途中から記憶が曖昧なので、半分は美鈴姉から聞いたお話なのですけど」
畑中はそう言って上体を起こすと、両手で枕を胸に抱えたままベツドの縁に腰かける形となり、こちらを向いた。

「謝らなければいけないのは私のほうです。ごめんなさい」
そして僕に向って、ペコリ、と頭を下げた。

「何に対して、何故謝ってるのかよくわからないんだけど」
感じたままを、頭を下げっぱなしの畑中に返す。

「今日あなたが寝坊したのは私のせいでした、だからごめんなさい」と申しているのです」

どうして？ 僕が寝坊したのはどう考えても墮落した僕のせいであり僕以外のせいではありえないと思うのだが。

「私は昨日、あなたに魔術を使わせてしまいました。そもそも導力に目覚めたばかりの人間に魔術を使うこと自体、その人間を相当疲

弊させることになるのです」

顔をあげた畑中は、こんな風に続けた。

「ですから、今日あなたが寝坊してしまったのは必然的に私のせいなのです」

「わかるように説明してくれ」

君たちはどうも常識というか、前提をもう少し吟味して話し出すべきだと僕は強く主張するよ。

「僕は魔法だか、魔術だかに関する知識はほぼ0なんだぜ？」

開きっぱなしだったドアを背もたれにしつつ、腕組みをして畑中に遺憾の意を述べた。

「知りたいんですか？」

え？ 意図せず、そう声が漏れた。

その声には何やら不思議な響きが含まれていたから。心配の色か。いやもつと深い、彼女の、僕じゃ入り込めないような心の場所に置かれている何かが、その短い台詞には込められていたような気がした。

「知ってしまうということは、後戻りできないと言うことです」

畑中はうつむきがちになる。

「何を今更」

表情に影のさした、彼女のそんな姿は見ていて居た堪れなかったので、努めて明るく声をかける。

「逃げられないように僕の脚を動かなくしたのは君だろう」

冗談めかしてそう言ってから、彼女に目を遣る。

まあ、当人が平気な顔してるんだ。君は僕の護衛なんだろう？ そんな風に落ち込むのは似合わない。さっきみたいにくてふてしく笑ってればいい。

言葉にはしなかった。口に出すには、少しばかり気恥ずかしいものもあったし。だけでも畑中は僕の意をそれとなく汲み取ってくれたらしい。名残惜しそうに枕を手放してベッドの定位置に戻すと、立ちあがった。

「八代君は……やっぱり」

そしてはにかんだ様にあどけない笑顔を作ると、言った。
「ズレた人です」

10. かかってきた電話

「貸して下さると仰っているのにこんなことを言うのもどうかと思います。よろしかったんですか？　お母様のお部屋なんか借りてしまっ」

少々早めの夕食に、畑中は盛られたチャーハンを平らげた後、律儀にも皿を自分で洗ってくれていた。

僕は夕食に、冷蔵庫の余りものの食材を統合して考察した結果、チャーハンが最も適切な料理と判断しそれを作ってみたのだ。

結果から言うと、失敗だった。

畑中は「おいしいです」と、言ってくれた。言っではくれたが、自分では全く納得がいてない。ベーコンはやはり、事前に油で揚げておくべきだったし、そして恐らく飯を投入するタイミングが遅すぎた。卵と飯粒の絡みがいまいちだ、そもそもフライパンを温める時間が短すぎたのだろう、とどこどころご飯で塊ができていた。最悪である。

そもそもチャーハンと焼き飯の違いを知っているだろうか。この二つにはれっきとした違いがある。チャーハンと呼ばれるものは「卵を先に入れてからご飯を入れて炒める」のに対し、焼き飯と呼ばれるものは「ご飯を先に入れてから卵を入れて炒める」のである。だからこそ、卵を先に入れるチャーハンはご飯を投入するタイミングが難しい、卵で一つ一つの飯粒をコーティングする黄金のチャーハンにするためにはそのタイミングを完璧にマスターするしかない。早すぎても遅すぎてもダメだ。

それに鍋を温める時間が少なかったとは言えやはり、もっと米の水分を飛ばしておくべきだった。でんぷん質が糊化したからご飯に塊ができていたのだろう。

親父ならもっと美味く作っただろうな。

「八代君？」

机の上で仰々しく頭を抱えていた僕は、その声にハツとした。

「ええと、なんだっけ？ プロピルメルカプタンへの変化が甘かったせいで甘みが足りないという話だったか」

「……いいです、もう。大したことじゃありません」

失望されてしまった。

「じよ、冗談だよ」

言って、キッチンに立つ畑中の背中に声を向ける。

「別にいいんだ、母がいらないとは言え、死んだのは僕が生まれた時で記憶には全然ないし。そりゃ、そういう目で見ようとすれば僕が殺したってことになるのかもしれないけど、そんなことは気にしてないし親父も気にするなって言ってる」

ま、結論として。

「君がそんなことで気に病む必要はない。どちらにしろ女性を男の部屋に泊めるっていうのは気が引けるからな。気兼ねせず、存分に使ってくれたまえよ」

キュ、と水道を止める音がして、畑中は手に持っていた皿を水切りにカタリと置いた。

「わかりました。遠慮なく使わせて頂きます」

なんとまあ、ほのぼのとした光景なこと。

僕の命が誰かに狙われている、なんて嘘みたいに。

「ご飯まで頂いてしまって申し訳ないです」

だが、このひどく家庭的な状態の前提には、影がある。彼女がここにいる理由はそれなのだから。思考順序の逆転、これもある意味、出来そこないの鶏と卵だ。

「いいって言ったろう、ボディーガードは丁重に扱うべきだからな。これだって言ってみれば賃金代わりみたいなもんじゃないか」

そう、ボディーガード。それが彼女がここにいる理由。

畑中は僕の横を通り過ぎながら言った。

「では、お言葉に甘えてシャワーを浴びてきます」

いろいろと話した結果、衣食住と体の清潔は提供する、という話

になった。そういうわけで、僕は母の服をいろいろと漁り（これはさすがに怒られるかと思ったが、まあ親父のことだ。快く許してくれるだろう）パジャマ代わりになりそうな物をもう脱衣所に置いておいた。その選出のセンスについては伏せておくことにするが。

この点において、畑中が何も持たず手ぶらでうちにやって来ているということを考慮すれば、そう扱ってもらおうという意図が見え見えではあるのだが、そんなことを咎めるほど僕は小さい人間ではないのである。

むしろ、魔術という存在を知っている人間が身近に居てくれることで、僕は幾分か救われていた。

「覗いたらころしますから」

わかったよ。

「重ね重ね申し上げるが、君が言うとお普通に怖いからな、そのセリフ」

半開きにしたドアから顔だけを覗かせていた彼女にそう告げると、畑中は風呂場へと向かった。

まったく。

「やれやれだ……」

『まるで新婚さんだな』

のわっ！ フーお前急に話しかけるなよ、びっくりするだろう。

「というか、帰ったんじゃないかったのか？」

『帰るわけがあるか、バカか貴様は。大体私の家は今これだ』

右手首の腕輪から、少し籠った声が響く。

「おお……そーいやそーうだったな」

まあ、言われずとも想像くらいはついてたが。

「というかやめてくれ、そんな風に言うのは。畑中に失礼だろうが」
『ほお、貴様は自分の不細工を自覚していると言いたいわけか』
うるさいな。

フーといくらか雑談をこなし、広い机の上に小さな紙と鉛筆を用意する。

夕食の前、僕は自分から畑中に志願し、魔術の講義を延々と受けていた。2時間は話し込んでいただろうか。

それを通して、僕の魔術を使ってみたいという欲求はさらに高まった。きっと、誰だってそうだろう？ そんなものがあると知っていたのなら、思うはずだ。魔術を、魔法と呼ばれる夢を、扱ってみた。

僕だって、使いたい。

馬鹿みたいだと罵られたって、子供みたいだと馬鹿にされたって構わない。

それに、いくら畑中が護衛についてくれているとはいえ僕自身が魔術を使えるというのは最大の防衛術になり得るし、学ばないに越したことはない。

これは言い訳。

でもそれでいい。欲望に必ずしも理由が必要だとは限らない。いや、欲求に理由は必要ない。

だったら何も言わずに始めようじゃないか。

魔術という名の奇蹟を。

まあ、前置きはこの辺にしておくとする。僕は自分の気分の高まりを感じつつ、勝手に動きだしそうになる手を理性で無理やりに押さえつけて。

『まず、第一に』

さっきの畑中の話を、頭の中で再生する。

『魔術のことを魔法と呼ぶのはやめなさい。そんな風に言ってるのは龍だけです。基本的には魔術、もしくは導術。魔法だと少々万能のイメージが過ぎます』

というわけで、僕はその時から魔法の類をまとめて魔術と呼ぶことにしていた。

『魔導師が何故魔導師と呼ばれるか。その所以は』

その所以は、自分たちの「導力」と呼ばれる力によって自然発生する魔力、即ち「マナ」を自由自在に導き、扱うことが出来るとい

う一点による。畑中はそう教えてくれた。

故に、人の持つ力とは「自然魔力に準する、固有の、魔力を導ける優位の力」であり、準自然固有魔導優力、略して導力。これは先ほどフーが口にした単語が気にかかっていた僕が、畑中に無理やり聞きだした話だ。

さらに、魔導師の左右の手にはそれぞれ役割があるという。

右手は装填の為の魔手。

繊細に導力を操ることが出来る手で、マナをその掌へと集束させ、顕現させる。

左手は精錬の為の術手。

魔手に集めたマナを左手へと移し、それを各々の魔術で使える形へと変換する。

いわば右手と左手は鍵と鍵穴の関係にあり、一人一人が全く違う形状を持っている。両掌を合わせるのは今の魔術では最もオーソドックスなスタイルらしい。それをする事によって自分の使う魔術のイメージをより堅固なものとし、右手から左手へマナの流れを作り出すのだそうだ。

昨日。

畑中の見解では、僕の右手は無意識のうちにマナを収集していたという。そしてその右手で畑中の左手をつかんだ為畑中のマナの流れは阻害されて歪になり、結果として術式の暴発、あの事態を招いたということだった。それでもあれが珍しい事態であることに変わりはなく、通常なら術手が力負けするようなことはあり得ないらしい。

このことについて、畑中はあまり進んで話したがらなかった。何故かはわからなかったが、話したくないことを無理やりに聞き出すような真似をするほど僕と彼女はまだ親密じゃない。聞くべきではないと思ったし、実際僕はそれについて突っ込んで聞くとは思わなかった。まあ、今の僕に対してそこまでの重みを持つ事柄とも思えない、僕はそれなりに紳士なのである。ということにしておく。

とにかく。右手、つまり魔手によるマナの顕現。これが魔術の 1 ステップ、アーティストになる為の第一歩と言うわけだ。さて、情報の整理も出来たことだし。僕は自分の手に巻きつけていた心の鎖を外すと白紙の上に転がる鉛筆を夢中で手に取り、紙に言われた通りの図形を描いた。

直径 3 センチにも満たない、正確なわけでもない、少し歪んだ小さな円。

それだけ。それだけでいいらしい。そしてその中心に、鉛筆を立てる。だが立てると言っても普通に立てるのではない。削ってあるほう、つまり尖がっている側を下にして立てるのである。

ここからが大事なところだ。

「おい、フリー、黙っとけよ」

『安心しろ、言われなくてもそんな子供じみたことはしない。貴様のようにはな』

しかしながら、毎回毎回こいつの表現は実能的を射ていると言える。不愉快なくらいにな。いや、だめだだめだ。こいつにリズムを崩されては堪らない。僕はめくるめく軽やかにそれをスルーした。

よし。と一つ意気込む。

僕は鉛筆の背を人差し指で抑えて、円の中心を見定めて立てると人差し指の力加減でバランスをとる。これでいいはずだ。そしてそのまま、意識をそこだけに集中する。外から聴こえてくる虫の声も、時計の針の音さえも聞こえないくらいに。

極限まで神経を薄く、細く、尖らせる。

視界は暗く落とし、目に映るのは鉛筆と、紙に描かれた円の線のみ。

僕はこの世界に一人だけになった。

その中に、畑中の声が重なる。

『集中し』

集中し。

『力を抜いて』

力を抜いて。

『そして』

そして。

『意識を繋ぐ』

……………意識を、繋ぐ！

瞬間、鉛筆を支える僕の人差し指から、無数の蒼い光の糸が円周へと延びた。燃ってあった一本の細い糸が解れたかのごとく、解き放たれたそれらは一瞬にして鉛筆の線に複雑にからみつき、そして紙の中へと入り込む。

本当に一瞬だった。僕の右手の人差し指を起点にして、鉛筆と閉じ込める光の檻が完成する。

これが「序導」。

息を荒くしつつ、輝く三角錐を呆然と見つめる。今この導力の檻は、僕にしか見えていない。僕の力は僕にしか見えないのだ。

「す……………すごい……」

感嘆に声が漏れる。だが、このままじゃだめだ。

導力だけでは何もできない。

しばらくすると、その信じられないほど鮮やかな蒼い輝きも色を失い、元の何もない空間へと戻っていく。しかし、色は褪せてしまってもそこには確実に僕の力が在るのが指先を通して分かる。

3点。意識を集中させる点が3点あれば、導力を自分の思うように展開するのが容易になると畑中は言っていた。それ以上では逆に意識が飛び散り、それ以下では空間認識能力がうまく働かず、導力を展開するのが難しくなる。この場合は鉛筆の頂点と、円周。円周は点ではないが、とにかく囲まれた場所を捕まえると意識することが、初めて導力を展開させる場合には最もやり易い。

そう、捕まえる。

そこに確実に存在しているマナを、魔術の網で捕まえるのだ。

点滅する無数の蒼い糸を自分の意思で中心に向けて狭めていく。網を引き寄せるのは、思っていたよりもずっと簡単な感覚だった。

光の糸の群はまるで一本一本に僕の意味が通っているかのように、ざらざらの紙の上をするすると滑らかに動く。

鉛筆は、マナを目にみえる形に具現化する際のガイドだ。その糸が絡め取ってきたマナを、一本の鉛筆の周囲に沿って形にする。

これが「顕現」。

イメージするのは、細い棒、鉛筆そのものの形だ。鉛筆へと集束した蒼光の糸は僕の意味をそのまま体現して鉛筆のボディで網目となり、その表面へと巻きついていく。そして縛る。ぎゅっ、と。

これで、いいんだろうか？ 少し不安だ。僕は成否が解らぬまま、人差し指をなるたけそつと夢の纏わりついた棒の尻から離す。

僕の心配をよそに、HBの何の変哲もない鉛筆は円の中心に立ち続けていた。その全体を赤く発光させて、尖った芯その一点だけで。

「お、おお。やった」

『感動の割に薄っぺらいセリフだな』

「感動メーターが限界MAX振りきれて、0に戻っちゃったんだよ……」

僕は目の前の光景から目が離せないまま、魂の抜けたような声でフーに答える。

……出来た。

畑中の言っていた通り、本当に出来た。出来たじゃないか。

僕にも使えたんだ、魔術が。いや、本来はこれだけでは魔術とは呼べないのだが、経験値が0から1になったという事実はとてつもなく大きい。

そう、そして。

これで絶対。

これは自分の意思で。

僕はもう後戻りできないところに足を踏み入れた。

巻き込まれたってわけじゃない、全てが自分の意思でだ。彼女に、畑中に気負わせるようなことだけは避けなければいけない。嫌悪感の理由は自分でもよくわからないが、とりあえずそれだけは僕の良

心が許さないから。彼女は暗い顔の似合う人間じゃないんだ。

ふう、と興奮冷めやらぬ中に一安心を得て、息をつく。

「で、次はどうす」

リリリリリリ。

パタン。その音に僕がびくつ、となると鉛筆はあっけなく倒れてしまった。

「うえあ！」

なんてこった！

『電話だぞ』

「わかってるよ！ あーあーあー、せっかく立ったのに……」

電話の主よ、我はそなたを恨む。恨むぞよ。親父か。親父、あなたなのか！ よもやこのタイミングでなくてもいいだろ、畜生。マーフィーの法則か、これぞマーフィーの法則と言うおつもりか。

倒れたペンシルはそのままに、バタバタとリビングから廊下へと出て左向け左。突き当たりの洗面所に向かう途中にある電話へと早足で向う。無機質にコールを告げ続ける備え付け電話を発見するとまず一睨み、イライラと受話器を手にとった。

「もしもし」

もしもし、と一昔前のヤンキーのような不遜な口調になってしまったいた。万が一これで相手が親父じゃなければ大変失礼だが、はて。

「ああ、もしもし」

む、この口調、親父じゃないぞ。

「あ、大変失礼しました。八代でございますが」

慌ててそう言い直す。そもそも第一印象を良く見せるための心がけが大切である電話での応対に言い直しは利かないだろうが、しないよりはマシだ。しかし親父はもつともつたりと喋る。こんなハキハキとした話し方はしない。

とすると、誰だ？ 僕の知り合いにはこんな透き通ったテノールボイスの持ち主はいなかったと記憶しているが。

「こんにちは。いや……違うな、もう七時か。訂正させてもらおう」
その含みのある話し方は、熟成した人間を受話器の向こうに印象付ける。だが。

「こんばんは、ジョーカー君」

「！」

その耳新しい単語が、魔術の練習で磨り減った僕の神経を再び尖らせた。昨日の今日で僕をこんな風と呼ぶ奴は——2年2組の人間しかありえない。

11. ジョーカー

「誰だ」

受話器を握る手に力が入った。僕がトランプのジョーカーだろうとなんだろうと、それは構わない。だが意図的にそんな呼ばれ方をされれば、その呼称自体に嫌悪感を感じずとも込められた悪意は明確に読み取れる。

「用があるならさっさと言え」

口を衝いて出る言葉もとげとげしく、邪険になる。しかし、聞き覚えのない声だ。同じクラスの連中なら、一度くらいは声を聞いたことがあるはずなのだが、おかしい。

挨拶を交わしたきり、向こうは一向にしゃべる気配がない。沈黙が続く。僕は痺れを切らし、冷えきった声でもう一度同じ問を繰り返した。

「名を名乗れ」

「くっ、ふふ……」

電話線の拾える最低ラインすれすれのテノールが、くつくつと笑う。

「ふざけているのなら、切る」

「いや、これは失礼、ジョーカー君」

ねっとりとした言い回しがいちいち鼻についた。怒りはじんわりと心に浸透し、だが僕の芯の部分はかえってしんと冷えてくる。

「いい加減に」

「奇遇だね、私もジョーカーなんだ」

あくまでも自分のペースで、その男は僕の声を遮り、名乗った。

「……何？」

「ジョーカーだよ」

なんだ、こいつ？ からかっているのか。

そんな風に油断していた僕は、次の瞬間。数本の思考の糸が繋が

り。

衝撃に体躯を打たれた。

心臓を貫かれたかのように、僕の時間がその鼓動を止める。フルカラーの視界は反転し、白と黒のフィルターが僕をモノクロの世界へと落とし込んだ。僕の頭の中に張り巡らされた網が複数の過去をからめ捕り、一つの事実として結びつける。ジョーカー。こいつは今そう名乗った。

こいつだ。

体の内側で、和太鼓を叩いている音がする。噴き出た汗がシャツにじっとりと染み込んでいく。

間違いない。こいつが――僕の右手のこの腕輪を、僕の命を狙う張本人だ！

昨日ずっと感じていた違和感は、これだったんだ。僕は眩暈を感じつつ、なんとか言わんと意図することを口から紡ぎ出す。

「魔導師も逆探知なんて文明の利器を使うのか？」

倒錯の余り、今のがきちんとした言葉になっていたか、自分でも判別がつかない。

「……ふふ、安心しなさい。私はそんな下賤で姑息な真似はしない」
相手の返答を咀嚼する限りでは、僕の口から発せられた音声に日本語として致命的な欠陥はなかったようだ。じんわりと、だが急速に受話器を握る掌が汗ばんでくる。落ち着け、魔術師と言えど、電話越しじゃ何もできないはずだ。

いや、待てよ。

こいつが今僕に電話しているということ、それが詰まるところ何を意味するのか。それに気づいて、プラスチック製の受話器が手を滑り落ちそうになる。

電話番号が簡単に割れるということは。いや、それどころか今の男は僕のことをジョーカーと呼んだ、ご丁寧に二度もだ。つまり。これは脅しだ。

お前のことはすべて解っているのだ、という脅し。逆探知なんて

そんな小細工、する必要すらないということか。

「ふふ、わかっていただけたかな？」

なめられたものだな。僕はもうとっくにジョーカーの手の平の上というわけだ。

その低い声域のせいで年齢は判別しがたい。受話器からの声は若いようにも、年老いているようにも聞くことが出来た。どちらにしても、相手はこちらの動揺などお構いなしに、落ちつきはらって僕と対しているようだ。結局その余裕は、十分すぎるほど下賤で姑息なものに思われた。僕は舌で唇を湿らせてから、口を開く。

「……生憎、僕はまだ自分の右手首が可愛い。手放すつもりはない。いや、手首放すつもりはない、とでも言うておこうか？」

自嘲を交えつつ、ブラックジョークを飛ばす。そうでもしないと今、この瞬間、この会話で僕は自分というものを保てない。

「くくっ、やはり君は面白いな。――八代 椎奈」

ジョーカーはあたかもそれが当然であるかのように、不愉快な微笑を交えつつフルネームで僕の名を口にした。こいつの中では、正常と異常がそっくりそのまま入れ替わっているのだろう。吐き気がした。

「今、君のそばにいるアーティストは何をしているのかな？」

僕は廊下の右手奥に薄暗く見える風呂場の引き戸を一瞥した。先ほどからずっと、シャワーの水音がBGMとして耳に心地よく響いてきている。まったくもって、光熱費を考慮してほしいものだ、と僕は呑気に考えた。

「地球温暖化に貢献している」

「ふっ、そいつは大変結構なことだ」

愉快そうなジョーカーの声は、僕の心を深い絶望の淵へと陥れる。畑中のことを思うと、僕一人でこの電話を続けていいものかどうか迷いが生じた。だが、切るわけにもいかない。切ったとしても再びかかってくるのがオチだ。

魔導師同士の対決。もっと少年漫画的で、学園異能バトル的展開

を期待していたのだが。ここまでいやらしい、心理的な攻撃を仕掛けてこようとは。

いや、もはやこれは攻撃ですらない。

一方的な凌辱だ。

受話器の向こうのジョーカーという男が指一本動かせば、僕の右手首から先は僕の身体からおさらばする。今や、そのくらいに考えておいたほうがいい。

僕は、何もできない。

「何が目的だ」

苦虫をかみつぶして、口から言葉を絞り出す。

「僕に何がさせたい」

最も、血なまぐさいことは御免だ。ここまでくれば、奴がとんでもないことを言うてくるだろうことくらいは容易に想像がつく。だからこそ僕は、その要求内容によっては腕輪がどうなろうとも、例え右手首が跳ね飛ばされようとも、全力を尽くして抵抗するつもりでいた。

「いい、大変よろしい。その食ってかかるような態度、ゾクゾクするよ。若さというのは、実に素晴らしい。私も昔に戻りたいものだ」
「話はあくまでも自分の歩調で進める、か。逐条腹立たしいしゃべり方だ。僕は左手に受話器を持ちかえ、空いた右手で頭を押さえた。はめられている禍根の蒼い腕輪が、廊下の薄明かりに照らされて玄妙な光を放つ。

「その腕輪、私は無粋な方法で得るつもりはない」

ジョーカーは静かな口調でそう言った。

「どういう意味だ」

「それはね、ジョーカー君。君に一つ、お願いをしたいということだ」

何だと？

「ふふ、もう少し肩の力を抜きなさい。別に取って食ったりはしない」

僕はそのセリフの続きに、君が言うことを聞く限りはね、という無言の圧力を感じた。

「君も魔導師になりたいんだらう？」

「……話が見えないが」

それでも、強気な態度は崩さない。屈したら、負けだ。何に負けるのはわからない、だけどこれはプライドの問題でもある。

その一方で僕は今にも畑中が出てくるかもしれない洗面所の引き戸を注視していた。どうする、今畑中が出てきたら。素直に状況を話すべきか？

いや、そんなことは今考えるべきことじゃない。今は会話に集中したほうがいい。ジョーカーが僕を観察している可能性だって低くはない。

「ついでに、君のレベルアップに協力してあげようかと思ってね」

「……………」

何だ？

こいつ、何を言っている？ 全く意図が読み取れない。

「他意はない。君のアンテナで字面そのままを受信したまえ」

そして再び、くつくつと笑い声を立てる。自分の理解力のなさを咎めるつもりはない。ないが、理解できないのは事実だ。

「――星の街公園」

僕が右手をさらに額に強く押し当て辟易とする中、ふいにジョーカーはそんな単語を口にした。

「星の街公園？」

「そこに、迷い猫がいる」

「何？」

「二度は言わない。いいかね、今晚中にそこに行って、迷い猫を保護しなさい」

解らない。こいつが、何を言おうとしているのか、ことごとく捕捉出来ない。いや、普遍的な言葉として、言っている意味はわかる。だがその裏に何があるのか読み取ることは多難を極めていた。

星の街公園。確かに知ってるさ。行ったことは何度もあるし、親父と遊んだ幼い記憶は思いだそうとすれば今でも鮮明に蘇る。だがそれがどうした？ 迷い猫？ 僕がその言葉に従って行動する限りは命は保障するとも言いたいのか。それとも指定の場所に誘導しておいて、奇襲でもかけるつもりなのか？ それはない。この電話は、そんなことをする必要はない、という明示であるはずだ。

「君は少々邪推が過ぎるようだな」

ジョーカーのその声にはやや憐憫の色が見えた。だが、その声音の半分以上は歓を尽くす傾向にある。やはりそれは、僕を腹立たせるのには十二分の代物だった。

僕はラジカルにも、額に押しあてた右手で前髪を一房ぐっと掴んだ。邪推だと？ 魔導師ってやつは電話越しにでも僕の心が読めるってのか。

「違うな。それは違う。ただ、君の考えていることは読みやすい」

ジョーカーは畑中と同じものの言いをしたが、そこに込められた意味合いは大分異なっているように思われた。

「私と君には幾等か共通項があるのだよ。ジョーカーという呼称にしてもな」

「……すこぶる不愉快だ」

「くっ、そうだろうね。全くそうだろう」

あんたのその耳につく笑い声もおおむね不愉快だが。

「まあそう言うな」

ジョーカーは雄弁に語る。

「いずれ、君はその腕輪を目の上のたんこぶに思うだろう。違うかね」

悔しいがそれは否定はできないことだった。今でさえその感否めない。

「私はその腕輪を直接安全に外す方法は知らない。しかし、ヒントならくれてやれる」

電話越しの男はヒントが欲しくはないかね。と穏やかに付け加え

る。

「結構だ」

ここで否を返すべきではないのだろうが、僕の口は強がることをやめようとしなない。そもそも、狙いが解らない。ここまで予想のつかない会話は初めてだ。完全に相手のペースに嵌められてしまっている。

こいつは今何を考えているんだ。不気味すぎる。

「はっ、いいね、それでこそ君だ」

高揚感を付け加えたようなそのテノールは、だが、と続ける。

「これは取引ではない。私からの『お願い』だ。それを勘違いされでは困るな」

高圧的な言葉に、手汗がその量を増す。

「……つまり。あんたが言いたいのは、僕があんたの言うことを聞き入れる限り、安全が保障され、さらに腕輪を外すためのヒントまで頂ける、ということか」

「その通りだ」
しかし。

「あんたはこの腕輪が欲しいんじゃないのか？」

「ああ、そうさ」
ならば何故。

「さっきも言っただろう、私は乱暴を好まない。平和的な解決を望む」

馬鹿な。そんな虚言を信じられるものか。じゃなければこの物々しさはなんだ？ 畑中が何故僕の家にいる。あんたが危険人物として認識されているからだ。それにあんた自身も言っていたように、今しているのは『取引』じゃない。『お願い』なんだろう。

「違いないな。君の言葉には日本刀にも勝る切れ味がある」

イライラと、焦れてくる。結局、何が言いたいんだ。

「君だからだ」

何だと？

「私は君が気に入っている。故に、暴力に帰依するようなことはしたくない」

いつ僕があんたに気に入られたって言うんだ。

「そんなことはどうでもいいさ。重要なのは現在の私に君への殺意がないということだ」

僕はじっと、その声の続きに耳を澄ませる。

「いかんせん、君が私のお願いを無碍にするような真似はしないと心得ている。君は賢明な青年だ」

僕は歯を強く噛みしめた。僕はこのジョーカーとかいうふざけた奴に完全に遊ばれている。奴は目的を二の次にして僕を玩具にしている。

僕のどこにそこまでの要素があるというのだろうか？ 勝手に話を進めてくれては、甚だ迷惑だ。

「ふふ、ああそうだ、もう一つ。危なく言い忘れるところだった」
敵さんの意図するところは一応ながらも解った。だが、気は抜けない。僕は左手の受話器をもう一度強く握り直す。

「猫は、32号機関で保護しろ。と、そこに居るアーティストに伝えてくれたまえ」

32号機関。また聞き覚えがない。

「何だ、それは」

「腕輪や、君を保護していた『封じ屋』の先端グループの一つだ。確かそこにはテンションの高い金髪の男が居たのではないかな？」

思いのほかあっさりと、ジョーカーはその言葉の意味するところを僕に教えてくれた。

「ふっ。それではまた。グッドラック、ジョーカー君」

低い美声を引き留める間もなく、ガチャ。という音が、耳元で僕に通話終了を告げた。

ツー、ツー、ツー。

それではまた？ あんたと話すようなことは二度とないと願いたいところだが。

閑静とした廊下で、無機質な音だけが僕の耳朶を打ち続いていた。僕は立ち尽くしてしばらくそれを聞いてから、音を立てないよう静かに受話器を置く。電子画面に「ツウワ シュウリョウ ゴゴ 7 ジ 33 プン」と表示されていた。十五分以上は電話していたというわけか。男の僕にしてみればそれは随分な長電話だった。

「それで……」

まさか、とは思っていた。だが、通常の間人は部屋を出る時、当たり前ながらドアを開けなければならない。それが魔導師にも当てはまる、と考えたのは失敗だったのだろうか。

「君はいつからそこにいたんだ？」

振り向くと、気持ち悪いくらい予想通り。狭い廊下で背中にほぼ密着するようにして、髪に潤いの残る畑中が立っていた。母の洋服ダンスから引っぱり出してきた水玉模様のピンク色パジャマに身を包み、女子特有のいい香りを周囲に漂わせている。その腕には、彼女が昼間着ていた衣服が綺麗に畳まれて、抱きしめられていた。

すぐそこに、彼女の整った顔があった。白い頬をほんのり紅潮させて、髪と同じ淡い栗色の目をまっすぐ僕に向けている。怒っているようでもないし、慌てているわけでもない。彼女は落ち着いていた。

「大方、あなたの思っている通りです」

シャワーの音が聞こえなくなった時から僕は、ずっと洗面所の引き戸を睨みつけていた。

「だけど君は出てこなかった」

電話中とはいえ、戸から人が出てくるのを見逃すほど僕の目は節穴ではない。俗耳に入らば、瞬間移動とかいうやつだろうか？

「まあ、どうでもいいさ。そんなことは」

よくはないけど、悪くもない。所詮今は関係のない話だ。

「それで、どなたからのお電話だったんですか？」

廊下を照らす薄暗い橙色の照明の下に立ち、僕の眼前30センチ、お互いに息の吹きかかりそうな近さで畑中が言った。まず僕はそれ

に苦笑いを返しておく。そして誠実な色を湛えるその目を見つめ、意を決して事実を伝えるべく口を開いた。

「ジョーカー、だそうだ」

その名を出した途端、畑中の顔は横殴りされたかのように強張った。

「……してやられましたね」

軽く下唇を噛み、僕から目をそらす畑中。その感想には全力で賛同の意を示したいところだ。僕だってこんなことになるとは思っていなかった。こここのところ予想をぶった切る出来事が多すぎて思案に余る。

「その腕輪がまだあなたの右手首についているということは、向こうはそれをネタに何か要求してきたのですね？」

畑中は僕の右手首を見てから、眼前の男に視線を戻すと、そんなことを言った。

「鋭いな」

その通りだ。僕よりも頭一つ小さい畑中は、ほんの少し不安の混じる、しかしそれでいて屈強な目つきで僕を見上げていた。僕は続きを口にしようとして、はたと思いとどまる。彼女に罪はない。それに今のところ問題もない。そんなことは分かっている。だが、僕はついに抑えきれず、その小さくまとまった顔に少し怒気の籠った声を降らせた。

「君らはジョーカーという男の何を知っている？」

煮え切らない。もしジョーカーが電話ではなく直接対話の形をとっていたとしたら、僕が既にこの世の人間でなかったという可能性だって低くはないはずだ。結果的に奴の気まぐれで僕はの寿命は延命されたようだが、それとこれとは話が違う。命にかかわるような話を結果論することはそれ自体がおかしいのだ。

「あの……お願いです、怒らないで下さい」

僕の顔を驚いて見上げ直してから、眉根に皺をよせ、畑中は申し訳なさそうに首を横に振った。畑中がうっかり僕にこのことを伝え

忘れていたということまでは納得してもいい。だが、『封じ屋』が僕にジョーカーについて何の情報も提供してくれないというのはどうなんだ？

「伝達者が君である必要はなかった。それは別に龍ちゃんでもよかったんだよ。少し行き過ぎた考えかもしれないけど、君らは少々不親切だと思うな」

畑中はそれを聞いて目を丸くした。

「私は、てっきり龍から聞いていたものとばかり……」

ああ、違うね。僕は君らから何も聞いちゃいない。君が今日うちに押し掛けてきて、あなたは現在進行形で命を狙われています、なんて言い出したのがそもそもの発端さ。それ以外の情報はほとんど僕の耳に入っていないんだ。

「ではどうしてジョーカーのことを？」

そんなに驚くことだろうか？ 少し頭を回せば分かりそうなものだが。

僕は、電話中に閃光のごとくほとばしった考えを畑中に話した。それは詰まる所、こんな感じである。

畑中はおそらく昨日、6時間目の始まる前に学校を早退していたのだろう。僕は5時間目が終わってすぐに眠りについたためその事実を知らなかったが、これは関田の言動から推測が立つ。つまり、畑中は6時間目のホームルームで「僕がジョーカーと嘲笑われた」ということを知らなかったはずだ。僕だって、関田からそのことを聞かされるまでは知らなかったし、聞かされなければその機会すら永遠に失われていたかもしれない。

なのに、畑中のこのセリフだ。

『私に手荒な真似をさせる前にそれをこちらに渡してください、ジョーカー君』

昨日あの状況下で、僕にはそこまで回す頭が残っていなかった。だからつい、自分の都合のいいように事実を捻じ曲げて納得してしまっていたんだ。

「封じ屋」はきっと、僕を狙う人間の情報はほとんど掴んでいないだろう。と。

畑中は皮肉を込めて、腕輪怪盗である僕をそう呼んだのだ。と。とんだ勘違いだった。そもそもそう思っている、彼女には聞いておくべきだったんだ。どんな些細な要件でも、それを知っているのと知らないのでは心の余裕が違ってくる。少なくとも僕は、全く正体のわからない敵に狙われるよりも、それについて何かが分かっている敵に狙われるほうがよっぽど心理的に楽だ。

しかしながら、彼女が六時間目の授業に参加していたかどうか、などという情報はまさに不要物でしかない。それについて一言でも僕たちの二人のどちらかが触れていれば芋づる式に答えが導き出されていただろうが、それすらも起こり得ない状況が出来上がってしまったのである。僕も僕でボケていたとは思えない。

不自然に噛み合ってしまった歯車。

「まあ、こんなとこだ。自分の中で矛盾点を解消しただけだ。というか決め手は君自身が僕に向ってその名を口にしたことだし。結局、こんなのは推理とも呼べないお粗末なものさ。」

それに実際は名前なんてものの重要性はそこまで高くない。畑中は人差し指を顎にあて、思案するそぶりを見せてから呟いた。

「なるほど」

畢竟僕が何を言いたいかというと、これからもこのような体制が続くようであれば、それは僕が異議を呈する点になり得る。ということだ。

「わかりました。出来るだけ私の得た情報はあなたにも提供するよう、配慮します」

畑中は神妙な顔つきでコクリと小さくうなずいた。

「それで、ジョーカーは一体何を？」

ああ、それなんだが。

とりあえず、僕は畑中に再び服を着替えてもらうことにした。少し嫌がりながらも昼間の服装に戻った畑中を僕は再びリビングに呼

び戻し、電話での会話を掻い摘んで話す。

「それで、今のところ僕は安全ってことでいいのか？」

白い靴下を穿く畑中に、意見を募る。彼女が座るリビングの黒いソファアは、昨日の小部屋の小汚いソファアとは違って弾力もあるし小奇麗だ。例によって親父製である。何かと綺麗好きな親父の人間性が、その家具からはうかがえた。

しかし、彼女は僕に対する防衛がなっていないというか、この立ち位置だと、生足とスカートの合間の領域が絶対的なまでに僕の目を奪う。そんな短いスカートで脚を上げるな、畑中。非常にはしたない。いや、僕的には全然オーケーなんですけどね。というか、これは僕なんか警戒するにも値しないってことだろうか。そうだとするならばそれは少々無礼だぞ。

などと考えているうちに、畑中は膝上近くまである白い靴下を両足に穿き終わっていた。

「本当に安全かどうかはわかりません。ですが、ジョーカーが私たちを良いように使おうとしているのは確かです。そう言う意味では危険なことに変わりはない、そう考えるのが正しいと私は思います」
だろうな。畑中の意見はあらかた僕と同じだった。動かないことには先が見えない。

「じゃあ、そろそろ行くか」

「はい」

とにもかくにも。

僕たちは、ジョーカーに言われるままに、星の街公園へと向かったのである。

12. 猫を探して

閑散とした住宅の合間を縫うようにして、アスファルトで舗装された夜道を同級生の女子と並んで歩く。

それが今でないならば、例えそのチシューションが必然の産物でないとしても、僕は充足たる悦びを感じることができたに違いなし。少なくとも隣を行く女の子を美少女と形容するのに抵抗はなく、僕だって一端の男児だ。この状況に関して興奮が全くないと言えば、その言動は限りなく虚に近づくことになる。

だが現実というものはあまりに厳しい。そして虚しい。

世の風あたりはつらく、人間が幸福に近づくためのハードルというのは意外と高いものだと痛感する。僕の気持ちは少し沈み気味であり、これからどんな危険な目に逢うかもしれないと考えれば、女子と歩いているからといってそんなことで浮かれられるわけないわけ。

要するに僕は沈痛な面持ちを持つ他にないということである。どうせなら昼間がよかった。曇り空の夜ではおどろおどろしさも当社比2割増といったところだ。たかが公園に向かうのにこれほど気乗りしないことがあるなんてな。果たして神は僕に楽しい思いをさせてくれる気があるのだろうか。

などというぼやきは口にだせるはずもなく。

「なあ畑中」

こうして一緒に歩いてみると、女子と男子の歩くスピードの違いに気づく。男だけで歩いている時には、そんなこと気にも留めなかった。が、二人で歩いているとどうも畑中が早歩き気味になるのが気になって、僕はやや歩幅を狭くする。

「なんですか？」

畑中は顔は前へ向けたまま、目だけでこちらをちらりと見た。

「僕はこれからどうなるんだ？」

「どうなる、と言いますと？」

「うーん」

一体いつになったら元の生活を送れるようになるのか、ってことかな。

「……私には何とも言えません。残念ですが、記憶を消すと言った都合のいい魔術はありませんから、あなたが考えているような元の生活に戻れるということはほぼ不可能と考えたほうがいいでしょうね」

「そうかあ」

まあ、そうだろうなとは思ってたけどさ。現実言葉にされるとその事実が目の前に強く叩きつけられてしまった気がする。

もはや、つく溜息の在庫も切れかけてきていた。なんとも少ないストックだったという気がしなくもないが、こうも連日で嘆息させられるような経験は今までになかったのである。在庫確認が間に合わないのも仕方がないと頷かざるを得ないだろう。

あ、ここ左。と、畑中の少し先を行きつつ入り組んだ住宅街の中、彼女を公園へと導く。

「でも、大丈夫です」

何が。

「私だっですぐに慣れましたから。麻痺とも言うかもしれませんけどね」

慣れる、この世界についてことか？

「ええ」

「僕は……今のところ慣れたいとは思えないけどな」

そりゃあ魔術なんてものを使えたら楽しいんだろうし、僕自身の見聞だって広まるのかもしれないが。それでもやはり、今まで造り上げてきた僕だけの世界を唐突に突き崩すというのは、いささか惜しい気がしてならない。僕の世界にとってこれは根本からの改革なのだ。

って、慣れる？

「畑中は生まれつきとかじゃなかったのか？」

街灯に照らされて揺れる栗毛を後ろに見つつ、意外を込めた声をかける。

「魔術がということですか？」

うん、まあそういうことだ。

「そういえば先ほどは魔術の概要ばかりお話していましたからね」「あれで概要なのか……」

かなりの情報量があったように感じたが、魔術というものは僕が考えているよりずっと深いらしいな。

「私が魔術を使うようになったきっかけといえますか、原因は兄の死なんです」

僕は何の躊躇もなく発せられた畑中のその言葉に少々動転した。

「お兄さんが居たんだ？」

「ええ。でも私が小学四年生の時に亡くなってしまった」

そうだったのか。何気ない気持ちでその質問を口にしたことを少し後悔した。

畑中は何ともない風に応答しているが、実際のところはどのようなだろう。この手の話題になると、聞いた方がいいのか聞かない方がいいのか僕はいつも迷ってしまう。聞かないなら聞かないでそれは失礼なのではないか、とか。

「人が魔術を使えるようになるには様々なパターンがあるのですが、私の場合は兄を亡くしたショックだったのでしょうね。今でもその時のことははつきりと覚えてますから」

そんな僕の心配をよそに、けろっとして畑中は言う。

「まあ、昔のことですよ」

「ふうん……」

きっかけ、か。僕の場合何がきっかけだったんだろう？　いろいろありすぎたせいでわからないな。

そうこうしているうちに、僕は見なれた光景を発見し、足を止めた。

「着いたよ。ここだ」

畑中も僕の隣で止まる。

「結構広いですね」

その通り、星の街公園は高校生になった僕の目から見ても、大きな公園だった。平均的な小学校のグラウンドと同じか、それ以上の広さを保有しているのではないだろうか。

遊具がぼつんぽつんとある以外には小さな砂場があるだけなので、親子連れよりも、鬼ごっこだとか、あるいはサッカーや野球といった球技をする小学生がこの公園の主な利用者層だ。とはいえ、ブランコやシーソーと言った定番の遊具がそろっているためか、親子連れにとってもそれなりの人気を誇っている。住宅街のまん真ん中にある緑、というのが案外その魅力の一つなのかもしれない。

公園の周囲には、内側に沿って主にブナの木が多く植えられており、その下の土には公園の大部分を占める砂にはない、こぶし大の石がいくつか落ちている。親父に連れられてここに来た僕は、その石と遊具を使い、今になってよくよく考えてみると随分過激な遊びをしたものだった。

本当に過激だったな、あれ。親父もよく許容してたよな。というか親父本人がノリノリじゃなかったか？

恐ろしい。

僕は畑中を連れて、中に入る。畑中は念のため、と胸の前で手を組み合わせて

「セット」

と声をかけた。一瞬、柔らかな風が畑中の下から吹き上げるようにして、髪とスカートがふわりとひらめく。見えない。いや、見えない。僕は敢えて見ない。

とりあえず。これは右手と左手の回路をつないで、導力と魔力の流れを自分の中に作り出す、その為の共通の発動呪文らしい。昨日龍ちゃんがやっていたのはこれだったのだろう。

しかし必ずこれをしなければならぬということではなく、未使用

だろうと魔術の使用自体には別段問題はない。ただ、それでは一つの魔術を発動するのにいちいち諸手順を踏まなければならない為、連続して術を使う場合には時間も手間もかかる。発動呪文はその手順のいくつかを簡略化する為の呪文であり、いわば一種の魔術発動のルーチン化でもあるのだ。どうでもいいが、この魔術を使っている間の状態のことを『パレットを作る』という。おそらくアーティストと呼応した表現なんだろうな。

「パレットを作ると精神力を通常より早く摩耗します。出来るだけ早く目的を達しましょう」

目的を達すると言ってもなあ。

迷い猫を探して保護しろ、だっけ？

「そんなのどこにいるんだよ」

僕は言いつつ、固い地面から砂利を踏みしめる感覚へと移行する。見渡す限り障害物のないこの公園では、夜に光る猫の目を見逃すことのほうが逆に難しい。

まず、僕と畑中はゆっくり歩きつつ、木と木の間を隈なく探しながら、ぐると公園を一周してみた。しかし、何も見つからない。二人で顔を見合わせたあと、もう一周。念のためにと追加で一周。さらに遊具の周りと砂場の中を探して、また一周。

計、4周。始めこそ緊張の糸をピンと張り詰め、小さな物音にも過剰に反応しながら公園を回っていたのだが、それも4周もするうちにだれてきた。公園に足を踏み入れてから、もうそろそろ二〇分になる。暗闇の中の単純作業は僕のやる気を淡々と奪い去っていく。結局、僕ら二人は何の収穫もなしに、入口とは対極に位置するカラフルに塗装された木製のブランコに腰を落ち着けた。

「……いないじゃないか」

「探し方がいい加減すぎますよ、八代君」

何を言うか。

「そう言う君だって見つけれられてないだろう」

まあ、畑中は僕よりも疲れやすいというハンデを背負っているわ

けだが。

キィキィと鳴るブランコを揺らしながら、僕も大きくなったんだなあ、と靴の裏の擦る地面を感慨深く見つめた。昔はこの高さでも結構高いと思ったものだけど。人の目に見える世界なんていうのは、成長につれて全く違うものへと変質してしまう。だとすれば幼い思いの出は大切にしなければならぬ。

実に典型的な現実逃避である。

「もう一度探しましょう」

面倒臭い。

「馬鹿ですか、あなたは。本当に死にますよ？」

それは嫌だな。

「ではさっさと立ちなさい」

一度座ってしまおうと、再び立ち上がるのに倍以上の苦労を要するという真実に僕は気がついた。

「何を年寄りみたいなこと言ってるんですかあなたは」

「そう言う君がまず立つべきだ」

「ええー、面倒くさいじゃないですか」

「ちょっと何この娘、超ムカつくんですけど！」

と、畑中の座る赤いブランコに目をやって、気づく。

あの仕掛け、まだ残ってたんだ。

昔この公園の入口にあった人型の看板が撤去されていたから、てっきりあれも取り払われたものだと思っていた。とはいえ、一応隠ぺいはされているわけだから、気づけなかったからといって撤去者を責めるわけではないが。

僕は無性にそれを試してみたくなった。

先にブランコから立ち上がり、畑中の後ろへと回る。

「ほれ、立つ立つ」

「八代君が探してきてくださいよ……私はここで見守ってますから」

「それがボディガードの言うことか？」

「だから、見護るって言ってるじゃないですか」

「漢字を格好良く訂正したって駄目だよ！　そもそも見守るという言葉に護衛するという意味合いは微塵も含まれていない！」

ああ、もうしょうがないですねえ。のんびりとそう述べた畑中は、いかにも大仰な動作でブランコからその腰を上げる。君こそ年寄りかと言ってやりたい。言わないけど。

立ち上がったその後を見ると、やはりそのブランコの後ろ側面には小さな釘が刺さっていた。完全に刺さりきっていないその先は、何か引っかけりそうなフックのように曲げられている。

振り返って、植栽のブナの木に目を遣る。これもまた昔と変わらず、人が仁王立ちするように枝分かれした太めの幹がそのブランコの真後ろにあった。その幹の下から数えて4番目の枝に目を凝らすと、その元には細めの工事用の黄色と黒のロープの先端が、チラリとこちらを覗いている。

本当にそのまま、親父と一緒に作った仕掛けが丸々残っていた。

「……迷い猫とやらが見つかりましたか？」

「あ、いや。違うんだけどね」

僕が少しにやにやしながら答えると、畑中はむすっとした。

「ほら、早く探しますよ」

ああ、うん。

そう言いつつも、僕はブランコを持ち上げる。

「何やってるんですか……」

もう、知りませんからね。と言って、畑中はまた公園一周の旅に出てしまった。僕の悪い癖が如何なく発揮されているな。いや、頭でそれは理解できているのだが。本当によろしくない癖だ。

って先にブランコを持ち上げてどうする。

僕はそれを一旦手放し、ブナの木のロープへと向かう。

近づいてみると、その枝の元には同じように釘が刺さっていて、これもまた先が曲げられ、今度はアーチ状になっている。その穴にロープが通されていて、さらにそのロープの先には小さな輪が作られ、抜けないようになっていた。昔は親父に肩車されないと触れな

い高さだったロープが、今は目線と同じ高さにある。

それを手に取り、引っ張る。わずかな重みが僕の手には負荷をかけた。それを引っ張り続け、やがて50センチほどの長さになると、僕は足を思い切り開いて、空いている手で何とかブランコを手にとり、足を閉じつつそれを目線まで持ち上げる。そしてブランコの釘フックにロープの先の輪っかをひっつけた。夜で視界が悪いのに、手元が狂うこともない。僕にとってそれだけ刺激的な遊びだったことは確かなのだ。

結果として、ブランコの椅子が空中で固定される。

「完了……と」

全く不備がない。5年以上経った今もこの仕掛けが風化していないとは自分でもなかなか驚かれる。懐かしいな。知らぬ間にわずかな笑みが漏れた。でも、的がない。ほんの何年か前までは交通安全君という名の不憫な看板が公園の入り口にあったのだが。

はて。まあいいか。後で始動の確認だけして、釘なんかは危ないから回収して帰ろう。僕がそのロープから離れて、畑中を探そうと公園を見回した。

その刹那だった。

「ひゃあああっほおおおおおおおおおおうっ！」

「八代君！」

その騒音に近い狂ったような叫び声にワンテンポ遅れて、僕を呼ぶ畑中の声が耳朶を打った。

「何事だ？」

僕は公園の中を僕に向かって走り来る畑中に、努めて冷静に声をかける。

ようやく何かが来たらしいな。

「ところで近頃の猫っていうのはひゃっほうって言うのか？」

「馬鹿を言ってるんじゃないやありません！ 私から離れなくてください」君から離れていったくせに。などと言ったところでどうにもなりはしないし、彼女はほんの数秒で僕の元にすっとなできてくれたの

である。それに文句をつけるような口がどこにあらう。

息を弾ませる畑中は僕の前に立ち、右手だけでファイティングポーズのようなものをとる。僕もまた、弛んだ神経をぴりりと張り詰める。

「うはあああつ！ いい加減諦めろよおおうつつ！」

ゴミ袋いっぱいを集めた落ち葉と小枝を思い切りコンクリートの床にぶちまけたような音を伴って、入口近くのブナの木の子枝と葉の中から、弾丸を思わせる勢いで人影が飛び出した。その小柄な人物は空中でくると一回転すると、軽やかに公園敷地内の地面へと着地、服についた枝と葉を体をぶるりと震わせて地に落とす。

既に相当人間離れた動きをそいつはしていた。

「あんれえ？ どこ行った？」

ジーパンを穿いた猫背のそいつは、ぼさぼさの頭を左右にぶんぶん振りながら、間の抜けた声で独り言を続ける。

おい、まさかあれが本当に猫なんじゃないだろうな。

「……解りません。しかしあれからは敵意を感じます。どこか禍々しい何かを」

とても禍々しくは見えないが。どちらかというと近所迷惑甚だしいといった感じだ。

「おおおつ、人だ！」

と、そいつは僕たちを見つけると、八重歯の除く口の端を喜びに釣り上げた。

「なあ！ なあなあなあなあああつ！ 聞きたいことがあるんだけどさああつ！」

などとボーイソプラノで叫びながら、出鱈目な走行フォームでこちらへと駆けて来る。

「止まちなさい！」

畑中がそれを、右手と鋭い声で制した。

「それ以上近づくと撃ちますよ」

「おおおうつ？ 俺撃たれるのか？ 撃たれちゃうのかああつ！」

しかしその男は止まるどころかさらに勢いを上乘せし、走りながらひゃっほう、と獣のように叫ぶ。一片の迷いもなく、広い公園を真っ直ぐ僕たちへと走り寄ってくる。

「ちっ」

畑中は舌打ちして、上げていた右手をゆっくりと顔の左側面へとスライドさせた。そして間を置かずして、水平線を描く軌道で一気に入れを右側へと振り抜く。その軌道上から一瞬にして、細く尖った無数の紅い閃光が信じがたい豪速で射出される。

「うはあっ、すげえええっ！」

掠りでもすれば肉をそぎ取ってしまいそうなその赤い飛び道具が、その男へと瞬間集中豪雨のように降り注いだ。僕は息を飲む。

だが、その後だった。自分の目を疑うような光景が展開されたのは。

13. 僕と彼女と猫と少年と

畑中の指先から無数に放たれたそれらは、夜間の公園のすべてを例外なく曝け出すべく眩い赤光を放ちながら、ものすごいスピードで男へ向かって飛翔していく。対するその小男は進路を変える素振りなど一欠けらも見せず、チェストに白いラインの入ったオレンジのTシャツをはためかせ走り続けていた。そして躊躇なく、煌めく紅の流星群へと突っ込む。

見るに、アーティストと判断しての攻撃。今や魔術に携わり、微弱ではあるが力を得た僕にも、その感覚がなんとなく掴みとれていた。あの男がこの公園に飛び込んできた時から空気がピリリと痛い。おそらく、僕たち二人が入ってきてからしばらく安定していた公園内のマナの流れに、小さな乱れが生じた為だ。と言葉では言うものの、概念はほとんど理解できてはいない。だが、それが振動となつて、僕の現実的でない神経を揺らす。

それを感じた畑中が、攻撃した。少なくとも僕なんかよりはベテランである彼女の判断に間違いはないだろう。

その畑中は今、この立ち位置では栗毛の後頭部しか見ることができないが、僕よりもずっと冷静にその男がどう振る舞うかを観察しているようだ。だがこのままだと小男は間違いなく、畑中の放った閃光を全身に食らうことになる。そうなった場合、あの男は大丈夫なのだろうか。見ず知らずの人間を心配する義理など僕には一つとしてありはしない。しかし、湿度の高い空を切って飛びゆく魔術の閃光は見るからに鋭利かつ危険そうな凶器だった。

グロテスクなワンシーンを見なければならぬとすれば、僕は目を背けたいところである。

さあ、どうなる？ 僕も畑中に習い目を細め、なり行く先を見極める。

そして鋭い赤光の群れが、走り続ける小柄な男の身体と接触する

というその瞬間。男は、まるでそのすべてを遊びだとも思っているかのような満面の笑みを、その童顔に浮かべた。

消える。

消えていく。

男に触れるか触れないか。その位置で、閃光が次々と消滅していく。いや、その表現は的確ではない。その様子は、水に投げ込まれた小石が、その水面に波紋を打ち放って沈んでいく様に近かった。小男の周囲にある何らかの境界面に触れた何本もの閃光は、無色の液体に飲み込まれるように、虚空に赤い鮮やかな波紋を伴ってゆっくりと沈み、そして無に帰す。生き残った幾本かの赤い閃光は公園の対辺まで飛んで行って、リズムよく木の幹に刺さると、これらは花が萎れるようにしてまた消えてなくなる。

「……なんだよ、あれは」

新鮮な驚きに、自然と口から言葉が出た。

その結果、元の暗い公園に残されたのは僕と畑中と、そして奇妙な雄たけびを上げながら駆けて来るその男だけだ。

「うはああああっ！ 超すげえっ、こんなにたくさんの魔弾は見たことがねえっ！」

畑中は一歩後ずさりすると、男とは対照的に緊迫した口調で言う。

「あの量を一瞬でデイスベルですか……何者です」

デイスベル。畑中に聞いた話だと、確かそれは打ち消しの呪文。

「おおうっ！ お前らあっ！」

なんて畑中の言葉に耳を傾けている場合ではなかった。

その男は勢いを衰えさせないまま、啞然とする僕と畑中の1メートル手前で両足の運動靴を揃え地面を打ち鳴らす。そして。

嘘みたいに跳躍した。

口を開けて驚く僕たち二人の頭の上を軽やかに飛び越え、その高さを保ったまま一直線に左後方のブランコの支柱まで飛んでいく。かと思えば今度は、その青い支柱の中ほどを左足で蹴り、身体をしならせてさらに高く跳ね上がる。

完全に、この地球上の物理法則に逆らった動き。どう見ても、人の持つ重量で出来得る運動ではない。滅茶苦茶すぎる。

手入れのされていなさそうな量の多いぼさぼさの黒髪が、公園の街灯に照らされながら風圧に揺れる。男は、仕上げとばかりに空中で前方宙返りを打つと、ブランコを吊り下げている支柱の上辺に音も立てず、すたりと着地してみせた。

さながら、何かの大道芸を見ている気分だった。僕の常識を遙かに逸したその一連の動作には、あっけにとられるとしか言い表しようがない。

僕たちはそれを目で追いながら反射的に振り返り、オレンジ色のTシャツの薄汚れた背中を見た。するとその男はにかあつ、と邪気のない笑顔でこちらを振り返るなり、口角泡を飛ばして僕たちに語りかけてくる。

「なあなあ、猫見なかったかつ？」

猫だと？

「……畑中。これはどういうことだ」

桃色のスカートをひらひらさせながら忙しく僕の前へと移動しつつ、畑中は唸り声を上げる。

「わかりませんが……しかし、この男は私の友人ではありません。

勿論、知り合いでもありません」

だろうね。こんな粗野な男が君の友人だったら僕は君を少し軽蔑していたかもしれない。

「冗談を言っている場合ですか」

場合じゃないかな、やっぱり。

細い棒の上で器用にバランスをとる男は、左手で頭をぼりぼりと掻きながら、まるで何か物珍しいものでも見る目つきで僕たちの返答を待っていた。改めて見てみると、身体が小さいとかいう話ではなく本当に子供らしい。推定するに、まだ中学生にもなっていない。道理でボーイソプラノかつ幼い顔つきなわけである。

「猫ね……知らないな」

僕はその事実面に食らいつつも、畑中の背中越しに黒い瞳を持つ少年を見上げ答える。僕のその答えに、大きなその目が少し見開かれた。

「あんれえ？ おっかしいなあ！」

そして幼児向けの絵本にでも出てきそうな大げさな動作で、首を横に傾ける。

「あなた……所属は」

対蹠的に畑中が声を低く落とし、神妙に問う。

「しょぞくう？」

なんだそれ、食えるのか？ というセリフが驚くほどシックリきそうなの聞き返し方に、僕は唐突に吹き出しそうになる。

「ふざけないで下さい……回答によってはそれなりの処置を下しますよ」

だがその喜色のない声に込められた水面下の憤懣と、目の前の少女の纏う真剣な雰囲気を見る限り、その反応はあまりに不適切だ。そう思い、何とか堪える。

「なんだそれ、食えるのかあ？」

僕は吹き出した。

「八代君！ これは遊びじゃな……っ！」

畑中が目を怒らせて僕を睨みつけた、と思ったら。彼女の綺麗な栗色の瞳は僕の間抜け面を通り越して、はるか後方を眺めている。

途端、もう一度、盛大に枝を折り、乱暴に木の葉を叩き落とす音が夜の公園に響き渡る。

「ん、お！ あああああああっ！ みいーつつけたあっ！」

と、語尾に音符の付きそうなセリフを聞いて後ろを振り返る間もなく、そのぼさぼさ黒髪の少年は、再び僕たちの頭上をひらりと公園の入口側に向かって飛び越えていった。人様の頭を二度も飛び越えるとは、なんて失礼なガキなんだ。と言いたところだがこれはもう逆に敬意を表すべきレベルなのかもしれない。

「八代君！」

甲高く言われて、見上げていた頭を正面へと振り戻す。

「あ……」

そこには居た。多く草木を身体にまわりつけて公園のど真ん中に着地したそれは。

猫だ。

ぴんと立てられた白毛の耳に、柔らかい背骨。その背中には白く美しい毛並みが生えそろう、顔には街灯の明かりに光る髭と、暗闇にぎらつく鋭い眼。その脚先には、猫としか思えないような鋭い爪がついている。

きつと猫、だ。

そしてそいつは獲物を狙う虎の眼光を放ち、俯いた顔はこちらを厳しく睨んでいる。そこまではいい。

うん。あれは………猫か？

目をこすり、見なおす。だが僕の網膜が脳みその視覚野へ送る情報にブレはない。

「おい。畑中」

ついでに聞こえていれば少年よ。

「世間一般にあれは猫とは言わない」

いいか、あれは。

「猫耳をつけて猫のコスプレをした人間だ」

しかも男。

女ならまだ許せたものを。暑苦しくも毛皮みたいなものをかぶってはいるが、ちゃんと服らしきものを着ている。というか、そもそもしっかり二本足で立ってるじゃねえか。そんな不気味な猫はこの世に存在しない。いやまて、今となってはそうとも言い切れないので、存在しないはずだ、と語尾を変えておこうか。

ズボンは黒く、全体が白基調で統一されている分、脚だけが闇に溶けた。そのせいで、前方数十メートルに白い毛皮をかぶった大柄な猫耳男の幽霊が浮かんでいるかのような印象を受ける。

「……ええ……？」

ええ？　と言われましてもね、畑中さん。それこそ僕のセリフだよ。

釈然としない僕たち二人を置いて、眼前に着地した少年は、膝に手をつけて頭をうなだれるその猫耳男の方へ、勢いよく顔を上げた。そして地を踏みしめる足で砂石を蹴り飛ばし、放たれた銃丸のごとく爆走する。

「だああああありゃっ！」

一瞬にしてその男と距離を詰めた少年は、猫耳男の前で砂塵を巻き上げて1メートル近く垂直跳び。宙に浮いたまま体を捻るようにして、猫耳のついた頭部に右足とび蹴りの急襲をかける。すると、割合大人しかった猫耳男は、俊敏な動きで前かがみだった上半身をさらに低く落とした。足蹴りは綺麗に空を切り、勢い余った少年は空中で態勢を崩す。猫耳男の目が敵意に満ち溢れ、ギラリと光る。

○センチはあるだろう先鋭な猫の爪が襲いかかっていた。

だが、少年もそのままでは終わらない。どんな運動神経をしているのか、少年は蹴りの勢いを逆に利用してさらに右回りに身体をひねりつつ、地面すれすれに髪の毛をかすらせながら急激なとんぼ返りを打った。その目論見は功を奏し、一瞬前まで少年の胴があった場所を白銀の光が尾を引く爪が横様に通り抜ける。

それらの動作が一瞬のうちに開始され、次の瞬間には終わりを迎えていた。少年はしなやかに宙返りを完了すると膝をついて砂の地面へと着地し、猫男は振り切った腕の反動をを再び次の攻撃に向けて、繰り出そうとしている。

なんてことだ。二人とも人間業じゃあない。少なくとも僕には、一生をかけてみたところであるの動きに辿りつけるとは思えない。どういうわけか、軽い絶望感に似た何かが僕の心を打った。ってあれ。「……畑中？」

数十メートル先での紙一重の攻防に気を取られていたせいで、僕

は目の前に居たはずの畑中の動きに気づけなかった。灯台もと暗しとはよく言ったもので

「じゃない！　おい、何やってんだ！」

恐るべきことに、彼女は依然として戦闘を続ける二人に向かい、駆け出していたのである。猛然とダッシュする畑中は、動作を順行しつつ右手を大きく後方に振り上げる。他方では体をねじって白い片腕を高く掲げる猫耳男が、目尻の釣り上った猫目で少年をロックオンし、切り裂きのアクションを起こそうとしていた。

それを跪いた体制で見上げる少年は、また楽しそうに笑う。だが、今度の笑みにはどこか含みがあった。見ると、地面近くの右手が面妖な光を放っている。

「させません——」

それを見てか小さく呟いた畑中は、走りながら振り上げた右手で空中の何かを掴み、ボウリングの球を投げるかのように前へと振り抜いた。寸陰にして、どこからともなく具現化したダーツが少年と猫耳男を分かち位置にヒュンと飛んでいく。

先にそれに反応を見せたのは、攻撃態勢に入っていた猫耳男だ。少年に対するその動作を中断し、電光石火の動きで後ろへと跳ぶ。

「おおっとう？」

急速に攻撃を取りやめた眼前の猫耳男の動きから状況を読んだのか、少年も数瞬遅れてバク転で後ろへと跳ね、襲いくるダーツをギリギリで回避する。次の瞬間、ダーツはその二人の居た地面に突き刺さった。

「八代君、ばーっとしないでください！」

「え？」

癖っ毛の長髪を揺らしながら疾走する畑中は首だけ僕を振り返り、日ごろ穏やかな眼を緊急に見開いて、叫んだ。そうしつつも、その右手は流れるような動作で再び初夏の空気を把持し、掴んだ何かを少年へと投げつける。

烈風を切って出現したダーツが、飛ぶ。

「おおっ！」

少年は極めてめいっばいに目を見開いて、側転、左手だけで地面を突いて跳ね跳び、瞬く間にその空間座標を変更した。黒髪少年の足裏が公園の地面を捉えるのとほぼ同時に、その数十センチ右隣に小石を弾き飛ばしてダーツの矢が突き刺さる。

「なんだよおおっ！ 邪魔すんなあっ！」

畑中はその隙に乗じて、きいきい騒ぎ立てる少年へと追いつき、真正面に対峙する。

「第三現の魔弾はそうそうデイスベル出来ないようですね」

片膝立ての状態から立ち上がりジーパンに付いた砂を軽く払う少年に対し、畑中はドスを利かせた声を飛ばす。二人の間には、もはや5メートルの距離もない。

「くっそおお、さてはお前ら『敵』だなあっ！ いい人かと思ったのによおお！ だまされたっ、くそっ！」

少年が悔しそうに喚く。騙された、というのは身に覚えがないので聞き流しておいてやろう。

なるほどね。迷い猫を保護しろ、か。

僕は素早く、広さのある公園内に目を走らせる。居た。猫耳男はブランコの前から向かって公園右端の滑り台付き砂場の前で猫背になり、彼に役回りを取って代わった畑中を状況が飲み込めないといった風に観望している。

たった今、僕は僕のすべきことを完全に把握した。

「封じ屋には所属名も名乗れないような馬鹿はいません……結論を言えば八代君。この少年は私がなんとかしましょう。後は解りますね？」

少年から視線を外すことなく、桃色の少女は高声を張った。ええ、わかりますよ、わかりますとも。

「できれば猫の方も君に何とかしてほしいところだけどな」

ジョーカーが僕たちに期待していることは、つまり。僕たちがどうにかしてこの少年を下し、猫耳男を保護すべし、ということだ。

僕の担当はどうやら、かの猫耳男らしい。

さて、どうしたものか。保護と一口に言っても、そもそも奴に言葉が通じるのか怪しいものだ。おしゃべりな少年とは真逆で、あいつはこの公園に入ってきて（正確には飛び込んできて）から一つも言葉を口にしていない。

事実、あの猫耳は伊達じゃないのかもしれないし、そうだとすれば交渉がうまくいくかどうかは相当わからなくなる。勿論言葉だけで保護可能な話ならばそれに越したことはないが、僕の直感が「それはないな」と告げていた。こういう時に限って僕の勘は当たってしまうのである。これ、前にも独白した気がするが。

「……至極穏当、こりゃレベルアップにもなるわけだ」

何せ、下手を打てばあの運動能力と猫の鉤爪を持つ化け物みたいな奴を相手にしなきゃならないわけで。

ちなみに、僕には昨日の畑中とのゴタゴタを除外すれば、喧嘩の経験がない。全くのゼロだ。これは僕のちょっとした自慢でもあるのだが、今の状況ではマイナスファクターの一つへとその性質を變貌させかねない。

やばいな。

脚が独りでに震えてきた。出来るのか？ 僕に。

しかし、弱音なんてものを吐いていられる状況でもない。こうなってしまった以上、少年は畑中に任せきりだ。もはや僕には格好つけて、女性に頼るなんて男らしくない、などと言えるべくもなく。男らしくある必要がどこにあるう、僕の精神は軟弱主体、帰依出来るものには帰依すればいい。

とにかく頼みます、畑中さん！

震える膝でこれを言うわけで、僕のへたれ具合ここに極まれり、といった感じ。

弱気になった頭が考えることといえば、増援だの援軍だのと、まさに他人に頼りきりの軟弱な逃亡策ばかりであり、僕らの行動の何がジョーカーの逆鱗に触れるかは皆目見当がつかない。あの嫌みな

男の指示通りに動くのはひどく不服だが、僕が一人でやるしかないのである。

僕は猫耳男へと砂利を踏みしめて歩み寄る。

やるしかない。その言葉を心に刻みつけ、口を一文字に引き結ぶ。と、間後ろから騒がしい足音が響いてきた。

「ああの猫はあ！　おいらの獲物だああああああつ！」

14. 布石投石

振り返らずともわかる。この声、あの少年だ。

まずい。

背筋を凍り付かせそう思った刹那、ひどく眩い光が背中側から僕の影を長く目の前へと伸ばした。

「どわああっ！」

何が起こったかわからぬままに素早く頭を右回転、後方へと目を遣ると、悲痛な叫び声をあげる少年の小柄な体躯が、強烈な赤い光の筋に横槍に吹き飛ばされている最中だった。僕が振り返り切ると同時にその身体が有に数メートルはぶっ飛んで、公園の地面を無様に転がる。

「早く行ってください、あなたに狙いを定められても面倒を見切れませんから」

淡々とした調子で畑中が僕の左横から声をかけた。忙しくも反対側へと首を回転させると、畑中の顔を見つけて一つ早急に頷く。悠長に徒歩で移動している程余裕のある状況でもない。僕は駈け出した。

「ちくしよおおおおおっ！ なんっなんだよ！ このババアっ！」

「バツ……！」

うわあ。あれは即ち、子供ながらの無邪気の刃というやつだな。

しかし畑中は相当いきり立っている。

少年、今のは残念ながら死亡フラグだ。

「あなた……あまり私を怒らせないほうがいいですよ」

そして怖い、畑中さん！ さすがにドスが効きすぎ！ 君は宝塚

の男役ですか！

なんて思いつつ、猫耳男へと走る。向こうも僕に気づいたらしい、滑り台の前に佇みつつも、その面構えをより一層硬質なものへと変えた。後ろからは例の赤い閃光が飛び交っている振動が宙を飛散し

て、僕の透き通った感覚神経を凜と揺さぶる。この感じから判断するに、どうやら二人は僕と猫耳男から遠ざかっているらしい。畑中がうまく誘導してくれているのだろう。

まさか畑中が負けるなんてことはないとは思いますが……いや、僕が心配するような身ではないだろう。今は自分のことだけ考えるべきだ。それが畑中の為にもつながる。僕は再び前へと顔を向けた。

「猫さん、でいいのかな。僕は敵じゃないから、まずその爪はおろしてくれないかな」

念のため猫耳男とは10メートル程の距離を置き、そこでゆつくりと足を止める。後方でドンパチやる二人を除けば、ここはしんと静まり返った夜の公園だ。明かりだって脇にある街灯の無機質な白光だけ。ようやく本来そこにあるべきどこか寂寥な空気を取り戻しつつ、僕は出来るだけ柔らかに猫耳男へと語りかける。

「あー、日本語わかる？」

細身ながらもひょろりと背の高い白髪の猫耳男は、掲げた鋭い爪を胸の高さで光らせたまま猫の目で僕をギラリと睨んだ。軽く二メートルは身長がありそうで、これだけの距離があっても未だかつてないほどの威圧感を受ける。関田だってかなり大柄な部類の人間だが、こいつの身長は全くの規格外だ。背に羽織る白い毛皮のようなものが、風に揺れて白光を反射する。その立ち姿は小粋というよりもむしろ不気味だった。

猫の目をした男からの返答はない。

「……えー、と。Do you speak English?」

日本語に見切りをつけてにわか英語で挑んでみるも、またもや返答はないどころか、代わりに細長い五本の猫爪が軽く持ち上げられる。警戒を強められたということだろうか。そんな些細な畏怖でさえも、いちいち身体に震えが走る。怯む。

いや、物怖じするな。僕は余計な感情を頭から吹き飛ばして表情を引き締め直し、両手を高く挙げた。

「ほら、丸腰だ。安心してくれ、僕は君を保護しにきたんだ」

このジェスチャーはある程度世界共通認識のはずだ。そう思い、上目づかいに対峙する男の表情をチラリと窺う。

「保護だど？」

低いとも高いともつかぬ、平坦な声が言った。

って日本語話せるのかよ！

話を通じることには僅かな希望を見た僕は、少し安心してそれに返す。

「ああ、保護だね」

「戯言を」

しかし猫耳男は鼻で笑う。合わせて揺れる猫髭が場に似付かず滑稽だ。

「あの小僧も同じことを言っていたぞ」

「……そうか。うん、ではこうしよう。僕は君に危害を加えない。

暴力に帰依するのは好みじゃないのでね」

とまあ、ジョーカーの受け売りなのだが。

「同じことだ。得体のしれない人間に保護を被るほど俺は貧弱じゃない。それならばまだあの小僧とやり合って無理やりにでも連れて行かれる方がマシだ」

プライドが高いんだな。僕は苦笑した。だが笑えるような場合でもない。

「いいか、ついて来いと言うのなら答はノーだ。小僧、お前に俺の相手が務まるとは思えん。俺の気が変わらないうちにさっさと選手交代するんだな」

食い気味に言葉を放つ猫耳。よく喋る。

僕は数杖先の男から目を離すことなく、考える。頭の中を光がかけ巡り、その思考をより複雑な造形へと高めていく。

最もありそうな可能性を考えよう。

とりあえず今はこの猫耳男がどんな存在なのかってことは置いておくとする。その上でジョーカーの狙いだけを考慮するならば、それはおそらく僕が『封じ屋』の人間としてこの男を確保することだ。

そうでなければ『32号機関で保護するように』などと僕に言う必要はないし、そもそもそんなことを頼む必要もない。保護しろと言うのなら直接ジョーカーが確保に向かうか、その仲間を仕向ければいいだけのことだ。

前者は、それをする必要のないことであるという可能性が一点、もしくは考えにくいのが、本人にそれをする余裕がないと考えればいい。どちらにしろ奴が現実に行動を起こしていない今それを考えるのは無意味である。

それでは残った後者を既に実行しているのだとすれば、あの少年こそがジョーカーサイドの人間と考えるのが妥当。さらに少年の様子とジョーカーの口ぶりからすれば、任務の遂行が滞り、速やかにステップが踏めていないことが伺える。そこで僕が別の側面からのアプローチによりこの男を捕獲するという算段。同じ機関からの追手が増えるよりも、天から射す希望の光を見せた方が捕獲はより容易だ。あくまでも可能性としてだが、下手をすればこれがジョーカーの最初からの策だったとも考えられる。何らかの方法で僕に腕輪を装着し、腕輪が狙われているという情報を流すことによって僕をいいように使う、という知略。そうなればこの役回りが僕である必要があったとも思えないが。

さらに僕に護衛が一人つくことも予想していたのだろう。それを踏まえた上での『32号機関で保護せよ』という指令。

保護という言い方をするあたり、不用意に傷つけるようなこともしたくないのだろう。先ほどの攻防を見た限りでこの猫耳男と同等の力を持つあの少年を派兵しているのも頷けた。

白い猫耳の付いた、一見ふざけているとしか思えない男を強く睨みつける。

つまり、僕が今一言でもジョーカーと繋がっているようなことを口にすれば、その瞬間交渉は決裂し、即ち僕の危機へと直接する。何故ならそれはジョーカーの意にそぐわない終了であり、なおかつ展開はほぼ確実に実力行使の土壇場へと移行するからだ。そしてそ

うなった場合、物理的な危険という名のモンスターが僕へ魔の手を伸ばすのである。

畑中とあの少年が敵対するのも策の内、ということ。

一先ず。いいだろうジョーカー、あんたの要望通りに動いてやるよ。

僕はそこまでを考えると、考察を一時停止して静かに口を開く。

「僕は『封じ屋』の人間だ」

それを聞いた猫耳男の表情が一転、驚愕のそれへと変わった。

「本当か」

ああ、と僕はうなづく。眼の前のこいつにとって『封じ屋』とやらがどのような意味合いを持つかは知らない。だが、僕に渡されたカードは使うべきだろう。

「君も知っているのだろう。『封じ屋』がどういう存在か、くらいは」

口から出たままを適当に並べた。今はそれっぽく聞こえればそれでいい。ぽかんと開いていた口を閉じた猫耳男は、疑念を顕わにして僕へと聞き返す。

「お前はジョーカーの手先じゃないのか」

やはり。

ドンピシャだ。

「ああ、だから安心してくれ」

そこで調子に乗った。漏れそうになる笑みを堪えたりして、要するに僕は是が非でも馬鹿だったのだ。喜々として語りだした僕は、その帰結を思い知ることになる。

「あの少年は僕たちがなんとかす
ヒュと。」

「え？」

僕の鼻先数寸を、風を鳴らす猫の爪がかすり抜けた。

上半身と視界の反射だけで間一髪、僕はそれを空切りの一撃とする。

——なんで？

僕はそのままグシャリと、腰を砂利へと打ち付けた。粘っこい脂汗が一気に、背筋にねとりと湧きだしてくる。

どうして。

どこで失敗した？ いや、失敗なんて状態か、これは。僕はまだ何もしていないはず、ならなおさら何故だ。

「ああ、よく知っているさ」

瞬刻にして僕の眼前へとその身体を移動させていた猫の眼が、冷たい光を宿して尻餅をつく僕を見下ろす。

「『封じ屋』が」

ゲームやアニメなら「ジャキン」といった感じの効果音が入っただろう、そんな動作で、右手の指それぞれに生えた五本の長い爪がゆっくりと構えられる。僕に向けて、殺しの予備動作として。そして、男は言った。

「所構わずメルシングを殺して回る集団だってことはな！」

「——っ！」

この猫耳男は——メルシング！

「道理で」

こんな男も、こんな猫も、この世に存在するはずないと思ったわけだ。

だが、どうして。それならば何故ジョーカーはあんなことを。

『ついでに、君のレベルアップに協力してあげようかと思ってね』

その発言が頭の中に響いた瞬間、僕は激昂と共に奥歯を猛烈に噛みしめた。

どこかでジョーカーの笑い声が聞こえた気がしたからだ。

やりやがったな、ジョーカーの奴め。初めからこうなることが奴にはわかっていたんだ。その上で僕に勘違いを起こさせるように誘導した。

あくまで可能性に頼った賭けだったことは否定できない。

しかし、この賭けは僕に分が悪すぎた。

この猫が何者なのか、あの少年が何者なのか、『封じ屋』とジョーカーの関係が何なのか。掴みかけていたものが全てが指と指の隙間からさらさらと砂のように零れ落ちていく。ブラインドをかけられたように、何もかもが見えなくなる。

てつきりこいつは僕に助けを求めるだろうとばかり思っていた。畑中やあの少年と同じ、アーティストだと思っていた。だが、それは全くの間違いだったわけだ。この猫耳男はメルシングで、表の世界の不穏分子を排除するのが目的である『封じ屋』にとってはただの目障りな存在でしかなかった。

畑中は大抵のメルシングなら一目見れば見抜けると言っていたはずだが……いや、そんなことはどうでもいい。保護？ ふざけるな。この場合の保護とは畢竟、端から実力行使を意味していたんだ。だがあいつはそんなことは一切口にせず、保護なんていう曖昧な言葉で僕の考えを攪乱した。いや、そんなものは言い訳だな、僕が勝手に思い違えただけ。だが。

汚らしい。

汚らしいやり口だ。奴はすべてを解った上でやはり、僕をからかっていると思えない。奴はあの電話の時から、僕が『封じ屋』の人間としてこの猫耳男と対峙するだろうことを読んでいた。ジョーカーの発言はそれを踏まえた上での情報の操作だったんだ。僕にこの賭けに分があると思いきませた。

迷い猫。

それが何なのか口にしなかったことを、もっと素直に疑っておくべきだった。

保護。

奴の言い回しを、もっと曲解しておくべきだった。

結局一から奴は、僕とこいつをやり合せるのが目的だったんじゃないか。だとすればあの少年も僕とこの猫をやり合せるための？

いや、それはまだ早い、考え過ぎた。

ともかくそれをさせるためだけにここまで回りくどい手段を――

ここまでのやり取りと僕の思考のすべてが奴の計算の上だったというのか。ほんのわずかな時間の思考でさえも、僕へのいやがらせへと活用か？ いや、違う。

そんなレベルではない。

それは誇示。たった数時間前にその存在を知った程度の人間に、僕は完全に思考過程を読まれ、一方的に弄ばれているという、示教。僕がどれほど奴に支配されているかを見せつけられたに他ならないのだ。その事実には究極的に胸糞が悪い。

やられた。

だが、どうする。怒りと失望はつばと一緒に地面へと吐き捨て、目の前の危険分子へと思考のフォーカスを合わせなおす。

少なくともあの格闘戦を見る限りでは、この猫耳男と黒髪少年は対等。さらにその黒髪少年を畑中は高く買っていた。となれば眼前のこいつだって相応の実力を持っていることになる。

「っ！」

僕は瞬時に身を翻し、振り下ろされた爪の一撃を辛くも横に回避した。

対してこの僕は魔術素人のほとんどが一般人に程近い存在だ。

「どうしろ、ってんだよ！」

そのまま片手について立ち上がり、何とか横っ跳びに逃げ出そうとする。

「遅いな」

だが、視界から消したはずの鋭い猫目が、僕の進行方向真正面から僕を睨みつけた。

「くっ！」

運動靴のかかとで急ブレーキをかけ、バックステップ。もう一度距離をとる。だが。

「遅い」

僕がとったはずの距離が、無い。

鼻のくっつきそうなところに、腰をかがめた髭付きの男の顔があ

る。目と目が、合った。

「遅すぎる。お前が『鬼』だぞ？　はん、少し待ってやる。あっちの小娘ならともかく、お前のような弱小小僧はハンデの一つでもなければ相手にもならん」

「ふっ……言ってくれる！」

返事だけは強気に返す、いつもの僕だ。少しダボダボな長ズボンの右ポケットから、公園巡回の間にたっぷり拾っておいた小さな石ころを一個取り出す。

ある程度だがこうなる予想はついていて。何のためにあの仕掛けをしておいたと思っている？　そうだ、落ち着け。敵を間近にして、深呼吸を一つする。

勝算はある。

賭けは失敗だ。しかし、ギャンブルであつた以上もう一方にはあつたんだ。こうなる可能性も。

それを考慮していないほど僕は馬鹿じゃない。

「後悔することになるぜ」

さあ。

始めようか、鬼ごっこを。

「最も鬼のほうが一段と危険な鬼ごっこになりそうだが、な！」

言って、紅い攻防を繰り広げる二人を左手に、僕は一步後ろに下がって目の前の猫耳男に向かい、至近距離でのつぶてを打った。しかしゆらりと、身体をほんの少し傾けるだけでそれは避けられる。もう一発。僕は走りだしながらも一つ小石を投げつけた。避けられる。

さらに、投げる。避けられる。幾度となくそれを繰り返しつつ、僕は滑り台と砂場の前を離れ、ブランコへと向けてどんどん後退していく。ターザンロープを通り過ぎ、シーソーを横目にし、走りつつ、また投げる。そろそろ片方のポケットの中身が尽きるな。思いつつ、また右ポケットに手をつ込み、振り向いた時には。

「……いない……っ！」

前からの砂を踏みしめる足音に、戦慄が走った。

「なっ？」

「振り向く方向がいつも同じ」

紙一重のところで、しゃがむ。髪の毛の先端が二、三本、切れ味鋭い右手の爪に持っていかれた。

「回り込むのも簡単だ」

そもそも、敵に背を向けて走るなんてのは通常間違いだ。が、この場合速度が違い過ぎる、一概にミスだとは言えないな。なんて、そう余裕たっぷりに続けた猫耳男の左手の爪が、白光しながら僕の右肩に振り下ろされる。

まずい。そう思うのが先か、わずかに残された野生の感覚が、僕の両手を後ろの地面に付かせ、右足を高く振り上げさせた。

「！」

それに動物的なまでの反応を見せた猫耳男は、振り下ろしかけていた左手の爪を停止させ後ろへ、僕から見れば前へと跳躍する。

やはり。

僕は無我夢中で、すかさず右手に握りしめていた石を空中の男へと投げつけた。

「さあ、避けてみる」

いくら動物の運動神経をもつ男と言えど、空中では身動きがとれまい。だが、そうではなかった。

動物は動物でも、奴は猫なのだ。

くるり、と器械体操という捻りの動き。それをするという意図を持たずに跳んだ人間のなせる業ではない。高所から落ちる猫の動きを彷彿とさせた。いや、それすらも凌ぐ、猫とはまた違うオリジナルの躍動。

僕の投げた石は何に当たることもなく地に落ちた。

「俺をなめるな」

まさに猫のごとく4本の両手両足で着地した猫耳男が、白い前髪をさらりと涼しげに揺らしながら、平坦に言う。それを聞いて、思

った。

馬鹿め。

お前は気づいていない。自分の弱点がだんだんと露呈している、という愉快な事実。お前の馬鹿げた油断が近づくことを許している、自滅の足音に。

実に滑稽だ。そのふざけた白い猫耳と髭も相まってな。

意図せず、口の端が持ち上がっていた。行ける。思っていたよりこいつは単純で、何も考えていない。

戦略ゲームで王手の一歩手前、僕はもうすぐ勝ちを手にするというのに、相手はまだ迫りくる毒牙に気づいてすらいらない。僕だけが相手に落ちようとする敗北の雷を知っている。その時の感覚。それに近い興奮が夜に慣れた僕の目を爛々と輝かせる。大好きだよ、この感じは。

「ふふ……」

「ちつくしよおおおおっ！」

のわっ？

一瞬のうちに何かが僕の目の前を右から左へ、超スピードで通り過ぎた。

「なん」

「待ちなさいこのクソガキ！」

おそらくそれは少年だったのだろう。続いて何十本ものダーツと赤い弾の一群が僕の目の前を通り過ぎ、最後に憤怒を顕わにしまくった畑中が綺麗な髪を振り乱しながら、それらを追いかけるように走り過ぎていった。僕の軟い声など無残にかき消す怒声付きで。

いや、おかしいよな。いろいろと。

そもそも魔術やら何やらっていうのは、普通の人間に見つかっちゃだめなんじゃなかったっけか？ 半ば呆れつつも、それらは放っておくことにしておく。今は人にかまっている余裕などない。

猫耳男が立ち上がったのを確認した僕は、すぐさま全速力で駆け出した。

今しかない。一気に決める。

15. 椎奈ギミック

阿呆みたいにじっとしたまま動かない猫耳男の横を走り抜け、仕掛けを施したブランコへ向かい脚の回転速度を上げていく。

「来いよ、猫かぶり野郎！」

すれ違いざまに、あからさまな挑発をかける。もともと鋭く細い瞳孔がさらに細く小さくなって、その眼光だけで肉体を切り刻めそうな恐ろしい視線が僕に送り返された。それを確認し、僕はブランコへ急ぐ。

左を見れば、ターザンロープに巻きつくようにして少年があたりふたと畑中から逃げ惑っていた。脇に立つ白色燈に照らされて、離れていても二人の動向がよくわかる。一応公園のものを傷つけない配慮からか、畑中はダーツを投げてはいないようだった。が、僕からでは見えない何か少年をひたすらに襲っているらしい、彼は見るからに必死だ。

「一方的」という描写がここまでシツクリくる情景も珍しい。まあ注目するべきはそこじゃないというか。

畑中、まさしくそれは鬼の形相である。

相当さっきのババア発言が響いてるな。なんとなくだが、そう思った。いや、なんとなくなんかないけどね！

ご愁傷様です。

振り返らずに走る。おそらく僕が全速力で走って見たところで、あの猫耳男が本気を出せばいとも容易く追いつかれるだろう。僕がブランコに向けて疾走できているということは、奴がまだフルパワーの片鱗を見せているにすぎないとも言え換えられた。

僕は易々とカラフルブランコにたどり着き、そこでようやく視界を百八十度回転させる。僕のぴったり後ろにつけていたかのように、すぐそこに白い猫耳の生えた男の長身が迫っていた。見れば顔つきは、逆三角形の猫目を除いて非常に端整なものだ。

「なんだ、意外にイケメンじゃないか」
からかってやる。

「余裕だな、小僧」

セリフこそ落ち着いたものではあったが、そこに上乘せされた単純な感情を隠し通せるほどの冷静さは無くなってきた。

もう一押し。

僕は青筋の立った額めがけて、また左ポケットからつぶてを放った。もはや確実にかわされることが分かっている以上、僕がそれをする意味は一つしかないわけだが。

「無駄だと言うことがわからんのか？」

案の定、猫耳男が首を僅かに傾けるだけで、その石は目標にヒットすることなくカラカラと地を転がった。じりじりと、一步步確実に、僕は後ずさりする。

「わざわざこんな入り組んだ遊具まで走ってきて、結果自分の逃げ場を狭めるだけとは、哀れな。しかもそれで小賢しい武器のストックも切れたと見た。ブランコの下の地面は擦れていて、小石も落ちていない。まさに絶対絶命、というわけだ」

僕の逃げ腰な足の動きを見てか、ポケットを探る右手を見てか、男は心に再びゆとりを取り戻したのだろう。笑いに口の端を歪めつつ悠長に長台詞を吐く。そして一步、また一步と、時間をかけて僕へと歩み寄ってくる。

「お前もそれなりにいい面だ。顔は傷つけないでやってやる」

不吉なセリフを吐いてくれるな。

それより僕もイケメンだってか？

「怖がろうか喜ぼうか迷うところだ」

僕の態度が気に入らないのだろう、猫耳男の表情が一層険しくなる。

「この期に及んで強がりを」

強がり？ 確かにそう聞こえなくもないだろうが。

「……おしゃべりしてないでさっさとやれよ」

ザ、とさらに一步下がり、僕は並はずれて挑発的な言葉を口にしました。表情と声色も適切なそれへと切り替え、目の猫耳の怒りを買うことだけに意識を向ける。

「ほう？」

効果観面。その三白眼が判然たる怒りに見開かれた。

「猫は猫らしく背中の中毛を逆立ててろ、って言ってるんだよ」

もう一步、下がる。

この辺りでいいか。

「よもや鬼ごっこのルールを忘れたわけではないだろうな？」

だが襲いかかるのを躊躇するかのように、平坦な声は会話を続けようとする。ああ、あれは本気で言ってたのか。そういえば鬼は僕だ、とか言ってたな。

「そういうことなら、忘れたつもりは毛頭ない」

むしろ完璧なまでに記憶していると言って差し支えないくらいだ。

「そうか。どうせギブアップするのなら今ここで楽にしてやるが」

そんな漫画や小説でしか聞けないようなセリフを生で聞いたことに並々ならぬ感動を覚えつつも、僕はもう一步後ずさりした。

後ずさりして。

「！」

こけた。

踵が何かにつまずいたのか、いや理由はなんでもいい。とにかく僕は、ブランコを後方数十センチにして、派手に尻餅をついてしまったのである。

「痛ってえ」

反射的に口を突いて出る言葉と共に、顔を上げて冷徹な猫の瞳を睨む。

同時に、視界の端で右手の遊具にて争いを繰り広げる少年と少女を捉えた。二人は、飛んだり跳ねたりしながら（まだ常識的な感覚を持つ僕としては非常に不本意なのだが、本当にそうとしか描写のしようがない）ジャングルジムの頂上からシーソーへと飛び移ろう

としていた。

畑中もうまくやってくれている。時間の配分もばっちりだ。成程やはり、彼女は僕が心配するような玉ではなかった。

さて、と。

「そろそろ、チェック・メイトの時間だ」

言ったのは猫耳男。両手合わせて十本の爪が、白い服の胸の前で交差して構えられる。格好つけやがって。勿論対象は、僕だ。しかしそんなものに感興はそそられない。僕が見るべきは。

僕は目を正面の男からそらして、再び右方へと向けた。

——少年が落ちる。

猫耳男が両手の爪を僕へと突き下ろし。

——少年はジャングルジムから飛んで。飛んでそして。

右手と左手の爪は、夜風を切って僕の首へと向かってくる。

——そして持ち上がっているシーソーの座面へ。

首狙いかよ。B級スプラッターな映像なんて見たくもない。関田に無理やり『エルム街の悪夢』を見せられて吐きそうになったのも今やいい思い出だ。

——椅子へガタリと着地した。

瞬間。

「！」

僕は左手に隠し持っていた石を、力任せに猫耳男の顔面直撃コースで、つまりはほとんど真上へと投げつけた。

石は、一驚を喫する猫耳男の鼻へ向かってヒュンと飛翔する。

「まだ石が……！」

だが、その駭然は僕にまだ抵抗の意思ならぬ石が残っていたからの駭然に過ぎず、それを回避できないが故ではなかった。その石単体には猫耳男の攻撃を一時中断させる程度の効果しかない。

「結局甘い！」

「違うな」

「！」

甘いのはお前だ、猫耳野郎。

僕には当たらない、ギリギリで。

固く、そして大きな木製の直方体が、髪の毛をふわりとそよがせる風圧を伴い僕の頭上を通り抜ける。

それは――ブランコ。

シーソーの一方が下がることでブランコが動き出す、単純だが悪質な仕掛け。

そしてその起動スイッチを押したのは僕じゃなく、あの少年。

猫の神経を持つ猫耳男とは言え、僕に攻撃を仕掛けようとしていた状況ではそれに気づくのも遅れる。最も間接的にそれを押させたのは畑中であり、回り回ってさらに言えば、畑中にそれを頼んだ僕でもあるのだが。

どちらにしろそんなことは過程にすぎない。結果として、今猫耳男の顔面30センチに、ブランコは迫っている。

それでいいじゃないか。

「っおのれ！」

そんな叫び声とともに、猫耳男は咄嗟に後ずさりした。ブランコの動きは比較的ゆっくりだし、避けるのは困難でない。だがそれはこんな風に不意を突かれなければの話だ。

「当たれ」

「ちい！」

だが後ずさりの二歩目には、猫耳男は地を蹴っていた。嘘みみたいな反応速度で、長身の体躯は大胆に跳ぶ。普通の人間とはそもそも出来が違うというわけか。ブランコの一撃は、猫耳男の鼻擦れ擦れのところで空振りに終わり、僕の敵は前方一直線上で後ろ向きに宙を舞う。

だけど、これで終わりじゃない。

へたり込む僕を前にして、さっきとは逆の構図が出来上がっている。今や、僕は攻勢に回っている。そしてそれは何を意味するのか？

それは、僕が奴の攻撃の間合いから外れるということを意味し。

それは、一刹那の安全が確保でき、瞬時であれ集中できる環境が整ったということの意味する。

「つまりこういうことだ……猫耳野郎」

僕の周囲の空気が――変わる。正確には僕の右手の周囲の空気が。序導、そして顕現。

「工程は網羅した」

僕の世界に僕だけを突き落とし、一気に集中力を高める。時間はかけられない。

ほとんどぶっつけ本番みたいなものだけど、やるしかない。

『ほう、やるな』

フーの声が遠くで響いた気がした。

親指、人差し指、中指。他の二本は折りたたむ。極限まで高めた精神力を駆使し、三本の指の間にマナを一気に収束する。その飽和点を見極め、凝結。

頭がきいんと痛んだ。だが、そんなことは気にしていられない。さらに力を加え、見えない手で握るようにしてマナを手の中へと押し込める。額には玉汗が浮かび、息が乱れる。

右腕全体が、蜂に刺された痛みと熱さを帯びていく。

「くっ！」

耐える。耐えろ。そうしていれば次期に、それらはすうと引いていく。

そんなのは一瞬の出来事で、僕の掌には、赤く煮えたぎるマナの塊がふよふよと浮いていた。炎よりもずっと紅く、そして夕暮れよりもきつと燃えていて、血よりもなお鮮やかな朱。龍ちゃんの造り出したそれよりもずっと小さく、ずっと弱弱しく、今にも消えそうだけど、しかしそれでいて信じられないほどのエネルギーを感じさせる紅の球。

僕にだってこれくらいは出来るということだ。

やはり、話だけは先に畑中から聞いていて助かった。

「ほらよ、懇親の第一弾、だっ！」

役割を終えて返ってくるブランコを再び頭上に見つつ、僕は掌の球と自分の存在とを切り離す。つまり、僕がかき集めたマナの塊『魔弾』を世界へと放つ。

傍から見れば、普通にボールか何かを投擲しているようにしか見えないうのだろう。

実際、その動作は必要のないものだ。魔導師は身体で魔術を使わない。魔導師は頭で魔術を使う。だからこの動作は、僕自身に対する自己暗示にすぎない。『飛ばす』というイメージが必要だったから、投げる真似をする。

そんなことはどうでもいい。

当たればいい。

当たれ。心でほんの少し、そう願った。

「――当たれ！」

というか口にも出した。

小石とは違い、一直線に、それも猛スピードで飛んでいくそのギリギリ光る赤い球は、触れたら火傷しそうな尾を空中にギリギリ引きながら翔空する。

「！」

猫耳男はそれを見て、初めて狼狽したように見えた。のだが。

案に違わず同じこと。

奇妙な捻りの動きによって、器用に空中でポジションを変えた猫耳男の脇を、僕が顕現させたマナの塊はかすりもせず通り抜けた。

……あっさりとかわされてしまった。さすがに少しショックを受ける。

そして、綺麗に着地を決める猫耳男。

「三段攻撃には……さすがに驚いたが。それでも詰めが甘い。俺を普通の人間として見ているうちは俺には勝てないぞ、小僧」

メルシング。普通ではない。人間ではない。

そして普通ではないが故に、人間ではないがゆえに。

お前は僕に負ける。

「ふっ」

僕はこらえきれずに、笑みを漏らした。

「何がおかしい」

「残念だけど」

僕は数メートル離れて立つ猫耳男を指差した。

正確には、その頭上を。

「既にギミックは完成しているんだよ」

その頭上に落ちてきた。

——小石を。

指差して。僕は言った。

「え？」

「僕の勝ちだよ」

鬼ごっこのルール的には駄目なのかもしれないけど、間接タッチ
ってことで。

そいつがそれに気づく間もなく、コツン。と、可愛い音が周
囲に響いた。

猫耳男の頭に天から小石が降ってきて、当たった音だった。まさ
かここまで絶妙なポジションに立ってくれるとは。考案者の僕であ
れ、多少の驚嘆さえ感じなくもない。

そして、何の脈絡もなく次の瞬間、猫耳男の姿は僕の視界から消
え去った。

「……………」

わけではなく、小さくなっていた。肉眼でなんとか確認できる程
度の大きさへと、その姿を変貌させてしまっていたのである。

「そうなるのかよ！」

また驚きながらも僕は立ちあがって、ズボンをの砂をはらい落し
ながら、そいつへと徒歩で近づく。

「馬鹿な！」

そして甲高い声でキィキィ喚くそいつを、右手で軽く摘みあげた。どちらかというそれは猫というより、毛玉に近いだろう。体型はピカ○ユウっぽい。かもしれない。

「保護完了、と」

全くもって面倒くさい任務だった。

「待て！ 説明しろ！」

ったく、うるさいな。手足をばたつかせたりして、さっきまでの威厳はどこへ行ったんだ？

「くうううう！」

唸る猫毛玉。猫耳男と呼べていたころの面影すらない。みじめなもんだ、というか可愛いんですが。僕は喧しい毛玉が黙るのを待って、口を開いた。

「さっきブランコの前でお前に向かって投げた石。あれが最初で最後の僕の攻撃さ」

あれ以外はブラフだったんだよ。

ブランコはそれなりに大がかりな仕掛けで発動する攻撃だった分、あれをかわしたお前はおそらくそこで僕の攻撃が終わったと考えただろう？ だからあのブランコは、最初から避けられることを想定しての攻撃の歯車の一つに過ぎなかった、というわけ。

さらにそれでは足りないと思ったから、三発目を最後の攻撃だと思わせるためにわざわざ魔弾を使ってはみたけど、ブラフという意味ではそんなことをする必要は端からなかった。ただの小石でも一応役割は果たせていただろう。

だが、お前の気をそらすためのミスディレクションは必要だったからな。

結果として、お前は僕の攻撃を避けきったと思いこんで完全に安心し、最初の投石の行方を追おうともしなかった。それが四発目の攻撃となってお前の頭上へ落下しているのにも気付かずだね。

僕は一回目のバックジャンプの時、お前がどれ程後方に飛べるのかを観察していた。そしてそのあと小石の回避運動にあの捻る動き

を加えたことも考察し、ああいう咄嗟の反射的跳躍をさせれば、お前は必ず限界ぎりぎりの距離を飛ぶだろうと考えた。一回目と同じ、もしくは極近い状況を作らなければ僕の見立てが成功する確率は下がるからな。ブランコと魔弾にはその見込みも含めていたのさ。

当然ながら、それまでの小石をただがむしやらに投げているように見せかけていたことも功を奏した。当てる以外の狙いもなかった、単調な攻撃。そう見せかけるこそが、僕の狙い。そうすることでお前が小石の行く末を気にかける危険性を限りなく低くして。

今回もどうせ苦し紛れの一発だろう、と思わせることで。

「お前が僕の本当の狙いに気づく可能性はかなり低くなった」

それでも念には念を入れて、お前が僕の意図に気づかないよう、わざわざ無駄な話をして気を逸らせていた。正直な話、シーソーが動くタイミングとお前の攻撃のタイミングを合わせるのには苦労したし、半ばギャンブル的な話だったかもしれない。

だが、結果として勝ったのは僕だ。あの間抜けなエンドがお前へと訪れのも必然だよ。終始お前は僕の狙いに気づこうとしなかったんだからな。僕は魔術の使えない最下級のアーティスト、方やお前は普通の人間じゃないメルシング。そのデイスアドバンテージが逆に僕を勝利へと導いたのさ。

簡単に言ってしまうえば、お前の敗因は僕に対する見縊りと油断、だな。

「……馬鹿な。そこまで仕込まれて、いたのか？」

馬鹿な。もう一つそう呟いて、いったん静かになったかと思うと。

「だ、だがっ！ 何故俺の性質が解った！」

再び喚き散らす白猫毛玉。

ああ、それね。

「畑中、ああ、今あそこで少年を追い詰めてるあの娘だ、あいつから教えてもらったんだ。メルシングとはつまり、精神生物。人がいないと認識すればいないし、いると認識すればいる。つまり、高度な精神活動を持つ生物に依存し存在を保っている、言ってみれば幽

霊だとかお化けに近い存在だ、ということをや。まあ、魔術だって似たようなもんだしな」

だから龍ちゃんは僕に対して魔法を信じるか、なんて質問をしたのだろう。言ってみれば人が魔術を使えるようになる為のハードルの一つは、それを心から信じられるかどうか、らしいから。メルシングにも、それと共通する点はあるのであり。

遠巻きに畑中と少年の攻防を眺めつつ、語る。あっちももうすぐ終わるだろう。

「メルシングの存在の顕現には、多種多様な手段がある。それでもやはり精神生物と言うくらいだ。人の精神に依存するのが最も簡単な方法。そうじゃない場合は自分の精神濃度を上げて、大気中のマナを取り込むしかない。まあ簡単に言えば」

『簡単に言えば、人の導力に頼った顕現は頑丈なボディ付きで、そうじゃない顕現はボディが脆い。そのメルシングが持つ力にもよるがな』

その先を引き受けたのは腕輪の中のフーだった。

『私たちがこの世界に干渉するための方法として、前者を嫌うメルシングは少なくない』

とは言うものの、前者を取るメルシングもまた少なくはないのである。それによる影響を懸念するのが『封じ屋』の行動理念にもなっているくらいだ。

今はそれは関係ないので、閑話休題。

だからまず、弱点は見抜いたと言うよりも、知っていた、に近い。だがその『脆さ』だって僕には曖昧な言葉だった。どの程度を脆いといい、脆くないと言うのか。その線について畑中から聞き出すことはできなかった。聞く必要も大して感じられなかったしな。

「そこで、もう一つの判断基準」

首根っこを摘む白猫毛玉が、しんと静まるのを待って口を開く。

「お前は避けに避けた。避け過ぎた」

少年の蹴りも、畑中のダーツも、僕の蹴りも、投石も。すべてを

避けた。そもそも投石なんかは当たったところで大したダメージもない。

「僕の投石には一応、それを確める為の意味合いもあったんだ。身動きの取れない空中ではまず、あんな厄介な回避動作を取るよりもお前のあの立派な爪で弾いた方が明らかに早い。空中で迫りくる飛び道具を無理にかわそうとするより、簡単に効率的かつ安全な動作だろう。少なくとも僕ならそうするし、僕じゃなくても大抵はそうする」

それをあえてしないということはつまり、それをしないだけの理由があるということだ。だからあの時点で、お前の性質に関する予想はついていた。

小石すらかわさなければいけない、理由。あるとすればそれは二つ。

お前がメルシングであると同時に、人間に頼らないタイプで、不完全な顕現しか保てないということ。

さらにその『脆さ』とは、小石程度の打撃を身体に一発食らうことで致命傷になり得るということ。

「お前自身が言った『鬼ごっこ』もヒントにはなったね。どちらにしろ意味するところは同じだ」

それで小石がヒットしたお前は、こうなった。

予想通り、読み通り。

「ちんまいな、お前」

「うううう……そんなことでこの俺が」

まさに負け犬に用意された捨て台詞。実はお前ゲームの登場人物とかかよ？

『向こうも終わったようだぞ』

16. 任務完了、そして

フーの声に顔を上げてみれば、

「ちつくしよおおおおおおおお！ 覚えてやがれええっ
！」

丁度向こうも捨て台詞を吐き終わったところだった。当たり前ながら少年の台詞である。街灯から公園の周囲の樹木へと飛び移り、尻尾を巻いて逃げかえる少年の姿はやけに小さく見えた。今までこの比喻を使うことは意図的に避けてきたものの、ここまでされれば猿のようだと言わざるを得ないだろう。

というか、遁走の動作までいちいち無駄にアクロバットなんだよな。

「おー、畑中。お疲れ」

バイト上がりのお兄さん風に声をかけつつ、不安定なシーソーの上に立ち、肩で息をする畑中へと歩み寄る。

「……あの餓鬼……」

なんかすごく怖い声でつぶやきが聞こえてきたんだけど気のせいだよな。

「今度会ったら……してやります」

きっと気のせいだ！

「畑中さーん」

「ああ、八代君」

ようやく僕の声が届いたのか、畑中はころっと穏やかに気色を変えてこちらに振り返る。

「さすがですね。大丈夫でしたか？」

「大丈夫じゃなく見えるか？」

「頭の方は大丈夫ですかという意味です」

「その質問が今来るとは思ってたな！」

畑中は、冗談ですけどね。とか言いつつ、シーソーからひらりと

降りてこちらへ歩いて来る。その姿を見てか、白猫毛玉がまたキィ金切り声を立てた。

「この、悪魔！ 『封じ屋』なんてつぶれてしまえ！」

「なんですか、その胸糞の悪い毛玉は」

一々恐ろしい言い回しをするのはやめてほしい。切にそう願う僕であった。

「いや、まあね。さっきの猫耳の男がこうなった、と言いますか」
そうとしか言いようがない。

「人心に依存しないタイプ、ですか」

そう言って、畑中は顎に人差し指を当てる。何やら思案顔だ。

「……………」

そのまま何かを考えている様子である。いったいどうしたというのだろう？

「畑中？」

黙って深く考え込んでしまった畑中に、話の続きを促す。

「ああ、ええ。それで、そいつを保護しなければならないのでしたね」

ああ、らしいね。僕は、右手に摘まれてなお声を上げ続ける毛玉に目を落とした。目玉が小動物のそれというか、黒目だけになっていて非常にくりくりと可愛らしいため、僕はそれを見て少し癒される。

「でもどうやって説明するんだ？ ジョーカーに脅されていますとでも素直に言うつもりか？」

「ええ」

ええ、って君。

「別段問題はないと思います。それに少し気になることもありますから」

「気になること？」

「……いえ、個人的な見解ですのでお話するようなことでもありません」

そうなのだろうか。

「まあいいや。当面、僕はどうすればいいんだ？」

「月曜日までは自宅待機、ですね。そのメルシングは私が責任を持つて保護しておきますので」

保護という言葉に、右手の毛玉がビクついた気がした。

「そうか」

まあ、それならそれで僕としては気が楽でいい。

そういえば。

「札を言うのが遅れたな。サンキュ、畑中」

ふと思いついて、そんな言葉を口にする。

「何のことでしょうか」

聞いた畑中は、キョトンとしていた。そう言えば、頼むだけ頼んできちんと説明をしていなかったかもしれないな。そういうことならば、この反応は頷けよう。

ふむ。

一端回想に入ると言うのも物語の常套手段だろうから、ここからしばらくを回想シーンとしようではないか。

公園4周目。

そろそろさすがにだるい。

「畑中あー」

「蟹」

「蟹!？」

「いえ、しりとりかと」

「なんでいきなりしりとり開始だよ!」

しかも自分の名前に蟹を続けるとは、なかなかやるな(?) 畑中。
「そうじゃなくてだな」

植栽に落ちる石を拾ってはポケットに入れる作業を、猫探しと並行しつつ言った。

「ちよっと頼みたいことがあるんだけど」

「Bまでなら大丈夫です」

「何言ってるの君!？」

しかもそれ、Bってあんまり分かる人いないと思うぜ。

っていうか、本当にBまでなら大丈夫なのか？ え、マジで？

……いやいや、馬鹿なことを考えるな僕。

「そうじゃない」

「伊勢エビ」

「君は海産物が食べたいのか！」

「いえ、八代君に似てるなあと思ひまして」

「酷くない!？」

「伊勢エビ」

「アウト！ 二回も伊勢エビ言ったらアウトー！ ていうかそれ以前にしりとりはもういいよ！」

「そうですか、残念です」

声がびっくりするほど残念そうではないので、僕は気にせず話を続ける。

「可能性の一つとして、猫単体でこの公園に来ることはないと思う」と言いますと？

「あくまでもそうなるかもしれない、という話だけど。僕がジョーカーなら、ああいう話し方をする場合、追跡者が一人、あるいは二人と被追跡者が一人の場合だ。そして恐らく、ジョーカーは僕に猫の相手をするように言ってきた」

茂みの間に首を突っ込んだりしながら、僕は適当にだらだらと話す。畑中にもそこまでの真剣みは感じられないが、僕の話には一応耳を傾けてくれているようだった。

少なくともしりとりを無理やり再開しない辺り、まともである。

「根拠は薄いし、そうならない可能性のほうが高い。ついでに、僕はその上で喧嘩沙汰になった場合を考えてる。だから仮にそうなった場合、対策の一つでもあったほうがいいと思うんだ」

つまりは、最悪のパターンを考えておけば後はそれなりに対応で

きる、という話だ。そしてその対策とは勿論、僕の為のものである。畑中にそんなものが必要とは思えない。そうじゃなければ護衛は務まらないだろうし、護衛の手に負えないものが僕の手に負えるはずもないだろう。

「そういうわけで、ここからが頼みごと」

「私に出来ることならなんでもどうぞ」

心強い言葉だった。

「一つ。最初は出来るだけ猫と追跡者を離してほしい。相手を分析する時間が欲しいんだ」

少しの間を開けて、数メートル離れた茂みを搜索していた畑中から返答が返ってきた。

「わかりました」

こうもあっさりと承諾してくれると頼もしい限りである。

「二つ。これは念のためだけど、もし僕がブランコの前までダッシュで移動したらその時は、シーソーの上がってる方を思いっきり踏ん付けてほしい」

「シーソー？」

「ああ。ま、これはあくまでも念のためだ」

そもそもあの仕掛けが残ってるかどうかも怪しい。シーソーの方は確認したが、ブランコはさすがに撤去されている気がしないでもない。

「……解りました。私自身が出来るかどうかは分かりかねますが、出来る限りご期待には添えるようにします」

そうか、助かる。

僕は会話をこなしつつ、石をポケットに詰めていった。

可能性は多い。多いが、予測がつかないほどではない。その場の展開に応じて考察を切り替えられる程には多くない。だったら、下手を打って僕がどうにかなくなってしまふということもないだろう。

僕はもう一つ、石を拾った。

回想終わり。

さして意味のない回想だった気が……しないことにしておこう。
はてさて、事が僕の狙いどおりに運べたことは喜ぶべきことであり、つまりは畑中に感謝すべきことだと言うことで。

「おい」

彼女はきつちりと僕の頼みをこなしてくれていたのである。

「ブランコにそんな仕掛けがあったのですね……」

ああ。

結局、例のブランコとシーソーの仕掛けを回収しつつも一通り話した終ったあと、畑中はようやく納得したのか、僕の感謝を受理してくれたらしい。

「でもしかし、いったい何のために？」

何の為に、だったっけ

そうだそうだ。

確かその昔、ピタゴラスイッチという番組が流行ったことがあっただな。

「その仕掛けを模倣して、まあリスpektして。僕と親父で勝手に公園の遊具に改造を施したわけだ」

だからというわけではないが、本来、シーソーに至るまでの仕掛けもあったのである。しかしながら、それはさすがに隠ぺい不可能な大きさだったので早々に撤去。

「おい」

なごりとしてシーソーを踏めばブランコが動き出すという仕掛けだけが残っていたのだ。それもたった今回収したが。

「なかなかエキサイティングなお父様なのですね」

「ああ。まったくだよ」

思い返せば返すほど危険極まりないな。

「おい、無視するな」

「畑中、何か言ってるぞ、この毛玉」

持ち上げつつ、言う。

「毛玉じゃない。俺の存在を忘れやがって!」

忘れていたわけではないぜ。意図的な無視だ。

「そっちのほうが酷いぞ!」

「五月蠅いですね……」

その甲高い声を制したのは畑中。

「八代君、貸して下さい。少し静かにさせましょう」

言われたとおり、僕は迷いなく、右手で喚き散らす毛玉を畑中に手渡した。お気の毒さまであるが、名目上保護であるので、その点に関しては逆に感謝を被りたいくらいだ。

「シエロフュージー」

渡した瞬間、抑揚のない声と共に畑中の左手が強烈に光ったかと思うと、何本もの白い光の筋が急速に白猫毛玉を包みこんだ。

いや、包み込むと言うよりもこれは――

「術牢です。簡易ですが」

あ、牢屋か。

僕はてっきり虫籠か何かかと思ったよ。

瞬く間に完成した檻はタルのような形状で、側面が歪曲した格子になっている。通常との相違点と言えば、それがやけに光り輝いているという点だろう。闇に映えて綺麗だ。

中に封じ込められた白猫毛玉はちんまい両手で牢をつかみ、何やら騒いでいるようだが、その声は僕の耳に届くことがない。僕の家にかけられた隠ぺい術と同じで、防音効果が付与されているようだ。その上部から鎖のような物が伸びていて、畑中の左手がそれを握っている。それだけ見れば提灯とも取れそうな有様である。彼女がそれを手にしている様は、さながら風変わりなキーホルダーを持っている女子高生だ。

「おお……すぐ魔導師っばい」

「ばい、ではありません。魔導師なんです」

そりゃそうなんだろうが、やはり僕には目新しいものなのである。ではこれで一応、ミッシェンコンプリートってわけだな。

「やれやれ……仕掛けも回収したし。とりあえず帰るか」

いい加減シャワーでも浴びたいところだ。と、僕は出入り口へと方向転換して、一步踏み出した。そして。

踏み出したその脚が地に着いた途端。

あれ？

突如として明確な違和感と、足先の曖昧な感覚が僕を襲った。

なんだ――？

ついた脚は、僕の身体をしっかりと支えることなく。

カクリと。

膝から折れて、僕の上半身を空中へと投げ出してしまう。普段ならここで咄嗟に左足が出る。出るはずなのに。

秒速120mで神経を通して到達したはずの僕の命令を、僕の脚は無視した。

よろりというわけでもなく、ただただ。ふにやふにやに力が抜けて、直線的に落ちるのみ。言うなれば、金縛りとは対極の現象に陥っている感じ。だが、結果的に身体はびくともしない。目の前迫ってくる地面。見えない石膏で固められて、手すら出ない。

あれ、あれ。

動かない。

「八代君！」

畑中の澄んだ声に、エコーがかかって聞こえてくる。

その細い両手が僕へと伸びて、僕の決して小柄ではない体軀を支えてくれた。一度は勢いで畑中ごと沈みそうになった重さも、彼女のがんばりのおかげか再び持ち直し、なんとか落下が阻止される。

「お、重いです」

「悪い……畑中……」

うんしょ、と可愛らしいかけ声をかけつつ、畑中は右腕を僕の肩に回す。そして僕の左腕を彼女の肩へと。

酔っ払いが担がれているようなポーズだ。

「格好悪いよ……」

ただでさえ昨日から畑中には世話になりっぱなしだというのに、こんなことで彼女の手を煩わせてどうするのだ。そもそも女子に肩を貸されるなんていう構図が既に恥ずかしい。

「言える立場ですか、あなたは」

呆れたような、あるいは少々苦笑も含まれているだろう声で、彼女は言う。少し揺れた彼女の髪が、僕の首筋に触れてくすぐったかった。

「歩けそうですか？」

「……歩けなさそうれす」

うわ、やばい。それつもなんだか怪しくなってきた。その上、瞼におもりでも付けられている気分だ。

「……なんで……」

「無理して魔弾なんか撃つからですよ」

まったく。と、密着しているはずなのに、耳朵を打つ畑中の声はひどく遠い。その短い台詞の内容ですら、ほとんど頭に入っていない。

言語としてではなくただの音声として、僕はその声を聞いていた。頭がぼうとして、力がどんどん抜けていく。もう目を開けているのもつらい。急激すぎる眠気の波状攻撃で、僕は陥落寸前だった。

「あれは作るだけなら難しくないんです。問題はそこじゃないんですよ。何の為に段階を踏んだ練習方法を教えたと思ってるんですか？」

優しかった。絶対的に優しく、マシユマロみたいに柔らかい声だった。心の底から温めてくれるような、そんな声。

もし母親がいたら、こういう声を僕にかけてくれたんだろうかなあ、母さん。

「……………んうう……………」

「後は私がなんとかしますから、今は——寝なさいな」とどめだった。

その言葉が、僕とкаろうじて繋がっていた意識の鎖を断ち切る決

定打となった。

幕間 2

天才なんて、この世にうじゃうじゃいる。
でも、僕は違う。僕はそんなじゃない。
天才なんて、この世にはほとんどいない。
でも、僕は違う。僕はそんなじゃない。
じゃあ天才って何だろう。

……

ねえ、あの子、亡くなったらしいよ。

え？ マジで？

マジマジ。何でも自殺だって。

うへー、天才の考えることは解りませんなあ。

あれじゃないの？

重圧に耐えきれず、自殺。みたいな。

あー、かも。そういうのってあるよねー。

でも実際はわっかんないぜー。

あまりの天才具合に嫉妬した同い年の生徒が自殺に見せかけて他
殺！

えー、ないない。

私もないと思うな。

やっぱりそういうのってお話の中だけじゃん？

そうだな、あはははは……。

なんでだろう。

なんて、そんな風に言えればよかったのだろうか。
どうしてだろう。

なんて、何食わぬ顔で口にできればよかったのだろうか。

その日から、僕は変わった。

変わらなきゃだめだと思った。その一方で、なんでみんな笑って
られるんだろう。って、心からそう思った。僕もそのみんなに混じ
って笑っていればよかったのだろうか。って、心の底からそう思っ
た。

当たり前か、みんなは僕じゃない。僕とは違う。だったらやっぱ
り、そこにある笑顔は僕のものじゃないし、僕のものであっていい
訳がない。

じゃあ、僕は僕で、笑ってればよかったのか。

違う。

違う。

違う。それは違う、絶対に。

だってそれは自殺なんかではないのだから。

自殺なんかでは——絶対にないのだから。

7月7日。

その日から、僕は変わった。

その日は僕にとって七夕なんかではなく。

その日は記念日。

その日は僕が天才からただの馬鹿に堕ちた——ただの記念日。

17. 早寝……早起き？

夢を見ていた。

白銀の草原で、たった一人。

足元でざわめく膝丈の草花。その一つ一つが艶やかな銀色の光沢を放って、心配事なんか何もないかのように、のんびりさらさらと揺れている。

そんな草原に、たった一人。

橙色の風に優しく頬を吹かれて、髪を揺らされ、服がはためき。でもそれは。

——僕？

リリリリリリリリリリリリ。

目覚まし時計が鳴っている。そりゃあもう、独白するまでもなく確実に鳴っていた。

平素ならば、普遍的物語の定石的展開として、まあ手を伸ばしてその早朝の咆哮に終止符を打つべき所である。とはいえ、今の僕が普遍的物語の登場人物として名を連ねられるかと尋ねられた場合残念ながら答えは否だ。どうにもこうにも是が非でも、結局僕は世界から外れた存在なのだろう。そうとしか思えない。

思えないので、とりあえず寝起きの貴重なまどろみタイムをもう少し堪能するでしょう。エアコンも効いているし。というところで。

「起きなさい」

刺々しい、とまではいかないが、決して穏やかではない声が僕に降ってきた。

……似たような展開を近々、それも極々最近に経験したような。

『起きろ、私は腹が減った』

「あまりにデジャヴ！」

飛び起きた。

同時に、僕ではない何者かの白い腕が僕へと伸びて、ベッドの後ろの縁に置いてある目覚まし時計を黙らせる。

「ようやくお目覚めですか、お寝坊さん」

あーあーあー、ちよつと待て待てちよつと待て。

重い。この重さの正体は、確かめるまでもなく。

寝起きにこの状況はハードルが少々高すぎやしないか。僕は上半身だけ起こしつつ、右手を頭に押し付けた。

とりあえず、ベッドには寝ている。それは確かだ。

「……あー」

フーはいい。いや、よくはないのだが、この腕輪が外れない時点で僕はもうプライバシーなんてものをほとほと諦めたのだ。だからまずは。

「なんで君が僕の部屋にいるんだ……畑中」

しかも馬乗りで僕の脚の上に。彼女の肩にかかって胸辺りまで伸びる栗色の髪の毛が、目の前で揺れている。開け放たれた窓から差し込む朝の光に透けて、清潔感も割り増しといった感じた。一応桃色の母のパジャマを身につけてるようである。寝間着姿というのもまた乙なものだ。

って待て。これって。やばくない？

朝、それは朝。今は朝。それってひょっとしてひょっとするといやしくなくても、生理現象として我が愛息子がエレクトしているということではないだろうか。ないだろうかっていうか、そうなんだけど。

「そうなんだけど！」

「朝っぱらからテンション高いですね、八代君」

「君のせいだ。とにかく僕の上から退きなさい」

懸命に冷静を装い、退却命令を出してみる。顔も近いがそれよりも、女の子が四つん這いで朝っぱらから僕の上、隔てるものは薄いタオルケット一枚。この状況は確実によろしくない。

「八代君、お腹空いてませんか？」

「僕の話聞けよ！ ……つてあれ」

なんだ、ちょっとでかい声を出したただけなのにやけに頭がくらくらする。

「んー……お腹は空いてるか、も」

喉もからからだ。何故か声もかすれていた。

大体、今僕はなんで家のベッドで寝てるんだっけ。僕は唸り声を立てた。猫を捕まえるために星の街公園に行つて、それから。

「八代君は馬鹿みたいに魔弾を撃ったせいで精神が疲弊して倒れてしまいました」

『そうだ。貴様は本当に馬鹿だ』

何故か二人から思い切り責められた。実際その通りなのかもしれないが。

だけど、何か違和感がある。何かが変だ。

「ちよつと……待ってくれ。聞きたいことがいくつかある」

「その前に何か飲みましょう」

僕の言葉を遮ったのは、穏やかながらも力のある澄んだ畑中の声。

「僕の上から降りるんだ」

畑中は僕の言うことなど聞こえてすらいないようにスルーし。

「はい、あーん」

何の途惑いも脈絡もなく僕へと差し出されるミネラルウォーター。なんと新妻風ボイス（棒読み）のおまけつきだ。

「……………」

いや、おかしいよね。いろいろと。

なんで君から水を飲まされなきゃいけないんだ。ペットボトルくらい自分で飲める、僕をなめるな。じゃなくて、ベッドの上では飲食禁止だ。でもなくて……なんだっけ。

おかしいのはひしひしと分かるのだが、どういうわけか頭が全然回らない。

「あーん」

「自分で飲めるって！」

なんて突っ込みもよそに、僕は額に当てていた手で畑中の手からペットボトルをひったくるなり、それを迷いなく口へと持っていた。事実、僕の身体は水気を欲していたのだろう。よく冷えた透明な水が極楽の清流となって口へと流れ込み、乾いた喉に潤いをもたらしてくれる。喉を鳴らして、夢中で飲む。実においしい。

中身が半分ほどになったペットボトルを口から離し、ふうと息をつく。

「ただの水がこんなにおいしく飲めたのも久しぶりだな」

何故か、ちよっぴり飢餓に苦しむ子供たちの気持ちがあった気がした。

「そりゃあそうでしょう。一日半ぶりの水分ですから」

うん。

……………うん？

「八代君は本当にお寝坊さんですねー」

『全くだ』

えーと。

つまり。

「……僕、寝坊し過ぎだろ！」

え、目覚まし時計通りに起きたのにどういわけか寝坊呼ばわりされてしかもなんかお腹が猛烈に減っていて喉までからからに乾いているなあとと思ったらそれがまさか一日半以上寝ていたからだなどという究極的なまでにシャレにもならないオチだったなんて嘘だな？

「その通りです」

「なんてこった！」

とにかく僕から離れろ畑中。

「どうしてです？」

「この期に及んでどうしてです？ も何もあるかー！」

「絶世の美女がモーニングコールという大サービスを決行して差し上げているといえますのに」

「決行していただかなくても結構だ、降りろ」

そもそも絶世の美女って自分で言っちゃうのかよ。さらにこれはコールではない。

はあ。と一つ大仰に溜息をついて、畑中はゆっくり僕のベッドから床へと降りた。溜息をつきたいのはこっちである。まあ、ある意味ほっとはしたかもしれないが。

「八代君も朝〇〇するんですね」

「ほっとしないどころか君のキャラクターを見失っちゃうけどそれでもいいならその〇を埋めるがいいこのエロ娘！」

「朝バナナですよ、朝バナナ」

「拍数が合ってないよ！　しかしながら意図せずその表現も非常に際どい！」

だめだ、このところ主に畑中のせいで女子に抱いていたイメージがいろいろと崩れつつある。言いつつだんだんと顔が火照るのを感じたため、僕は適当に喚き散らしてようやく畑中を部屋から退出させた。部屋から出る直前、彼女の顔にふっと浮かんだあのとてつもなく嫌らしい笑みは、きっと見間違えだろう。

もう一度右手を額に当てて、思考。

してはみるものの、結論なんて初めから決まりきっている。まずは。

「……シャワーだ」

実のところ本日は日曜日であり、すべては畑中が仕組んだ意味も必要もないドッキリでしたというなんとも益体もなくだるい結論が僕を待っていたとしたならば、僕は躊躇なく畑中に罵声怒声を浴びせ倒しその上でほんと一息ついて実に二日ぶり以上になる温水の至高を満喫、もはや拭っても拭いきれないかもしれない彼女への不潔なイメージを是非とも払拭した上で安息の休日을貪っていたに違いない。

が、全ては現実であった。

「つたく、何の罰ゲームだよ！」

こうなってしまった以上、もはや邪念を振り払って禪定の気持ちで行動するしかないだろう。

しっとり湿った私服（当然ではあるが、パジャマに着替えさせてもらっていたとかいうそんなギャルゲーみたいなイベントは発生していなかった。ありがたい限りである）を脱ぎ棄て、五分でシャワーを済ませると、さらに二分で制服へとドレスアップ。

脱衣所の時計で現在時刻を確認、6時ジャスト。余裕はたっぷりある。

僕は猛ダッシュし、黒い煙の立ち上るリビングへと滑りこんだ。

「って思わず普通に描写しちゃったけどなんだその煙は！」

「八代君……けほ、こげました」

けほけほと咳きこみながら、煙パラダイスと化したキッチンから、制服姿の畑中が現れた。急いでそこに駆けつけ、事態を確認する。

「朝ご飯を作ろうと思ったんですが、失敗しました」

なるほど。心使い痛み入る。

「が……」

そこに広がっていたのはまさに惨状といえるものだった。薄れてきた煙を手で払いつつ、僕はそれに目を落とす。

「まさかこの世に目玉焼きを焦がす人間が存在するとはね」

僕がそれをかろうじて目玉焼きと認識できたことが、既に奇蹟的と言えた。フライパンの上でくすぶるそれは、どこからどう見ても消炭である。どうやら原因はフライパンの隣に置かれたワインボトルにありそうだった。

「軽くフラッペしようとしたただけなんです」

「……そりゃフランベだろう」

目玉焼きをかき氷にっってもう意味が分かんないよ。目玉焼きをフランベするのはもっと意味が分からないけど。

「頼むからこれ以上厄介事を増やすのはやめてくれないか……」

「申し訳ありません」

換気扇を起動し、ようやく元の情景を取り戻したキッチンで、し

ゆんとする畑中。その落ち込みようを見ると、何故だか急に僕が悪いことをしたような気分になってきたので。

「あの、そんなに気にしなくていいからさ」

片付けを続行しつつ、適当に言い繕う言葉をかけておいた。

あ、まずいな。まさかとは思ったが、この焦げくさい臭いでさえ僕の食欲中枢を刺激する。当然ながら丸一日以上食べ物をお口にしないのであるから、空腹も大概限界を迎えていた。

「とりあえず、作るか」

学校の授業開始は8時45分だ。今からなら多めに朝食を作っても大丈夫だろう。かかる畑中は助手にすらなり得なさそうなので軽くキッチンから追い出し、冷蔵庫を漁る。

「おお」

そして僕は思わず感嘆に声を上げていた。すごい、いつの間にか冷蔵庫が新鮮な食材であふれているではないか。

『感謝しろ、あのガギを買い物に向かわせたのは私だ』

ふいに腕輪から聞こえてきた声に、僕は素で感激してしまった。

どういう風の吹きまわしか、僕が馬鹿面で一日中寝ている間に、フーと畑中は幾分か友好関係と呼べるものを築いているようだった。理由などは後で聞けばいいとして、その点で懸案事項が一つ減ったことに関してはまあ素直に喜ぶべきことなのだろう。

「助かったよ。実は食材不足もかなりの懸念材料でさ」

野菜室には野菜がバッチリ入っているし、魚と肉まで完備されている。価格のほうは、まあちょいとお高めになってはいるが、十分許容範囲である。というか、これは畑中の自腹だったりするのだろうか？

『私がお前の財布から勝手に金を貸した』

「何やってるの!？」

『あれだな、ありっちゃありというやつだ』

「なしっちゃなしだよ!」

どちらにしろ買い物には行くつもりだったが、それにしてもそう

いう行為は倫理的に問題アリだと思うがな。

『ありっちゃありだな』

「問題がな」

やれやれ。とは言っても、今回ばかりは僕にだって責任があるだろうし、ここで腹を立てすぎるのもイマイチ格好がつかない。今は朝食を作って食べられるという事実にだけ目を向けて生きていよう。うん、やるかな。

「「いただきます」」

食前の挨拶は久しぶりに二人分だった。なにはともあれ、僕はようやく食べ物にありつけるわけである。調理中につまみ食いという名の悪魔の精神が僕を誘惑しただろうことは誰にでも容易に想像がつくことと思うのだが、辛くも僕はそれに負けじと鋼鉄の精神で欲を払いのけ、ここに今日日本食フルコースを作り上げたのだ。

焼き鮭、なめたけの味噌汁、ほうれん草のおひたし、里いもと人参と鶏肉の煮しめ、野沢菜の漬物にだしまき卵、そして山盛りの白ごはん。テーブルのいたるところで湯気が上がり、それに乗ったいい香りが朝のリビングに立ち込める。それぞれが実に美味そうにつやつやと輝きを放って、作った本人である僕でさえも美味しうだと太鼓判を押せる。

至福だ。

たとえそれが料理として完成していなかろうと、空腹時に至ればある程度のライン以上のものは無視できるものなのだ。無視できるというか、空腹は最高のスパイスだとはよく言ったもので、なんでもおいしく頂けるのである。

ずらりと並んだ食べ物に箸をつける前に、畑中は僕を見る。

「八代君、少々メニューが多くないでしょうか」

「ん、そうかな」

確かに、自分がお腹空いてるせいかな、若干作り過ぎた感は否めな

い。

「ま、いいさ。余ったのは今日の弁当のおかずにすればいいし」

僕は適度に出汁の染み込んだ人参を口に運びつつ、言う。うん、美味しい。今は卑屈になるべきシーンではないだろうし、原始的な味覚に対しては素直になっておこう。

しばらく黙々と箸を動かすことだけに集中していたからか、珍しくテレビのBGMもない朝のリビングが静まり返ってきたころ、

「……おいしいです」

ぽつと、畑中が言った。

「そう？」

もぐもぐと口の中の鮭を飲み込んで、それに返す。

「今僕の舌は正常じゃないだろうから、客観的には味をみれないけど、畑中がそう言うってくれるなら嬉しいかな」

畑中と行動を共にしてほんの一日も経っていない（実際は二日ほど経っているが）のに、僕が彼女に以前抱いていたイメージはがらりと変わった気がした。ただ、それは悪化ではなく、確実に改善と言える。改善、だなんて上から見たようなもの言いではあるけれど、事実僕は彼女に対してもっと引っ込み思案で暗い人間だ、という印象しか持っていなかったのである。

今の彼女は学校に居る時よりずっと活き活きしていて、年相応の女性として天真爛漫、太陽のようにキラキラ輝いて見えた。それでいて物静かなイメージはそのままに、素直でどこことなく人懐っこいその部分には僕の中でさらに磨きがかかったと言えよう。

心の底からいい娘なんだろうなあ、とその人間性には軽く関心してしまう。

そんな風に改めて畑中を観察しつつご飯を口に運んでいたら。

「ごちそうさまでした」

いつの間にか彼女は一つの食べ残しもなく、綺麗に完食していた。「おう、お粗末さまでした」

僕もワンテンポ遅れて、箸を置く。

やはり卵焼きは余ったか。頭に弁当の構想を描きつつ、僕は空いた食器を重ねて席を立つ。

「私も手伝います」

「お、サンキュー」

畑中もそれについてきたので、まあ丁度いい、今からしようとしていた話をいくつかしたって構わないだろう。カタカタと鳴る食器を持って、再びキッチンへと踏み入れる。

「なあ畑中」

「何でしようか」

「ジョーカーが僕を暗殺しにくるといった可能性はほとんど地に落ちたわけだけど、この場合君はいつまで僕の家にいるんだ？」

非常に率直な疑問だ。僕はスポンジで鮭の乗っていた皿を洗いつつ、隣で泡の付いた食器を洗い流してくれている畑中に話を振った。

「それは今日龍に聞こうと思います。一応至上命令ですので、私の判断で勝手にこの家から退去することはできません」

「ふうん……」

至上命令、ねえ。

やはり彼女が学校で影が薄いのも、『封じ屋』関連の仕事の影響が大きくなるのだろうか。そうじゃないにしろ、高校生にして秘密結社の一員なのである。余生の思想に多大な影響を及ぼすこの年代の少女にとって、この国に居て本来あるべき自由を束縛されるようなことは少々酷は話ではなからうか。

まあ、僕なんか口をだすようなことではないのかもしれないけれど。

「例の毛玉はどうしたんだ？」

コップも綺麗に洗って、畑中へと手渡す。流れ作業だ。

「私の鞆の中です」

「あれ……」

水道を止める音で手を休め、思い返す。

「君って手ぶらじゃなかったっけ？」

「八代君が寝てる間に買い物に行つて」

畑中はぱっぱと手を振って水気を飛ばしてから、タオルで手を拭いた。

「その帰りに家に寄って制服と鞆は取ってきました」

「家？」

家って、君は美術準備室の向こうの部屋で暮らしてるんじゃないか
つたのか？

「ええ、暮らしてるのはあそこです」

二人でリビングに戻りつつ、畑中は続ける。

「ただ、一応どんな形であれ家がないと面倒ですからね。ぼろいアパートを借りて、私はそこに住んでることになっています。予備とでもいいですか、一揃え生活に必要なものだけはそこに置いてあるんです」

そういうことか。なるほどね、大体のところ納得したよ。

「それで、次が僕の一番関心を寄せる質問なんだが」

ピンポーン。

あれ、ピンポン？ 誰だろう、ちょっと待ってて、と畑中に断わ
つてから、僕は玄関に向かう。ピンポンピンポンと、何回も連続で
ならされるインターホン。

なんだか、とてつもなく嫌な予感が……。

と考えた刹那、僕は自分のミスに気づき、雷に打たれた。
ぐあ。

しまった。すっかり忘れてた。

18. ツーテール

僕は足音を立てないようできるだけ摺り足で玄関に近づき、恐るドアに耳をくつつける。ペタリ、と。

「しーいーちゃん！ きったよーっ！」

分厚いドア一枚を通して若干の曇りはあるものの、それでも明るく陽気に響く少女の声が僕の耳朵を打った。

……うわあ、マジかよ。

「おーい、そこに居るのは解ってるんだゾ！ 無駄な抵抗はやめて出でてきなさいっ！」

厚くはない板一枚を隔ててすぐそこに、ヘラヘラ笑いながら僕の登場を心待ちにする少女の童顔がいつも容易く脳裏に浮かんだ。

こうなっては、押し売りに対する天下の必殺技『居留守』を使うという手もある。そうだ、それがいい。というかもうそれしかないな。と、腹をくくって僕がドアから耳を離そうとした刹那。

「椎奈ー、出てこないとぶん投げるぞー」

打って変って野太い声が僕の名を呼んだ。関田まで居るのか。いや、居て当たり前だけど。それより、開口一番シャレにならない脅しかけだったような。

「そうだゾ、あたしもぶん殴るのだっ！」

少女よ、あなたも武力行使に出るおつもりなのですか。そうなると本格的に僕の命がやばいことになるのだがね。

『友を待たせるのは関心しないな』

と、高音域のフーの声が、腕輪の中からではなく僕の耳の横で響く。いつの間にかフーは、青髪を伸ばした人型にその姿を現していたのである。そしてそうあるのが当たり前とでもいった風に、僕の左肩に腰掛けていた。

「んなこと言われてもね。あいつら絶対僕の家に上がり込んで弁当のおかずつまみ食いするのが目的だからな、今中に入られたらまず

いし……って！」

ひそひそ声の甲斐もなく、最悪の事態が発生した。
ガチャリ。

痛快に鳴るそれは、フーの小さな子供みたいな手がドアの鍵を開けた音だった。やってしまった。こいつ、マジで何にも考えてない
としか思えない。

『いや、いろいろ考えてはいる。慌てる貴様のパニックフェイスを
見てみたい、とかな』

「最悪な奴だ、お前は！」

いっそもう一度鍵をかけ直してやろうかとも思ったが、ドアを目
前にして待機している連中である、一度鍵が開いたことくらいは視
覚的にも聴覚的にも認知可能だろう。となれば、もう一度閉めたと
ころで奴らが僕の家玄関前から退去するとも思えない。この板一
枚隔てて今そこに居るのはそういう奴らだし。

「お、ひろ君ひろ君っ！ 開いたっばいよ？」

案の定である。

「ぼいが……出てこねえじゃねーか」

「君は完全に包囲されているぞー、観念して出てきたまえーっ」
どうしてこう朝からテンションが高いんだろうねこの娘は。方向
性は畑中とまるで正反対だが、ドア越しに声を聞いているだけで疲
労感が蓄積していく点のみにおいては、二人の少女は似ていると言
えなくもない。などと考えて油断していたのがいけなかったのか。

ゴチン。と、鈍い音が頭蓋中に響いた。

「あいてっ！」

お星様が数個目の前でくるくると回り、開いたドアと人影の隙
間から差し込む朝日が目に眩しい。僕はくらくらしながら千鳥足で
数歩後ずさり、こここのところ異常なまでに打撃事故の多い額を反射
的に押さえた。じいん、と鈍い熱さが込み上げる。

「おー、悪い悪い。椎奈、開けるぞー」

「開けてから言うな！」

「なんだよ、朝からカリカリすんな。幸せが逃げるぞ」

誰のせいだと思ってるんだ。

「ドアをさっさと開けないお前のせいだな」

いや、でも不可抗力というか、僕にだって言いたいことはある。

「……ごもつともでした」

まあ、言わないけどね。

『まったく、ごもつともだな』

どうやら二人に、僕の左肩に乗るフーは見えていないらしかった。そして声も聞こえていないのだろう。反応がまるでない。最も、イライラするのは僕だけで十分だが。

よかった。

まあ、とりあえず今はどうでもいい自己責任云々よりもまず、関田らをなだめすかして先に学校に行っていたくのが先決だろう。僕は涙のうっすらにじむ目で視界前方をしつかりと直視する。

日の光を遮るようにして僕の家玄関先に立つのは、制服を着た大柄な男と、同じく制服を着た小柄な少女。その身長差には目を見張るものがある。それもそのはずどっちもどっち、関田は身長一九〇オーバーの巨漢だし、その隣で輝きを放たんばかりに微笑む少女は身長一五〇アンダーなのだから。

関田は相変わらずのスポーツ刈り。ところで髪の毛というものは、人にとって『威嚇』の意味合いを持つこともあるらしい。俗に言う不良さんたちの髪型を見れば、その通りだと言えないこともないのではなからうか。

では短く刈りそろえられた髪の毛は、威嚇などする必要もないという彼の腕っ節についての自信の表れなのだろうか。全くもって興味はないが。

一方で関田の隣の少女も、関田の馬鹿でかい図体に負けず劣らず強烈な存在感を放っている。その主因としてはまず、長く伸ばされた髪の毛を二本に束ねた髪型、ツーテールが挙げられた。赤みがかった髪の毛は一本一本が繊細で滑らかな質感で、よく手入れが行き

届いていることが一目ですぐに分かるだろう。これまたどうでもいい話だが、巷でよく言われる「ツインテール」は、正しくは「ツテール」と言う。

而してそのツテールであるが、小柄な体躯も相まってか、腰のあたりまで伸ばされた髪の毛は少女のプレザンスを際立たせるのに十分一役買っていた。これはさすがに威嚇ではないだろうが（いや、ある意味威嚇なのかもしれないけど）それにしても圧巻の髪の毛の量だ。見る度ごとにその長さが伸びている気がするのだから、恐ろしい。呪われた日本人形を彷彿とさせた。

「なによ、その気持ち悪いイメージ！ 怒るよっ！」

僕のモノローグに勝手に突っ込みを入れるのはやめていただきた
く候。

「顔に書いてあるから読めるんだもんっ！」

ぐ。なんだ、僕の心ってやっぱり読みやすいのか？

「違うもん、さががすごいだけなんだもん」

「……さいですか」

とまあ、このお調子気取りな性格もまた、彼女の存在感バツチリの理由の一つであろう。今更ながらこのチンチクリンは僕のクラスメイト、美咲^{みさき} 沙耶花^{さやか}だ。女子の癖に僕や関田とよくつるんでいる、少し変わった女の子。

目のぼつちりした顔立ちは、総評中の上（自称）である。ちなみにそれは謙遜のしすぎだ、というのが専ら僕と関田の通説だ。多くの時を共有するからこそ、彼女の顔立ちを否応にも他の女子と比べてしまう。

ふむ。ここ数日顔を合わせていなかったが、やはり彼女は可愛いという分類に間違いない。僕がこんなことを言うのもどうかと言う話だが、畑中といい勝負だ。

「で、お前。制服着てるってことはもう行ける準備万端ってことか？」

僕と美咲のかけ合いを黙って眺めていた関田は、太い声で僕に言

う。

「あ、いや。実はまだやることがあってね。だから先に行ってくれな」

「そうか、じゃあ中で待たせて貰う」

「僕の話を聞けよ」

「しいちゃんのお弁当もーらいっ!」

「あ、おい!」

などと声をかける間もなく、学生鞆をリュックのように背負って僕の脇を駆け抜ける小柄な影。その長い髪をつかもうとするも、滑らかな感触は掌をすりと抜ける。どこでそんなスキルを身につけたのか一秒足らずで靴を玄関に脱ぎ棄てると、美咲は制服の青いスカートを翻して僕の家の廊下をどたどた駆け抜けていった。

なんともお行儀が悪い。

「美咲! 待て、リビングには入」

「あああああああああああああああ!」

阿鼻叫喚なまでのその叫び声で、僕は悟った。

事態はもはや手遅れだ、ということ。

「……はあ……」

「溜息か。また幸せが逃げるぞ?」

「いいんだよ、既に幸せなんてものからほとほと愛想を尽かされてるんだ、僕は」

それよりどうするんだろうな、この状況。朝からこんなことになるとは。今日はこいつらが僕を家まで迎えに来る予定になっていた、ということは土曜日の時点では覚えていたはずなのに、一日睡眠のせいですっかり記憶が欠落していた。

そういえば土曜日目覚めた時は一三時間睡眠だかを悲観していた気がするが、今朝の寝起きを考えればそんなものは目でもなかったわけだ。僕の寝起きは概念ごと一新されたと言っても過言ではない。とにかく。僕は右手を額に当てた。

「やれやれだ」

「ん」

と、関田は僕の右手を見て、何かに気付いた声を上げる。

「お前、その青い腕輪まだつけてんのか。こいつは相当なお気に入りと見たぜ」

「お気に入る？ ……馬鹿言うなよ」

この腕輪はちょっとした事故みたいなもんだ。

「外し方が分からないんだよ」

「はあん……なるほどな」

何を勝手に納得したのか知らないが、まあこいつは放っておいたところで大した問題もない。適当にášらっておくのが吉である。

それよりも、先ほどの叫び声から忽然と消え失せているリビングの物音のほうの問題だ。びっくり仰天の美咲は騒ぎ立てることとばかり思っていたし、そうしてくれたほうが対処は楽だったろうからこれは想定外である。関田だけならばまだマシだったものを。知られたのがまずあの美咲だからな。厄介だ。

「んうー……」

観念するか。

「で、椎奈。さっきの美咲のすくりーむは何だ」

「お前がセリフで英語使うと不自然だからやめとけ」
平仮名になっちゃってるじゃないか。

「む、そうだな、身の程をわきまえる。で、さっきの美咲の鬼火は何だ」

「スクリームの意味は鬼火じゃないよ、叫びだ！ 全然違う！」

お前の頭の中の一体どこで意味が入れ替わっちゃったんだ？ スクリームって口にした時点では意味わかってたんじゃないのかよ。

「ん、そうだったっけかな。まあ、俺日本人だし」

それ以前の問題だろ、どう考えても。

「で、あの叫びはなんだったんだ？」

「……これから追々説明するよ」

したくなくてもしなきゃならないだろうしな。

「美咲ー、どうしたー」

なんとも白々しい呼びかけを慣行しつつも、僕はリビングへと足を向ける。後ろから関田がのそのそとついてきた。今更関田を止めたところで意味は微塵もなからうから、僕はそれを容認して歩を進める。

そして荒々しく扉の開け放たれたリビングの全貌が、僕の視界に入ろうかと言う時に。

「……ふえええええ……」

「……………」

あれえ？

鳴き声、いや泣き声。女性の。女性と言うより少女の。

あれ、泣いてる。泣いているのは美咲。俯いた美咲の後ろ姿。対するは畑中、彼女の表情もまた驚きに強張っている。その手には通学カバンが持たれていた。その中からきいきいと獣の声が漏れている。あの猫耳毛玉だろう。だろうけどそんなことはどうでもいい。これは一体。

「うう……ふうう、し、しい、ちゃん……ふ、不潔だよ……」

「どういうことでございましょうか！」

なんとなく意味はわかるけど分かりたくない。

「げっ、畑中じゃねえか！」

そしてその後ろから飛ぶ関田の声。

カオス。

平成のリビングはまさに混沌そのものである。

「……畑中、美咲に何か言ったりしてないだろうな」

「し、してません！ 断じて！」

あの畑中が動揺しているぞ。これはこれでレアな光景だな。とか、そんな悠長な感想を持てる場ではないので、とりあえず僕は美咲をの肩をちょんちょんとついて、こちらを振り向かせた。

「美咲、落ち着け。とりあえず落ち着いて僕の話の話を聞くんだ」

そしてその両肩に手を置く。

「う……?」

「ほーら、大丈夫だから。決して僕は不潔じゃな」

「ふわああああん！」

泣きに泣く美咲。何がそんなに彼女を悲しませるのか皆目見当もつかないが、僕の説得は彼女の耳に届くことすらなさそうだ。

こうなると泣きたいのは僕のほうである。

「……なるほど。いや、なるほどじゃあねーが、椎奈。わかった、とりあえずわかった」

「何がだ」

変にひきつったまま固まってしまった笑顔をそのままに、短く関田と会話をこなす。

「今この状況がとんでもなく面倒臭いものだということが、だ」

おお、さすがは関田だ。物わかりがいい。そして僕の頬っぺたは今にも攣りそうだ。

「あー、なんだ。とりあえず落ち着け、美咲」

関田は言葉を口にしつつも、僕の脇を抜けて美咲の頭にそのでかい手をぽんと置く。

「ひ……」

すると、美咲の大泣きがピタリと止まった。かのように思われた。が。

「ひ?」

関田が聞き返した瞬間である。

「ひろくんの………バカあああああああああああああああああああああ

今世紀最大級の爆弾が爆発した。そんな錯覚を生む程に生々しいすくりーむがその場にいた美咲以外の三人の耳をつんざいた。

あたふたする僕と関田。それをうろたえつつ遠巻きに眺める畑中。そんなことはよそに泣き叫ぶ美咲。

この際もうフーでも誰でもいい、助けて下さい。

『青春だな』

前言撤回、フーはどこかに行ってください。

「さて、落ち着けて!」

「そうだ、落ち着きなよ、美咲!」

「知らない知らない知らない!」

そして彼女はもう一つおまけに「ひろくんの大バカやろーっ!」

という台詞を関田に投げつけるなり、

「どたばたと何にかから逃げるようにして、リビングから出て行ってしまった」

「何言ってるんだ、お前!」

しまった、あまりの驚きにモノローグが口から駄々漏れしてしまったようだ。

「で、追いかけていいのか、関田」

「馬鹿か、この場合追いかけるのはお前の役回りなんだよ」

僕の役回り?　なんで。

「なんでもだ」

そうかい。ま、どうせ追いかけるつもりではいたけどさ。

「ああ、その間に俺は畑中から事情を聞いておくから。あー、何か訳アリなんだろう?」

「ああ、まあ、うん」

ここで、返答が滞る。やばい。

何がやばいって、その提案には非常に問題があるからである。

「やっぱり追いかけるならみんなと一緒にしないか、早くしないと学校にも遅れちゃうし」

「お前が、一人で、追いかける」

しかし関田はきっぱりと言い切る。何故だ。そりゃあすぐに追いかけた方がいいのかもしれない。でも僕一人でってことはないだろう。僕はチラリと、机の前で鞆を胸に抱えて石になっている畑中を一瞥した。

「あー……」

その彼女に向って、僕は口を開きかけたが、その初めの一単語を

述べる間もないままに畑中は頭がちぎれそうな勢いで首をぶんと横に振った。栗色の髪の毛が左右に振られて乱れる。

ですよね。それならばなおいっそう、僕だってそうだ。

問題とはつまり、僕と畑中がそれぞれバラバラに言い訳を立てて関田と美咲に説明をした場合、それぞれの言い訳が食い違って後々問題が発生するだろう、ということだ。そして僕は、相手の言い訳をうまく予想してそれに合わせて言い訳を作るなんていう人間離れた技術は持っていないわけである。それはアーティストにしても同じらしかった。

大体にして往々、僕がこれをもともと畑中と話し合っていないかったのは馬鹿だったとしか言いようがないが、それにしてもつまりは僕が一日寝坊したからであるし、不可抗力には違いない。

どうしたものだろうか。

「ほら、早くしろ。弁当は適当に俺が詰めておいてやるから」

「あー……」

考えろ。ここで頭を使わなくてどうする。

「じゃあ僕は畑中と一緒に美咲を追いかける。それならどうだ？」

「どうだ、じゃねえよ。お前が一人で追いかけないと意味がない」

「なんでだよ」

「なんでででもだ」

会話は綺麗に平行線上をたどる。しかしこんなことで時間を食うのも馬鹿らしい、僕は攻撃に打って出た。

「いや、その方が説明しやすいと思うんだ。彼女がそれをどうして悲観してるのかは知らないけど、美咲の勘違いがどんなものかは僕にだってさすがに想像がつく。それを取っ払うのに、僕一人は何を言っても言い訳がましく聞こえるだけだろうな」

僕一人で美咲を説き伏せる自信がないわけではないが、やはりこういう誤解を解く場合畑中からも言ってもらうに越したことはない。それは事実であり、真実である。

「む、それもそうだが」

落ちかける関田。押しが甘そうだが、ここはもうごり押しだ。

「だろ？ だからお前は僕の弁当を詰めて持ってきてくれ。ついでに戸締りも頼んだ。鍵は玄関入ってすぐの靴箱の上の引き出しの中だ。ああ、このことはお前には学校で説明をするから」

「は？ いや、ちよつと待ちやがれ」

「じゃ、行くぞ、畑中」

僕は一方的に会話を切り上げると、さっさと椅子の上に乗せてあった鞆を手取る。そしてずかずかと畑中に歩み寄って空いている手で少々強引に柔らかい手を取ると、啞然とする関田を一人残していそいそとリビングを後にした。

「ちよ、ちよつと八代君！」

急ぎ足で畑中を引っ張って、僕らは玄関で靴を履いて外に出る。

「八代君ってば！」

家を出てからさらに数分歩いたところで、僕はようやく夏の太陽に照らされて汗ばんできた手を解いた。この数日で夏は一段と本調子になってきたらしい。蟬の大合唱がからりと晴れた夏空を満たしている。

そして僕はほっと息をついた。

が、その束の間の安息に畑中の声が突き刺さる。一難去ってまた一難。

「……いきなり女性の手を取るなんて、無礼にも程がありますよ」

「え？」

振り返ってみれば、畑中は白く細い右手を胸の前でぎゅっと握りしめて、俯きがちにこちらを見ていた。

「あ、ごめん」

関田に引きとめられる訳にはいかなかったからな。夢中でそんなこと気にも留めてなかったよ。

「無礼にも程があると言っているのです」

その頬が紅潮しているのはこの夏のうだるような暑さ故だろうか。僕も僕だ。無意識のうちに畑中の手を握っていたわけで。それは

彼女にとっては失礼にあたっただろうが、僕にとってそれは羞恥でしかない。握った瞬間はさして意識していなかった少し冷たくて柔らかな感触が、ふいに思い出される。

「ぐ」

なんだか急に恥ずかしくなってきたぞ。

「ご、ごめん」

言って、畑中の顔から目をそらす。

お互い無言。

二人を隔てて瞬く間に舞い降りた微妙な空気が、夏の暑さに溶け、静寂を許さない蝉の声に流されていく。

「……」

馬鹿か僕は。何をやってるんだ。こんな光景を美咲に見られでもすれば、それこそ誤解を解くのは至難の業になってしまう。

「……うん、行こう。早くしないと追いかける意味もなくなっちゃうよ」

「追いかける、って心当たりでも？」

僕に駆け寄ってきてなんとも普通に振る舞う畑中に、僕も平静を装って返す。

「ない」

そして二人並んで、熱されたアスファルトを歩きだした。

「そんなに堂々となない宣言されましても。どうするんですか」

「さあね、普通に学校まで行けばいるんじゃないかな」

「いるんじゃないかな、って」

「いなきや教室にいるだろ」

「そういう意味じゃないですよ」
「じゃ、どういう意味だ？」

「いえ、それは、その」

それは、その？

「……なんでもありません」

「？」

よく分からない奴だな。きっぱり言ってくれて構わないけど。

「八代君がそう言うならそれでいいんだと思います。私よりもあなたのほうが美咲さんとは付き合いが長いのでしょうし」

そうかな？ まあそう言うのなら突っ込んで聞きはしないけどね。今日はやけにはつきりしない畑中である。なんて言いつつ、やはり彼女は会話の節々に不明瞭さが見えた。理由もまた不明だ。とりもなおさず僕たちは、久々に魔術だなんのといった不思議要素がひと欠片も含まれない日常会話をしかしきこちなくかわしつつ、朝の通学路を歩いて。

結局。

美咲の小柄な体軀を発見したのは、2年2組の教室だった。

19. けーたいは誰のもの？

時刻は八時ジャスト。まだ人のいない教室に佇むようにして、美咲は立っていた。窓から吹き込む朝方の涼風と、それに乗って飛び込んでくる蝉の声に肌をもまれながら、美咲の意識は彼女の手が握る何かに向けられている。

先ほどまでの泣きっ面はそこにはなく、彼女はかなり集中して手の何かを一生懸命いじっていた。教室の入り口に立つ僕に気づかないところを見る限り、相当だ。鞆も両肩にかけっぱなしだし。

「美咲？」

畑中には教室の外で一時待機しておいてもらって、とりあえず声をかけてみた。

「ふえっ！」

すると美咲は不必要なまでに驚いて、冷えた手を背中に入れられでもしたかのように大きくビクンと身体を震わせる。そして、ギギギ、と注油の必要性を感じさせる動作で首をこちらに回し、僕を発見してもう一つ驚きに声を上げた。

「ほわわわわっ！ 椎ちゃん！」

大仰な身ぶるいに合わせて、細長いツートールがぶらぶらと揺れる。

「どうかしたの？」

「え、え、え？ どど、どうもしてないよっ！ 今日も太陽は西から昇るのだ！」

そう簡単に地球の自転が逆回転になっては堪らない。どうやら、何かがあったようである。そしてその原因はおそらく、その手に握られた機械にあるのだろう。

「それ、君の携帯電話じゃないよな」

シックなシルバーのボディ、何の装飾もないシンプルなデザイン。今時の女子高生が好んで持つ物にしては、あまりに似つかわしくな

い。無論、美咲の趣味でもないはずだ。彼女の派手な携帯電話なら何度か目にしたことがあるし。

「うえっ！」

僕の指摘で、美咲はあからさまに動転した。汗がだらだらと頬を伝っているのは夏だから、という事由だけではないだろう。

「ち、ちちち違うもん、この汗は暑いからだもんっ！」

これほど典型的なまでのやり取りも、美咲だからこそ許されるのかもしれないな。と、「かわいいは正義」理論で目の前の少女を美化しつつも、僕は美しく整頓された机の合間を縫って彼女に近寄る。「で、それは何なんだ？」

「えーと、えーとね」

目線を右上にそらして、口をもごもごさせる美咲。何だ？ たかが携帯電話だぞ。何をそこまで動揺することがあろうか。まあ、何だって構わないけど。それよりもまず、関心を寄せられるのは美咲がしているだろう勘違いについてだ。早いところその誤解を解いてしまわねば、朝連を終えた生徒たちが教室にやってくる。それはそれで好ましい状況とは言い難い。

と僕が若干の焦りを募らせる一方で、パツチリお目目を四方八方に動かしつつもじもじする美咲は、一瞬その目線を僕に止めたかと思うと、思いがけない行動にでた。

「はいっ！」

ペコリ、と彼女がお辞儀をするような形で差し出されたのは、いぶし銀の携帯電話。

「……はい？」

律儀にも両手を使っている。賞状か何かの受け渡しでもしているつもりだろうか。そんなに大層なものでもあるまいに。それにその格好は、僕にその携帯電話を贈呈する、という風にも解釈可能である。あるいは、新卒の健康体操とか。

「健康体操じゃないよっ！」

美咲が顔を上げて叫ぶ。まあ、だろうね。

「僕にそれを取れと？」

「うん」

「……まあ、いいけどさ」

僕は訳が分からないまま、美咲の手から軽い携帯電話を受け取った。

「で？」

「それ、椎ちゃんの」

「言っている意味が分からない」

「それ、椎ちゃんの！」

語尾を強調して、美咲は同じセリフを繰り返す。だから意味が分からないのだが。

「だって、だってだって！」

両手を体側でぶんぶんと振りまわし、だってを連呼する美咲。どうでもいいが、いい加減後ろに背負った鞆を下ろしてほしいものである。見ている者にとってはいささかの不安定感がある。

「それ、椎ちゃんのなんだもん」

「だから、意味がわか」

「電話かかってきたんだもんっ！」

ああ？　僕は手に持った携帯電話に目を遣る。びっくりするほど薄いそれは、ちょっと強く握っただけでぼきりと折れてしまいそうだ。残念ながら僕は携帯電話なんて代物に生涯縁も所縁もなかった男であるからして、当然この機械の使い方も分からない。まあおそらく、携帯電話というくらいなのだから電話をかけることができるのだろう。

「それで、電話がどうしたって？」

「なんかね、なんかね。さやが教室に入ったら、さやの机の下にそれが落ちてたの」

畑中を呼びいれるタイミングを完全に失ってしまったなあと考え、携帯電話を手の中で転がしながら、僕は美咲の話に耳を傾ける。

「誰のかなあ、って思いながらそれを手に取ったの。落ちたままだ

と邪魔で座れなかったもん」

ぴよこぴよこと、身体のサイズに見合った小さな手を動かす挙動がいちいち可愛い。畑中がリスならば、こいつはさしずめウサギだろう。ツーテールは垂れた耳、とか。なかなかの的を射た比喻かもしれない。

「そしたらね、急にそのケータイ鳴りだしちゃったのっ
ほう。」

「周りに誰もいなかったから、あたしそれに出ちゃったんだ。もし誰かの落し物だったら、その人が自分のケータイ探すためにかけてきたのかも、って思って」

「それで、相手は誰だったんだ？」

そして一体、どういう経緯でこれが僕の携帯電話だなんていう素っ頓狂な結論に至ったというのだろうか。

「んとね、知らない声だったんだけど、すぐく声の綺麗な男の人だった」

「声の綺麗な、男？」

僕の脳裏をちらりとよぎる一つの単語。ぴたりと、背中に付き纏うような不吉すぎる黒い予感。

いや、まさかな。

「そいつがこの携帯電話は僕のだ、てなことを口にしたのか？」

「さっすが椎ちゃん、物わかりがいいねっ！」

美咲は両目を不等号みたいに瞑って、親指を立てた拳を勢いよく僕に突き出す。閑散とした教室に彼女の声が響き渡った。一瞬、会話の途切れ。

「……物わかりがいいねっ！　じゃないだろうが」

君はそんな見知らぬ男の言葉をほいほいと信じたっていうのかよ。
「う。だって、そう言われれば、そうなんだー、としか言いようがないじゃんっ！」

「だからって馬鹿正直にそれを僕に突き出すことはないだろ。せいぜい、これは八代椎奈の持ち物ですか？　と僕に是非を問うくらい

が妥当な判断だ」

「違うのっ！ それを椎ちゃんに渡してほしい、って言われたのっ！
だからそれは椎ちゃんので合ってるのっ！」

ああ？

なんだそりゃ。

「……なんなんだよもう面倒臭い」

幾許のいらつきからか、本心が口をついて出てしまう。

「僕が携帯電話を持たない主義なの、知ってるだろう」
右手で前髪をいじりながらぼやく。

「う。そうだけどお」

美咲は見上げる僕から目をそらして、ぼそぼそと呟いた。僕だつてそれを聞いた今、青息吐息の真っ最中ではある。

僕に渡してほしい？ 何を馬鹿な。誰の悪戯だ。

今から学校をでて警察に持っていつてもいいが、それだと一時限目に間に合うかどうか怪しくなってしまう。まあ、いいや、今日一日くらい。電源を切っておけばさして問題もないはずだ。僕は小さく息を吐きつつ、ズボンのポケットにシルバーの『けーたい』とやらを滑り込ませた。

「それはいいとして、もう少し敷衍した説明を要求させてもらおう」

「ふ、ふえ？」

「ふえん、だ。詳しく説明してもらおうか、という意味だよ」

「なんでよ、今でケータイに関するお話は全部だもん！」

「今の話のどこに君が動揺する要素があったんだ」

いや全くない。美咲があそこまで狼狽していたことには何か理由があるはずで、それは今の話の中には見受けられなかった。ということで、彼女はまだ何かを隠している可能性がある。

「かかか、隠してることなんて、なな、ないもんっ！」

隠し事判定。

◎。

隠し事アリ。

「言いなさい」

「な、ないもん！」

「……………」

じい、と顔を近づけて彼女の漆黒の瞳を見つめる。が、その目線をうまく捕捉できない。その大きな黒目は、ものすごい速度で泳ぎまくっていた。

「なな、ないったらっ！」

美咲はなお頑なに、否みの言葉を繰り返す。そこまで言いたくないのなら無理やり言わせるのも問題かもしれない。と、果てに僕はそう考え始めていた。今までの経験からしたって、下手に言い寄ったところで口を割るような人間でもないのだ、この娘は。隠し事があることはすぐにばらす癖に、その先が堅い。

「……、まあいいか」

僕は林檎の色で常に頬に朱の差している彼女の顔から、ゆっくりと頭を離す。今日も一日は長いのであるからして、無駄な労力は省いておくべきだろう。

「それでだな、本題は別にけーたいのことじゃない」

「う。だよね」

だよね？ 彼女の返答にどこかしらの違和感を覚えつつ、話を続ける。

「僕の家畑中がいただろう」

「うん」

「……？」

美咲は、そこで停止した僕を見て、ぱちくりと瞬きした。

「うん？ どしたの？」

「いや」

なんだ、先ほどとは打って変わって冷静だな。時間をおいて落ち着いたのだろうか。少し返事が素直すぎる気がしなくもないが。

「それで君、何か勘違いしてるよな？」

「あー、うん」

今度は生返事である。この心境の変化は一体なんなのだろう？

わからない。つくづく女子という生き物の思考回路は理解に苦しむ。

「とりあえず、僕と畑中はそういう関係じゃないから」

「うん、わかった」

「……………」

わかった？

今ので何がわかったんだよ。

おかしい。いつもの美咲なら、ここで最低でも「じゃあなんで穂波ちゃんが椎ちゃんの家にいるのっ！」とくるはずである。のだが。穏やかに僕を見上げる少女に、その気配はない。これはどう考えても異常だ。

「おい、美咲」

「ふえ？」

そしてあくまでもきよとした様子を装うつもりらしい彼女に向かって、僕が最も可能性としてあり得そうなことを言霊にしてぶつけようか、という。

その時。

ポケットの中の携帯電話が、僕の言葉を遮るかのように突然振動し始めた。

「……！」

「あ、それ電話かかってるよっ」

「そうなのか？」

言われて、一定周期でぶるぶる震える銀色の携帯電話をズボンから取り出し、拙い手つきで開く。いかに僕といえど、さすがにこれくらいの操作方法は心得ていた。

たくさんボタンがあるな。たぶん、この真ん中の一番大きなボタンを押せば通話が可能なはずだ。そして人差し指でそれを押そうとして、僕はふと電氣的な光を放つ液晶画面に目をやる。

そして、見つけた。いや、それは的確とは言えないだろう。

見つけてしまった。

僕は気づいていた。そこにそれがあることに。勿論、気づきたいとは思わなかった。気づいた、という事実にするのが嫌だったから。いずれそうなるのなら、いつその行動を完了したとて結果に変化は生じないのだが。どちらにしろ僕がそれを視界に入れた時点で戦慄することくらいは予想がついていた。

だから。

不吉な揺らめきと対照的に騒がしいまでの電子的点滅、それが一体どれほど僕に不愉快と敵意に満ち満ちた顔を作らせるのか、僕自身にはわからない。だが、そこまで計算されたようなそれを見つけて僕は、まるで自分の立っている教室の床板がグラグラ揺れて溶けて去っていくような、強烈な不安定感を覚えたのだ。

携帯電話の液晶画面に浮かんで点滅する、今や僕にとって苦渋と業腹の象徴ともいえる、五文字を見つけて。

「どうせ」

どうせそんなことだろうとは思っていた。

躍るようにして僕を嘲笑っているその五文字とは。

j・o・k・e・r。

吐き気がする。最悪だ。

「しいちゃん？」

そこでふいに美咲の心配に満ちた視線を見つけて、僕は思わずほんの少し顔を柔らかくする。眉間によった皺が伸びたのを感じた。

「……ああ、悪いけど少し席を外させてもらう」

「うん、わかったっ」

無駄に元氣よく返事をする美咲を早々に後ろにして、僕は震える携帯電話を手に教室を出た。

「あ、八代君」

ドアのすぐ横、隣の教室の前に畑中が立っていて声をかけてくる。

「悪い、君が適当に美咲と話をしておいてくれ」

「え？」

その前を早足で通り過ぎ、すれ違いざまに一方的な頼みごとをし

た。

「あの、ちょっと、どこに！」

「屋上だよ。いや、やはりついてきたいならばついてきてくれない構わない」

そう言っただけは、廊下で抜き去った畑中へと身体を回す。そして、歩み寄ってきた彼女に向かって右手の携帯電話を突き出した。

「携帯……？」

「よく見るんだ」

そう言っただけ、もう一段ぐいとそれを畑中の顔に近づける。そして。
「……？ ……っ！」

それを見つけた畑中の眼が一度は驚きに見開かれ、かと思えば数瞬にしてその眼に鋭く瞼がかかった。

緊迫した空気をぶち壊すかのようにどことなく滑稽なリズムで震え続ける携帯電話は、僕たちをからかっているかのようだ。

「本物ですか？」

「さあね。他にこんな粋な悪戯を思いつく奴がいるのならそいつが犯人なんだろうぜ」

「……そうですか」

僕はそれだけ言って、さっさと畑中に背を向けた。そして屋上へ向かう階段へと早足で歩きだす。畑中はそれ以上何も口にせず、黙って僕の後をついてきているようだった。

何らかの形でコンタクトをとってくるとは思っていたが、大胆なやり方だ。とはいえ、妥当だという見方も可能ではある。奴の狙いがそういうことなのならば。

だが何よりもまず、美咲を巻き込みかねないそのやり方には腸が煮えくりかえる。下手をすれば、彼女だってこちら側に指先一寸くらは突っ込んでいてもおかしくないだろう。

彼女は関係ないんだ。

僕だって巻き込まれた形なのに、これ以上他人を巻き込んで堪えるものか。僕を当事者に仕立て上げた奴が一体どんな存在なのか見当

もついていない今だって、僕はそいつを少なからず恨んでいる。そんなことが美咲にあっていいはずがない。

……これはジョーカーの挑発だろう。

今のタイミングでの電話。それ以前に教室に携帯電話が置いてあったこと。いや、もっと前からだ。

二人分の靴の音を朝の校舎に染み込ませながら、僕たちは早足で階段を上っていく。

繋がる。出来事を過去にさかのぼり、青い光の糸が僕の記憶の闇の中に浮かぶコンテンツを、一つの線上へと結び付けていく。結果として。

僕がジョーカーであること。

帰結はやはり、ここになる。

そして最終的な結論はズバリ。

「2年2組にジョーカーと繋がっている人間がいる……ということになる」

僕は暗がりの階段を2階層分一息で登り切り、屋上につながる鉄戸を開け放った。

そして左手の人差し指で力いっぱい、通話のボタンを押しこんだのである。

20. 目的

風に揺れる髪を自由にさせたまま、僕はそつと携帯電話を耳に当てる。

「……」

何も言わない、口にしない。そもそも本物のジョーカーかどうかなんてことは今のところ僕には分からないのだ。じつと、馴染みのない機器を手に相手の第一声を待つ。

四階建ての校舎は山沿いにあり、屋上に立って見回せばこの田舎町をほとんど一望できた。とは言え、どの方角を眺めてみたところで視界を遮る大した建造物もない。山にぶち当たるまで、盆地に立った民家の低い屋根が延々と続いているのがよく見えた。ところどころに万緑の混じる夏の大气が、午前八時の街を水で薄めたような青に染めている。

そんな風に景色を眺望しながらも、晴れやかな気分になることもなく。さわやかなブルーの風は僕自身を素通りして、付属物の黒い髪だけを揺らしていた。

「……やあ」

そして低い、重低音。僕の存在を電話越しに揺すぶる低周波。

「……」

疑いようなない、ジョーカーの声だ。これほどまでに印象的な声を持つ人間はそうそういない。もしかしたら全然関係ない人間の悪戯かもしれない、そんな淡すぎる希望は一握りの砂塵のごとく僕の前から散って、吹き飛んで行った。頬を、暑さだけではない汗が滴る。

「こちらはジョーカーだ」

どちらかと言えば欧米的な通話の開始方法だったが、どちらかと言ってやる気もさらさらなかったので、僕は嫌みたっぷりに返答した。

「お生憎だな、こちらジョーカーだ」

「ふっ」

いきなりの失笑を食らったようだ。結構なことだぜ。僕は心の片方で苛立つ自分を諫めつつ目を瞑り、身体为天頂にある回路に少々強めの電流を流す。今僕がすべきことは。

こいつから出来るだけ多くの情報を聞き出すことだ。

神妙な顔つきで後ろ手に屋上のドアを閉めた畑中を横にして、僕は一先ず切りだした。

「先日はどうも。いろいろとレベルアップの助けになったよ」

「そうかね」

ジョーカーは平然と、そう流す。

「君のことだ、うんとたくさん余計な勘ぐりをしたんだろう、ふふ」

「ま、そんなことはどうでもいい」

奴のペースに巻き込まれるのは御免だ。僕はジョーカーの言葉をばっさりと遮った。

何よりもまずは、これを聞かねばなるまい。

「美咲に何を吹き込んだ」

とはいえ、大体の予想はつくが。

「美咲……ああ、彼女か」

一息おいてから、低い声はしれっと言う。

「ちょっとした話の成り行きだね。椎ちゃんと穂波ちゃんがつきあってるかどうかとか、って知ってるかなっ？ と。聞かれたのでね」

僕は右手で頭を押さえつけた。やはり、そういうことだったか。

美咲の奴、やっぱり朝のことを気にしていたのだろう。なんだよ、それならそれで別に言い洩るようなことでもあるまいに。

「それで、何て答えたんだ」

「それはない、とだけ言わせてもらったよ」

あっけらかんと、ジョーカーはそう述べる。

「……気がきくな」

僕は声にちよっぴり驚きを交えた。

「いや、それは違うな」

だがジョーカーは、ゆったりと余裕を持ってそれを否定する。

「今回はたまたま、私の意見が質問の答えと合致した。それだけの話だよ、ジョーカー君」

どういうことだ。

「それは君の懸案外にあることだ。気にかかる必要性は全くと言っていいほど、ない」

そうして、それがお決まりであるかのようにくつくつと笑う。いつでも僕の数手、いや数十手先を読んでいる。受話器越しに森のような深い笑みを漏らすこの男から受けるイメージは、さしずめそんなところだった。

この男との会話はいつでも屈辱的だ。言い知れない敗北感。何故だろう、僕の勝手な思い込みなのだろうが、ぬぐい去れない苦味が僕の心に居座って動こうとしない。

何故なのだろう。

「……まあいい」

が、今は些細なことに振り回されているわけにはいかない。

「何か用があるんだろう？」

薄い携帯電話をしっかりと握りしめる。ここからが本題だ。と言っても、本題を切りだすのは僕ではなくジョーカーになるのだけど。

「迷い猫はきちんと保護したかね」

「ああ、猫。それならご心配なく」

緑色の塗装の剥げかけた鉄戸の前に並んで立つ畑中に、小さく目配せをする。彼女は手に持つ鞆を少し持ち上げて、それをギョツと抱きしめて見せた。その中にはもう猫毛玉はいないという合図だろう。籠る声は聞こえない。

「32号機関で保護させてもらったよ」

「そうかね、大変結構だ」

ジョーカーは満足げに唸る。

「ふむ。前置きはこの程度で構わんかね」

その勿体ぶるような言葉に、僕はゆっくりと息を吐いた。そして何が飛び出すかわからないジョーカーの言動を待って、吐いた分の息を静かに呑みなおす。僕の通話相手はたちの悪いびっくり箱だ。絶対に気は抜けない。

「まずその携帯電話だが、それは君のものだ。話は美咲クンから聞いているだろうね？」

話と言うほどの有意義な内容がそこにあったかは別として、その旨は確かに承っている。

「ああ」

僕は短く返した。

「結構。それでは次のお使いを申しつけさせていただけよう」

やはりきたか。低く落ち着いた声が、僕の深淵の水面を波立たせる。今度は何だ？

「なあに、大したことじゃあない」

毎度のこと、重く感じさせる間を持たせてから、ジョーカーは口を開く。

「七月七日。何の日か分かるかね」

七月七日。

一瞬。

本当に一瞬、頭をよぎる黒い影。

七月七日。何の日か、だって？ わかる。わかるさ。馬鹿にするなよな。

それは勿論。

「……………七夕、だろう」

「はっ、それも正解だがね」

それも？ どういう意味だ。

「それ以外には、何もない」

強気に言い放ったはずの聲が、独りでに震えていた。どこことなく寒気がする。心臓が勝手に早鐘を打ちだす。

まさか——そんなはずは。

「それ以外には何もない……？　馬鹿な。君にしてはおかしなことを言うな、八代　椎奈」

「気易くフルネームで他人のことを呼ぶのは止した方がいい……気に食わない人間がいるからな、僕みたいに」

嘘だった。別に僕はどんな呼ばれ方をされたって気にかけたりしない。つく必要もない薄っぺらい嘘だ。けど。

七月七日。

何か、何か黒く暗く、ぶよぶよと蠢く邪な奔流が、僕の心をここじゃないどこか別のところへもち去ってしまうような。そんな気がしたから。嘘で心の堀を埋めた。ジョーカーは鼻で嘲う。嘲笑は、救いには到底及ばないが。

それは——その日は。

「文化祭だよ、君たちのね」

「へ？」

思わず、間の抜けた声が鼻を抜けた。

「文化祭……文化祭。ああ、文化祭ね」

取り繕うように早口でそれを繰り返す。

確かに。七月七日は空が岬高校文化祭だ。

「……ふっ」

そのどこか柔婉な笑みが何を意味するのか、僕にはわからなかった。大方、変な間を持たせた僕に単純なおかしさを得たとかそういうことだとは思うが。

本来そこにあるべきでない空虚な安心感が、僕の心を満たしている。

ああ、そうだな。そんなことあるはずがない。そりゃそうだ。

今は、まだ。

「まあいいさ。君が何を思ったのか、それは私の懸案外にあることだ」

「それで？」

それでジョーカーは、僕に何をさせようというのだろうか。

「文化祭当日、君にして頂きたいことがある」

「何だ？」

「残念ながら、今は言えない」

笑いを含む声色で、ジョーカーは言う。

「どういふことだ」

「いずれ意味はわかるさ。いや今だって本当は」

そこで一遍、言葉に区切りをつける。ジョーカーの癖なのだろうか。そしてこの区切りの後には大概にして、僕をひどく消耗させる言葉がやってくるのだ。受話器からの老成したテノールに集中する。そして。

「――気づいているんじゃないのかね？」

「……………」

僕は一瞬にして沈黙させられた。

――こいつ、どこまで。

「言っている意味が分からないよ」

不自然なほど冷静な声が、録音されたテープみたいに僕の口から流れ出た。その実、どれほど僕の胸が内側から打ち鳴らされていたかは、自分自身でも驚くほどだったが。電話じゃなきゃ顔に出てばれていただろう。

ジョーカー。この男。

今まで会った人間の中で最も恐ろしい人間かもしれない。

本音はそうだったのだから。

「ほおう……便利な口だな」

「あんたのには及ばない」

「はっ！ 言ってくる」

楽しそうだな、ジョーカー。僕とあんたの感情をグラフにできるとすれば、それはそれは綺麗な反比例になることだろうぜ。

「それともう一つ。これは別に遂行していただかなくても結構ではあるが」

僕がそんな馬鹿げたことを考えていたら、ジョーカーはまたしても『お願い』を追加するつもりらしい。まだ何かあるのか。

「美鈴と牧埜宮清龍をそれぞれ、一発ずつ殴っておいてくれたまえ」
なんだろうか。

え？

なんて言った今。あまりにさらりと流されたその言葉。

変にハッキリクッキリ僕の記憶に、エコーのように残る声。
殴っておいてくれたまえ。

「気が進まないのなら別に行動に移す必要はない。君の任意だ」

「ちょ、ちよっと待っ」

「ふっ、それではまた。グッドラック、ジョーカー君」

やけに発音のいいグッドラックが聞こえたと思ったら、ガチャと言う無情な音が耳朵を打った。

……嘘だろ。

「き、切りやがったぞ！」

僕が耳から離れた携帯電話を左手に眺めて呆然としてみると、通話が終わったことを確認するためか、栗色の髪を揺らして畑中が画面を覗き込んでくる。

「あ、本当だ。ジョーカー、って書いてますね」

「ん、ああ、そうだな。うん」

明らかに狼狽する僕を見上げ、畑中は不審そうな顔をした。

「一体何を言われたんですか？」

「え、あう」

「……？」

言葉に詰まる僕に、畑中は顔を寄せてくる。ついでに眉根に皺も寄せながら。

「この携帯電話は僕が持っていて、以降指示はこの携帯を通じて行う、ってさ」

一瞬支えはしたものの、次にはさらさらと言葉が湧いてきた。それを白々しく眼前の畑中に吹く。

「それだけですか？」

「ああ」

じい、と僕が美咲にしたように、畑中は僕の目を見つめて、少し唸った。

「それにしては通話時間が長いように感じたのですが」

「感じられたただだよ、気のせいだ」

嘘っぱい。

僕自身だってそう思ったくらいだ。今のはさすがにひどかった、美咲並だ。

「……」

さらに彼女の瞼が半分下がり、いかにも僕を疑っていますと言わんばかりの形相で視線を注いで来る。いや、そもそもこれは隠す必要がないことのようにも思えるが、しかしなんというか。対応に困る。

いや。殴れ、と言われましてもね。

「それで、結局情報は引き出せたんですか？ ジョーカーから」

「う……」

痛いところを突かれた。しまったな。すっかりジョーカーにやられたらしい。まさか電話を切る前にあんなことを言われるとも思っ
てなかったし、一方的に切られたし。

「あんまり、かも」

「ふうん？」

畑中の声のトーンがぐっと下がる。イワークのいやなおとって地味にうざいよね。何言ってるんだろう僕。

「悪かった、話を延ばそうとしたんだけど一方的に切られたんだよ」
項垂れてそう申し上げると、畑中は厳めしくしかめた顔を僕から離して溜息をついた。

「八代君でもそういうことってあるんですね」

軽い足取りで僕から二歩三步と離れ、振り返り、眉を八の字に下げて天を仰ぐ。あーあ、といった雰囲気を全身で醸し出していた。

「どういう意味だよ」

言うと、畑中は少し表情を戻して僕を見る。

「八代君って何でも出来ますよね」

そしてポツリと、そんなことを口走った。

——何でも出来る？

何でもって何だ？ 何ができる？ 僕に何が？

「どういう意味だよ」

一字一句同じセリフ。声だけを低くして、繰り返す。

僕の中で何かのスイッチが入った。そんな気がして。

「だから、八代君でも失敗することってあるんだな、って思って」

「……やめてくれ」

口からそんな乱暴な言葉が飛び出していた。

君もそんな風に言うのか。僕のことをそんな風に。

「八代君？」

うんざりなんだよ。そんなのは。

僕は。

「僕は何もできない馬鹿だ」

だからやめてくれ。

「あの……？」

「僕は何もできない馬鹿なんだよ、それだけなんだ」

淡々と言って、その機械的な声は蟬の声にかき消され、僕ははっとした。

少し声が大きくなっていたかもしれない。畑中は僕の急変に目を丸くして驚いている。すぐさま自己嫌悪の苦い感覚が僕を包みこんだ。

「悪い……」

頭がクラクラした。慣れたしぐさで、頭を押さえる。自分に嫌気がさした。いい加減、僕は性格を捻じ曲げる必要があるそうだ。

「朝っぱらからどうかしてるな……」

言って、髪をくしゃくしゃにした。

被害妄想激しすぎ。

「いえ、私こそごめんなさい。何か気に障るようなことを言ってしまったのなら――」

「いやいいんだ、君は悪くない」

悪いのは僕さ。

それを口に出すのはやめておく。こういうことで卑屈になるとキリがない。僕の場合なんかは特にそうだ。そういう人間は好きじゃないし、嫌いな人間に変質していく自分が分かっているがそれらを止められないほど僕もガキじゃない。

「うん、気にしないで」

代わりに、彼女には笑顔に向けた。たぶん、ガラスのような笑顔。畑中もまたぎこちなく笑って、頬を掻いていた。

だめだな、僕は。女性にあんな顔させてるようじゃ。

「……あ」

そして何かに気づいたような声を上げる畑中。

「ん？」

「そろそろ降りないと、授業に遅れちゃいませんか？」

なんだか申し訳なさそうな彼女に言われて携帯の液晶画面に目を落とすと、時刻は八時三十五分。確かに、早朝登校によって有り余った時間はいい感じで潰れたようだった。

「本当だ。じゃあ、君先に降りなよ」

「え？」

彼女は一瞬キョトンとした。

「一緒に降りて変な勘違いでもされたら嫌だろ？」

「あー……」

僕がそう言っていると、畑中は目を細めて微妙な頷き方をする。

「五分くらい経ったら僕も降りるから」

言いつつ、身体を移動させながら緑色のドアを開く。

「わかりました」

畑中はまた一つ律儀に頷いて、僕の前を歩き抜ける。

「あ」

そうだ、これは聞いておかなくては。

「放課後はまた美術準備室に行けばいいのかな？」

背中まで伸びて、ところどころ跳ねている畑中の栗毛に、そう声をかける。彼女はすぐに反応して、スカートをヒラヒラさせながら、可憐に振り向いて、ニコリと笑って頷いた。

そしてドアをくぐって、校舎の闇へと消えていった。それを見届けてから、左手の携帯電話に目を落とす。

扱えるだろうか、こんなモダンなもの。人をなめるような銀色の光沢を放つ携帯電話。果てしなく心配だ。

「……けーたい、ねえ」

表を向けて、裏を向けて。とりあえず僕はその物体を観察してみ
て。

うん、まずはちゃんとカタカナでけーたいを言えるようになって
おかないといけないかもしれない。

などと今日の夕飯よりもどうでもいいことを心配する僕であった
のだが。

21. 推理Ⅱ整理

五分、か。

どうせ四十分には授業の予鈴が鳴る。それを聞いてから降りても始業には間に合うだろう。一時限目は三須先生の授業だったはずだ。老年の彼は遅刻者の基準が甘いから、少しくらいなら遅れたりしたって（あまり正当な考え方ではないが）問題もない。とはいえ、授業だけは何があっても真面目にこなさなければ。

それを考えれば、今のうちに思考できることはしておくべきだ。

「フー」

僕はどこを見るでもなく、ぶらりと下げた右腕の腕輪に話しかける。

『なんだ』

間髪を入れずに澄んだ高い声が返ってきた。

「どう思う？」

『何がだ』

「そうだな。何でもいいよ、適当に何か言ってくれないかな」

『適当に、か。しっかりしているようにいい加減な男だ。まあいい、私も貴様の考えを聞きたいと思っていた』

それを耳にしつつ、夏の太陽で熱をもったドアへともたれかかる。

『ジョーカーとの内通者は誰だと考えている』

「ああ、そのことか」

いい点を突いてくれた。そのことに関しては、これから日々を過ごすに際して思考するに余りある。

分かりかけてはいるんだ。ジョーカーの狙いは。

しかし奴が得体のしれない人間であることは疑いようなない事実だった。

「内通者、まあそんな大仰な言い方をすべきかどうかという問題はあるが」

『それが誰かをハッキリさせておくに越したことはない』

「そういうこと」

言ってふと思う。安易にその前提で話を進めてはいたが、そもそもこのフーは僕の味方なのだろうか？　こいつの立ち位置もイマイチ把握し辛いものがあるが。

『安心しろ。メルシングは自分の欲望以外には基本的に中立だ。そもそも今の私は貴様を依代にして存在している。そうである以上宿主を無下にしたりはしない』

僕が何か言おうかとするその前に、フー自身にそう断わりを入れた。

「……よくわからないな、メルシングという物は」

精神生物。僕から見たその存在は言ってみればモンスターであり、人間きの悪い呼称を使うならば魔物である。ジョーカー以上に考えが読めないと言えは読めない。

『深く考えるな。どうせ貴様の考えていることは往々にして私に伝わる。とは言えあくまでもなんとなく、感情の起伏や思考のベクトルが大幅に変更された時だけに限定はされるが』

「ふうん……」

そんなものなのだろうか。

『そんなものだ。さっきも言ったが深く考え過ぎない方がいい。頭がおかしくなるぞ』

「それは少し難しいな」

可能性の一つとして、ジョーカーが狙っているのは腕輪ではなくこの『フー』だということも考えられる。畑中も、龍ちゃんも、ジョーカーも、すべての人間がそれを知っていて、僕に隠そうとしていて、つまりそれだけ重要な秘密をこの名も無きメルシングは抱えているという可能性。

なくはない。

なくはないが。

「――この場合においてのみでは、それは違うだろうな」

『何を言っている？』

「……トポロジーを使ってポアンカレ予想の解を導こうとしてただけだ」

『そうか』

納得されてしまった。まあいいけど。

『それで。結局貴様は何をどう考えているんだ』

もくもくと、綿あめのように大きく膨れ上がった夏の風物詩を青空に見上げる。肌を焦がすような直射日光がヒリヒリと痛い。鉄戸に背中を預けたまま口を開く。

「関田と美咲はおそらく白だ」

『何故だ』

「僕の家で四人が鉢合わせした時、畑中のバツクの中からキィキィ声がしてただろう」

記憶に新しいそのシーンを頭に思い描く。四人分の驚嘆顔。思いだすだけで最悪の絵面であるが。

『あの毛玉か』

そう。

「関田と美咲にそれを気にする素振りはなかったからな。彼らは少なくともアーティストじゃない」

『確かに』

フーは尤もらしく一つ間を置く。

『マナを操る力を持っていなければ、メルシングの実体を知覚することはできない。だが、それだけで奴らを白と断定するのは少々強引だな。そもそもあの場でそちらを気にかけるほうが難しいだろう』

勿論、根拠はそれだけじゃないよ。

『では他に何があったというのだ』

「よく言うぜ。その為にわざわざお前に姿を現してもらってたんだろうが」

一番肝心な当日にその予定事項を失念していたせいで僕自身挙動不審になりはしたが、そもそも今朝関田らが僕の自宅を訪ねてくる

ことは事前に分かっていたことだった。

だからフリーには前もって土曜日のうちに、関田たちの前でその姿を顕現させることを依頼していたのである。

『……そんなこともあったかもしれんな』

とぼけた風にフリーは言う。そしてどうやら彼女はそれを実行に移してくれたのだった。

「ま、結局他の人間にどう説明するか畑中と話し合うのを忘れてて一騒動起こっちゃったけどな」

それはそうとして、フリーの声と、姿。どちらに対しても二人の反応はなかった。つぶさに観察していたが、彼と彼女に動揺の機微は微塵も感じられなかったのである。

フリーの話に基づくのなら、彼女の存在をジョーカーが知っているはずがない。なんせ彼女は偶然、落ちていた腕輪にその存在を滑り込ませたにすぎないのだから。ある理由も加味して、前述したとおりフリーがジョーカーの目的だということもないだろうと思う。だったら少なくとも、ジョーカーと繋がっている人間が二人のうちどちらかだとして、何も動揺がないというのはいくら何でも少し考えにくい。

「仮に二人のどちらかが超演技派の内通者でお前の存在を知覚出来ていたとして。仮にだよ、ジョーカーの性格ならおそらく朝の電話でそれを話題に振ってきてたと思う」

しかしそうはしなかった。

「ジョーカーがそれを知っていることを仄めかさなかった、ということはつまり、その内通者もお前の存在に気づいてないってことだよって二人は内通者ではあり得ない」

『納得しかねるな。お前の言っていることはすべて仮定の範疇を抜け出ない』

フリーの反論は最もだった。同じ立場で話を聞いていたら僕だってそうしただろうな。

「ああ、確固たる証拠はない。だから、おそらく白、なんだけどね」

ジョーカーがそれを話に振ってこなかったただけだ、ということだ
ってあり得なくはない。可能性として高いとは思わないが、それは
決して0ではないのだ。

「ま、そんな可能性、除外して差しさわりはないさ。その内通者が
それほどまで巧妙に人を欺く能力を持った存在だとするなら、僕に
それを突きとめるのは不可能に近い。だからそんなことは端から考
えないでいい。『おそらく白』で既に十分条件を満たしてるんだよ」
『どうかな。打開策を模索しないのは賢明とは言い難い。すべての
可能性には真摯に立ち向かうべきだ』

そうは言うがな、フー。

「何かあるのか？　アーティストかそうじゃないかを確かめる確実
な方法、とかさ」

『ない』

ないのかよ。

「だったら僕の推論に変なケチつけるなよな」

『何を。ケチをつけてほしいから私を使ってわざわざ考えをまとめ
ているのだろう』

「む……」

鋭い。やはりこいつを話し相手に選んだのは正解だったのかも。

『どうしても確かめたいのなら、ある程度アタリをつけて策をぶつ
けるしかないな』

僕は体表面が紫外線を吸収していくのを切に感じつつ、チャイム
が鳴ることを暗に期待しながら腕輪を持ち上げる。

「アタリねえ」

『ないのか？　心当たりは』

そんなものがあれば苦労はしないよ。

『あるんだろう』

「ない」

『……』

黙りこくる腕輪。

「……」

僕も負けじと黙る。が。

「……あるけどさあ」

暑さに負けた。制服の肩で汗を拭いつつ、やれやれと目を瞑る。屋上の床は目に優しい緑色だったが、照り返しがないわけではない。正午を過ぎればこの場所も日影になるのだが、残念ながら今はまだ八時半過ぎだ。この時間帯にこの場所で日光浴とは実に健康的である。暑いです。

『私に隠し事をする必要はない』

「この世の中で完全に信用できるのは自分自身だけだからな」

嘘じゃあない。それは絶対的な真実だ。

『そこまで重要な事項でもないだろう』

「……それはそうだけど」

あまり進まないんだよ、まだ固まってもない考えを他人に話すのは。

『思考整理が目的ではなかったのか？ 本末転倒だな』

フーが大人びた言い回しで冷たく言い放つ。全くだった。言葉にも熱があれば少しは涼しくなれただろうか。

「僕の悪い癖だな……」

悪い癖だらけじゃないか、僕。

『それに私は貴様が眠っている間ならばいつでも貴様の記憶と思考を覗くことができるからな。隠し事などしても無駄だ』

僕のプライバシーはいずこに!?

というかそういうことは早く言えよ!

『言ったからといってどうにかなるものでもなかろう』

いや、お前が僕の記憶及び思考を覗くのをやめればそれで万事解決だろ。

『私は徹頭徹尾他人の助言や茶々によって考えを曲げないと決めているのだ』

「……………」

あ、なんか今普通にこいつを殴りたくなった。

『む、今貴様、誰かを殴りたくなっただろう。誰だ、貴様を怒らせた輩は』

「……………」

わざとなのか？

『む、怒りが引いていくな。お前ほど感情のコントロールが上手い人間は見たことがない』

「……それはまあ、どうも」

『扱いやすいやつだ』

「お前を殴る！」

僕は右手の腕輪にうなる鉄拳をぶち込んだ。ごっどしゃいにんぐふいんがー！

……………痛い。

仕切り直し、仕切り直し。

「それでまあ、そうだな」

気を取り直し、今までの事実から推測できることを一つずつ、確実に言葉にしていく。

「アーティストである子どもは通常、表の学校には通わない」

僕は少し離れたところから真実への溝を埋めていくことにした。

これはついさっき通学中に畑中から聞いた話だ。（まだこれは魔術云々の話題圏外だと僕は勝手に認識している）

「何か特別な養成施設があるのか、それとも裏の世界にも学校があるのか。それは僕の知るところじゃないし、知りたいとも思わないから聞かなかったけど」

話を聞く限りだが、大体にして封じ屋は、裏の人間が表の学校に通うということはそれ自体が表のバランスを崩しかねない危険事項と認識しているようだった。勿論畑中本人は例外で、彼女の仕事の都合上通学を許可されているらしい。

「それを踏まえてまたここに戻るんだけどさ。そもそもジョーカーはなんで僕がジョーカーと呼ばれたことを知ってたんだっけ？」

『それこそが今の論題だろう。二年二組のメンバーにジョーカーと内通者が混じっていたから、だ』

「その通り」

フーの口にしたことは実に至当だ。

「だけど」

ここで少し立ち止まってみるべきだ。

「そいつが二年二組に混じってるのは僕の情報を伝えるためじゃない。というのが僕の考えだ」

『何？』

そこなんだよ。

そもそも。

「ジョーカーはなんで僕を殺そうとしていたのか？」

『この腕輪……それを手に入れるため、だろう』

フーが律儀に答えてくれる。そうだ。そして。

「そこに一つの――矛盾が存在する」

一つの特異点、そこに介在する矛盾点。

すべての原点はやはり三日前の六時間目から放課後にかけてにあるのだった。

『それで、何が矛盾なんだ？』

僕は湿気を少なめに含んだ夏の空気を、胸いっぱい吸い込んだ。

「二年二組には、確かにジョーカーと繋がっている人間――アーテイストがいる」

ほぼ間違いないと見て構わないだろう。そしてそれは通常裏の人間が表に長時間存在し干渉することを嫌うことからして、間違いなく特殊な措置といえた。ジョーカーだって裏の人間である以上、下手に表の世界をぐらかせるような真似はまずしないはずだ。

「だが」

そいつが僕のクラスにいる目的はなんだ？

『お前の動きを観察しジョーカーに伝達する為……、……。なるほどな』

フーがはっとしたように呟く。
そう。

「おかしいだろ」

僕も納得しかけてた。でも絶対的にあり得ないことが一つある。ジョーカーの目的は僕から腕輪を奪うこと。そしてその為に二年二組の誰かを介して、情報を得ている。ずっとそう思っていた。いや「僕から奪う」というのは後付けされた余分にすぎない。彼はあくまで腕輪が手に入ればそれでいいのだ。最もその理由は未だ不明だが、そこに無駄が介入する余地はない。

そして僕が観察、監視されていることは既に明らかである。だがしかし。

「僕が監視されている理由がこの腕輪である以上」

僕がこの腕輪を手に入れる以前の情報を。

「僕がジョーカーと呼ばれた事実を」

ジョーカーの内通者は得て、どうしてジョーカーに伝えたんだ？僕は金曜日の六時間目その時点では、ジョーカーらにとって全くマークする必要のない、いわば部外者だったはずだ。

『……つまりもともとジョーカーが二年二組に配下を置いていたのは』

「初めから僕を観察するためなんかじゃなかったんだよ」

そして僕を観察するための内通者じゃないとすれば、奴には。

『何か他の――』

「目的がある」

僕とフーは声を揃える。果たしてそれは何を意味するのか。

内通者は二年二組で起きた出来事を日常的にジョーカーに伝えていた。

たまたま？ そんなことは前述からしてあり得ない。さらに二年二組に内通者が存在している理由は僕なんかではなかったのだ。奴には二年二組の何かを観察し、日ごろから情報を得る必要があったということだ。その過程にたまたま僕という予定外の因子が飛びこ

んだ。

そう考えるのが至極自然な思考過程というものだろう。

ピースが一つ、ハマった。

まだまだ辺を埋めている段階のジグソーパズル。何の絵なのかもまだ見当が付かない。それでも繁雑に散らばり過ぎたピース、その数を一つでも減らせたことは大きな一歩だった。

重要なのは、そう考えることによって一つの可能性が浮かび上がることにある。

『ほう。おもしろい。聞かせてみる』

僕がいい気になって口を開こうとしたときだった。

キンコーン。

通常のチャイムよりも短めの予鈴が気だるい音色で始業五分前を告げた。

「……もうこんな時間か」

やはり五分は長いようで短い。どうせ放課後にはまたあの場所に行かなくちゃならないし。

「お楽しみは後に取っておく、ということにしとこうぜ」

『そうか、それもいいだろう』

あの胡散臭い男にも聞かなければならないことがたくさんあるのだ。

ともあれ、何よりもまずは授業第一。勉学は学生の本分だからな。僕はようやく太陽光から解放されたことを内心喜びつつも、相対的に涼しさを覚える陰りの校舎へと足を運んだ。

22. ひととき

自律し自重し禁欲し、そし学業に従事せよ。

とはまあうちの学生に対する教師陣の恒久的なキャッチコピーであるが、それを現実に実行し、さらには教師たちの勤勉基準を充足たらしむ生徒などというものは、実際に一字一句違わずそのキャッチコピーまんまを口にして振りかざす古参教師よりも数少なく、如何にもレアである。最もその概念というか通念というか、推して知るべし教師の願いはもはや公然のごとく全学生に浸透しており、それでいてなおかつ勉強に勤しもうという気を起こさない生徒がこの世には驚くべく数多存在するというのが現実世界の悲しい性であった。

今のところ世間一般の括りからして劣等生という集合には包括されない僕であるが、その気持ちは分からなくもない。というのもしかし、小学生の頃からそれを嘆く友が常に僕の傍らに居続けるというのがその理由の一つであることは一概に否めなかった。

というか絶対そうだ。

「午後からは古文に数学だと。生徒の気持ちをわかつとらんな、この時間割を組んだアホ教師は」

顔をしかめ、机の反対側で遺憾の意を述べるのは、関田だ。ついでに口をもぐもぐさせている。

「ひろ君にもものすごく同意するんだよっ！」

美咲がただでさえ二人分の弁当箱と菓子パンの群れによって面積を狭められた机に手について、はいっ、ともう片方の手を勢いよく挙げた。おい、食事中だ、お行儀が悪いぞ。

「お前らその会話何回目だよ」

毎週月曜が来る度にそのやり取りしてるじゃないか。

「あんだよ、そうは言うがな椎奈。お前は文句ないのか、この時間割に」

おい、人を箸で差すのはやめろ。僕は畑中に習って返す。

「しょうがないだろうが。せんせいがただでゆうりよしてくれてるよきつと」

「棒読みじゃねーか！」

あーもう汚いな、口の中のものがなくなってからツツこめよ。

「馬鹿か、ツツコミはスピードが命だろ」

む、それは確かに一理あるが。

「芸能人は齒が命だろ」

「古いな！」

左サイドで席に着きなおした美咲が、一生懸命菓子パンの袋を開けながらばやき声をあげる。

「でもお、さや絶対寝ちゃうもん……古文とか特に」

彼女は砂糖のたっぷりついた馬鹿みたいにカロリーの高そうなパンを一口かじり、情けない声を出す。

「俺は数学で限界を迎えそうだ。最近眠すぎて数学がただの記号の羅列に見えてきたから……」

関田、残念だがそれは睡魔の問題じゃないと思う。なんかこう、それは末期症状だ。

「まあ、ね。食後には消化器官に血液が集まって脳の酸素が不足する。そういう生理的な眠気ってのはある意味すごく人間的だし、あって当たり前だよ」

言いつつ、関田が詰めてきてくれた弁当のおかずを口に運ぶ。小さい弁当箱には、意外と綺麗に朝の残りが詰めてあった。少々量が少ない気がしなくもないけど、まあいいか。そもそも弁当箱を本当に学校に持ってきてくれたことだけが驚くべきことであり、及第点だ。すでに今日の昼食を学食で済ませる覚悟をしていただけになおさら。

「……そっかあ、じゃあ椎ちゃんは人間じゃないんだっ」

「なるほどな、そういうことだったのか」

「なんでそうなるんだ！」

僕はお前らと違って根性と気合があるから起きてられるんだよ。

「根性と気合がある宇宙人なのか」

「違う！」

まず普通に人類であることを認めてくれないかな。

「椎ちゃんちよっと変形してみて」

「しないよ！」

とうにか多分普通の宇宙人も『変形』はしない。変身するのもフリー○様くらいで間に合ってる。

「椎ちゃんフ○ーザ様だったの？」

「だからなんなんだよそのノリは！」

僕は生粋の地球人だよ。あと美咲、同じとこ隠せ。

言って、次の瞬間。薄口の醤油で味付けしたはずだったほうれん草のおひたしが、僕の想像を遥かに上回る衝撃で、味蕾を襲った。

しょっぱい！

なんだこれ、超塩辛いんですけど！

「おい、かんら、おはえ！」

思わず勢いのまま、箸で髭の生えた関田の顔を指してしまう。僕もお行儀が悪い。

「ん、なんだろう、宇宙人八代椎奈」

「なんかのまんがのタイトルみらいにするな！」

「口の中のものを飲み込んでからツツこめよ」

言われるとは思ったけど塩辛すぎて飲み込めないんだよ！

「あーあー、自分の料理のテクのなさを棚に上げてこれですか、呆れるな」

「か、かんらおはえ……っ！　かつら！」

僕が堪らず緑茶の入った手元のペットボトルに手を伸ばすが、それは意思をもったかのようにひょいと僕の手から遠ざかった。

「ほいっ、これでいいのしょうかひろ君大元帥っ！」

「おう、御苦労であった美咲二等兵」

くっ、しまったこいつらはすでにグルだ！

「美咲は正常な味付けを施された椎奈のおかず三品で買収させてもらった」

僕の弁当がなんとなく少ない気がしたのはそのせいだよ！

「おいしゅうございましたっ！」

君もそんなもので買収されてるんじゃないよ美咲。ていうか元帥が二等兵ごときを買収するな。僕のオアシスを手が届かないギリギリの位置でぶらぶらさせながら、美咲は空いた手で敬礼してみせる。無性に腹立たしい。

「くっ……」

どうする、飲みこむべきか、飲みこむまいとすべきか。食べ物粗末にすべきではないが、いやむしろ粗末にしたのは僕の料理に塩を振りまくった関田の馬鹿野郎のほうであり、僕ではないはず。

さらばこれを今食わずとも食の神様は怒りをあらわになさらないか——？

と。

『——連絡します。二年生文化委員は文化祭企画書を持って生徒会室まで来て下さい。繰り返しです。二年生文化委員は——』

洗礼された発声法による連絡放送が教室のスピーカーから流れ出た。

おやおや。

「ふんかいいんってほくしゃなかつはっけ」

「いい加減食えって、往生際の悪い。宇宙人なら食える！」
ぐ。

だしぬけに関田は僕の頭部と顎をがしりと両手で掴んで、咀嚼を強要した。強要というより強行だ。からいって、まじで！ まじで塩辛い！

「んうううう！」

「これは椎名宅に置いてけぼりにされた俺の分っ、これも椎奈宅に置いてけぼりにされた俺の分っ、これも置いてけぼりにされた……」
心底馬鹿げたフレーズを延々リピートつつ、関田は上下からつぶ

す感じで僕の頭部をがしと圧迫まくる。腕っ節が無駄に強いだけに逆らうこともできない。

もはや口の中に広がるのは塩だった。塩そのものだ。どこか北方の真っ白な塩湖が鮮明な映像となって僕の脳裏を支配した。そこで塩を集めているのはどうやら関田に似ている。なんてのどかな景色だろう。嘘だ。今のこの過激な状況にのどかさなど欠片もないわ。

ほうれん草のまろやかな面影が全くないじゃないか！ どれだけ塩かけたらこうなるんだ。味蕾が破壊される。そう思った。冗談抜きで。

しばらくしてようやく塩辛地獄から解放された僕は、必死の形相で美咲からペットボトルをひったくり、いっそう苦味を増したような緑茶をぐびぐびと飲み干す。

「ま、これだけで済んでるんだ。ラッキーと思いな」

「い、悪戯にも程があるぞ……」

僕は結局丸々一本を飲み干してから思い切り咳きこみ、力のない目で関田を睨みつける。

「何してるんですか、八代君」

というところで、僕の背後から畑中の声がした。涙目のまま振り返り、反応してみせる。

「あ、ああ。何でもない。生徒会室行くの？」

彼女は、なんでもなくはないだろ、という目つきで僕を見下しながらもそれを口にはしなかった。たぶん今、男子って馬鹿だなあ、とか思ってるに違いない。

「思ってますん」

「いきなりどうしたの畑中あ！？」

僕の心を読むのはやめろよ！

「やっぱりMなんですか？ と、思ってたところです」

「椎奈Mなのか？」

「椎ちゃんMなのっ！？」

……ああ、なんかもう否定する気も失せるよ。美咲、なんでそん

なショックな顔してるんだよ。どちらかと言えば真っ白になってしまいたいのは僕の方だよ。某ボクサーに習って今この場で燃え尽きたい。

「畑中、頼むからその嘘これ以上流布するなよ」

「人の噂も七五〇日ですよ八代君。気にしないでください」

「その長さを気にしないのは無理があるんじゃないかな!」

少なくとも卒業するまでM呼ばわりじゃないか僕。

「とにかく、八代君も文化委員なんですから、ちゃんと自覚持つてください」

「そうだぞー、畑中が正論だ。俺も同意する」

関田がここぞとばかりに食いついてくる。

「そうだぞ。椎ちゃんホームルームの時寝てばかりなんだから!」
美咲まで便乗してきやがる。どうやらこのバトルステージは僕にとって不利すぎるらしい。

「あー、関田。文化祭企画書ってなんだっけ? 僕そんなのもらった?」

ポコ。そんな音がした。

「私が持ってます。大体なんでもまず関田君に聞くんですか」
背側に立つ畑中が、丸めたプリントで僕の頭を叩いた音だ。

「そうだっけ?」

「そうです。自覚なさすぎです」

「んう……ごめん」

変に畑中と距離が近づいてしまっただけに、僕はなんとなく気まずさを感じた。今まで僕は、文化委員、もとい委員会活動という名の奉仕活動に行動的善意を添えたことは一度としてないのである。一度としてという言い回しはさすがに誇張かもしれないが、中学校三年間、通知表の備考欄に「もう少し学校活動に興味を持ちましょう」と書かれ続けた僕としてはそれくらいの言い方をしてまだ余りある気はしていた。

「謝る暇があったらさっさと立ちあがって会議室に向かおうという

意思を見せなさいな」

「はい」

素直に。僕は立ち上がる。

ここは素直にいつとこう。

「そういうわけなんで、関田。悪いけど僕の弁当食べといて」

「こんなもん食えるわけねえだろ馬鹿か」

「食べ物を粗末にしやがって、この背高のっぽ坊主め！ お前本当ぶん殴ってやるからなそのうち！」

本当と書いてマジと読む。

古いか。

そしておそらくその「そのうち」は半永久的にやってこないことだろう。

「ああ、あと二人とも。後で話があるから、ちょっと顔貸してくれないか？ 特に美咲、携帯を持ってくるのを忘れないでくれ」

「ん、わかったよ。どうせ携帯の使い方教えてほしいとか、そんなんだろ？」

「了解しましたっ！」

二人の歯切れのよい返事を聞いてから、僕は再び畑中を見た。

「ほら、行きますよ」

「あ、うん」

何故かちよつとイライラしているように見受けられる畑中に制服を引っ張られるようにして、僕は賑わいだ教室を後にする。

何故か不満げな美咲の顔が、教室をでるその瞬間ちらりと見えた。気がした。

「なあ、畑中。聞きたいことがあるんだけど」

一階職員室横にある生徒会室へ向かって早歩きで階段を下降しながら、僕は畑中に話しかけた。

「何か？」

「君さ、中学の時お泊りしてたとか言ってたじゃん」

危うく消し飛びそうな記憶の残滓をなんとかかき集め、きっかけ

を作る。

「お泊り……ああ。そういえばそんなことを口走ったかもしれまんね」

彼女は顔色一つ変えずにすらすらと口を動かした。

「それが？」

「いや、そういうのはアリなのかなってさ」

畑中は少し間をおいてから答える。

「表の世界の人間と共に、しかも表の世界の家で過ごす。そういうことがアリかどうか、ということですか」

そういうこと。

「別段それ自体に問題はありません。私もある程度の自由行動なら許可されています」

「ふうん……。今更だけど、君の正体を知ってる人間は学校にはいないんだよね？」

畑中は隣で小さく「ええ」とうなずいた。

「本当のことを言えばあまりこちらの人間と仲良くしすぎるのも問題なんですけど」

「そうなの？」

「龍が気を利かせていろいろ規制を甘くしてくれているんです」

畑中は見えてきた会議室を遠目にしながら、どこことなく感慨深げにそんなことを言った。へえ、それは素直に驚いてもよさそうな点だな。ほんの数時間言葉を交わした程度の人物に、意外だ、などという感想が適応可能かどうかは置いておいて。

「でもいつも四十万とか須原すばるとかと仲いいよな、君」

「……意外に人のこと見てるんですね、八代君」

いや、そういうわけじゃない。

「気持ち悪いです」

「そこまで言うの！？ 違うって言ってるのに！」

僕の記憶の限りでは、何故かと言うべきか彼女の交友には多く珍名の女子が含まれている。たしか中学の時も、畑中と一度だけ同じ

クラスになったことがあったが、音光などという名字の女子と仲良くおしゃべりしていたのが記憶に鮮烈であった。ちなみに「ねみ」と読む。

「恥ずかしいお話なんですけど、あまり人と積極的に付き合うな、と言われてしまうとどうしても学校では引っ込み思案になりがちで、それが珍しい名字と何か関係あるのだろうか。」

「いえ、特に関係はないんですけど」

「ないのかよ！」

「しょうがないじゃないですか！ 気づいたらそういう名字の方ばかりだったんです、私の周りにいたのが。美咲さんや八代君だってそんなに頻繁に見る名字じゃないですし」

「なんでちよっと逆ギレだよ。そう言われればそんな気がしなくもないけど。」

「私自身平凡な名字だけに名前負けしてる気分なんですよ」

ああ、確かに君本体のキャラが強すぎるのは否定しないよ。

と、口にするだけの勇氣は僕にはなかった。

「また元の話題に戻るけど、お泊りっていうのも四十万とかと？」

「ええ。彼女たちとは小学生の時から親しくさせていただいていますから」

なんだかさっきの会話内容と若干の矛盾を感じなくもない。

まあ、思春期乙女の私生活にメスを入れるなんていう無粋な真似をこれ以上繰り広げるのは僕らの精神衛生上もあまりよろしいとは思えない。丁度いい具合に生徒会室と書かれたお馴染みのプレートが目の前まで迫ってきていたので、僕らは話を打ち切り、何の気なしにプラスチックの引き戸を開けた。

「だるあっせい！」

第一声は、そんな威勢のいい掛け声だった。女性の。

「これはこれはお二方あ！ 御帰りなさいませい！」

ドアを開けたすぐそこに、男勝りで豪快な笑顔を浮かべ江戸前な言葉を振りまわす、メイドがいた。

「うえっ！　って四十万……何やってんだよ君」

メイドだ。

パーフェクト・ザ・メイド。

それこそ三百六十度どこからどうみても。別にメイド服に詳しいわけではないので詳細な描写はできないが、なんだかこうフリフリのフワフワなりボンとかスカートとかが僕の目に毒であることはほぼ間違いない。

それに加えて黒髪ポニーテールとは。

——やばい、鼻血でそう。

「いやはや。とりたててお二方がここを訪れる必要はなかったんでい。あっしが既に会長殿に上達済みだからなあ！」

「あ、そうなの？」

常時ハイテンションな四十万に空気ごと押されつつも、僕はなんとかそう聞き返す。

「それは知ってましたが、形式的な訪問くらいはしておこうかと思ひまして」

こいつの声を聞くと畑中のそれがいやに冷たく聞こえた。いや、別に冷たいわけではないのだけど。テンションの相対的落差が四十万と畑中じゃありすぎる。

なんでこんな両極端とも言えるような娘らの仲が異常にいいのか、甚だ謎だ。

そうはいっても、四十万は生徒会の一員であることから分かるようにびっくりするほど社交的なのである。誰とでもすぐに親交を深めてしまう。畑中もその大勢の中の一人なのかもしれない。そう考えることはしばしばあるが、この二人に須原を加えた三人組は異常なほどまでに仲がいい。常時べったりだ。僕と関田と美咲がつるんでいるのと同じくらいに。（それは決して僕と関田と美咲が仲よすぎて気持ち悪いという形容ではないが）

「おうよ！　それでこそほなみんななあ！　あっしが認めた女よ！」
どうやら畑中は四十万に一目置かれた存在のようだ。ますますこ

いつらの関係がわからなくなった。

「……で、四十万はなんでそんな扇情的な恰好してるんだ」

「扇情的とはこれまた！ 相変わらず口がうまいなあ八代」

恥居る素振りもない。豪快な笑顔をそのままに、四十万は男前な動作で前髪をくしゃつとかきあげた。

「生徒会は生徒会で毎年別な出し物をやるんでい。今年は巷で流行りのこすぷれ喫茶！」

そんなものが流行る巷は嫌だよ。

「似合ってますよ、四十万」

「おう、ありがとよ！」

相変わらずの口調だ。

こいつこの喋り方さえなんとかすれば絶対モテるのに。というのは二組男子の総意である。とか思いつつニコニコ笑顔の四十万を眺めていると、ふと思い出したように彼女はポンと手を打った。

「そうだ、お二方。うちのクラスの案を受理するに、一つだけ生徒会から留意してほしい点があるんだったぜ」

ん？ なんだろう。

23. 再び

「おや」

というところで、意気込んでいた四十万はトークの勢いを落として一つそう呟いた。

「そういえば八代はなんでここにいるんδει？」

「文化委員だからだよ！」

そこかよ。

「いやあ、そういうことを聞いているわけじゃあねえんだ、が。まあいいか！」

彼女は言葉を濁したが、どうせものすごく失礼なことを考えていたに違いなかった。まあとりたてて失礼だ、ということでもないのかもしれないな。僕自身今こうしていることは相当稀有なことだと思っているし、実際そうなのであるからして。

「それで、留意してほしいこととは何なんですか？」

四十万が作った妙な間を取り繕うように、畑中が冷静に問うた。

「おうよ！ 二組の出し物の案は、換言すればオリジナルランプを作って教室に展示する、というものだったな？」

関田から聞いた感じだとそうらしいな。

「しかし、それだけじゃあ余りにも簡素で、淡泊で、オブラートに包まない言い方をしまえば面白みとインパクトに欠けまくるんδει！ だからこう、何かエンターテインメント的なものを合わせてやりやがれ！ ということなんδει」

四十万は一息で、切れ目なく言い切った。

実に正論だ。なんちゃって文化委員の僕が反駁できる余地など些かもない。

「つまりあと一週間でクラスのみんなが出来るような簡単な余興を何か用意すればいい、ということなのですね？」

「そういうことだあ！」

畑中が綺麗に要約してくれたようだ。

ふうん。

「……それなら」

僕は静かに口を開いた。

「カードマジックとかはどうだ？ トランプ繋がりで不自然ってこともないだろう。初心者でも簡単に出来るのならいくつか知ってるし」

「良いですね。それで構わないんじゃないでしょうか」

「すぐさま畑中が賛成の声を上げてくれる。でもいいのだろうか？
こんなこと僕らの独断で決めちゃって。」

「べらんめい！ いいんでいそんなことは。どうせ話し合ってる時間もねえしなあ」

四十万は腕組みして、一本にまとめて後ろに提げた黒髪を揺らしつつうんうんと頷いた。

「じゃあ！」

その言葉と同時に！ と勢いよく顔を上げると彼女は、

「会長にはそういうことで言うておくんでい！」

そう続けて、そして前に突き出した握りこぶしの親指をビシッと立てた。

「よろしくお願いします」

隣の畑中が律儀にもお辞儀を شدしたので、僕もそれにつられて頭を下げる。

よろしくお願いします。

「てやんでい！ これがあっしの役目というものよお、お気になさるなお二方」

「おう。じゃあまあ、帰りがけのホームルームにでも言えばいいのか？」

「そうですね」

ああ、そもそも今日から放課後は文化祭の準備にあててるんだったつけ。

あれ。

「じゃあどうするんだよ。美術準備室行かなくていいのか、僕」
僕は四十万を前に平然と言う。

「文化祭の準備を終えてから向かって問題ありません。それにトランプマジックを教える程度なら別に今日じゃなくてもいいでしょうし」

畑中も、全くの些事を扱うがごとく冷静なしゃべり口である。聞かれて別段困るような単語は今のところ僕ら二人の会話にはない。毎度思うことだが察しのいい娘だな。

「大体八代君ならサボっても違和感ありませんし」

悲しいかな、事実である。

「おうおう、二人してサボりの相談かいお二方あ。聞き捨てならねえなあ！」

「いや、違うよ四十万」

違わないけど。

「ええ、違いますね。サボるのは八代君だけですし」
そこかよ。

「べらんめえ。せっかく改心したと思ったんだがな、八代の旦那よ
お」

「改心ってなんだ」

「ふうむ……」

そう唸って、眉間にしわを寄せた四十万の顔が怖い。もともと釣り目気味なこともあってか、般若とかその周辺を彷彿とさせた。テーションが若干下がってるのも威圧感を無駄に助長している。

とりあえず力なく笑っておいた。こういうところ（怖い顔）は友人同士で似るものなのだろうか。そうだとすると、果たして影響し、影響されたのはどちらのほうだろう。まあ正直そんなことはどちらでも構わないのだが、いつまでその怖い顔で僕を睨みつけているつもりなんでしょうかね四十万さん。

「ったく。もっとしっかりしてくれよな。仮にも」

「四十万！」

だしぬけに素っ頓狂な叫び声をあげたのは畑中だった。若干裏返ってたぞ、声。

「おっとっと。こりゃいけねえ」

名前を叫ばれた当人はにしと邪気のない笑い方をして、ふわふわのメイドスカートを翻して僕たちに背を向ける。

何故か畑中の顔が少し赤い気がする。気がするだけだろうか。

「あ。一応、これ」

と、何かお茶を濁すように畑中が言って突き出されたのは、筒状に丸められた例の企画書？　だっけ。だった。

「おうよ！　しかと承りやしたぜ！」

四十万が体半分振り返り、勢いよくそれをひったくる。

「そろそろ責務に戻るんдей！　他のクラスの奴らもそろそろ来るだろうしなあ！　お二方も教室に戻りねえ」

言うなり、彼女はポニーテールを揺らしながら、どこか賑やかな声の飛びかう生徒会室の中へと消えていった。その後ろ姿がドアに遮られるまで眺めてみる。暑苦しくないのかな、あのメイド服。通気性がいいようには見えないが。

なにはともあれ。

「……あいつは何をしてても楽しそうだな」

羨ましい限りだ。

「八代君とは正反対ですね」

そうか？　僕も楽しんではいるけどな、今の生活。

「またそうやって嘘をつく」

全部が全部嘘じゃないさ。そうだな、それなりに楽しいってのは少なくとも本音だよ。

「それなりに、ですか」

僕は再び教室へ向かって歩きだした畑中を追う。

「ああ、それなりに、ね」

それなり、それなり。世の中それなりが一番いい、というのはよ

くあるありがちな話だろう。何にしる極限を味わった人間は、多かれ少なかれ世俗感覚を狂わせる。

そう、狂わせてしまうのだ。

食事を終えて部活に行くやら他のクラスやらへ移動する生徒たちが、先ほどよりも多く目についた。御苦労さまである。

「八代君は、何がしたいんですか」

多くの生徒とすれ違う階段の半ばにして、畑中は唐突にそんなことを言った。

「なんだよ、いきなり」

よく意味の分からない質問の仕方はやめてくれ。

「では、どうしてジョーカーの言うとおりに動くのですか、と言いつ換えます」

畑中は足を止めると、えらく辛気臭い声色を使う。なんだ、そういうことか。

「別に。僕だって生に執着がないわけじゃないからね」
当然のことだ。

「そうじゃなくて。ジョーカーの言うことを聞いて、私が護衛について。それで」

それで？

「それで……結局八代君はどうなりたいんです？　何がしたいんですか」

「どうなりたいって」

そりゃあ。

元の生活に戻りたいに決まってるさ。魔術なんて、アーティストなんて、メルシングなんて忘れて。

元の、何もない、平和な生活に。

「戻りたいに決まってる」

もっとも、その願いは一昨日君自身にすっぱり否定されたけどね。

「だったら――」

「だったら、か」

何がしたいのか、ね。まるで教師の台詞だな。

僕は一瞬自嘲してから、畑中の目を見て言った。

「強いて言うならば、恋愛がしたい」

言ったとたん、畑中の整った顔面が凍りつく。

「……れ、……はあ？」

そして如何にも人を蔑んだような目で僕をじつとりと睨むなり、ぷいとそっぽを向いた。

「もう。いいです。……や、八代君にはもうこの質問はしません」
禅問答だった。

まあ僕が禅問答にしたんだけど。

「そうかい、助かるよ」

僕は別におかしなことは言ってないはず。そう考えつつも、顔が少しにやけた。畑中のああいふ表情を見るのは嫌いじゃない。視線を左下に逸らして、少し頬に朱の刺した、そんな顔。

人をからかうのは大好きなくせに、いざ自分があいふことを言われると恥ずかしがるんだな。恋愛に関しては僕と同様に未熟者らしい。意外だ。けど、おもしろいやつ。

確かに、今畑中をからかってみた感じ、言うという行為に関してはそこまで抵抗はない。自分の口から出た言葉は冗談だ、と分かっているからなのだろうな。他人から言われたことは良かれ悪しかれ真偽不明なのだ。社交辞令の難しさもここに極まれり、である。あの畑中がああも照れるのは、だからなのかもしれない。

クラスの皆も食わず嫌いせずにもっと畑中と話せばいいのにな。彼女を放っておくのはいろんな意味で勿体ない。でもそれだと彼女自身が迷惑なのだろうか、よくわからないが。

とまあ、そんな考える必要もないようなことに思いを巡らせつつも、僕はそのまま無言で二年二組まで歩き続けた。

教室に入ると、クラスの女子たちが集まって、何やらジャンケン大会が開かれているようだった。その辺にいたクラスメイトを捕まえて聞いてみれば、「八代の手作り弁当争奪ジャンケン大会」だそ

うだ。なんと哀れ、何の罪もない彼女たちは塩漬け弁当の被害を被る運命にあるらしい。さして助言してやる義理もなければその気もないので、僕はその群れを遠巻きに、見て見ぬふりをしてから再び教室を出ることにした。

次の瞬間一際大きな歓声とも悲鳴ともつかぬ猿の奇声が巻き起こり、しばらく歩いているとはるか後方から明らかに悲痛な叫び声が廊下中に轟いたが、その結末は僕の知る由ではない。

むしろ変に僕の弁当を欲しがるかおかしな輩が減っていい機会なのかもしれない。

弁当食べた人、ごめんなさい。

関田はしね。

僕は結局学食で空腹を満たし、午後を過ごした。八代味覚異常説が微妙に漂っていた気もするが、気にしないことにする。気にしたら負けだ。(?)

授業中、関田も美咲も優雅に船を漕いでいらっしやったが、友人の睡眠を妨げるような無粋な真似はしないのが僕である。さぞ気持ちよくお眠りなことであろう。

授業が終わった後、寝汗をたっぷり掻いた関田に、殴られた。理不尽だ。

そして、嵐のごとく学校で過ごすべき一日の工程は終了し、放課後がやってくる。

「美咲さんたちのお話は終わったんですか？」

僕はカバンを手にしつつ、近寄ってきた畑中に声を返した。

「ああ、ま、大した用事じゃなかったからね」

それよりも。

「いいのか？ 本当に」

「何がですか」

いや、文化委員が二人していなくなっちゃってもさ。

「何を言ってるんですか、八代君じゃないみたいですよ」

そこまで言われるとさすがに僕も自分が他人からどう見えている

のか気になってくるな。

「M」

「違うよ!」

それだけは絶対でない! うん、さすがに引っ張りすぎだろそれ。
「……そうですね、さすがにそろそろ笑いが取れなくなってきました」

もともと取れてないけどそこは突っ込んじゃダメなところなんだろうな。

「八代君がどう見られているか。そうですね」

言いながら畑中は教室を出る。僕もそれについて美術準備室へと向かうことにした。

「真面目だけど不真面目」

なんだそれ。ものすごい矛盾を感じるな。

「でもニュアンスは伝わるでしょう?」

まあね。痛いほど伝わってくる。

「冷たい」

ほう、それは久しく耳にしない印象だ。

「固い」

お堅いってことか?

「死んでる」

「おい!」

固いの漢字がおかしいと思ったよ! 冷たくて固いって完全に死
後硬直だもんな!

「何も返事がない。まるで」

「屍のようじゃないからな!」

この娘、Mの次は僕を死体に仕立て上げる気か?

「八代君、顔色が悪いですよ。ひょっとして死んでるんじゃないですか?」

「どんな状況だよ!」

「元から白かったですもんね、八代君」

「過去形にしないでください！」

怖いから。

「ああ、あとあれです。M」

「何回目だよ」

「何言ってるんですか？ Mは『マゾヒズム』のMじゃなくて、『もしかしたらこの人死んでる？』のMです」

無理からー！

「そんなに顔色悪いかな、僕」

「顔色が悪いといえますか、肌つやが綺麗ですよね。白いですし」
「そうなの？ 全然分かんないけど。」

「……ム力つくくらいに」

「ぼそっと小声で何か付け加えたよ、怖い！」

「髪もさらさらですし……ああ、なんか腹立ってきました」

「外見の話じゃなかったですよね畑中さん」

「ああ、八代君って鼻もちならないっていう話でしたっけね」
「恐るべし話題のすり替えマジック。」

「ってほら、もう着いちゃったよ、馬鹿な話ばかりしてるうちに」
「見覚えのある、古めかしい木の扉が目前にあった。ただ昨日と違うのは、美術室周辺をうろつく生徒が多数である点だろう。おそらく美術部の部員たちだ。」

「木造校舎の昼下がりには緑色の夏の光であふれている。こうして冷静に眺めれば、木造というのは実に趣のある視界だった。田舎とはいえこの町は所謂ニュータウンだ。その中に残る昔の名残、と言えば聞こえも悪くない。」

「ドア、開けてくれないか」

「畑中をチラ見して、催促する。」

「構いませんが」

「一瞬ハテナという顔をした彼女だったが、僕の要求を飲み、白い手を伸ばし古びたドアを開けてくれる。」

「畑中だって十分白いと思うんだけどなあ」

「はあ？」

いや、手だよ、手。

「男の八代君がそんなに綺麗な肌色をしてることが許せないんです」
「ついに許せないまで来たか……」

ガチャリ、とノブが回り、お化けでも出そうな感じで軋みながらドアは開く。鍵とかはかかってないのだろうか。美術準備室なのに。
「ほら、何をしてるんですか。入りますよ」

畑中に手招きされ、僕は急いで埃っぽい部屋へと踏み入れた。

「マーリン」

僕が入るなり、畑中はドアを閉めてそう呟く。狭くごちゃごちゃした部屋では反響もしないが。そして彼女は高々と右手を振り上げた。

「レアルクイール」

次の瞬間、本当に何が起こったかもわからないまま、畑中の手には白い羽根のようなものが握られていた。鍵と合言葉が変わったのだろうか。昨日はこんなじゃなかった気がするのだが。

「いいえ」

しかし畑中はきっぱりと言い切る。言い切りながら、その羽根をドアの鍵穴に差し込む。

「中から外に出る時と、外から中に入る時では違うのです」

「へえ？」

カチャリ、と音がしたかと思うと。

「……」

久しぶりに驚かされた。

新鮮だな。

ドアをくぐったわけではない。僕も畑中も。

立っていただけだ。なのに。

僕たちはあの、白く、そして無機質な小部屋のパイプ椅子に座っていた。

しんと静まり返った小部屋。ソファート、パイプ椅子と、小さな

テーブルの上にコップが三つ。何も変わらない、あまりに印象的すぎるこの無機質な部屋。

忽ちのうちに、僕と畑中は世界から外れていた。

「如何にも魔法っぽいな」

こういうのも嫌いじゃないさ。

24. 質疑応答

あまりにあっさり移動が完了してしまったため、この大理石造りの空間が今既に僕が普段いる世界じゃないという実感はあまり湧いてこなかった。もっともながら、移動した、という感覚を得ていないわけで、それも当然といえば当然であるのだが。

何の音もない。匂いも。おかしい出来事には幾分慣れたとはいえ、不思議なところだという感想を捨て切ることは僕には当分出来そうもない。

天井の四隅から降り注いでいる白い光というのも案外、白いのではなく単に色のない光なのかもしれない。そんなことは可視光線的にあり得ない話ではあるけども、もっと抽象的な段階でこの部屋には色がないように感じるのである。少なくとも白色というイメージより虚無色、そう表現した方がよりしっくりとくる。

しっくり、というよりも親近感——かな、この感じは。どういうわけかここにいると気持ちが悪く落ち着く。この部屋の色は、僕に似ているのかもしれない。

なんて、自意識過剰か。

「何をぼーっと座ってるんですか」

そうして部屋を一通り見回した頃、畑中が静かに立ち上がり、そんな風に声をかけてきた。

「ああ、ちよつとね」

「行きましょう」

僕もその声に従って立ち上がり、大理石の床を踏みならす。畑中は慣れた手つきで『裏』側の扉を開いた。扉を開くのに慣れた手つきもなにもない気はするけど。

「あれ？」

しかし扉の先を見た畑中がまずあげたのは、わずかに驚きを含むそんな声だった。どうしたというのだろう。疑問に思いつつも、そ

のまま部屋の中に入っていく畑中について、僕も扉をくぐる。

そしてこの扉をくぐる際は毎回思うことなのだが、僕はもう少し躊躇すべきだった。

「あら穂波、おかえり」

げ。机を囲むように配置された椅子の一つに座っていたのは、艶のある黒髪を長く伸ばした女性。以前見た時と同じ白衣を身にまとい、背もたれのない椅子に姿勢を正して腰かけて、大理石の机の上に広げられた新聞に目を通してしている。

「美鈴姉。ただいま」

畑中が形式的に挨拶を返した。ふむ。前も聞いた記憶があるが、美鈴さん、かな。

「と……ガキか」

彼女は言って、僕の方をちらりとも見ることなく手元の新聞に目を落とし、机の上のコーヒークップを口に運ぶと、中身をすすった。カップの中ほどに水面の見える暗黒は、まごうことなきコーヒード。芳ばしい香りが漂ってくる。

「こんにちは」

僕も、視界の端に金髪を探しつつ一応声をかける。人はまず第一印象から。よし、決めた。僕は好青年だ。好青年。

「八代です」

「誰があんたの名前を聞いたのよ。大体何？ 男のくせに声たっかいわね、気色悪い。コーヒーが不味くなるから黙ってて」

「ぐ」

そこまで言う？ しかもその言葉には抑揚がない。しかしフーとはまた違う抑揚のなさで、言葉の先端がいやに尖っている。それは言葉が尖っているのか、言葉に込められた気持ちに尖っているのか、はたまたその両方が尖っているのか。僕に知る術はないが、おそらく最後の線が濃厚だろう。犬を撫でに行ったらいきなり噛みつかれて犬が嫌いになった、とかそんな気分だ。その犬が尻尾を振っていないどころか低く唸り声を上げていることを確認しなかったのは、

どう考えても僕の過失だけだ。

思わず失礼な、これでも声変わりはしている！ と叫びたくなる衝動を抑え込む。

こらえろ、好青年。ここはこらえるんだ。

「ええと、私ちよつとしなければいけないことがあるので席を外させてもらいますね」

え？

「え、はたな」

言うなり、いそいそ、と畑中は僕たち二人の正面にある扉へと姿を消した。僕の発言の終わりすら待たずに。こんな素敵な空間に僕を一人残していくなど、彼女は意外に薄情な娘のようだ。おいおい、これは予想外だぞ。予想外もいいところだ。

「……あの」

「黙れつつったの。私が。聞こえなかった？ 言うこと聞けないんなら毛虫のたっぷり入った壺にでも突き落とすわよ。毛虫が口の中に入って窒息。立ちあがれば毛虫を踏みつぶし、足が滑って壁を登ることもままならない」

「……………」

怖え！

彼女は村上春樹が好きなのだろうか。いや、何が怖いってもう、その声の平板なこと平板なこと。そう、言うなればまるで彼女の胸のごとし。

「あんだ、ひょっとして今何かものすごく失礼なことを考えていたわね」

「馬鹿な！」

何故ばれたし！？

「もし私の想像が一ミリでもあんだの妄想を掠めてた場合、手足を縛りつけて生爪をはがした上で指一本一本に釘を打ち込みさらにそこにろうそくを立てて火をつけてあげるわ。痛いし熱いわよ」

無表情で淡々と拷問方法を述べる美鈴さん。怖い。僕は右手で額

を掴む。一ミリでも掠めてたらアウトなのだとしたら、じゃあ多分僕は存在してるだけでアウトなんじゃないだろうか？ 思春期の少年をなめてはいけない。それはもう、基準がなくても常にアウト状態、脳内はピンク一色である。

『嘘をつけ。どちらかと言えばお前の頭の中は七色だろう。整頓されてないパレットだ』

丁度耳の近くにあった腕輪からフーが、僕にしか聞こえないだろう声で囁いた。それだとそもそもどちらかと言っていない気がするのだが、まあいいか。七色ね、間違っていないいい比喻かもしれない。收拾がついてないという意味だ。

そんなことよりもまず、あなたは拷問マニアか何かなんですか？
「マニア？ はっ、人聞きの悪い。私はただ人を苛めるのが好きなだけ」

「堂々とS宣言ですか」

どうやら僕との相性はぴったりのようだ。畑中に言わせればの話だが。

「ちっ」

舌打ちも早々に彼女は乱暴な言葉を吐いた。

「新聞が読めやしないじゃないのよ。逐一鬱陶しいガキね、しね」

「僕は何もやってないはずだ！」

龍ちゃんはどこだ。こんな時こそあの高テンションが必要だぞ。

美鈴さんは明らかにイライラしつつ新聞を畳んで、長い机の脇の方へと寄せる。ついでにコーヒークップも。

「で、何」

そうしてから、切れ長の目をさらに細めて頬杖をつき、はじめて僕を直視する。なんとも面倒くさそうに。

僕は彼女を、改めて顔立ちの整った日本女性だと再認識した。現代人受けする顔ではなさそうだけど、江戸時代辺りなら將軍様の側室にでもなれたのではないだろうか。（今のは、多少失礼な比喻かもしれないが）どちらにしろ平均的な女性の顔立ちと比較しても美

人であることは確実だ。大人の魅力、というのだろうか。かわいいというよりも美しい。そういう感想をもって然るべき、大和撫子。

無論これは顔という真実を伴わない外見だけに観察の範囲を窄小した場合の話であり、そんな顔に浮かぶ冷えたような、見下したようなぞんざいな視線は、どうも投げやりな感じで僕に向けられていた。

「何、と言われましても」

とにかく、今のところ彼女は僕と対話してくれる気になっているらしい。気をお損ねになる前に適当に話を切り上げた方がこの場合得策と言える気もする。

「残念ね、龍ならいないわ」

それでもなおおっさりと、美鈴さんは残念すぎる事実を口にした。

「え、そうなんですか？」

「あんた目と頭が悪いのね」

いや、さすがにここにいないのは見ればわかりますよ。そしてさりげなく馬鹿って言われたか？ 今。とにかく龍ちゃんはいないのか。そりゃまいったな。彼には聞かなければならないことが多くあったのだけれど。

「ちよっと出張中、といったところかしらね。ニート面の癖に」
わかった。

わかったぞ。畑中の毒舌はこの人譲りだ、間違いない、絶対だ。畑中も元は無垢な少女だったのだ。彼女もまたこの人の被害者だったのだ。それにしてもニート面の癖に、ってかなり滅茶苦茶な暴言だよな。

さらにそれを如何にも理路整然とばかりに述べるから恐ろしいわけ。

「それで、何。私じゃ話し相手には不服ってわけ。ふうん」

「違いますよ」

そんなわけではない。そんなわけがない。

「ええと……ですわね」

しかし困ったな。実に困った。このある意味密室ともいえる空間でまな板悪魔と二人きりか。畑中、早く戻ってきてくれ。一緒にフオークダンスでも踊ろうじゃないか。

「ま、いいわ。座んなさい」

正面の椅子を顎でさしながら、美鈴さんはこれまただるそうに僕に命じた。

「いえ、僕は立ってま」

「座りなさい」

押し黙る僕。いや、この場合押し黙らされた僕、だ。

ドスの利いた低い声。ああもう間違いないな。畑中の悪いところはすべてこの人から受け継がれているようだ。逆に言えばこの人は、畑中からいいところを全て取り除いた最悪の人物である可能性も否めない。そうなると災厄だ。

「座れつつったの。私が。聞こえなかった？ 言うこと聞けないんなら熱々に熱した鉄板の上で匍匐前進させるわよ。肌が張り付いて熱いのよ？ もし立ちあがったりしたら硫黄に浸した羽根に火をつけて投げつけるけれど」

乗せるだけじゃなくて匍匐前進ときている。とても熱そうだ。というか死ぬだろそれは。ん？ もしかすると死なせることが目的だからそれでいいのだろうか。

いや、よくはないよ。

当然そんな目にあうのは嫌なので、僕は即行で美鈴さんの正面の椅子を引いて腰を下ろした。

「……どう？ 魔法のある暮らしは」

なんだかお手軽な製品か何かであるかのような言い回しだな、魔法。

「あなたも『魔術』ではなく『魔法』と言うのですか」

僕は反射的に、まさしくどうでもいいことを尋ねてしまう。また残酷な拷問方法を聞かされるのかとも思ったが、意外にも彼女はきちんと会話を成立させてくれた。

「そうね。穂波には魔術と言えと教えてるくせにそれはどうなの、って問題は残るけど。魔法は——魔法だわ。ええ。あくまでもね」
そういうものだ、と割り切ることを僕は近頃覚えた。

その話し方と態度にこそ問題はあれ、彼女自身からはそこまでの威圧感を受けない。むしろしなやかで、嫺やかだ。（重ねて申すが言動の話ではなく、対面した際の印象である）龍ちゃんよりは、そういう意味では話しやすいのかもしれない。いやしかし彼だつてある一時を境に豹変したわけで、彼女がそうでない理由はない。僕は心もち身を固くする。

美鈴さんは言つて頬づえをやめたかと思えば、今度は髪の毛をいじりながら不遜にもそっぽを向いた。対等な態度で僕と会話をしてくれる気はどうやらないようだ。特段それを望んでいるわけでもないけれど、ほぼ初対面の相手にその態度はどうかとも思う。

「まあ……いいわ。私に聞きたいことは？　あるんでしょ、たくさん」

そんな状態でそんな意外なことを言うものだから、僕は少し驚いた。

「龍に答えられる質問なら私にも答えられる。あんたがここにきた目的はそれでしょ？　あるなら聞いてやらないこともないわよ、質問。もっともそんなくだらないものは聞くだけに終わるかもしれないわね」

長く美しいさらさらの髪の毛を弄りまわしながら、彼女はつらつらと述べる。

「何？　ないの？　ないならいいで、私がえぐくてグロい拷問の話でもしてあげるけれど」

「……いえ、それは結構です」

勿論質問はある。あるが——

「私は何者か、つてどこ？　そこが気になる？　慎重なのね、ガキの癖に可愛げのない」

ずばずばと僕の考えていることを、僕が口にする前に言い当てる。

恐ろしい話だし、驚くべきところなのかもしれないが、ひとまずこちらとしてはあまりいい気分ではない。僕はにべもなく口をつぐむ。「寡黙ね、ガキ。そういうのは嫌いじゃないわ。この世に言葉を扱える人間は私一人で十分なもの。それ以外の人間が私と対等に言語を扱うことにはむかつ腹が立つわね」

全くもってぶっ飛んだ思想の持ち主のようだ。

「私は穂波の保護者、みたいなもんよ。牧埜宮清龍も同じね。私の名前はもう知ってるでしょ？ はい、自己紹介終わり」

終わっちゃったよ。

「で、質問は？ ないなら吐きそうになる処刑方法の話でも」

「いやいやいや、それは結構ですって！」

しかも拷問から処刑へとグレードが上がっている。僕をどうするつもりなんだこの人は。

「ふむ、では一つ質問をさせていただきましようか」

そうしないと何を言い出すかわからないからな、この美鈴さんとやら。

「あなたがたにとってジョーカーとは、どういう男です」

僕は実に平坦に、そして大胆に美鈴さんの喋り方を真似てそんな風に質問を繰り返した。それを耳にした彼女の、髪を弄ぶ手の動きがぴたりと止まる。

「ふうん……ガキはガキでも少しは頭の出来がマシなガキのようね、ガキ」

そしてゆっくり、顔を再び僕へと向ける。しかしその目は冷たさを増しているようにも見えた。いや、実際そうなのだろう。

「まるで私がジョーカーと繋がりががあるような言い回しをするのね」

「あなた、ではありません。あなたがた、です」

訂正。しばしの沈黙。動きの停止。

僕はまっすぐに目の前の漆黒の双眸を見つめる。

「はっ、いけ好かないガキだわ、あんた」

そうですか？ 僕は自身を好青年だと評価しているのですがね。

「それは大そうな思い違いね。それかもしくは評価基準に問題がありすぎる。どう見積もったって非好青年がいいところ」

それは非行青年のことだろうか。否定の文字一つくっつけるだけでこんなにも意味が変わる言葉だったとは。

それで、質問には答えていただけるんですか、美鈴さん。

「……ジョーカーは、そうね、私たちにとって怪盗ルパン三世ってところね」

ルパン三世。この人、文字を隠しもしないつもりか？ まあそんなことはどうでもいいとして、その揶揄がいったい何を表すのか僕にはなんとなくわかる気がした。

「それだけですか？」

「それだけよ」

即答された。結構な話である。相対的見識を求めたのであるから、すべからくその回答は間違っていない。確かに。僕の求めた解だ。途中式を組み立てる条件には十二分にふさわしい。

「ルパン三世。ふふ、言い得て妙ね。我ながら素晴らしい嘲弄だわ」
美鈴さんはどこか遠くを見つめて笑った。あまり上品とはいえない笑顔で。

「彼が――ジョーカーがこの腕輪を狙っている、いや狙っていた、という情報は？」

右手の腕輪を見て、僕は質疑を続行する。

「ルパン三世よ。わからない？」

本人が犯行予告、か。腕輪を盗みにまいます、とでも？ それはあまりに道化じみている、そんな馬鹿げたことをあの男がするだろうか。

「それがしてきたんだからびっくり。そもそもそんな腕輪に価値があるなんてのも初耳だったわ。ぶっちゃけ私も龍も、どうぞご勝手に持ち去り下さい、てなもんよ」

「……へえ」

実際この腕輪のどこに価値があるかは僕にもわからない。この人

にも分からないとなれば、それはやはり――やはりこのメッセージか？

意味の分からない英文は、腕輪の手の平側の部分に未だ存在し続けている。消えたりしていたらそれはそれで困惑することになりそうだが、今のところその心配をする必要もなさそうだ。

いや、しかしそれならこの人たちだって気付いているはずだ。こんなものは腕輪を手にとってほんの少しでも眺めれば発見できる。

「このメッセージは？」

「は？」

「いえ、なんでもありません。少し寝ぼけてました」

反応からするに、知らないようだ。突っ込んで聞いてこようともしないが、本当か？ 演技だろうか。だがしかし知っていることを知らないという演技をする必要などあるだろうか？ あるとすればそれは一体何故。

いや、今は考えるのはやめておこう。本題からずれてきている。

「それで質問は終わり？」

「まさか」

まだ聞きたいことはあった。それに僕には重大な任務があるのである。

この人を殴らねばならないという重大すぎる、僕が背負うには少々荷が重すぎる任務が。荷が重いと言うより、気が重い。

殴ったら本当に拷問されそうだな。

だからとりあえず僕はこう切り出してみる。

「美鈴さん」

「気易く名前を呼ばないで頂戴。私を呼ぶ時は美鈴姉と呼べ」

え、そこ？ という突っ込みは、まあしない。突っ込めばそれで僕の任務は完了なのかもしれないが、そこで僕の人生は終了なのかもしれない。さすがにそんな馬鹿な話はないだろうけど、人の行動を抑制、束縛するのは明確な恐怖に他ならないわけで、僕がこの人を殴るという行為におどましさを感じないかと言えば答えは一択、

ノーしかない。

しかしなんだろう、封じ屋の大人の間では名前の呼び方を強制することが、もしかして流行っていたりするのだろうか。

「では美鈴姉さん」

「気持ち悪い！」

とたん、叫喚したのは美鈴さんだった。

「気持ち悪いわ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い！ 怖気が走るわよ、鳥肌が立つ！ 姉さんだなんて呼ぶのはやめろ！ 美鈴姉！ ねえ、で切るのよ！ 馬鹿かあんたは！」

なんだろうか。何か触れてはいけないものに触れてしまったらしい、両手で身体を抱くようにして息切れしている美鈴さんを前に、僕は一つ咳払いをした。

「えーと、ああ、はい。すみません。美鈴姉」

「……何よ」

とてもじゃないが穏やかな雑談を繰り出せる空気ではなくなってしまった。が、繰り出すしかない。僕はKYになることにした。

「美鈴姉、頭の上に埃がついてます」

「あー、そう？」

あまりにベタ。しかしベタベタがベターなのだこういう場合は。僕に必要なのは『美鈴さんを殴ったという事実』にすぎない。それだけあればいい。

とか思ってるうちに美鈴さんは自分の頭を掃い始めた。ふむ、美人がすることはすべて様になると聞いたことがあるが、しかしこれはなかなか滑稽な動作だな。

「とれた？」

「ああ、とれてないみたいですぼくがとってさしあげますよ」

「……何で棒読みなのよ？」

「きのせいです」

言うが早いのか、僕は立ち上がって縦に長い机を迂回し、彼女の元に辿りつくと、軽く彼女の頭を叩いた。

平手で、ポン、と。

「ちよっと、何か痛い気がするわ。あんたそれ、本当に埃取れてるの？」

「ええとれました」

「だからなんで棒読みなのよ」

僕は美鈴さんの質問には答えず、そのままぎこちない動作で元の椅子まで戻り、着席する。よし、任務完了だ。完了した。そう言い聞かせ、冷静になろうと努める。

そして、質疑を再開した。

「畑中は一体どういう種類の魔術師なんです？」

25. トランプ一万能者

「畑中は一体どういう種類の魔術師なんです？」

間に挟まれた明らかに不審な話題と僕の（決死の）動向について、目の前の黒髪美人は気にかける素振りもなく、僕の質問に対しては瞼を半分降ろし、思考する。

「どういう種類のと聞かれればそれはまあ、そうね。おそらく『封印術師』ということになるわね、多分」

おそらく？ 多分？

なんだそれは。

「なんて言えればいいのかしら。わかりやすく拷問で例えたとすれば」
「やめてください」

「顔に水滴を落とすタイプの拷問があるじゃない、あれって水責めというよりは睡眠妨害系よね。本質的には同じなんでしょうけど」

「やめてください！」

僕の悲痛な声はほんの数メートル前方の美鈴さんにすら届く気配がなかった。遺憾だ。

「つまりはそういうことよ」

「全然わかりません」

「まあそうですね」

「……………」

拷問の話したかっただけだろ、あんた。

「種類、ねえ。穂波にはちょっと例外的な話になっちゃうのよね」

美鈴さんはだるそうに髪を弄ぶ作業を再開し、小さく欠伸をする。まことに暇そうだ。

「系統に型、か。そりゃあ分類しようと思ってできないなんてことはないんでしょうけど」

「……？」

「そのよくわからないという顔。鬱陶しい」

……僕には薄弱な機微でさえも許されないというのか。

「する意味がないのよ」

「といいますと？」

「その鬱陶しい顔をね」

「一瞬でも本筋の続きだと思った僕が馬鹿でしたともさ！」

彼女は何とでもないという風に、髪の毛をいじり続け、指に巻きつけたりしている。変に子供っぽく見えてどこか諧謔的でもあった。見方によっては加虐的ともいえる。まあ、自己申告でSだしな、この人。

「それでなんだったっけ？ 漆責めのエロさについてだったかしらね……」

「違いますね」

「あら、じゃあくすぐり責めのエロさについてだったかしら」

「違います」

「鰻風呂？ そう、鰻風呂だったわね、あれは拷問というよりもむしろプレイだわ」

「そもそも拷問の話ではないですね！」

これ以上続かれても嫌なので僕が耐えきれず突っ込むと、美鈴さんはわざとらしくため息をつく。

「はっ、ノリの悪いガキ」

破壊的なまでに乗り方の分からないノリだった。

「まあ、閑話休題。あの娘は少し変わってるのよね。特別——いえ、特別というよりも、特異なの」

特異。他と違ってしていること。僕の持つイメージからすれば、それはあまり聞こえのいい言葉ではない。畑中自身からはそんなことは聞いていないが。

「本来魔術師ってのはね、一つの魔術に特化するもんなの。他のことには手を出さない。というか、手を出してうまく折り合いつけてやるなんてことは通常不可能なわけ」

不可能とまで言い切るのはどういうことだろう。

「例えていうなら、ラケットスポーツ全部でプロを目指すようなもんね。ああいうのは確かにラケットを使うっていう部分は似てるけど、実際は全然違うスポーツよね。逆にラケットを使うところが共通してる分、並行してやったりすればフォームがおかしくなっちゃうのよ」

例えば、卓球。例えば、バドミントン。例えば、テニス。僕はそのどれも極めようとした経験など一切合財ないため分からないが、その例えは存外分かりやすい。同じジャンルで括れるようで、括れないスポーツたち。根柢の部分が違っている。なるほどそれでは確かに、専攻を決めるのが賢いやり方なのかもしれない。僕は魔法を格闘技や学問のようなものと、多種多様なスキルがあればある程に強くなっていく、相補間的関係の技術なのだと思っていたが、そうではないらしいな。

「魔法は、まあその種類はそれこそ豊富で一口には語りきれないけれど、大雑把な括りでいけば追跡術、結界術、封印術、生成術の四つってところかしらね。その内の一つを選択して、まあ俗な言い方をすれば専攻する」

専攻、ねえ。

「私の場合は追跡術。詳細は省くけれど」

省かれた詳細は看破するとして、だ。

追跡術？

今まで僕が読んだファンタジー物に、そんな魔術の存在は認められたことがあっただろうか。大体が元々、追跡なんて言葉はファンタスティックとは縁遠い響きだ。少なくとも僕はそう思う。現実的というか、唐突に無機質な感じが漏れ出てしまっていて、とても魔法という雰囲気ではない。追跡術なんて言い方をするとなおさら、殺伐とした軍事関係を連想させてくれる。

「無機質で現実的で、軍事関係。確かに、以前にも表の人間に同じようなことを言われたけどね、そんなのは勝手な先入観との甚だしき懸隔だわ。魔法使いって言い方をするとなそういう誤解を招くから

穂波には魔術師って教えてるわけだけど。そんなもんよ、魔法使い
つつつても結局は人なんだから。人と人のあるところに生じる現象
なんてたかが知れてるわ。ファンタジーだろうとなんだろうと、結
局人の造る物語の根幹は人間関係でしかない……それは雄弁に、痛
いほどに現実世界そのものを語ってる。まあ、それはいいとして」

美鈴さんは、はたと髪と同化したみたいな手の動きを止めた。

「あの娘にはね専攻ってものがない。それにね」

そして、よく意味の分らないことを口にしたのである。

「魔法の使い方をごで学んだのかわかんないのよ」

「……………は？」

僕は固まった。石になった。

数多の死線をぐぐり抜けた僕の耳もついにいかれたか？　しかし
美鈴さんはなんてことのない風に、あくまでも悠然とした態度で、
僕をぼんやりと眺めながら言う。

「そうね、それは正確には私たち——龍と私には、あの娘に魔法を
教えた覚えはないってことなの。もっともこの二年くらいは私たち
からも手ほどきしてるけど、穂波の魔法は私たちのものとは違うの
よね、根本的に」

どうなんだ、それって。それって、どうなんだ。

「それってどうなんですか？」

動揺のせいで同じことを三回も繰り返してしまった。

「すごく大問題ね」

大問題にはとてもじゃないが聞こえない口調のまま、美鈴さんは
上の空。透明な空気を吸ったり吐いたりして、また口を開く。

「とにかく、あの娘にはなんでも扱える。どの種類の魔法だろうと、
ほとんど制約もなしに。その中でも飛びぬけて上手く扱えるのが封
印術、ってだけの話よ。一応龍の専攻がそれだしね。そういう言い
方をするなら追跡術師でもいいのかもしれない……何でもいいけど、
バーサティリティなのよ、穂波は。そういう魔法使いは俗に、万能
者^{トラ}なんて呼ばれるわ。それがどれだけ特異なことかあんたにはわっ

かんないんでしょうれどね」

トランプ。万能者、ね。トランプにはそんな意味もあったのか。ふと、畑中の発言がリフレインする。

『私はこの分野の専門ではありませんから魔術単体の術式はごく単純なものです——』

そもそも分野とか、専門ではないとか。

そういう話じゃない。ということらしかった。

専門じゃなければ、使えない。それを畑中は平気な顔をして使っていた。

「……なるほどね。理由はそれか」

僕は呟いた。一人で、静かに、小さく。

「理由は、それか」

二回、同じことを。

「ま、ここからあんたの護衛に穂波が選ばれたんもそういう理由が大きいわ」

「……でしょうね」

「私と龍が動くのが面倒つてのもあったけど」

「そういうことは心の中でのみ言っておくべきだと思いますがね！」

「私はSだわ」

Sだからと言ってそれは人を不愉快にさせていい理由にはなりません。

「そうなの？」

「……………」

それが当然であるかのようにキョトンとしないでください！ 僕が間違ってるような気になってくるじゃないですか。

「これで回答になったかしら？」

「ええ、ありがとうございます」

正直、少し予想外の要素がふんだんに含まれ過ぎていたが、回答としてそれは予想以上の収穫だった。

これでまた一つ、たどり着いた、と言うべきか。

「まだ質問をしても構いませんか？」

「ええ。私の気が変わらない限りはね」

ともすれば信号よりもコロコロと気の代わりそんな人を前にして躊躇する暇はないだろう。では早々にもう一つ。

「ここは封じ屋の中でも、32号機関という組織らしいですね」

「ええ、そうね。誰からそれを聞いたかは知らないけれど」

相変わらずどこを見ているか分からないような焦点で、美鈴さんはぼうつとしている。

「32号ということはつまり、31号や、30号機関も存在すると……そういうわけですね？」

「そうね、その通りよ」

では。と、僕は一つ息をのみ込む。

「少し質問が飛躍しますが――あなた方『機関』同士における連携は、どれほど行われているのです？」

美鈴さんは再びその焦点を僕に合わせる、僕の目に。

この人は解り易いな、反応が素直だ。錯覚だろうが、周りの空気がどこことなく冷たい。

「どういう意味？」

「そのままですよ。末端組織がそれ単体で動くということもあるでしょうが、話を聞く限りじゃこの32号機関にはあなたと牧埜宮さん、そして畑中の三人だけのようだ」

そしてそんな少人数では遂行しきれない職務だってなくはないはずである。

「僕は――僕はね」

口を開こうとしない美鈴さんに代わって、僕が淡々と話を続ける。

「人に良いように使われるのは、大嫌いなんですよ」

「……それはジョーカーのことを言っているのかしら」

冷えた目で、美鈴さんは僕に対して斜に構える様相だ。暖かさのない机を挟んだ二人の間に、決して心地よいとは言えない空気が流れ始める。

「質問に答えてもらいましょうか」

「繋がりのない話をしだしたのはあんたのほう、逆ギレはやめてほしいわね」

彼女はやれやれ、とおどけて首を振り。そして僕からふっと目を外した、かと思うと。

「気が変わったわ」

ぶっきらぼうに質疑応答を打ち切ったのである。

「！……そうですか」

ではここからは。

美鈴さんに答える義務はない、ないが。

僕の言葉は、詰問になる。

「あなた方の目的はなんですか」

「あら、それは質問かしら？」

しれっと流された。答える気がないのならそれでいい、どうせ質問をしたつもりもない。

「ジョーカーを倒すことですか」

「さあ」

彼女のその受け流すような態度に構わず、僕は立て続けに言い倒す。

「そもそもこの腕輪は何なんですか」

目の前の黒髪美人の反応など気にしない、否、必要ない。

「僕は考えました。誰かがこの腕輪を狙っている。そうなればこの腕輪には何か価値がある、もしくは何か用途があるのでは。と。結局直接的なそれらを発見することはできませんでしたが、畑中はこう言っていた。何の変哲もないフツウの腕輪、だと。そしてあなたもこう言った。そもそもそんな腕輪に価値があるなんてのも初耳だった、と。だとすれば、何らかの方法であなた方——いえ、この場合は牧埜宮さんが、ジョーカーにこの腕輪に価値があると思わせた。そう考えるのが自然、必然、常道。もっとも、あなた方がグルになつて僕を騙している可能性は捨てきれない、だからこの場合、なん

ですが」

美鈴さんは僕を見ない、見ようとしなない。それでいい。

「そうやってくると、そうやってジョーカーにこの腕輪を狙わせるように仕向けた意味はなんでしょうか。それはつまり、餌。餌だ。それがこの腕輪に与えられた役割。ジョーカーをおびき出し、倒すためのね。いや、倒すなどという言い方はあまり適当していない。もっと下衆な言い回しをするなら――殺す。消す。とにかくジョーカーという存在は、あなたたち『封じ屋』にとってあまり良好とは言えない関係にあるらしい。反応を見る限りは。だからそれを何とかするための策略。まあ、そう呼ぶには少々お粗末ではありますが、あなた方の目論見はある程度成功していたと言える……現状、僕がこうしてジョーカーに付きまとわれている以上はね」

大理石に囲まれた空気は、濁ってはいるが、重くはない。これでもいい。

「つまり僕も、その延長線上の存在でしかない。僕はあなた方に使われているだけの、囚、そう呼ばれるのも馬鹿馬鹿しい、餌だということだ。正直いい気分ではありません。そして畑中が僕の護衛に付けられたのも、そういうわけだ。ジョーカーとコンタクトが取れないままに腕輪を奪われるわけにはいかない、だから常に監視している人物が必要だった……護衛というよりも監視役ですか。監視。これもまた、気味のいい言葉ではないですね、ええ。僕の限りにおいては、その単語は僕の命を守る為に十全だとは思えない。まあ、どちらにしろタダで僕を守ってくれてるというのですから、それに関しては目を瞑りますが。しかしその目的もあくまでサブだ、メインはやはり、ジョーカーの直接の討伐、それに尽きている。だからこそ畑中だ、彼女はいろいろな魔術が使える。そもそも直接対峙してしまえば、護衛という理由で、正当防衛という理由で、ジョーカーを殺すことができる」

僕はそこまで言い切ってから、一つ息をつき、

「……違いますか？ 美鈴さん」

そう、対面する美女の表情を、ゆっくりと窺った。

そして彼女はまた、何もない空間に焦点を合わせたまま、長いまつげの目で瞬きして。溜息が出るほど綺麗な黒髪の後ろ髪を両手でかきあげて、そして言った。

「違うわい」

再び僕にやられたその双眸に浮かぶ表情は。

「なかなかの洞察と推察ね、ガキ」

さながら、龍ちゃんのそれにもにた、ポーカーフェイスの無機質な微笑みだった。

「でも、だからって何？ 逆に私から問わせてもらうけど、あなたの目的は何なのかしら？」

瞳に浮かぶ、魅了されるような遊興。紅い口元に浮かぶ、ぞっとするほど美しい薄ら笑い。龍ちゃんの造る表情よりもっと妖艶で、それなのにもっと無感情で、無感動。

「僕の目的ですか」

そういえばついさっき、畑中からも同じようなことを聞かれたな。

「そんなのは決まりきってますよ」

当たり前だ。畑中には嘯いたが、僕が一体何をどうしたいか、そんなものは決まっている。

「身に降りかかる火の粉は払うものです……」

だから、僕は。

いい機会だと思った。絶好のチャンスだと思った。

とはいえ、理由なんてものはなんでもいいのかもしれない。それに一度くらいは、そうなってみたいものなんじゃないか。なんて、正当化してみたりもした。それは少年の夢であり、いや、そもそもこんな世界に足を踏み入れた時点で、そうなれるんじゃないかって、そう思っていた。そう錯覚していただけかもしれないけど。

いや、往々にして、理由なんて必要ないのかもしれない。それはインパルス、所詮ただの幼稚な衝動なのだろう。いや、絶対そう。

だけど。いや、だから。だからこそ僕は。

「笑わないで下さいよ」

僕の目的は。

「僕の目的はね——」

26. 礼は零のままで

結論から言えば、美鈴さんは大爆笑だった。

まあ、いいけど。さすがに質の悪いあれだったのは認める。

それで気をよくしたのか、彼女はもう一つだけ僕の頼みを聞いてくれると言いだし、僕は一冊、目に付いた魔導専門書とやらを読ませてもらうことを提案してみたのだが、僕がそれを読むことを許された時間は三秒であり、三秒故に出来る事といえどこかのプロレスラーよろしく「ダー！」と言ってみるとか、あるいはパラパラ漫画の如くページをただめくり落とすことだけで、なんだかんだ彼女は僕をからかっていたにすぎなかったわけだ。

そんなこんなで帰宅したのが数時間前。大したことはしていないのに、どっと疲れた。

まだ父は帰ってこない。もうそろそろ帰ってきてもいいのではないかと、とか極淡すぎる希望も気まぐれで抱いてはみるものの、やはり現実是非情である、一週間は帰ってこないだろうというのが僕の本心というか達観の至りだ。

「なあ、畑中」

何故か台所でエプロンをつけて、さらに鼻歌混じりで食器を洗っている栗毛の居候に、僕は声をかけた。

「君はいつまで僕の家にいるんだ」

食後、ソファアに腰かけたまま正面に見るテレビのチャンネルを適当に回しつつ、何度目になるかわからないその質問を繰り返す。

「だから、言ってるじゃないですか。八代君の身の安全が保障されるまでは私が護衛としてこの家にいなきゃだめなんです」

「何なんだよ、その安全が保障されてる基準ってのは」

「例えば八代君の手首が突如大爆発して腕輪ごと吹っ飛んだら、それはそれで安全なんじゃないでしょうか」

「せめてハッピーエンドで終わりたいなあ！」

振り返って思いきり叫んだ。この際突っ込むポイントを分散させるのはやめておく。

「しかし、八代君は元々死んでるようなものじゃないですか」

「何が、しかし、だ！ さすがに僕も傷つくぞ」

それこそしかし、だんだん酷くなってきたくないか、僕に対する罵詈雑言のレベル。

「八代君、シンデレラですもんね」

「脈絡がなさすぎるせいでそのセリフには非常に明確な悪意を感じざるを得ない！」

どうせ死んでれら、とかだろ。

「っっ！ 心を読まれました」

「僕にも心を読む才能があったなんてな！」

なんでだろう、全然嬉しくないや！

「例えば八代君が死んでれらだったとしたら」

「いや、まずやめてくれよその不吉な表記は」

「ではシンデレラだったとしたら、どうします？」

どうしますと言われてもな。そもそもシンデレラって女の子じゃないか。

「シンデレラって確か『ガ、ガラスの靴を置いていったのは王子様の為なんかじゃないんだからねっ！』ってやつですよね」

もはや使い古されたネタを持ってきやがった！

小学生の時いたよな、シが上手く書けない奴。シとツ。ソとン。今でも上手く書けない女子を僕は多数知ってるが、そんな奴らはきつとロクな大人になりはしないだろう。

「そこから地を這うような努力を重ねた結果シンデレラは立派なフレイムヘイズに」

「ならない！」

ほら見ろ、やっぱりロクな大人にならないじゃないか！ いや、まさかシンデレラはそれを言うための複線だったのか？

「でも最後、継母さんはお姉さんたちにガラスの靴を履かせる為に

足の指と踵をそれぞれ切り落としちゃうんです。結局ストッキングが血で濡れているっていう理由でばれちゃうんですけどね」

「継母はシンデレラだったってオチか」

「？ 何言ってるんですか、八代君」

「ここ一番でとぼけただと！？」

畑中は、場に似つかわしくないほどにつこりと微笑む。

「全く八代君ったら、たまによく分からない気持ち悪いこと言いますよね」

「気持ち悪さだけは伝わってるのかよ！」
最悪だ！

「でも実際八代君がシンデレラだったら一生奴隷のままでしょうね」

「Mだからな」

僕は先廻りして開き直る。

「そうだ、逆に畑中がシンデレラだったらどうだろう。」

「……どちらかと言えば継母か。」

まあ、そんなことを言われればさすがの畑中と言えど怒るだろうな。結構女子から見ても嫌なタイプの人間だろうし。ここは彼女を立てておいてやることにする。

「畑中、君にはシンデレラ、結構はまり役だと思わないか？」

「私はどちらかと言えば継母です」

自分で言っちゃった！

「美鈴姉から教わったことですが、人生何事も経験です。嫌われ者の役回りを演じることも時として人を成長させるのですよ。だから私は敢えて継母を選ぶのです」

なかなか良いこと言うじゃないか。

「のこぎりで人の身体を切り刻める経験なんてそうそうありませんし」

「僕の関心を返して！」

「というか露骨に美鈴さんの影響がでてるよ怖い！」

「そして私は言うんです、中に誰もいませんよ」

「そりゃ指先や踵の中に人がいたら怖いよ、って君絶対ヤンデレラ分かるよね！」

さて、閑話休題。

「この前も聞いたけどさ、君嫌じゃないのか？ 僕と一緒に寝泊まりするなんて」

「別に気にすることないじゃないですか。むしろ血気盛んなお年頃なんですから、喜び勇むべきですよ、八代君」

「わーうれしいなー」

畑中秘伝スキル、棒読み発動。

「む。その反応、私に女性としての魅力が足りていないということですか」

「そういうわけではないよ」

いや、逆。真逆だ。君が魅力的な女性じゃなかったらむしろそれこそ僕としては万々歳。

なんてそんなこと、言えるわけもなく。

「君こそ、僕みたいな美青年と一緒に寝泊まりできるなんて喜び勇むべきじゃないのか」

「しんでください」

間髪入れずに！？

「身の程をわきまえろと言っているのです」

「待ってくれ、話せば分かるよ！」

「問答無用です」

五・一五事件の再発だった。八代死せども自由は死せず。

いや、その事件で殺されたのは犬養毅だけど。

台所からの水音が聞こえなくなったと思ったら、畑中はいつの間に近づいてきていたのか、外したエプロンを腕の中で畳みながら僕の隣に腰を下ろす。ソファアの布地が、女の子一人分の質量だけ隣にふわりともっていかれた。今日は至って普通のTシャツに、至って普通のジーパンを着用している彼女。僕はチラリと隣に目をやってその服装を確認、再び視界にテレビを映す。

なんで何の躊躇もなく物理的接近を図ってくるのかね、この娘は。
「ふふ、こうして並んでいると夫婦みたいですネ」

その上そんなことを言うのだからけしからん。

「……残念ながらそのアンチATフィールド攻撃にはもう慣れたぜ」と返したのが逆効果だったのだろうか。畑中は一瞬押し黙って、諦めて立ち上がるのかと思っていると。

トン。と。

「？」

僕の肩に何やら重量が加算される感覚。何やらさらさらした何か
が僕の腕を撫ぜる感覚。

はて。

この感覚は一体。

「……………」

肩に乗った物体の大きさはスイカ大か。ふむ、人間の頭のような
すべすべした手の平が半袖から出た僕の腕をゆっくり撫でる。
気持ちがいいような。

女子特融のなんかいい香りが僕の鼻腔につき、畑中の柔らかい頬
が僕の肩に。

……………。

「っははははは畑中さんんん！？」

「どうしたんですか、八代君」

「あれ、この部屋クーラー効いてるはずなのに超暑いよ、あつつい、
なんでだろう！」

ていうか、なんだか温かいし柔らかい！

「これは健全なインターシップというものです」

「全然健全じゃないどころかむしろ昂然というか超然というか完全
に万全に十全なまでに欣然かつ一方的な、ってそれを言うならスキ
ンシップだろうが！」

まず完膚なきまでに健全の意味を辞書で調べてこい！
ついでにインターシップの意味もね！

ていうかよく舌回ったな僕！

「ふふ、八代君の腕、あったかいですね」

「ややややめ、やめるんだ」

僕の理性がまだ少しでも残っているうちに、離れるんだ！ 君を傷つけたくない！

覚醒系のキャラクターが言えば格好いいのかもしれない台詞も、今の僕が口にすればそれはただの変態的台詞でしかないわけで、僕は半妖から妖怪になってしまいうのを必死になって押さえつつ、無我の境地に立ち無意識のうちに様々なテニス技を繰り出しながらも、オーラ力を行使して畑中を振り払い、立ちあがった。

つもりだったのだが。

いや、立ちあがったのは立ち上がったのだが。畑中も僕に身体を密着させたまま、というより纏わりついたまま一緒に立ち上がっていたわけで。しかもほっぺたどころか、何かもつとマシユマロみたいに柔らかくてふんわりしたものが薄いTシャツ一枚を隔てて僕の腕に当たっているような――

これはまさかひよつとしてひよつとするといやしなくても。

「……」

僕は。

「……………逃げるっ！」

全力で逃走した。

ああ、逃げたさ。

全力で畑中を振り切り、リビングの戸をぶち破りロケットスタート、そのまま全速力で階段をどたと駆け足で登りきって、部屋に入って電気をターンオン、瞬間鍵をクローズド、ベッドにダイビング。そして僕の身体が理性をとり戻し鎮まるまで、しばしの時を置く。

『無様だな』

馬鹿みたいに火照る顔を枕に押し付けていると、腕輪から罵倒を受けた。

「……何とでも言ってくれ」

『あの程度の色仕掛けにも上手く対応できんとはな、失望したぞ』
何でクラスメイトで僕の護衛役のはずの畑中が僕に色仕掛けだよ。
しかし畑中も何のつもりなんだか。じゃれ合うには度が過ぎている。

「――実際、だめだよな。もしもの場面で色仕掛けなんてされたら、
確実に思考力が鈍る」

『冴えない男ほど色仕掛けに弱いものだ。経験がそもそもないのだからな』

「ぐ」

フーの言葉には棘があったが、いやむしろそれは棘そのものだったのだが、案外真理を突いている気がした。事実を指摘されることほど悔しいことはない。何せ反論ができないわけで。僕はさらに強く、枕に顔を押し付けた。

ああ、なんだかあの柔らかい感覚がまだ腕に残ってるや。
じゃなくて。

「……お前にはもういろんなことを聞いたけどさ、もう一度だけ教えてくれないか？」

口がタオルケットでもふもふして声が変に籠る。少し息苦しい。

『私が貴様の疑問を退けたことが今まであったか？ いや、ない（反語）』

どこかがおかしな台詞だったが、それは何とも心強い、心嬉しい気分僕をしてくれた。フーは少なくとも僕に対しては、至誠的な対応を心掛けてくれている。助かる話だ。

僕はベッドの上で寝返りを打って仰向けになり、蛍光灯の眩しさを手で覆い隠す。

「メルシングは、導力を持たない人間には知覚出来ないんだよな？」
『確かに私はそう言ったかもしれないが、本当はそれは正確ではない』

その声と同時にふと気付くと、蒼髪人形と化したフーが僕の腹の

上で胡坐をかいていた。

「というの？」

『今、私のこの声も、あるいはこの姿も。これは他の人間に見えては困るものだ』

そうだろう？ とフーは僕に向かって首をかしげる。僕は頷いてそれに返した。

『だが、これは厳密にはメルシングだから、ではない。メルシングであれば、その趨勢を一般人に見見されることを好まない物が多数だから、だ』

僕は何も口を挟まぬまま、ただ耳を傾ける。

『この具現化している体は、前も言ったように、貴様の力を借りてやっているものだ。しかしその力をどれほど使うかは、こちらで調整していることなのだよ。つまり、導力を持たず、魔導師としての素質のない人間には見えない程度に、自身がこの視覚的に存在する濃度を意識的に決定しているのだ』

「ほう……」

つまり、意識的に僕の力を多く使えば、その分君らはこの現実世界により深く干渉できるようにもなれる、ということか？

『ああ。だが多くのメルシングがそんなことをする意味はないし、利益もない。大体そんなことをしてしまえば早々に『封じ屋』に見され、討伐されるのがオチだ。メルシングの知能は概して高くないが、それが分からぬほど低くもない』

フーはそれだけ言うと、再び僕の腹の上からその姿を消した。彼女の言葉を借りれば、自身の濃度を低くして僕の視覚では捉えられないようになった、ということなのだろう。

「なるほどね。解った。ありがとう」

これで。

これで大体の目星は——ついた。それに一応、冷静にもなれたしな。

「後は時が来るのを待つだけ……か。口に出してみるとなんだか拍

子抜けだな」

でも、まだやるべきことはある。僕は寝転がったままジャージのポケットをまさぐって、銀色の携帯電話を取り出した。折りたたみ式のそれを開くと電話帳を起動し、ある人物の名前を検索。

ちなみにこの辺の操作方法は畑中から教わった。さすがは畑中、万能のアーティストにして華の女子高校生、けーたいもお手の物だ。携帯電話使い方講習を開催していただくにあたって軽く愚弄を受けたことは言うまでもない。もっともそれは甘んじて受けるのが筋だと思ったので、僕はさして反論することもしなかったのだが、それが原因なのか、気がついたら僕の携帯電話のプロフィールに「機械音痴」などと書き加えられていたのは間違いなく畑中の犯行だろう。とにもかくにも。

ジョーカーの名を液晶画面に表示させ、僕は通話ボタンを押す。一回のコールの後、それはあっさりと繋がった。

「……これはこれは。君の方からお電話頂けるとは、いたく重畳」
毎度の如く、熊が唸るような、それでいて艶のある低い声が僕の鼓膜を揺らす。

「本当は電話なんかしたくはなかったがな」
それは本心であり、確かな真実だった。

「そう言うな。私は嬉しいよ、ジョーカー君」
あんたが嬉しいのが嫌なんだ。しかしそんなことをいちいち言うのも面倒だし、スマートじゃない。僕はすぐに本題を切りだした。

「今日、美鈴さんと会ってきた」

「ほう。行動が早いな。それで、動向は如何だったかな？」

「彼女を殴ってきた」

即答してみせた。正確にはそうではないのだが、そう表現しても差し支えはないだろう。するとジョーカーは急に黙りこくり、そしてしばしの静寂の後、独特のくつくつとした笑い声が響き始めた。僕はそれをやり過ぎるべくベッドから起き上がり、開きっぱなしだったカーテンを閉める。

「殴った……美鈴をか。そうか、殴ったか。ふ、くく」

そして再びベッドに腰掛け、受話器を左手に持ち変える。ツボにでも入ったのか、僕の言葉を聞いてからジョーカーはしばらく小声で愉快そうに笑い声を立てていた。

「ふ……いや、失礼した」

そして調子を元に戻し、まだ少し笑いの混じった声で謝罪の言葉を口にする。

これでさらに、確信をもって核心に近づいたと言える。いや、もはやただの確認か。

「あんたと長電話するつもりはないからな。もう一つ、要件は手短に済ませる」

「ほおう？」

本当は言いたくない。こんなこと。

「感謝はしていない。助かったとも思っちゃいない、だけど」

あんたからは散々、プレゼントを頂いたからな。

「礼だけは言っておこうと思ってさ」

「……………」

沈黙。当然だろう。僕だって本当は寡黙な科白を貫きたい。

でも、僕がこれを言わなければ僕は僕でない気がして。

気がして。

「ありが」

「それを最後まで口にすれば私は大いに失望する。それは推奨できないな。それどころか私がその言葉を受け取る日がやってくることは、永久にない。それを理解しないのは賢明ではないと私は考える」
ゆっくりと、しかし強引に割り込まれた。

口から半分以上出かかっていた言葉を無理やり飲まされる。

「どういう、意味だ？」

「字面そのままの意味だよ、ジョーカー君」

「……」

僕は何か言おうとして、やめた。急激な敗北感に苛まれて、言葉

にならなかった。

「それならそれで、僕だって積極的に言いたかった言葉ではない」
強がってみるも、そうかね、との返事を口にしたジョーカーの声には、あからさまに不満の色が見えた。

「どういうことだ？　僕はまだ何か見落としている、のか。だとすれば一体何を。」

「長電話はしたくないのだろうか？」

「……、ああ」

僕は気が乗らないままに返答し、

「ふふ、それではグッドラック、ジョーカー君」

ジョーカーはお決まりの台詞で僕との通話を終えた。

僕は携帯電話を耳から離して、片時それを眺め。

「Fh2g6I8ial-bangie@kll.ne.jp――
このメルアドにでも何か隠されてるのか？」

画面に表示されたままの無為な文字列を、だるい心持でなんとなく口ずさんでみた。が、特に発見はなかった。

そして不機嫌にそれをパチンと閉じる。

「……」

礼は受け取らない――その言葉の意味するところはなんだ。考える。考える。

頭の中のチェス盤。これではまだ、チェックメイトじゃない？

僕がまだ見落としていること、か。

「ふん、まあいいさ」

『短時間に考えすぎだぞ、椎奈』

僕のしかめっ面に声を投げつけてきたのは、久しぶりに僕を名前で呼ぶフーだった。

「なんだよ……僕が起きてる間は思考と記憶は読めないんじゃないのか」

大体、今の僕のモノローグは決して量が多いわけでもなかったはずだ。

『實際言語化して処理している情報などたかが一片に過ぎん。そもそも、貴様の考えのベクトルが動いた時は分かると言っただろう。貴様は時折、頭の中で複雑に物事を考え過ぎている。そして一度に様々な方向にベクトルを向けすぎだ。そのせいで私まで気持ちが悪い。ひどい吐き気を催す』

「精神生物に吐き気なんかあるのか？」

『物の例えだ、馬鹿者』

そんな事を言われてもな。複雑に思考しすぎ、なんて僕にはどうにもしようがない。こんなものは、もはや体質みたいなものだろう。『ふん。私を知るかそんなもの。とにかくもう少し頭の中を静かにしてくれ』

ずいぶんと我儘な注文だった。

「はあ、わかりましたよフー先生」

しかしまあ、こいつもこいつで発言は辛辣だよな。いざとなったとき僕の味方でいてくれるのか時々不安になるくらいには。僕はそんなことを独白して、もう一度辺に対して直角になる感じで、ベッドに背中を預ける。

「疲れたな」

ふと、本音が漏れる。弱音ともいうか。僕は視覚情報を遮断するために、目を瞑った。十五分だけ寝て、それから勉強しよう。と思っただけで。

コン、コン。

木製の音が、ドア付近から鳴った。もしかするとこれは所謂ノックというやつだろうか。そしてこの家には今僕と畑中しか存在しておらず、僕はその行為を実行していない。ということとは、だ。

「……………疲れたなあ」

僕はベッドに倒れたまま大声でもう一度呟く。

コンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコンコン。

「畑中さあん！？」

目をかっ開いて飛び起きた。君は狐か。

絶え間のない超高速ノックを無視し続けられるほど、僕は図太い神経の持ち主ではないし、放っておいてドアをぶち抜かれる（決して誇張表現ではない）のも嫌だ。僕はしぶしぶベッドから立ち上がってドアの鍵を開け、ノブを回そうとして。

ゴン。

「うぐあっ！」

「八代君！」

ドアは僕の意思とは全く関係なく開け放たれた。

「くうー、つつつ……」

三回目だぞ、このパターン。

ドアを開ける際の警戒を怠っていたとはいえ、いい加減前頭部がジンジンするよ。自室のドアを開ける、という穏健かつ平和的な行動に警戒が要ること自体おかしいけど。

額の被災地を手でさすりつつフロリングを数歩下がり、どういうわけか怒声を上げながら僕の部屋へと飛び込んできた彼女と対峙する。

って。

「……あ」

その頓馬な声の主は、僕だった。

「これ、どういうことか説明してくださいませよね」

睨みに加えて凄味を効かせる畑中の手に持たれている物は――

27. 雨降らせて地固める

薄い、一冊の本。だが、それはただの本ではない。勿論、健全な青少年が読む、不健全な本でもない。

「それは……所謂、魔導書。だな」

カバーには何も書かれていない、無地の黒い本。

「そういうことを聞いているではありません」

ピシヤリと言い返されてしまう。まあ、そりゃあそうか。

僕はこれからの展開を頭に思い描いて、苦笑した。

「どうして」

畑中は激昂とまではいかずとも、その一步手前くらいまではいつているのだろう。普段穏やかな声が、何かを堪えるように震えている。

「こんなものがこの家にあるのですか」

「まあ、隠していてもどうせ見つかると思ったしさ」

畑中の静かなる怒気を正面から受け続けるというのも色々とい気がしたので、僕はもう一度ベッドに腰掛けて彼女から視線を外す。

実を言ってしまうえば今畑中が持っているそれは、美鈴さんからこっそり借りてきたものだった。それを母の部屋の机の上に無造作に置いておいたのだから、畑中がそれを見つけない理由はどこにもないだろう。

「どうしてですか」

「どうして、ってそりゃあ、借りてきたからと言うより他はないな」
正確には、本を持ち出そうとした僕に対して美鈴さんが何も言わなかったのだ、と言うべきだったのだろうが、そこは曖昧模糊であって何も問題はない。

「借りて……きた」

彼女は、今度は呆然として、いや、愕然としていた。逆立てられ

た柳眉も、いつの間にやら平生の状態へと戻り、それどころか少しハの字に為りかけていて。力強く胸の前に掲げられていた魔導書も、力なく体の横に揺れているのみで。そのままその場に座り込んでしまいそうなくらい、身体を弛緩させて。

「私は……私は、八代君に。これ以上、踏み込んできてほしくありません」

そして俯いた畑中は、力なくそんな風に呟いた。

「そう。僕はこれでも好奇心の旺盛な人間だからね」

畑中とは目を合わさない。

「用件はそれだけ？」

そのまますっかり覇気を失くした彼女に、追い打ちをかけるような言葉を投げつける。

「……私は」

顔に深い影を落として、深く項垂れて。彼女の語尾は今にも消えてしまいそうだった。それでも僕は、彼女を突き離すのをやめない。「悪いけど、今から少し仮眠をとろうと思ってたところなんだ。用がないなら出て行ってくれないか」

「私は！」

その声に籠った悲痛な響きに、僕は怯む。

「……なんだよ」

机の上で時を刻み続ける父から貰った懐中時計を睨みながら、僕は言葉を紡いだ。

畑中の顔をまともに見ることなんて、もうできなかった。

「魔術について教えてほしいと言われた時、私はあなたに言ったはずです。八代君が踏みこんでいいのは、ここまです。さわりを知る程度なら、ひき返すことはできなくても、それでもまだあなたの片足はまだ一線を越えていなかった。でも！ それで、こんな本に目を通したりして、これ以上深く携わってしまえば。関わってしまえば。あなたはもう完全に——『こちら側』へきてしまう。きてしまうんですよ。それだけこの本を読むと言うことは、あなたにとっ

て危険なことなんです」

僕は腰かけていたベッドの縁から立ち上がり、フローリングを見つめたまま乱雑に言い返す。

「いいじゃないか。何をどうしようと僕の勝手だ。さっきも言ったろう、僕は好奇心旺盛なんだよ。魔術。魔導師。すばらしいじゃないか。これほど感興をそそられる物もない。大体、君は僕の護衛だろう？　僕が魔術を学ぼうと何をしようと、君の迷惑にはならないはずだよ。むしろ逆だろ、役に立つスキルを会得しよ」

「あなたは分かってないっ！」

その声に、僕は言葉の端を呑み込んだ。

頭がガンガンするような、叫び声だった。頭がクラクラするような怒声だった。それでいてどこか哀願を含むような、そんな悲しげな声音が、不意を打って僕の耳をつんざいた。

畑中が、爆発した。

「分かってない……解ってないです！」

「……何が」

ここまで来たら、もう後には退けないな。本当は退きまくりたいところだけど、彼女からはある言葉を聞かなければならない。僕は意を決して顔を上げ、畑中の顔を見た。

そこにあっただのは、今にも泣きだしそうな、女の子の顔。

「……！」

衝撃を、受けた。

僕は芯から揺さぶられてしまった。彼女のあんな顔は見たことがない。見たことがない上に、ここまで僕の決心を揺らがせてしまうものだとは思わなかったから。僕はまた、彼女から逃げる。彼女のその表情から、目を逸らす。

目を赤くして、唇を震わせ、眉根を寄せて、それなのにそこまで昂った感情を、彼女の理性はせき止めている。

筆舌し難い熱い何かが、僕の口を勝手に滑らせようとした。

彼女に謝れ。

たちの悪い冗談だったと。その魔術書にはまだ目を通してないと。謝れ。と、言う。誰が？ 他ならぬ、僕自身が。

僕自身の本心が、僕の建前を押しつけて、勝手に出て行こうとする。

「……何を、解ってないと、言うんだ」

だけど。ここでそれをしてしまう訳にはいかない。一時のくだらない同情などに流されてはならない。

「私は、あなたの護衛です。それは確かです。だから、あなたを守りたい。それが私の本心です。これは任務ではありますが、それでも私があなたを守りたいと思う気持ちに、間違いはありません」

言葉を少しずつ区切りながら、何度も息つぎをしながら。

本当に、心から僕へ訴えかけるように、彼女は続ける。

「でも、あなたがこれ以上、こちらにきてしまえば、私は私の力だけではあなたを守れなくなってしまうかもしれません。余計に、守るのが難しくなるかもしれない。こちら側へきてしまうというのは、そういうことなんです」

「要領を得ないな」

「聞きなさい！ ……あなたには何も分かっていない。この本を読むということが、どういうことなのか。何の覚悟もしていない。世界の『影』になるということが、どういうことか。何の宥恕ゆうじょもしていない。こんな本でも、読めば読むだけあなたの世界は壊れてしまうということを、理解していない」

そういうことなら、僕の世界はとくに壊れている、と思う。

だってそうだろう？ この状態が正常だなんて、誰にも言わせない。

「それでも八代君はまだ——決定的な欠落を経験していません」

僕はその言葉に、若干顔を上げて彼女の姿を視界に入れる。

「魔術を使える人間は……絶对的に壊れているんです」

壊れている？

「壊れた人間がすべからく魔術を使えるわけでは、ありませんが、

その逆は真。だから、一線を跨いで完全にこちら側にきてしまうなら、あなたは、確実に……」

「壊れるとでも？」

畑中の言葉が切れた。沈黙は是なり、ということだろう。

「……それに、そんなことはあなたの一存で決めていいことじゃないんですよ」

しばしの緘口かんこうの後に、悲哀な声は再開される。

「あなたには、お父さんがいる。お友達もたくさんいる。あなたの命は、自由であるが故に自由ではありません。他人に縛られないということは、自分で自分を縛るということです。あなたが自由に振る舞うということは、自律しなければならないということなんです。自分の勝手で他人に迷惑をかけないなんて言いますが、あなたの勝手は少なからず他人に影響を及ぼしてしまう。あなたがそれだけすごい人間だからです」

君は、どうなんだ？ 君だって友人はいるだろう。家族のような存在だっている。

「君はどうなんだ、畑中」

「私は……八代君とは違うんですよ」
もう、と俯いてから。

本当に、本当に寂しそうに、そして申し訳なさそうに、諦観した風に。

「私はもう、壊れてるから」

彼女は笑った。

僕は再び、心臓を冷たい鉄で貫かれたような痛みを覚える。

壊れてる。壊れてる？

馬鹿な。なんて、そんな一言でさえ口に出すことは出来なかった。出来るはずがなかった。鬱屈をかき集めて飲み込んだような、そんな無理のある笑顔に、どうしてそんな馬鹿げたことを投げかけられる。

「あなたは私とは違う。あなたはもう、こちら側へきてはいけない

人間なんです。それだけの価値を持った人間なんです、あなたは。表にいるべき人間なんですから。本当は、あなただって解ってるんでしょう、八代君」

なんて。

なんて悲しそうな表情をするんだ。

「僕は君とは違う……確かに、それは事実だろうな」

そんな顔をするのはやめろ。

「でも君が僕を守るなんて言うのは、それともこれとも訳が違う……そうだろう？」

やめてくれ。

「どういう、意味ですか」

目を腫らした畑中が発するのは、涙声。どうして。

どうしてこんなに胸が痛む。どうしてこんなに不愉快なんだ。

「君が僕を守る、なんて言うのは、罪の意識からだ。違うか？」

「……………」

何も言わない畑中の悲愴な眼が、どんな鋭利な武器よりも深く、鋭く、僕の心の軟い部分をぎりぎりと抉る。

「違うないな。僕が今こうしている原因は、今君が僕の護衛なんて役回りを演じている理由は、元はと言えば、君が僕をジョーカーだと勘違いしたからだ。違うか？」

僕はそのまま歩いて、物言わぬ彼女へと近づく。

悲哀さを漂わせる彼女は、僕を見ないで、どんどん俯いていつて。「これも違うない。君は、君が僕を守ることは、罪滅ぼしのつもりなんだろう。自分が僕を巻き込んだ、巻き込んでしまった、そのどうしようもない罪悪感を打ち消すために。八代君がこんな世界に首を突っ込んだのは、自分の責任だから、責任を果たして重荷から逃れたいから。所詮その程度なんだよ。例え僕がもう元の世界に戻れないとしても、取り返しのつかないことをしてしまったとしても、僕を危険から守ることでそれを相殺できるのなら。そう思っている。僕を守りたいのは本心でも、それは僕のためじゃない。違うか？」

彼女の目と鼻の先、本当に身体がくつついてしまいそうな距離まで、歩み寄る。

「違わないよな。君はただ自分の責任でこれ以上事態が肥大化するのが嫌なんだよ。自分がある時、もっと的確に行動できていたら。そう思ってしまったら、僕が深入りすることも君の責任だったと帰着できてしまう。それが嫌なんだ」

畑中は、顔をあげようとしめない。反論をしようとしめない。

ただ、僕の前に黙するのみ。

「甘えるなよ」

まだ、止められない。

君が口を開いてくれなければ、僕は止まれないんだ。

「罪滅ぼしなんて馬鹿馬鹿しいことを考えるな。一度被った罪は絶対に消えたりしないんだ。僕はこれから一生君を恨むかもしれない。君が僕を守ることでのその恨みが恩に上書きできるとしても、そんなことで罪がなくなったわけじゃあ決してないぜ。それはただのすり替えだ。姑息で、そして浅ましい考えなんだよ、そんなのは。僕と君が放課後の美術準備室の前で出会った六月三十日、その日をなかったことにしてしまわない限り、君が犯した罪の意識だってきつと消えてなくなることはない」

そう。

一度犯した罪は絶対に消えてなくならない。

絶対に。

「そんなものの為に僕を止めようとしてくれるのなら、そんな制止は不愉快なだけだ。君は僕の命の安全を保証してくれれば、それでいい。それ以上は必要ないんだよ、迷惑なんだ。僕がどう壊れようと、そんなことは君には関係がない。それとも」

僕は、右手を彼女の顔の前へと持っていて、そして頭一つ分下に見える彼女に向って、台詞を吐き捨てる。

「君がこの腕輪を外してくれるのか？」

「っ！」

腕に衝撃が走り。

気付けば、彼女と目が合っていた。

畑中は僕の右手の腕輪を思い切り掴んでいて。

見ていた。僕の日を。

ガラス玉のように美しい栗色の瞳に、今にも零れ落ちてしまいそうな雫を潤ませて。

「さ……さっきからっ！ 黙って聞いていればあ！」

鼻の頭も頬っぺたも林檎みたいに真っ赤にして、それでもまだ絶対に涙だけは流すまいとして堪える声は、ほとんど泣き喚いたような叫び声に近かった。

「確かに、私が八代君を、守るのは、罪滅ぼしのつもりなのかもしれない。私が八代君を引きこんだことに罪悪感を感じているのも、じ……事実ですっ！」

癖っ気のある栗色の長髪を振り乱しながら、彼女は僕の腕を離さないままに、続ける。

「で、でも、そんな言い方をされる、覚えは……ありません！」

掴んでいた僕の手を、畑中は投げるようにして乱暴に振りほどく。「あなただって嫌でしょう？ 親しくしていた人が、じ、自分の目の前で絶対に踏み込んではいけない道に、それがどれだけ危険なところか、き、気づかずにつ！ そこに入っていくのを、黙って見ているなんて、嫌じゃないですか？ わ、私は嫌です！ そんなこと絶対にできませんっ！」

畳みかけるように、彼女は言った。

「人が、それも自分の知り合いが壊れていくところを見てみたいだなんて、そんなこと思うはずがないでしょうっ！」

「それが理由か？」

「え……？」

間髪を入れずに、聞き返す僕。

「君が、僕を守り、僕が踏み入ってはいけない世界へ踏み入ろうとしているのを静止してくれる、理由だよ」

「理由……って」

畑中は一瞬、ぽかんとしていた。していたが、やがてその目を厳しく細め、僕を睨む。

「なんなんですか。理由がそんなに大切ですか」

それから、指の背で目じりに溜まった涙を拭って。

「人が人を……同種の生物を助けたいと思う気持ちに」
言った。

「理由なんて必要ないでしょう！」

とたん、トンネルを抜けた時の明順応にも似た、温かな光に包まれるような、そんな晴れやかな錯覚を、僕は覚えた。吹き抜けた風が、僕にまわりついていていた負に染まったモノすべてを持ち去ってくれたような、そんな感じた。

「そこに何かあるとすれば——あるとすればそれは」
とにかく。

「……ふっ」

これで、彼女とこなすべき掛け合いはすべて終えた。

「そうかい。もういい、君の言いたいことは解った。これ以上話すこともない。母の部屋に帰りなよ」

そのまま僕は、無防備にぶら下げられていた畑中の右手から魔導書を抜き取って、

「え、あっ！」

空いた手で肩を掴んで彼女を部屋の外に押し出し、

「じゃ、ちょっと早いけどおやすみなさい」

「ちよっ……」

有無を言わずドアを、閉める。勿論鍵も。背を木戸につけて、僕は一つ嘆息した。

外から畑中の怒号が聞こえる気もするが、もはや知ったことではない。何をどうしようと、それこそドアを魔術でぶち破りでもしない限り、彼女自身のかけた結界術も手伝って僕の部屋は難攻不落だ。
『痛々しい』

僕の傷心にぐさりと突き刺さってくる青色腕輪の透明な声は無視して、僕はベッドに寝転がった。今度は枕に顔を押し付けることはせずに、枕元の目覚まし時計をぼんやりと眺める。

『そして馬鹿馬鹿しい』

「……うるさいなあ」

言われるまでもないことだった。

『貴様は何をやっているのだ』

「聞いてたんなら分かるだろ？ 痴話喧嘩」

で、済んだだけよかった。はたかれるくらいは覚悟していたのだが、少し彼女を低く見過ぎていたようだ。

「で、僕は壊れちゃうんだってよ」

『今でも十分壊れていると思うがな』

「気持ち悪いくらい同意見だ」

フーの言葉には含みがあった。どうせ僕の昔の記憶でも読んだのだろう。

僕だって一度、壊れている。

畑中の言葉に従えば、だからこそ僕は魔術なんてものが使えるようになったのかもしれない。往々にして、この世に壊れていない人間など存在しないだろう。誰もがどこかに何らかの、決定的な欠陥を抱えて生きている。

欠陥がない人間がいるとしたら、そいつは既に人間という群れからは逸れているだろう。

欠陥とは相対的な不備であり、絶対的な欠落ではない。さらば、人間である限りにおいて相対評価から逃れることは絶対に出来ない。完成品があればこそ、欠陥品が存在する。この世に一つしか『それが存在しなければ、それがどんな形体をしよう、どんなに壊れているように見えようと、不良だの良だのの評価をつけることは絶対に出来ようがないということだ。それが『壊れている』と評されるには、必ず誰かがそれが『正常』だった時代からの変遷を観測している必要があり、そもそも『正常』というのも相対的に人間に

対して有益であるかどうかを示したような言葉であるのだから、益体もない。

全事象において完璧といえる人間がいたとしても、そいつもまだ人間だ。

何故ならば『欠落している』という事実が欠落しているから。完全を手にした人間は、不完全を手にすることが出来ない。前を見ながら後ろを見ることが不可能なのと同じである。結局人間である以上、絶対性を手に入れることは出来ないのだ。

だからこそ、「欠陥」という相対性に縛られないものがいるとすれば、そいつは世界において唯一無二の存在で、斗南一人の人でなしということになる。

すべての人間は壊れていて、壊れていない。

「……なに訳のわからないこと考えてるんだろうな、僕」

さっきの畑中との言い争いは、僕のヒットポイントに相当なダメージを残していったようである。またフーに怒られるのも癪なので、この辺で思考は打ち切り。

「ま、いいさ。目的は果たせたからな」

『目的、か』

まあ、あれで十分だろう。僕の見立てが間違っていない限りは。うん、変に同居人のことを考えるのはやめだ。気持ちの切り替えは大切である。

『目的といえば、ジョーカーの目的だ。あの思わせぶりな言い方からして、私を満足させるだけの回答が用意してあるのだろうな?』

フーが、僕の黒い目覚まし時計の上に腰掛けていた。僕は少しだけ驚いてから、フーの青い双眸を見つめる。

「それ、まだ分かってなかったのか?」

『貴様が授業中に寝なかったからな』

寝なかったことを非難されたのなんて初めてだよ。

「どうせ文化祭にはわかることじゃないか。ていうか僕の記憶を読めばわかるんだろう?」

『それではつまらないだろうが』

フーは目覚まし時計の上部に付いているアラームを止めるボタンを、小さな両手を使ってカチカチ連打しながら、如何にも退屈そう
だ。

「じゃ、ヒントだけな」

僕は龍ちゃんに習って、右手の指を三本立てる。

「一つ。猫耳の男と少年の関係」

おそらく、僕の予想が正しければこの二人はまだ登場の機会がある。

「二つ。僕が美鈴さんにした行動と質問の内容」

これはさっきの電話と合わせて考えると分かりやすいかな。

「三つ。僕と畑中の痴話喧嘩」

後はこれくらいか。

『……全然解らんぞ』

「考えろよ、少しは」

勿論、今出したヒント以外にも、朝話してたこととかをいろいろ
総合してな。

「僕は勉強するから」

言って、目覚まし時計の上で考える人のポーズを取り出したフー
はそのままに、僕は勉強机についた。勉強している間は少しはさっ
きの喧嘩のことを忘れていられるだろうから。

だめだなあ、僕って案外芯の細くて弱い人間だった。今更だけど、
それを思い知らされる。

畑中の泣き顔がふと思い浮かんだりすると、その度に胸がちくり
と傷んだ。

『お前に芯などあったか？ 筋があるかどうかも怪しいところだな』

「僕は軟体動物かよ」

さすがにそこまで言われる覚えはねえよ。というか、フーに励ま
されてしまっているのか、これ？

どうにも落ち込んだ気持ちを奮わせて、僕はペンをとる。

こんなのは文化祭までだから。きっと。

28. 少女は背側から声をかける

「だめです」

「魔法について教え……ってええ!？」

まだ何も言ってなかったのに否定されたよ!？」

「どうせそんなことを言いだすだろうとは思っていましたが」

畑中は机の上にチョコンと座って居たもふもふ百獣の王を手にとって、またベッドに腰掛ける。そのライオンらしからぬ可愛らしいぬいぐるみを両手でうりうりと弄りながら、彼女は続けた。

「だめですよ。もう既に龍からいろいろ聞いちゃってるんでしょうけど、これ以上は私が許可しません。絶対にだめです」

強い、否定の言葉。否定というよりも、禁止の語調。

「どうしてさ」

ドアにもたれかかったまま、僕は聞き返す。

「あの金髪——ええと、龍ちゃんは何の出し渋りもなかったぜ」

「龍を基準にするほどあなたの頭は腐っていたのですか、残念です。救えたはずの命がこれでまた一つ消えてしまいました。あなたはもう手遅れですよ」

「……………」

僕が玩弄されたのは置いておくとしてだな。その言い種はどうなんだよ。

「仮にも一緒に住んでる人なんだろう？」

「そうですね。人間として間抜け、確かに人です」

そこまで深い意味合いを込めたつもりはねえよ。

「昔からあの人は多分におかしい。軽すぎます」

畑中は、まさに苦々しい何かを吐き捨てるように言う。まあ確かに軽いという印象はなきにしもあらずだが、でもあの人の場合、あれが全てだとは到底思えない。そう僕に思わせるだけの何かを見せつけられたというのは、ただの勘違いではないだろう。

「ただの勘違いですよ」

「どうしてそこまで言うんだよ」

爪も牙もない愛玩的ライオンは、畑中の操り人形になっていた。
楽しいのだろうか。

「とにかく」

僕を押しとどめるように、畑中が語気を若干強める。

「だめなものはだめです。あなたは傍観者であれば何の問題もない。魔術なんてものはエンターテインメントとして楽しめばいいのです。それだけで八代君には十二分。その程度なら別に関わりをもったとてどうということもありません。あなた一人くらいが騒いだところで世間に魔術なんて馬鹿げた存在が露呈することもないですし」

「しかしだな畑中」

「八代君」

弄りまわされていた哀れなぬいぐるみに目を落としていた畑中が、じろりと視線を持ち上げた。

「魔術は麻薬とおんなじです」

麻薬？

「ええ。魔術中毒、なんてのもよくある話です。魔術に魅入った人間は、魔術に魅入られる。魔、なんて漢字がつくくらいですから、そもそも人間にとって有益ばかりのものではないんですよ。もっとも魔、だなんて日本語に習った場合の話に限られますけれど」

畑中は言う。

「私はそうやってだめになった人間を知っています。どんどん魔術に魅入られて、入り込んで、そして使っていたはずの魔術に使われる。最終的に、そうなった人間は身を滅ぼしてしまう。八代君が如何に強い精神力と自制の心を持ち合わせた素晴らしい人間だとしても、絶対にそうならないなんて虫のいい保証は私には出来かねます。ましてや遊び半分で魔術に手をだそうだなんて笑止千万ですよ」

彼女は静かに、落ち着いてはいるがしっかりと、断言した。僕は間をおかずに、それに対して反論の口火を切る。

「でもな、畑中。僕の場合この腕輪が外れるまでどうにもならないんだぜ？ 別に遊び半分で魔法に手を出そうってわけじゃあない。君は確かにすごい魔法使いなのかもしれないけど、それでもボディーガードが絶対に完璧ということもないだろう。僕が魔法を学んで不利益になる道理がどこにある？」

「だめなものはだめです」

しかし、畑中の心証は動く気配がない。思っていたよりも頑固だ。普段学校で見ているおっとりとした見かけとのギャップのせいもあるだろうが、存外押しに強いことで僕はありていに驚いた。

「悪いけど、僕だって退く気はないよ。昨日のことだって、僕が生きてるのがそもそも奇蹟的な話だとは思わないか？ あんなことがこれからあるとしたら、その時僕はどうすればいい。今度もまた無事に済むと考えられるほど僕は能天気な馬鹿じゃない。それともあれか、家庭用包丁かなんかで武装でもすれば魔法使いなんて簡単に撃退できるとでも仰るのか？ アーティストの畑中さんは」

「……あれは、私の不注意です。それに、私がしている限りでそんなことは起こり得ません」

「可能性は0じゃないだろ」

「限りなく0に近ければそれは起こらないのと同じことです」

そして、沈黙。二人が二人して共に一切退こうとしないわけで、会話が会話としてちゃんと成立していない感じだ。駆け引きと呼ぶには幾等か稚拙だが、僕らのその交渉的やり取りはトークにおける並行条件を見事に満たしているらしかった。しかしここで折れるというのも、何だか負けた気がしてイマイチいい気分ではない。僕はぬいぐるみをまたいじり始めた畑中を睨みながら、無言を貫きとおす。

たぶん、そのまま一日が過ぎた。

と言ってしまったても何ら僕の主観的時間経過の観測には問題がないだろうというくらい長時間、僕ら二人は同じ部屋にいてなおたった一つのコミュニケーションもなく過ごした。実際僕には相当長

く感じられたわけだし、少なくとも三十分はそのままだったというのは時計を見る限り事実にそこまで反しているわけでもなさそうだ。さすがにここまで時間が経てば不安にもなる。

畑中は、本当に何も教えてくれる気がないのかもしれない。とか。……折れようかな。

と、あまりにも軟弱すぎる思考回路が持久戦に耐えあぐねてギブアップを要求し始め、僕が何度目になるか腕を組み替えようとした時、まるで普通の少女の如くぬいぐるみと戯れていた畑中がふと顔を上げた。

そして諦めとは違う、少し呆れたような、困っているような、それでいて怒っているようななんとも微妙な表情を浮かべて、彼女は沈黙を破る。

「しょうがないですね」

どこか弱気な声で、畑中は言っている。

「……さわり、くらいなら」

そして、嘆息した。

ギリギリのところだったが、我慢比べの勝者はどうやら僕に決定したようだ、ああ助かった。と思ったら、畑中は不意を打って散々遊び倒したライオンのぬいぐるみを僕へと投げてよこす。というより、思い切り投げつけられた。顔面コースのそれを咄嗟の反応で何とか受け止めてから、僕はヘラヘラと笑ってみせた。それを見てか、畑中は不機嫌な声音のまま続けて言った。

「でも、それで終わりにしなきゃだめですよ。あなたが踏みこんでいいのはここまでです。それ以上は、だめですから」

「わかってるって」

僕はライオンを元居た母の机の上に戻してあげてから、勉強机みたいな母のデスクの椅子を引いて、座った。

「それじゃ、早速ご教授願おうかな、畑中先生」

はい、回想終わり。

そんな感じの会話をこなしたのが今となっては大分前に感じる、四日前。土曜日の夕刻のこと。こんなことを思い起こしてみる程度には……僕は往生際が悪い。

結局、約束——でもないが、彼女が提示してきた条件は僕が一方的に破ってしまった。

これ以上は踏み込まない、なんて。

残念だけど、そんなことは無理だよ、畑中。

「八代君、聞いているかなっ？」

「……これ以上ないくらい限りなくバッチリ、完璧なまでにリスニングしてますよ」

僕の思考に横から割り込んだ挙句、朝だというのに妙なテンションで僕にまわりつく金髪。是非ともやめていただきたい。

「ああ！ さすが八代君。今別のことを考えてた癖に僕の話はバッチリ聞いているなんて！」

「はあ」

やるせなくやる気のない相槌を返すも、龍ちゃんはその辺の小学生よろしく僕の腕にベツタリと纏わりついて離れない。これが女ならよかったとまではさすがに言えないが、男であるならばこれはむさ苦しいだけである。と思った僕であつたけれども、龍ちゃんに限ってはそんなことはまるでなく、むしろ爽やかないい香りさえ漂ってくる始末。それでも、いい大人の体躯を持った二人の男がじゃれ合っている図など、傍目を考えればおぞましいだけだった。まるでぞつとしない。

そういうわけで一応拒否反応は示してみたものの「お兄さんと八代君はもう友達だね？ だから何も問題はないよっ！」と、耳元で喚かれた。なんかもう、龍ちゃんがそう言うのならそうなのだろう、という気さえしてきたが。

というか、あんた。ため口どうのこうのはどうしたよ。敬語でいいのか？

「んー、それはあれだよお。八代君のイメージに合わないからやめ

やめ」

山の天気よりも変わり易い人だな。

「ああ！ それは違うー。山の天気が変わり易いんじゃないくて平地の天気が変わりにくいだけ」

同じことじゃないですか。

「んー、確かにそうかもね。客観視すれば、ほとんどの事象に対する結論は大体一つに収束する。数学や科学で求められる解なんてのは得てしてそういうものさ。でもここで重要なのはどちらを基点にして物事を眺めてるかかってことだね。今この屋上にはお兄さんと八代君しかないわけだから、条件はイーブンだよ」

どこかがおかしい思想家のようなことを言い出したぞ。

「つまり！ さ。この状況下でどちらかの視点で物事を見ることに意味はなし。結局僕が変わり易い人間なのか君が石のように堅い人間なのか、それを測る基準がないんだからね。あるいはこの場にもう一人、気分で物事をころころ変えるような人間がやってきたらその時仲間外れになるのは八代君だよ。そうなればはやっぱり、平地の天気は変わりにくい、が真理なのさ。言ってる意味わかるかなあ？」

龍ちゃんの意味不明な戯言を聞いて僕は、まさしくどうでもいいことを一つ思い出した。

かの高名な画家、エッシャーのだまし絵に『凹凸』というのがあ

る。
それがどんな絵だったか細部まで詳しく鮮明に記憶しているわけではないが、しかしながらその絵が如何なるだまし絵だったかくらいは覚えている。あれはたしか、上下反転させてみると凹面が凸面に、凸面が凹面になったかのように見える、といった類のトリック的なアートだったはずだ。目で追っていけばいつの間にか騙されている、というタイプの絵画ではないにしろ、やはりああいう絵はただ見ているだけで、ただただ面白い。エッシャー程巧妙に人間の粗をついた人間はこの世に数多くないと思われるが、まあそんなこと

はいとして、少なからず今のこの状況はその『凹凸』という絵に似ている気がしたのである。

どちらの立場に立つこともでき、どちらの見方をすることも味方をすることもできる。

しかも今この場合においては凹凸の割合が一对一であるからして、どちらをどう見たところでそこに明確な差異も基準値も存在しない。同値であることが平等だとは思わないが、しかしそこに多数派と少数派の概念は適応されない。

しかし、その均衡が少しでも崩れれば。

いくら見方を変えてみたところで、少数派は何時までたっても少数派なのである。どれだけ絵をひっくり返してみても、少ないものは少なく、多いものは多い。

そして、少数派はいつしか隔離される。

非凡であるということは凡に非ずということであり、それはすなわち優れた突出を示していると同時に落ちぶれた民主主義の被害者を表しているわけだ。人が多くなればなるほど、人は人でなくなり、人である以上の巨大な何かにその姿を変質させ、やがて人であるべくマイノリティの人間はそこのおどましく気味の悪い何かに、踏みつぶされる。

それが良かれ悪しかれ、どんな手段と形式を伴ってさえ、切実に、確実に。

龍ちゃんの言いたいことも、なんとなくわかる気はしたが。

「……」

僕は言った。

「わかりたいとも思わないのでそもそもその質問を却下させてもらいますよ」

「にゃは！ いいね、その受け答え。今度美鈴姉えに使ってみようかな」

「……意外と勇気あるんですね」

あの人にそんな挑発的な態度を取ったりすれば、ひどく恐ろしい

ことをされそうだ。

「ああ！ 撥り拷問くらいなら、やりかねない」
怖すぎですね。怖いもの見たさってやつですか。

「にやはー、いやね、お兄さんは基本的にMだから」

「……………」

ええと。

こいつのせいかな！？

畑中が僕をM呼ばわりするのは美鈴さんがこの金髪爽やか野郎をM呼ばわりしてるのを常日頃から目撃しているからなのか！

「まあ、親の背中を見て子は育つって言うしね。蠟燭プレイの背中とか」

「モロにあんたのせいじゃねえか！」

力任せに龍ちゃんを振り払って、僕はあらん限りに叫んだ。八時過ぎの学校屋上に、悲痛な言霊が響き渡って霧散する。

「にやははは、さすがに穂波ちゃんの前ではそこまではしないよ」

「穂波ちゃんの前では、ってなんだよ！」

畑中の前じゃなかったらするのか！？ 蠟燭プレイを！

「ていうかそもそも美鈴姉とはそんな仲じゃないし」

じゃあどんな仲なんですか。

「ううん……」

快活な顔を悩ましげにしかめて、龍ちゃんは僕の問いに考え込む。確かに、美鈴さんは畑中の保護者代わりといったようなことを口にしていたが、美鈴さんと龍ちゃん、二人の関係性は未だ僕にとって謎のままである。

「ああ！」

と、龍ちゃんは閃いたように顔を上げ。

「僕が一方的に暴力を受けて悦んでいるだけの仲、かな」

「おまわりさーん！」

変態がいますよ！ 僕の目の前に！

「にやはは、軽い冗句だってば。冗句冗句冗句」

三回繰り返したことによって懷疑性が増したという残酷な事実を口にしようかどうか迷っていると、龍ちゃんはまたしても僕の背中へと回り、両肩に重量がかけられる。そして頭の上に、龍ちゃんの顎がごつんと音をたてて乗っかる。

「重いですってば」

「いい加減元氣だしなってえ、お兄さんまでテンション下がっちゃうでしょうが」

「……元氣ですよ、十分」

それは、まあ軽く嘘だった。強がりというやつだ。ここにきてようやく状況説明の一文を挟むとすれば、それはつまるところ。

「一昨日からずっと、穂波ちゃんから無視されちゃってる、ってことだねー」

そう。昨日一日、僕は畑中と一言でさえ言葉を交わしていない。

家で無言、学校で無言。

幸い畑中は絵のレクチャー、僕はマジックのレクチャーに回ったため文化祭の準備に際して僕らの破たんした関係性が露呈し得ることもなかったが、やはり無視されるというのは相当につらいことである。つらいことである。つらいことである。

そして今日の朝も食卓に流れる空気は実に悲惨な物だった。僕は結婚はおろか女子とのお付き合いすらも経験していないというのに、離婚寸前の熟年夫婦の気分を味わった、と言って何ら差し支えもなさそうなくらいだった。

とにかく家でおとなしくしているのは座りが悪すぎるし、彼女も彼女で僕には護衛として僕にはしっかり付きまとうわけで、その事態を解消すべく僕はまたもや早朝登校を決行し、屋上に向かったわけだ。畑中はドア一枚隔てた校舎の中で、寡黙に僕を見張っているようだった。面と向かっていないだけ、これは全然マシだ。

と解放感に満ち満ちた夏の青空に一安心したところで、屋上には何故か青とオレンジ配色の長袖Tシャツに、短パン皮靴の金髪が居たわけで。龍ちゃんは時間潰しにはちょうどいい話相手だった。少

なくとも今畑中と話すより数億倍は気が楽である。

「……だから、畑中とは会話してないだけだって言ってるじゃないですか」

「酷い言い訳だね」

その言葉には、僕は自分自身の味方をやめて、龍ちゃんに同意せざるを得ない。

「それでも護衛っていう役回りだから近くで君のことは見張ってるわけだ。にやははは、超気まずいね」

笑ってそんなことを言うのは止してくださいよ。僕だって地味にダメージ受けてるんですから。

「ああ！ さすが八代君、人を傷つければ自分も同じように傷つく。いい人の典型だね」

「そんなんじゃないよ、ただ」

ただ。

ただ、何だ？

その後に言葉は続かなかった。漂白剤で洗った服みたいに、頭の中は真っ白。

「ま、いいか」

「えー？ そこでやめちゃうのかい？」

肩が軽くなったと思うと、視界の横から伸びていた両腕が消え、そして笑ったままの龍ちゃんが金髪をなびかせて再び僕の正面に現れる。

「さてさて」

そしてニヤニヤと、あの笑みを浮かべる。僕の嫌いな、ポーカースマイルを。

「もうすぐ文化祭だね」

「……そうですね」

エメラルドの如く煌めく碧眼が、夜の猫みたく僕の瞳を抉ろうとしている。目をそらすことなく、僕は正面に立つ豪華な金髪の男を逆に睨み返してやった。

「楽しみだねえ」

「そうでもありませんよ。僕に限ってはね」

「そうかい？」

そうだ。それ以外はあり得ない。楽しいはずがない。

ただでさえ七月七日はそういう日なのだ。それに加えて、今回は特に。

「ま、いいけどね」

龍ちゃんは、鼻につかない動作でやれやれとばかりに前髪をかきあげた。

「お兄さんに会いたくなったらいつでも呼んでよ。すぐに会いに行くからさっ」

そして再び、僕を碧が貫く。ジロリ、と。ガラス玉みたいになった瞳は、一直線上で僕と龍ちゃんを結びつけていた。

「……残念ながら、畑中に言わせればですが、個人的にあんたに会いたいだなんて思う程僕の頭はいかれていますよ、まだね」

「ああ！ そりゃそうだね、正論だ。うんうん。それじゃまあ、お兄さんもこう見えて暇じゃないんだよ、そういうわけでそろそろ消えろとするねっ」

と、僕のあからさまな皮肉にさした反応を見せるまでもなかった龍ちゃんの、明るく朗らかな声が僕の耳朵を打った次の瞬間には、その姿は既に僕の目前から消失していた。刹那の間に、僕は屋上に一人きりである。蝉の声は、こういう時だけじんじん唸って、僕の耳を溢れそうな夏の音で満たしていた。

もはや驚くことはなにもなかったが。

器用な人だよな、なんだかんだ言って。

「どうするかな……」

さて、教室に戻っても構わないが、そうした場合少なくとも見積もってもあと三十分程度は言葉の使い方を忘れたような畑中と二人きりで空間を共にせねばなるまい。僕は畑中からM呼ばわりされてはいがMではないのであるから、そんな危険な行為に走るなんて自重

すべきだし、あの刺すような詰まる空気は経験すること自体そもそも御免被りたいからな。それならやはり、もう少し屋上で思考していることにしよう。僕は屋上を囲む青い手すりまで歩き、じんわりと熱を持ったそこに、正面からもたれかかる。

龍ちゃんがいい話相手だったというのは半分は正しいが、半分は嘘だ。

無垢で純粋な雑談だけで時間を浪費することが可能な程、僕と彼の関係は清々しいものではない。無様で馬鹿げた談笑だけで興を尽くすることが可能な程、僕と彼の関係は初々しいものではない。

ジョーカー。

腕輪と僕と『封じ屋』を結びつける、それが最大かつ最小にして唯一の、共通の話題。現実的で機械的で、どこか凄惨の香をも匂わせるトピック。彼にはまず、その話を振ってみた。淀みなく動いた彼の口から聞いた情報を、今は整理するでしょう。

そもそもジョーカーという男は何者なのか。

いや、男かどうか、正式には不明らしい。僕だって声を聞いているだけなわけだから、それだけで男女の別を判断できるかと言えばそれは絶対に確実だとは言いい切れない。隣で会話内容を指示して別の男に喋らせるといったことは可能だろうし、そもそも声の質なんてものはいくらでもいじることができそう。魔術なんて便利なものがあるならばなおさら。

ジョーカーの年齢、性別、国籍、その他経歴、他雑多。なんとも月並みなプロフィール情報だが、その全ては謎という闇に包まれている。

奴が名前を馳せさせたのは七年前。そんな素性の知れない人物がどうして裏の世界において有名になったのかという僕の質問に対して龍ちゃんは「いろいろあったからね」としか答えてくれなかったけれど、ジョーカーというのは一言で言ってしまうと、『封じ屋』に対抗する新興組織の名前なのだそう。

それは『封じ屋』と同じで「表と裏の世界のバランスを保つ為に

動く」組織。しかしながら、その基本理念は封じ屋のそれとは相いれず、そもそも相互理解が困難らしい。というより、バランスを保つ、というのは一瞬美徳に聞こえはするけれど、やはりそれを利用した商いごとであるということ、要するに『ジョーカー』と『封じ屋』は商売敵なのである。

ああ、無論人物名のはずが組織名という滅裂な食い違いを見逃しているわけではない。奴はそもそも自分の名を名乗っているわけではなく、自分の立ち上げた組織の所属の意味合いを込めて、それを口にしているらしかった。そう考えてみると、僕のことをジョーカーと呼び、それを戯弄の種にしているというのも分からはない。慇懃無礼な話だ。それにしても。

商売敵、か。

一体世界のバランスを保つ、なんていうファンタジックで勇者チックな務めのどこに商売なんていう不義な要素があるかは、てんで予想もつかない。だが、世界の構成物質がどれほど変わったところで、そこで暮らす人間の構成物質は変わっていないようだった。結局表だろうと裏だろうと、人の醜悪は依然として変わっていないわけである。美鈴さんの言っていた通りということか。興を削がれる話だな。

僕は運動場を見下ろして、ぱらぱらと増えてきた生徒の影が、次々と校舎に吸い込まれていくのを気拔けに眺めた。みんな気楽そうだ。実際に気楽かどうかはともかくとして、今その足並みに僕自身に加われるとすれば僕は喜んでここから飛び降りてもいい。

絶対に無理だけど。二つの意味で。

さておき、後どれほど僕はここで日光浴を続けられいいのだろうか。そう思い、ようやく使い方に慣れてきた携帯電話を取り出して時間を確認しようとした時だった。

「――八代？」

29. スバル

僕は一驚を喫し、瞬時に振り向いた。

思考の海に没入しすぎていたのだろうか。背後から近付かれてその気配に気付かないとなれば、いつ何時、誰に突き落とされたとして、文句は言えまい。そんな危惧を胸に抱きつつ、一人の少女を視界に捕捉する。手を後ろで組んで、そこに立っていた小柄な体軀は。

「……おー。須原か」

同級生にして畑中の友人で仲良し三人組の一人、須原だった。

「どうした？　こんな朝早くに。僕に何か用？」

僕は手すりに右肘をかけたまま、落ち着いた微笑みを湛える彼女を見やる。

「うん、そうだね。用といえば用なのかも」

用があるのかないのか、なんとも分かり難い言い回しをしながら、須原は首を少し傾けてボブカットの黒髪を揺らした。同じ黒髪でも、僕なんかはよく見れば真っ黒ではないのだが、須原の髪色は本当に、鴉の羽の如く漆黒。それが連日変わりのない陽光を反射して、彼女の頭に天使の輪を作っている。僕は髪はその滑らかな動きと、白黒のコントラストの美しさに一瞬目を奪われてから、どこか知性を感じさせる須原の静かな顔に目を戻した。

「文化祭の絵のことか」

あたりをつけて言ってみる。

「うー……ん。それもある、けど」

少しだけ視線を上げて、須原は顎に人差し指を当てた。

実は彼女こそ、うちのクラスの展示物の要なのである。自慢にもならない話なのだが、要するに二年二組でまともな美術的デフォルメセンスを持っているのは須原しかいなかった、ということであり、そういうわけで、須原は今回のクラス展示に関して、数人のアシスタント的生徒らと共に全員分の顔をデフォルメして描くという激務

をこなしてくれているのだ。

その件、文化委員の二人は後回しにすると聞いていたから、おそらくその為になんかやっていたのだろう、と思ったのだが。

それは少々、希望的観測過ぎたらしい。

「それもあるけど、というと？」

「ま、うん。その前にね。君に言いたいことがあるんだ、八代」

そして須原は何かを愛惜するように笑ってから、油断していた僕の鳩尾に不意打ちの衝撃をぶち込む台詞を口にした。

「女の子を泣かせるなんて最低だよ」

「！」

瞬間、震撼、僕。

予想だになかった強力なストレートで、軽くノックアウト寸前まで追い込まれる。

思わず叫びを上げそうになって、しかしそれすらも出来ない自分に気づく。さすがにこの時ばかりは、自分の心情が音速を超える勢いで顔面へと浮きあがるのが自覚できた。目を見開いたままの僕に、須原は言う。

「なんで知ってるの？ って顔だね。八代、びっくり仰天って感じ。君にしてはなかなかレアな表情だ」

口を開けたまま何も言えずにいるのを確認するように僕を眺めてから、また言う。

「勿論、穂波ちゃんから聞いたこと。あー、ていうか、元氣のない穂波ちゃんから四十万ちゃんが無理やり聞きだしちゃったみたいない感じなんだけど」

折り入って僕を責めるような言い方もせず、須原はなんら意図の読めない微笑のまま僕への言葉を継続した。

「でもね、さすがにあれだけ元氣なかったら私だって四十万ちゃんだって不審にも思っちゃうよ。穂波ちゃん、意気消沈って感じ。そりゃさ、何かあったの？ って聞きたくもなっちゃうって。八代は

ね、まず自分が穂波ちゃんをどれだけ傷つけたかっていうことを考えるべきだと思うな」

「そ……」

無意識的に言いかけて、口を嚙む。自己の正当化、なんてそんな下らない保身はこういう場面ですべきことではない。僕は右手で額を押さえた。

「うん……そうか。そうだよな」

「そうだよ」

間髪入れずに返される。

「居候って形とはいえ、女の子と同棲してるんだよ？ 百歩譲って喧嘩しちゃったのはしょうがないとして、その後のケアが問題。それに喧嘩って感じでもないんでしょ？ 詳しく聞いたわけじゃないから解らないけど、もし原因が君にあるなら君から謝らないなんて、そんなのは絶対にだめだと思うな」

「……………」

ぐうの音も出なかった。

ぱあの音も出なかったしちょーいや、やめておこう。

ちなみに、畑中とは口裏を合わせて、なんやかんや（両親同士が知り合いで、畑中の両親は二人して海外へ転勤しているからうちで養ってもらうとか、まさしくそんな適当な感じ）で彼女が我家に居るということは既に周知の事実だったりする。のだが。今やそんな問題ではなさそうだった。

まあ、畑中が友人に何も言わないなんて思ってた方が問題なのか。言い争った内容が内容とはいえ、畑中がいざこざがあったという事実を悟られない風に振る舞う必要はない。その手が自分まで届かないことが分かっていたとして、それは助けを求めちゃいけない理由にはならないから。

彼女もアーティストである前に一人の少女であったということ、か。

おぼろげにわかっていたこととはいえ、感じ悪いよなあ、僕。

「穂波ちゃん、滅多にないくらい落ち込んでたんだよ」

手は後ろで組んだまま、面持ちも改めず、須原は淡泊に僕へ詰め寄る。

「んう……」

手厳しいな。

「……ごめん」

「わーたーしーじゃ、なーいーでーしよ！ 謝るのはさあ」

さらにぐい、と僕に顔を近づけて、彼女は静かな怒りを顕わにした。

「本当にね、私も穂波ちゃんとは付き合い長いけど、あんなに落ち込んでるのを見るの、初めてなの。意気消沈、というよりも拓落失路って感じなんだから。泣いてるところなんて見たこともない娘だったんだ。これ、誇大表現でもなんでもなくてね」

「……うん」

「君はさ、少なくとも馬鹿じゃないんだから。こういうことくらいちゃんとしなきゃ、ダメ。勉強だけしてたって立派な社会人にはなれないんだよ」

「……………」

全くもって、頭が上がらない。もっともこの場合、上がらないのはうだつなのもかもしれないが。

ん、それもおかしいか。

「ま、私がどうの言うことでもないのかもしれないけどね」

ふっと須原は僕から顔を離す。

「でも、やっぱり友人の貞操が危ないとなるとき」

「そんな話じゃなかったような気がするんだけど」

「アハハ、冗談。でも実際さ、女の子ってのはこういうことに敏感なものだよ」

「そうなのか？」

「そうなの。女の子から袋叩きにされなかったただけ命拾いしたと思うべきだね、君は」

「……はあ、さいですか」

怖すぎる話だった。

しばしば発動し得る女子の理不尽な論理展開というのは本などで読んでも程度の知識はあったけれど、さりとて事実談としてそれを語れるようになりたいとは思えない。

「四十万ちゃんも優しいからね。まだ何も言われてないでしょ？」

って言っても私だってこうして八代に会う用事がなかったら、果たして箴言を進言しようとは思わなかったかも。穂波ちゃん、そういうのしてほしい、っていう感じの娘じゃないから」

ということは、それを差し引いても僕に何か言わないと気が済まなかったわけだな、君は。

「そういうことにもなるかな」

アハハ、と。須原は花のように笑った。

しかし花は花でも、自己主張の強い花ではなく、煌びやかな花ではなく、群れて華やかに咲き誇る花でもなく。本当に儂い、本当に切ない、そんな感じの、小さくて強い、一輪の花のように。

彼女は笑った。

目を細めて、やはり。

何かを愛惜するみたいに。

「穂波ちゃんにはちゃんと謝って仲直りしなよ。本当に」

「言われなくてもいずれそうするさ、時がきたらね」

「なあに格好つけてんの？ この優男め」

なんとでも言ってくれ、今の僕ならどんな言葉だって甘んじて受け入れよう。

「ふうん？ ま、君がそう言うなら、これ以上言うことはないけどさ」

須原は言って、一息を吸う。

「なんだか、一気に喋りすぎちゃったな。こんなキャラじゃないんだけどね、私」

「そうかな」

教室で見てた感じ、畑中よりはお喋りだったように見えたけど。

「まあ、いいじゃない。君の私に対する印象になんか興味ない。それより文化祭のお話をしましょう、文化委員さん」

「……ああ」

僕が曖昧な返事をする、ずっと後ろで組んでいた手を、須原はようやく前に出した。

「こういうわけなんだ」

その両手には、それぞれ小さめのスケッチブックと、鉛筆が握られている。

「まだ一時限目が始まるまで時間あるし、ちょっとスケッチされてくれるかな」

「……そういうことなら、喜んで」

言うが早い、か、須原はさっそく僕を見ながら紙に鉛筆を走らせ始めた。

「八代はさ」

「？」

まだ描き始めて三十秒も経っていないうちから、彼女はまた口を開く。絵に集中しているからか、少しおざなりな口調で彼女は。

「天才ってなんだと思う？」

「……………」

そんなことを、言った。

「ね、どう思う」

「どう……思うって」

また話題が飛躍したな。そりゃ、色々と思うことはあるけど。

「いい印象はないな。天才、なんて言葉に」

「そうなの？」

「ああ」

いい印象がないどころか、大嫌いな言葉だ。

「言葉じゃなくてさ。本当に、天才ってどうなのかな、って聞いているの」

言葉じゃない。

「天才……か」

天才。

秀才。鬼才。偉才。英才。

この世の少数派たち。

「並外れた才能の持ち主、だよな」

「そうだね」

「でも本物の天才ってそういうものじゃないと、僕は思うよ」

「というത്？」

何があっても揺るがない。

是が非でもぶれない。

どうしようもなく強固。

決定的に完全。

究極的な、絶対。

並外れた、っていうのは確かに最上級かもしれないが、それはやはり比較表現にすぎないわけで、天才っていうのはそもそも凡人と比較するべき対象じゃないと、僕は思う。

「本物の天才を目にする機会なんて滅多にない……けど。僕はそういう人間に出会ったことが一度だけある」

僕とは違う。

それが確かに、第一印象だった。

たった一つの衝撃もなく。

たった一つの驚愕もない。

そこにあったのは、自然。

この世の摂理だけ。

林檎を手にとって、ああ、これはリンゴなのだと思うのと同じように。

僕は、そいつをそういう存在として認識した。

「嫉妬心もなにも、本当になんにも、湧かなかったよ」

天才と呼ばれる彼らは、あらゆる意味において。

一人だ。

孤立している。

いや、そもそも、孤立とかいう話ではない。

文字通り、そのままの意味で。

住んでいる世界が違った。

同じ空間に居て、同じ空気を吸って、同じものを見て、同じものを聞いて、尚。

僕とは違う世界に、彼らは居る。

違う空間に居て、違う空気を吸って、違うものを見て、違うものを聞いて、尚。

だから。

「へえ？ 君もいささか一般的な人間じゃないとは思うけどね、私は」

「さあね、君みたいに言う人間はたくさんいたし、それを責めるわけじゃないけど、視野が狭いと思うよ、そういう言い種は。僕くらいの人間なんか、世界を見ればそれこそごまんというもんだ。僕なんて平々凡々な存在にすぎないんだろうさ」

それに。

「そもそも、自分を天才だと勘違いしている人間も、また多い」

僕もその自信を、自負を、勘違いを打ち碎かれた、一人だ。

「興味深い話ね」

「どうか。本物を見て崩れ去る紛い物の話なんて、聞いてもつまらないだけだよ」

「君が紛い物だとは思わないしつまらないとも思わないけどな」

全く躊躇することもなく、僕の顔をちらちらと見上げながら、須原はどんどん鉛筆を動かして、口もまた会話を途切れさすことなく動かす。そしてまた、意図の汲めない質問を繰り返した。

「じゃあさ、どうして君は、天才って呼ばれるのを嫌がるの？ 自分が天才じゃないって分かってるから、なんてそんな格好いい理由じゃないんじゃない？ 普通誰だって、天才、なんて言われたら嬉

しいと思うけどな」

「……………」

どうして。

「あ、そんな顔しちゃだめだよ、スケッチできなくなっちゃうから」

「……難しい注文だ」

「ううん、ごめん。でもね、ほんの出来心からの質問なんだよ。興味本位、って感じ。別に君のことをどうこういうつもりもないし、答えたくないなら答えてくれなくてもいい。それに私と君はそこまですで親交が深いってわけでもないしね、こんな不躰な質問をすること自体、君にとっては失礼にあたるのかな」

「いや」

そんなことは、ないが。

「…………うん。子供の無邪気さっていうのは、得てして大人を傷つけることがあるよな」

突飛なその語りだしに、須原は怯む様子もなく、手を止めることもない。構わず続ける。

「君はそういう経験あるか？ 須原」

「んー？ 子どもは思ったことをそのまますぐ口に出しちゃうもんね。例えば折角作ってあげた料理がまずいって言われちゃうとか、そういう感じ？」

「そうだな、そういう例を引き合いに出してもいい」

「それがどうかしたの？」

「例えばその料理で、子供が僕の料理を褒めてくれたとする。プロみたい、って。そりゃあ僕だって嬉しい。確かにそれは僕が料理に関して努力して、それが認められたのだと、そう解釈してもいいだろう。でも、実際はそうじゃない場合がほとんどだ。子供ってのは、大人は何でも出来ると思ってるんだ。料理を褒められたとして、それもやっぱり、そういう類の畏敬だと思わないか」

「ん、よくわかんないんだけど」

「じゃあ」

例えば。いや、例えるまでもなく。

「僕が試験で一位を取ったとして、さ」

「とったとして、じゃなくて実話じゃない」

「……まあ、とったとして、だ」

そこでこう言われるとする。

「やっぱり八代って天才だよな。ってね」

「……？　それが何か嫌なの？」

「僕はそれを、順位が二位だった奴に言われたことがある」

須原はまだ得心しかねる顔をしている。

「そこなんだよ」

その顔に、僕は少し食ってかかった。

「一位と二位の差はなんだろう。天才だからか？　二位の奴は持ってたなかった才能を、僕がたまたま手にしていたからなのか」

いいや、違うね。

「これだけだよ」

言って、親指と人差し指で空をつかむようにして、須原に見せる。

「ほんのこれだけの努力の差、なんだよ。やっぱりそこにあるのは、努力の差でしかない。一ミリ届くか、届かないか、それだけなんだ」
なのに。

「誰もそれを言わない。僕を天才だと決めてかかって、あいつには勝てないと言って、僕を神か何かに祀り上げたみたい。結局、僕を尊敬してるようで、そんな奴らは僕を見下しているにすぎないだろう」

『天才』なんていう一言で。

僕の努力はすべて無に帰す。

「誰も僕の努力を知ろうとしない。自分の限界を勝手に決めて、僕に勝てなきゃそこでお終いだ、という考え方しかしていない証拠さ。どうせやっぱり結局畢竟、言い訳なんだよ。お前は天才だから、凡人の努力なんてわからない、なんて言われたことが何度あることか。昔はその都度思ってた。そんなセリフは僕よりも努力してみたら

言えってね。だから嫌なんだ、天才なんて言葉は僕にとっては否定の言葉にしか聞こえない」

僕だってみんなと同じだ、なんて。言っても信じてもらえなかった。

言う隙もなかった。

「それとも君もそう思うかい？　僕と君は違うって。凡才の気持ちは僕にはわからないってさ」

「そんなことはないよ」

即答だった。少し、面食らう。

「私はそうは思わない。君、いい人だしね」

「……なんだ、そりゃ」

根拠に乏しい発言だな。

アハハ、と彼女はまた笑った。よく笑う娘だ。僕は何故だか、少しだけ棘を抜かれた気がした。

しばらく鉛筆が紙の上を走る音だけが行間を埋めて、須原はその手を止める。

「うん、よし。大体描けたよ」

そう言って顔を上げ、彼女はボブカットの黒髪をまた揺らした。もう出来たのか。

「早いな」

「そうかな？　もうそろそろ予鈴なっちゃうくらいだと思うけど」

言われて、携帯を取り出してみる。ディスプレイに表示されている時間は確かに、八時半過ぎ。

「へえ。意外と時間って潰せるものだな」

「そうだね。っていうか、変なことばかり聞いてちゃってごめんね。出だしから気を悪くさせるようなこと言ったのに、本当ごめん」

「ごめん、って謝るようなことでもないさ」

ああいう話をするのはさしあたって嫌いじゃないしな。

「むしろ謝らなきゃだめなのは僕の方だって話だったろ」

「穂波ちゃんにね」

ああ、と僕は返してから、彼女の横を歩き抜ける。

「降りちゃうの？」

「ああ、さすがに暑い」

「……がんばってね」

僕はその凜とした声に、須原を振り返る。

「何を？」

「いろいろ」

その深い黒味を持つ双眸が逆光の中僕を見つめて、言った。

「私も君を、格好いいジョーカーにしてあげるからさ」

30. 前夜の想

さて。

今までの様々な出来事を統合して、いざここに一つの結論はやってくる。

きっと一つの結末が、やってくる。

笑顔で無表情でお喋りな金色も。

人をいたぶるのが好きな撫子も。

壊れてなんかいない栗色も。

低い美声の切れる助言者も。

ぼさぼさ頭のやんちゃ君も。

口生意気な蒼髪人形も。

白く揺らめく猫耳毛玉も。

坊主頭の背高柔道部員も。

元気印の二本のおさげ髪も。

江戸前な言葉遣いの生徒会員も。

綽々としたおかつぱ頭も。

全部ひっくるめていいのだ。

このピリオドにはそれを含める価値がある。

絶対不回避な引力が、僕を引き寄せて。

絶対不条理な終焉が、僕を突き放す。

それはとっくに分かりきっていることで。

それはとっくに覚悟を決めたことだった。

どうしたって僕は少数派で。

ひょっとしたら徹頭徹尾、この世にただ一人なのかもしれない。

天才とは違うけれど。

絶対ではないけれど。

僕はどうせ、僕なのだと。

どうしようもなく、僕なのだと。

それを理解するには、やはり十分すぎて。

しかし逆説、不十分すぎて。

大富豪における最強は。

やはりババ抜きに便利なカードに過ぎなかったのだ。

絶対不可視な運命が、僕を飲み込んで。

絶対不義理な友人が、僕を吐き出す。

そんな滅茶苦茶な日が、一日くらいあってもいい。

そんな支離滅裂な時が、一瞬くらいあってもいい。

そしてそれは、やってくる。

何が何でもやってくる。

やってこなけりゃウソってもので。

結論。

掛け値なく言おう。

僕は七月七日が大嫌いだ。

31. 二枚のジョーカー

穏やかで慎ましくて麗らかな春の足音がいつの間にか遠ざかっていったのは、人々が陽炎をちらつかせ遍く熱波を従える夏の後ろ姿を見つけて駆け寄っていったからであり、実のところそれは春に対する興味を失うように教えられてきた国民洗脳による春に対する暴虐なのではないだろうか、とか擬人的表現技法で季節の移り変わりを虚ろにしたためてみるのも、夕涼み時にはまた一興だろう。

来る日も来る日も休むことなく日本国民にうだりを提供し続ける夏は頑張りすぎだと思うので、せめて一日くらい有給休暇をとってくれてもこちらとしては全然構わないのだけど、しかし彼には約三カ月程度しか勤務期間がないわけだから、一年を平均してみれば、日本に勤める夏は事実その辺の大学生よりもよっぽど暇そうだった。そうは言っても、地球温暖化の影響が知らないが、近年の夏の精力的活動に対する熱心さには目を見張るものがある。

今年の文化祭がやってきたのも、そんな夏が猛威をふるっていた七月七日。

驚くほどあっさり、文化祭の日は訪れたのである。

最高にハイな美咲に模擬店巡りで散々振り回されほんの二時間ばかりの間に体力と金銭を無駄に浪費しまくっただけに終わらず、行きたくもなかったコスプレ喫茶に四十万に無理やり連れ込まれ、チャイナだかメイドだか和服だかの女の子たちに囲まれるというのはあまり悪い気分ではないと言う事をさりげなく悟った僕であるが、しかもそこにさりげなく畑中（やはり無視してくる）も憑いてきているわけで、僕はマジで文化祭を楽しむどころではなく、内心常に冷や汗ものだった。

こんな時だけに限るが、ベガとアルタイルのことがほんのちよっぴり羨ましい。普段は一年に一度しか会えない恋人など居て居ぬようなものだと思わないが。あれ、恋人じゃなくて夫婦だったか

な。まあいいけど。

とにかくそんな織姫と彦星が出会うというロマンティックなシチュエーションにしては少々配慮の足りない熱気が、空が岬高校を大勢の活気と共に満たしている。

さすががしいとまでは言わないけれど、実に。

青春を見た気分になった。

たぶん、去年も同じことを思ったのだろう。覚えてないけど。

さらにそれはここ、二年二組の教室でもある程度作用している集団心理であり。

「よ、よし。覚えたか？」

関田のおぼつかない声が裏返って聞こえる。

「好きなところでストップって言ってくれ」

言って、関田は不器用な手つきでランプを右手から左手へとぱらぱら落とし始めた。机一つ隔ててその前に立っていた女子生徒が「ストップ！」と可愛らしく声を上げる。

「ここだな、ってうわー！」

「……………」

「……………」

僕の沈黙と、女子の沈黙である。花吹雪のように宙を舞い、床に散らばるランプ。

いや、普通あそこで落とすか？

「す、すまん！」

あたふたとそれを拾い集める巨体を尻目に、女子生徒二人は白けた顔で僕の前を通り過ぎ、つまり教室を出て行ってしまった。

「……何やってんだ、お前」

「げっ、見てたのかよ椎奈！」

「まあ、そろそろシフト交代の時間だからな。ようやく美咲らから解放されたよ」

関田に詰め寄りながら、僕は常時とは教室を見回してみる。

ぐるりと一周するように壁際には机がいくつか設置しており、ク

ラスの生徒が何人か椅子に座って何種類かあるトランプマジックを披露していた。壁や天井には、須原がクラスの面々を元にデザインしたA4サイズのトランプが、約四十名分貼ってある。この教室を訪れることにおいて、マジックを披露されるというのも正当な楽しみ方だろうけど、マジシャン銘々は一時間毎に交代するので、時間をずらして全員がどのようなデフォルメされているのか確かめるのもなかなか楽しそうである。実際、マジックを実施しているクラスメイトに「あなたはどのトランプなの？」と声を掛けている人もちらほら見受けられた。

単なる自画像を描いているわけではないところに須原の絵のスキルが感じられるというか、本当に彼女がトランプにした二年二組の面子は、僕の想像を遥かに超えて美化され、愛玩化されている。一応塗り絵という形で全員が参加しているため、それぞれに、うん、なんというか、個性あふれる——配色となっているし。

まあ、僕のものに関しては敢えて、触れずにいるとしよう。

「そうか、もうそんな時間か……ようやく、ようやく解放されるわけだなあ！」

トランプを集め終わった関田はまるで土木の重労働でも強いられていたかのように汗を滴らせまくって、感慨深げに声を震わせていた。

「何を大げさな」

僕は軽く嘲笑する。

「何を言うか、見てただろうが椎奈よお！」

しかし坊主頭は必死に、まさしく圧政からの解放を待ち望んだ奴隷のごとく、その目をよくわからない感情に燃やししながら、目一杯反論してきた。

「俺の不器用さはなあ……」

「知ってるよ。針の穴に糸を通そうとしたら強く握り過ぎて針が折れちゃったっていう話だろ」

それはもはや、不器用のテリトリーを超えていると思う。

「それもあるが、俺が今言おうとしてたのは、リンゴの皮をむいていたらいつの間にか芯しかなかったという話のほうだ」

「逆にすげえ」

というか途中で気づけ。

「まあ、そういうわけで俺のマジックはこの一時間、一度もたりとも成功しなかった。地獄だったよ」

「……なんというか」

そんな悲しい笑顔で言われてもなあ。

「ま、そういうこった。俺をマジシャンに抜擢した奴らの気が未だに知れん」

「全くだな」

賛同してみた。

殴られた。理不尽だ。

「ま、俺は文化祭を満喫してくるとするか。一番不安だった役回りも、まあ一応とはいえこなし終えたことだしな。後は頼んだぜ、親友」

「待った、それよりお前、例の約束忘れてないだろうな？」

「……、ああ、あれな。本当にやるのか？ 生徒会の誰かに恨みでもあんのかよ」

関田は顔色を少し真剣なものへと塗り替えてから、僕に聞き返す。

「別に、ちょっとしたいたずらだよ。出来心とも言うね。偶にはいいだろ？ 趣向をかえてこういうのも。お祭り騒ぎにはちよつとした事故や騒動がつきものってね。僕なりの文化祭の楽しみ方さ」

僕はそれに軽い調子で返しておいた。そこまで深刻になられても困る。

「はあん？ お前がいいってんなら俺は、いくらでも協力はするがよ。ほどほどにしとけよ、お前頭いいんだから。いいか、とりあえずはこれ一回きりだからな」

「言われずとも、金輪際こんな真似はしないよ」

言っと、関田は急に黙り込んで僕をじっと見つめてきた。

「……お前」

「なんだよ、急にどうした。気持ち悪いぞ？」
あくまで、軽く。

「いや、……、なんでもねえ」

こいつは、変なところで勘がいい。だけど、それ以上のところまで突っ込んでこようとは思わないのだ。それを見越して、僕は動じない。

「じゃ、ま、予定通りに」

「そういうことで頼んだよ。親友」

と僕がそう言い終わる前に、関田は僕の前から姿を消していた。

「……って、誰が親友だったの」

勢いで僕まで繰り返してしまったじゃないか。親友、だなんて言葉。なんだか急に気恥ずかしくなって、独り言で訂正。

だって、僕にはそんなものを駆使する権利も権限も、一切ないってのに。

しかしながら僕の言葉を聞く姿勢など端からないだろう彼は、もはや教室を出ていたわけで、多分、僕の恥ずかしい単語だって耳には入っていなかったのだろう。全くもって、肌理の荒い奴だと思づくと思う。それがいいところでもあるんだけどさ。

僕はそれを見送ってから、コの字に配置されている机の中で、関田が離れて無人となった、出口のドアに最も近い席へとついた。

しばらくするまでもなく、賑わいだ教室で一通りのマジックを堪能した生徒や学校外の方々が、続々と僕の机へやってくる。なるほど確かに、こうして赤の他人を前にしてみるとマジックというのも意外と緊張を呼び起こすものだ。関田ほどではないにしろ、手元が狂うのも頷ける。などと思いを馳せつつ僕は半時間程の間、適当に客を捌いた。

一足先に交代した畑中が僕の真向かいでマジシャン役をしていた。うん、していた。

それはいいとして、どうしてなかなか、大抵の客が驚いてくれる

というのは嬉しかったり。こんなに単純なマジックだったのにな。こんなチャチなものでも楽しめるとなると、やはり人の幸せというのは考えようだ。捻くれた奴は、幸せにはなれない。

と、そこへ現れたのは。

「ん……？」

黒髪ボブカットの少女だった。

「君のシフトはもう終わったと思ったけど？」

「ちょっと気まぐれでね」

須原は、僕を見下ろしてアハハと笑う。

「それにほら、自分の描いた絵ってのは案外愛着も湧くものだよ？」
そんなものだろうか。

「そんなものそんなもの。それにさ、今日は何だか知らないけど、お父さんも来てるんだよね」

お父さん？ 君の？

「勿論私の。なんていうか、邂逅相遇を銜ってるって感じ。びっくりだよ、仕事休んでまで来るなんてさ。授業参観か何かと勘違いしてるんじゃないのかな」

「それはないだろ」

須原はそれなりに常識人であるからして、その父が非常識であるなどとは考えにくい。娘と一緒に文化祭を回りたいだなんて、なんともかわいい発想ではないか。まあ、もっとも僕の父は根っからの非常識人なので、その法則を強くは推せないが。

しかしうちの文化祭はどういうわけか、地元の人間にそれこそ非常識なまでの人気がある。毎年平日開催であるにも関わらず、一般人はかなりたくさん訪れるらしい。らしいというか、僕の目で見ただけでもそのようだ。だったら彼女の父親が文化祭に来たってそこまで甚だしく疑問なわけでもない。

「で、それが何で君がホームルームに舞い戻ってくる理由になるんだ？」

「んー、ちょっと照れ臭いってのもあるかな。実は多分彼、今既に

現在進行形で正門前にいるのだよ」

ひどい奴だな。

「そう言わないで。君も想像してみれば今の私の気持ちくらい分かるでしょう」

あの親父が文化祭に。

しかも同伴して行動したがってるとなると。

……………。

「……うん、僕なら死を選ぶ」

「そこまで？」

須原は垂れ気味の目を見開いて少し驚いていた。

君にはあんな親父を持った僕の気持ちは分かるまいよ。

「ところでさ、今年もやるんだよね、空爆」

空爆。

かなり物騒な名称ではあるが、それは『空が岬高校ゲリラライブ』のことを指す。まあ、ゲリラライブとはいえ、開始時間は毎年決まっているのだが。しかしプログラムにその旨が記載されているわけではないので、一応そういう扱いになっている。

言ってみれば文化祭の風物詩、名物、看板イベント。

「やるんだろうな。文化委員が屋上監視に駆り出されてるみたいだし」

毎年恒例、空爆。

いや、全くもって物々しい名称なのだが、その実皆の注目を面白いくらいかつさらっていくのだから、大したものである。去年が運動場だったから、今年はおそらく旧校舎と新校舎の間にある中庭で行われるのだろう。詳しいことは僕も知らないけれど、去年はぶつとんだ会長のマイクパフォーマンスに始まり、個人バンドのライブにチアリーダーや吹奏楽のジャズライブなどと、文字通りお祭り騒ぎ、大騒ぎ。僕自身はそういう空気に馴染めなかったしこれからも馴染むつもりはないが、しかしやはり青春だ。ああいうのもたまには不愉快じゃない。

風の噂だと、四十万も出演するのだそうだ。ああいう騒ぎ大好きだからな、あの娘。

「お父さんが見たいってさ。そういうわけで空爆まで時間をちよいと潰したいんだ」

と一つ前置きしてから、須原は挑戦的な目つきで僕を見る。

「マジック、やってみせてよ」

「……君は種を知ってるだろう？」

「んや、君のやるのは知らないよ」

そうだったっけ。あまり記憶にない。誰にどのマジックを教えたかなんて、一々僕が管理していることでもないし。

「ま、それならいいか」

なんて、猿芝居を打って。茶番はここまで。

丁度。

君にはこのマジックを見てもらいたいと思っていたところだ。

僕は手元にあったトランプの山をおもむろに掴んで須原に近いところに移動させると、その上に左手を置き、一気に左へとスライドさせる。一列に、さっと広がるトランプ。リボンスプレッドと呼ばれるテクニクである。

「おお、すごいね」

「ま、見た目ほど難しくはないんだけどね」

僕は彼女の夜の瞳を射ぬきながら、定型の台詞を口にする。

「それでは、一枚。好きなカードを選んでください」

「はい」

須原の小さな手が、一枚のカードを抜いた。

「覚えましたか？」

「……」

数瞬、カードを眺める、表情に変化のない須原。

「覚えましたか？」

「……ええ」

残った山札を一つにまとめる。

「では今から僕がカードを上から下へ落とすので、好きなところでストップと言って下さい」

そして僕は先刻関田がしていたように、カードを落下させた。

「ストップ」

清澄な声が、制止をかける。

「それではそのカードを一旦置いて」

言いながら、僕はストップと言われたところで山札を二つに分ける。直接山札には戻させない。それから須原の引いたカードを間に挟むようにして、それらを重ねた。

数回、カット。

「それでは」

再び、リボンスプレッド。

横列になったトランプを前に、一方の端を人差し指で持ち上げ、ひっくり返す。

ドミノ倒しの要領で、トランプは全てぱたと裏返った。

「あ……」

そして、須原は、小さな声を上げた。

「あなたが選んだカードは……」

僕はそれを指さす。須原の眼を見ながら、彼女に何もかも見せるけるが如く。

絶対と絶対の間に。

ジョーカーとジョーカーの間に挟まれたそれを。

「ハートの、6——ですね？」

しばらくの、噤口。

教室の喧騒のせいであまり露骨にそれを感じることはなかったが、確かな沈黙。

「……大正解。さすがだね、関田とは違う」

須原は、笑わなかった。

「当たり前だ。あんなのと一緒にするな」

僕はトランプを片付ける。まるで何もなかったかのように。

「……まいったな」

須原はそれを見ながら、困却したみたいに力なく言った。

「何がだ？」

「何がだ？　だってさ。よく言うよ」

そして、僕を見る。

「さっきのハートの6、どうやったの？」

「……マジシャンに種明かしを頼むなんて、無粋だな、須原」

僕は返して、ランプをとんと揃えて置き、ゆっくりと、一文字ずつ台詞を口にした。

「……そうね。是々非々って感じ。その通りか。君が正論」

そうして、ボブカットを揺らして彼女は、僕に背を向ける。

「さて、そろそろ時間だ」

「ああ、そうだな」

「君もでしょ」

「そうだな」

「ねえ」

「ん」

どんどん短くなっていったやり取りの果てに、須原はもう一度、首だけで振り向いて。

「いつからなのかな？　ちょっと怖いや」

「……」

「やっぱり君、普通じゃない」

僕は何も言わずに、半分しか見えない彼女の顔をただ、見つめる。しかして彼女は。

「アハハ」

笑った。

どうして、何かを愛惜するように。

「さっきも言ったけど、君もそろそろ、屋上監視の時間でしょ？　四十万ちゃんから聞いたんだから、確か。さぼっちゃだめだよ」

言って、彼女は完全に、僕に背を向ける。

「……ま、サボるわけないか」

そして須原は、今度は振り返らずに、教室を出ていった。

32. 種明かしの始まり

「……」

須原の言うとおりに、時間だ。ぼーっとしているわけにはいかない、行かなければ。と僕が席を立とうとした刹那。

「あ、ひいちゃんっ！」

おあつらえむきのタイミングで、美咲が教室へと飛び込んできた。怪しげな台詞を口にしながら。

「そろそろ交代のひかんだよねっ」

そして僕の机の前で跳ねるようにして停止、いつも通りの赤みがかったツーテールを揺らす。いや、その前にちよっと待て。

「……君、その餅食ったままマジックするつもりか」

美咲はその小さな口いっぱい餅（おそらく黄粉）を頬張り、加えて両手にもそれぞれ、ピザ餅と安倍川餅を握っている。

「え……だめ？」

いや、だめに決まってるだろうが。何ちよっと驚いてんだ。

「うー」

「ほら、僕が一個もらってあげるから、さっさと食べちゃいなさい」

「えー」

不服とばかりに唸る美咲から、香ばしい安倍川を取り上げる。

「あっ！」

「母音だけで会話してんじゃねえ」

「……うう」

あ、これなかなか美味しい。

じゃなくて早く交代しなきゃだめなんだった。僕は立ち上がって、まだ口をもぐもぐさせている美咲を椅子に座らせる。

「悪いな」

美咲には無理を言って、僕が文化委員で抜ける分だけ、代わりにマジシャンをやってくれることになっている。

「いいのいいのっ、椎ちゃんが文化委員のお仕事ちゃんとやるっていうのに協力しないほうが不義理でしょっ！」

「……………」

なんか、今の言われ方はどうなんだ。

「あ、そうだ美咲。例の奴、まだ借りっぱなしだけどいいのか？」

「あ、あれね。うん、いいよっ！一応予備があるし。……ていうか椎ちゃん、ひょっとしてなんだけど、ヒロ君になんか妙なことを吹き込んでない？」

「ん、気のせいだろ」

「そうか、気のせいだねっ！」

単純な奴。

「ていうか、サヤでよかったらあ……その」

何やら恥じらうような様子だが、それも手に持つピザ餅のせいで台無しである。

「いつでも好きな時に好きなようにし……使ってくれていいからさっ！」

「……おー。お言葉に甘えさせてもらうよ」

何か言いかけていた気がするが、まあ気がするだけだろう。そう決め込んで、僕は美咲に手を振った。美咲がちぎれんばかりの勢いで手を振り返したのを目の端でとらえつつ、いつにも増して賑わいだ教室を出る。

あれは月曜日にでも返せばいいかな。

さてと。

文化祭というふわふわ宙に浮いたみたいな非日常、行き交う享楽の声や逸楽の影で溢れる廊下。皆例外なく、楽しそうだ。そんな空気の中ごった返す人々の間を縫うようにして、僕は屋上へと向かった。一分と経たず、到着。なんだかここ一週間、普段あり得ない頻度でこの屋上を訪れている気がするな。そんなことを頭のどこかで考えつつ「関係者以外立ち入り禁止」と張り紙のされた鉄戸を、開け放つ。

そこには既に、落下防止の手すりにもたれかかり運動場を見下ろす畑中の後ろ姿があった。

「もう来てたのか、早いな」

割合明るめに、声を張る。

彼女の栗色の髪が、風に吹かれて揺れるだけ。その小さな背中中は、何も語りはしない。

まあ、今更返事がないくらいで落ち込むなんてこともなく、いやそもそもそれは分かりきっていたことなので、敢えてそれを待つなどという愚行に時間は費やさない。僕は彼女に背を向け、反対、つまり旧校舎側の中庭が見えるほうの手すりへと体を預け、見下ろす。「お」

まだちらほらとしか人影は見えないが、しかしその中では、ポニテールのメイドが何やらせわしなく動いているのが目立って見えた。

……メイド服のままかよ、四十万と。

『おい』

主だった前置きもなく、腕輪からフーが話しかけてきた。

「ん、どうした」

『ずっと考えていた。ジョーカーの目論見、とやらを』

ああ、あれ。

「それで？ 考えはまとまったのか」

『ああ』

肯定の返事。

「ほう？」

暇だから聞いてやるよ。

『偉そうに。まあいい。前は確か、ジョーカーが貴様のことをジョーカーと呼ぶ――ややこしいな――理由、とかそんな話だったな』
それこそがつまり、気づくための鍵だ。奴に別の目的があるという、事実。

『そして貴様の口ぶりからすると、その内通者はある程度特定できるといった感じだった』

「ああ」

『しかしながら、貴様がジョーカーと呼ばれた事実をどうのこうのするよりもまず、そこに至るのには必要な条件がある。そう、腕輪を手に入れたのが貴様だ、ということをジョーカーが知らなければならぬはずだ』

そうだな？　と僕に確認を取るフー。

頷くこともなく、僕はギラギラ照る太陽を手で遮る。

『偶然見かけた、なんていう如何にも都合のいい話はこの際考えないぞ。そしてそうなってくると、ジョーカーが誰を監視していたのかは自ずと見えてくる』

フーは言う。

『あの日、貴様がこの腕輪を付けているのを最初に発見したのは、坊主頭のデカブツ。しかし奴は月曜日の朝貴様が言ったように、ほぼ白。ジョーカーと繋がっている可能性は、まあないだろう。全くの一般人だ、監視される理由もまずない』

関田のことだな。

『さらに金髪の男と黒髪の女、あいつらは貴様のクラスメイトではないし、ジョーカーと呼ばれたということも知らん。よってこの二人も除外して差し支えない』

龍ちゃんと美鈴さんのことだろう。

『となると、貴様が腕輪を手にした事実を、土曜日の夕刻電話がかかってくるまでに知り得た人物は残すところあと一人』

フーが言う。

『つまりジョーカーが何らかの目的を持って監視、観察していたのは』

「……………」

『畑中穂波だ』

どこかでまた、蝉が鳴き始める。

逆ベクトル。

狙われていたはずの僕。

その僕を守るはずの畑中。

監視されていたのは、その彼女。

庇にする手首にじわり、と汗がにじむ。

僕は、何も言わない。

『ジョーカーはあの小娘を見張っていた。そして、畑中穂波の監視者は必然的に、貴様が腕輪を手にしたことを目撃する。さらに言えば、小娘が貴様のことをジョーカーと勘違いし、そう呼んだという事実をも耳にした。ジョーカーという男は貴様をからかうためにその勘違いを利用したようだしな』

そう。

おそらくフーの言っていることは、十中八九正鵠を得ている。僕の考えとほぼ同じ。というか、少し考えれば誰でもすぐにわかるだろうことだ。

……ここまではね。

『しかしお前は黒髪の子——美鈴とか言ったか、あの女に、腕輪はジョーカーを誘き出すためのエサだ、とか言っていたが、ジョーカーはご存じのとおり、頭の切れる男だ。そんな初歩的な、馬鹿げた罠に気づけないはずがない。だとすれば、奴も利用しようとしていたのではないか？』

僕は黙る。

『奴は、ジョーカーは予測していた。自分を仕留めるために、あの小娘が駆り出されるだろうという事実を。そしてそれを逆に利用し、畑中穂波を始末しようと考えていた。『ジョーカー』と「封じ屋」は敵対関係にある組織、そして敵方の有能な駒を隠密に潰すという策略は決して珍しいものでもない』

「……それで？」

『しかし、椎奈。貴様という邪魔が入った。だからあの場で小娘を始末できなかったのだ。そこで、ジョーカーは画策する。自分の部

下を使って、貴様に責任をなすりつけた上で畑中穂波を消せないものか？ と。そしてそれはすぐに実行に移された。公園での猫とガキだ。貴様が猫をどうにかするように仕向け、一方でガキが小娘を仕留める手はずだった……そう考えれば辻褄は合う。どちらにしろ失敗したようだがな。あの小娘は魔導師として強すぎたのだ』

僕は目線を上げる。旧校舎のアナログ時計が示すのは、一二時十分前。

後——十分か。

『だから、今度はもっと直接的に、不意を打って、単純に。そういう考えになるるのは自明』

フーは一息おいて、言った。

『結論。貴様が託された任務とは、今日、「空爆」とやらの騒ぎに乗じて畑中穂波を殺すことではないのか？』

「……………」

『そしてその為に、わざわざ小娘と仲を違えた。その方がやり易いと考えたから』

そして、無機質で平坦で、味気のない透明な声を従えて、違うか？ と僕に問う。

僕は、一瞬厳粛な面持ちを保ってから。

答える。

「大ハズレ」

そしてフーを馬鹿にした風に、控え目に哄笑してみせた。

『む』

「はは、いいね、なかなか面白かったよ」

確かに全く、面白かった。いやはや、暇つぶしには丁度いい余興だった。

「これはほんの例えだけど、射撃が何で難しいか分かるか？」

『いきなり何の話だ』

「……少しの照準のズレが目標に届く頃には大きなズレになるからさ。標的が遠ければ遠いほど」

勿論、僕は射撃に詳しいわけではないし、これが射撃競技を馬鹿にした台詞だというのは自覚できている。が、僕が言いたいことは伝わるだろう。

「お前の見識も、途中までは当たっていたよ。そこから先も、まだ少しくらいはかすってた。でも結論まで到達してみるとこれが滑稽、全然的外れ。考えが足りてない。大体お前の論法だと、肝心の内通者のことにほとんど触れていないじゃないか」

『むむ』

「しかも、今の話ではジョーカーは畑中のことを僕が腕輪を手に入れるずっと前から監視してたってことになる。それなのに彼女を襲うタイミングがこれまで一度もなかったと思うのか？ 如何に畑中が警戒心の強いアーティストだったとして、一瞬でも隙を見せることがなかったとでも？ いくらなんでもそんなことはありえないさ。畑中が見張られていることを知っていたならいざ知らず、彼女は何も知らなかったんだぜ。監視されているなんて、気づいていなかった。それにそれこそ、ジョーカーは頭が切れる。どんな小さなチャンスだって絶対的な好機に変えてみせるだろう」

『むむむ』

「ジョーカーが彼女を殺そうとしていたのなら、彼女が今生きているのはおかしい。生きているはずがない。少なくとも、猫にしろ少年にしろ僕にしろ、もっと確実な手段を試みるはずだ。あんな不確定要素ばかりの方法を使うわけがない。そうだろう？」

まあ、少なかれ誇張はあるかもしれないが。

『むう……』

話しているうちに、眼下の中庭にぞろぞろと人影が増え始める。アンプだとかドラムだとか、賑やかしのアイテムたちも多く運び込まれているみたいだ。その中心となって指揮を執る江戸前メイド。

——うむ、至って実に格好いい。

『それでは一体……？』

「それでは一体……？ じゃないだろ」

僕はまたフーの話に意識を合わせる。

ジョーカーに監視されているのは畑中。

そこまで分かっているのなら、後はほんの少し思考のベクトルを動かしてみれば、それだけで事足りる。

「まず。畑中は、高校に入ってからあまり積極的に交友関係を広げようとしていない」

そのことに関しては容易に想像がつく。おそらく彼女の仕事への意識の高まりから、だろう。

「そして監視、とはいえやはり彼女は学生だ。それ相応の手段というものがある。灯台下暗しというだろう？」

『……どういう意味だ』

「そのままさ」

彼女は、言ってみればこの世界のプロだ。

「あからさまな尾行、監視。そんなものに気づかないほど、畑中も間抜けじゃないってことだよ。もっとも事実を知っているわけじゃないし、彼女が実は超ドジっ子キャラだったなんていうなら話は別だけど、でも彼女は抜け目なく一流のはず」

あれでドジっ子なら、それはそれでアリだけだな。

「彼女が監視に気づいていないということは、つまり、ジョーカーとの内通者は彼女にとって疑いをかけるという行為の対象外にいる可能性が高いということ。いや、そうでなければ今に至って監視するなんて行為がスムーズに行えているはずがない、少なくとも今彼女とクラスメイトなわけだしな」

『疑いをかけるという行為の対象外——』

「もっとも近くに居ながらにして、何の疑念も生じない、一切の疑問もぶつけられない関係」

ま、これだって使い古された監視方法なのかもしれないが。

「畑中の友人、に絞られる」

一般人。表の世界に生きる人間。

その先入観こそが、畑中を縛る最も強固な鎖。

「それも、だ。さっきも言ったけど彼女は高校に入ってから交友関係を広げていない。ということは彼女に監視がついたのは高校生になるよりもっと以前、おそらく――彼女が魔術の世界に入って間もなく出来た友人関係……と僕なら考える」

そう、時は彼女の小学生時代にまで遡る。

そこで疑惑の範疇に入ってくるのが。

四十万 香菜美。

須原 愛乃。

「彼女にとって親密であればあるほど、気を許していれば許している程、彼女はその友人に疑いをかけたりしないだろう。そういう人間だよ、畑中は。しかも自分にとって普通の人間として振る舞える数少ない相手……特別な二人なんだろうな、畑中にとって彼女らは」
僕の人生において、この一週間以上に畑中穂波という人間を詳しく観察した日々はない。だからというわけではないが、ある程度彼女の人物像は把握できている。

僕にやたらと接近を図ってくるのも、そういう心理からなのかもしれない。

龍ちゃんの言葉を借りれば、魔導師はマイノリティ。

その上彼女はただのアーティストではない。

万能者。トランプ。

異端に属す魔導師の中でも、さらに異端。

その気持ち、感覚。

解らなくもない。

僕のそれとはまったく質は違うけれど。でも。

自分だけが、知っているということ。秘密を抱えているということ。

秘密というものは、持っているだけで辛い。厳しい。

それは、周囲の人間が、自分という人間と本質的には出会っていないということなのだから。

だからそれを開けっ広げにして話してしまえるなら、楽になって

しまえるなら、それ以上のことはないだろう。畑中にとって僕がこの世界に足を踏み入れたことは、確かに自責の念に駆られたとしても、半分以上嬉しいことだったに違いない。

なんて。

出過ぎた考えだろうか。

出過ぎた考えだな。

「さて……容疑者約四十名から、一気に二人だ。こうなれば、もはや特定したも同然」

畑中が監視されているという考え方さえできれば、後はオートマチックにここまで導ける。いや、そもそもそんなに大仰な言い回しで語るようなことでもない。往々にして被監視者の周辺が最も怪しいなんてのは、セオリーにすらならない話だ。

考え方さえできれば、と言ったが、それさえも単純な思い込みのロジックを解けるか否かに過ぎないのである。ここまでは、あくまでも前菜程度。

メインディッシュはまだこれからだ。

『ふむ。あの二人の内どちらかが魔術にかかわっているというのか。いや、二人ともという可能性もある』

「そうだな」

『貴様はもう分かっているのだろうか？　どっちなんだ』

「ん……もうじき分かるさ」

そろそろ。

「嫌でもね」

時間だ。

言って僕は。

畑中を振り返る。

丁度僕の反対の手すりに身体を預けていたはずの、畑中を。

振り返る。

彼女は。

栗色の髪を振り乱して。

手に持っていたオペラグラスを地面に落として。
学校の屋上で。

熱された緑のコンクリートの上に。

仰向けに倒れていた。

33. 一つの答えへ

『……！』

フーが一瞬にしてその愛らしい姿を具現化し、青い長髪を揺らして僕の目前に浮遊する。ていうか空まで飛べるのかよ、お前。もう何でもアリだな。彼女は動揺している様子はないが、しかし多少の驚きはあるようだ。異様な光景をその大きな目で確認、時を空けて言う。

『おい……』

「ああ、畑中が倒れてる」

『……、随分と冷静なのだな』

フーに言われるまでもなく、自分でも怖いくらい僕は冷静だった。冷静というより、冷淡。陽炎みたいに歪んだ現実なのに。異常すぎる光景のはずなのに。そんなリアルを目の前にして、焦燥感も、危機感すら湧いてこない。

いや、違う。動じる要素がないのだ。畑中が気を失い、倒れている。

これは、予定調和、規定事項にすぎない。

僕はポケットに右手を突っ込んでから、死んだように眠る彼女の人形のような顔を見つつ、他に誰もいないはずの屋上に響くような声を張った。

「かくれんぼよりも鬼ごっこ派なんですよ、僕は」

もう一つ、続けて言う。

「出てきてくれませんか」

僕の声に反応したのか、はたまた待っていたのか、それを合図にしたように、校舎へ入るドアの影から。

一人の男が姿を現した。

ゆっくりと、一歩ずつコンクリートを打ち鳴らし、男は歩く。どこか厳かな足運びで。だが、その足取りにはたった一つの躊躇もな

い。何らかの確信の下に、その存在は動いているように見える。

そして、僕と畑中を結ぶ延長線上で、静止。
黒。

線の細い体躯に纏うのは、夜色の真黒なスーツと、星ひとつない真黒なネクタイに、同じく真黒な靴。ポケットに手をつこんだまま――暑くないのだろうか――僕と対峙するその顔には初老の雰囲気漂わせ、白の混じる髪は長いとも短いとも言い難く。

しかし、重くない。その動作には、纏う雰囲気には、悉皆重みがない。全体に暗い色合い。しかしそれは闇ではなく、影のよう。まるで存在が希薄。

僕はその細身の男に向かい。

「どうも初めまして。こんにちは」

一歩だけ前に出て、口だけで笑ってみせる。

「これはどうも。こちらこそ、お初にお目にかかるよ」

その声は、低くも高くもない。さらにどちらかと言えばハスキーだ。どこか可笑しくも聞ける丁寧な口調の男は、目を線みたいに細くして柔和に微笑み返してきた。

「君が八代椎奈君かい」

「ええ」

僕はその細い眦に不必要なまでの切れる視線を送り。

「あなたは」

息を吸い込み、言おうとして。

言おうとしてそこで、はたと気づく。

世界が、青いことに。

「……っ！」

透き通った青色の壁が屋上の周囲から天に伸び、その薄氷の壁を透る光はその輝きを神秘的なブルーに変えていた。聞こえていたはずの祭の賑わいも、まるで水中で聞いているがごとく揺れて、フィリタを通したみたいにくぐもっている。浮き立つムードは、僕らから隔離されて遠く離れたところに連れて行かれていた。

いや、違う。普通に考えて、隔離されているのはこの空間のほうだろう。それも、隔離と表現するより、乖離だ。ここは世界から無理やりはがされた、世界の一部。

蒼い世界。

そして幽閉されたようなこの屋上を満たすのは、殺気立つ緊迫感。知らずのうちに汗が頬を滴る。

「……結界術」

それもおそらく、畑中が僕のうちに仕掛けたものと同じタイプだ。僕は視界の端に「あるもの」を見つけ、それを確信する。

「外からの情報を遮蔽し、内側から出られないようにする形式の結界か」

僕の声は周囲の不鮮明な違和とは対蹠的に、気持ち悪いくらいの明瞭さを持って周囲の半透明の壁にこだまし、幻想的に響き渡る。

『この色……』

フーが呟いた。

——色？

ああ。なるほどね。そういうことか。

「君の話は、かねがね伺っているよ」

周囲の状況が一転したことなどまるで気にも留めず、男は言う。

「でしょうね。あなたはそういう役回りのはずだ」

そうでなければならぬ。

『あいつはジョーカーか？』

「いいや、違うね」

あんな奴がジョーカーはずがない。あんな薄っぺらい奴が。

「ま、そういう展開でも新鮮ではあったらうけど」

それでさ。

君もいるんだろう？

さも当然であるかのように。僕は平坦に、なんてことのないように、言った。

「出てきなよ、須原」

「……アハハ。ばれてちゃ、しょうがないね」

ドアの影から、そんなセリフを口にしつつ、須原が現れる。いつもと同じボブカットを揺らして。全く本当に、いつもと同じように。

『……ほう、これは一体どういうことだ?』

「どうということなんだろうね」

フーの声を継いで、僕は目前に立ちはだかる二人へと声を放った。

「なあ、須原」

彼女の黒眼を捉え、言う。

「まだ時間はあるんだろう」

ここは目一杯気取って、どこまでも気障に。

「一つ、解決編と洒落こまないか?」

チェックは可能な限り、格好良く。僕の下らないポリシーみたいなものだ。

「……だってさ。どうする?」

窺うように首を傾げる須原に対して、男は小さな目でまっすぐ僕を見たままに答えを口にした。

「構わんよ。君の話なら耳を傾ける価値くらいはある」

それじゃあ少し失礼して。

「あなた方は、もう大方分かっているんでしょう? だったら前提

説明はなしでいいですね」

「ああ」

「ええ」

男と少女は銘々に頷く。僕はそれを見て、緩やかに語りを始めることにした。

終焉へのマジックショーを、始めることにした。

「……なあ、フー。さっき僕は言ったよな。あからさまな尾行や観察に気づけないほど畑中はマヌケじゃない。そして、だからこそ畑中が気を許す友人なら、安全かつ確実に監視を遂行できる。って」

『……、……ああ』

フーは空白の中にさらに間を持たせてから、相槌を打つ。その目はまだ倒れた畑中に向いていた。僕は構わずに言う。

「しかし、その考え方は一見筋が通っているようで、通っていない穴がある」

『……穴、か』

そう、穴だ。それも人が落っこちてしまいそうなくらいの大穴がね。

『友人は所詮友人にすぎないということ、だな』

「そうだ」

それではまだ半ばなのである。まだ足りない。

「畑中の友人だから。それだけだとあの放課後、どうやってジョーカーとの内通者が畑中を監視していたかの説明がつかない。あの時、畑中はどうみても一人だった。それにあれだけ大っぴらに魔導の力を揮っていたんだ。友人が彼女に対するウォッチャーだとして、畑中はやはり、それに気づいていなかったとしか考えられない」

つまりこの考え方だと、真実問題の半分もクリアできていないわけだ。

「ところでフー。僕とあの猫耳のメルシングが交戦した時のことを思い出してほしい。何か違和感はなかったか？」

『また話が飛躍したな』

とにかく、思い出せ。

『……貴様は選ぶべき言葉を誤り、猫耳の男と戦闘に入る。そしてそれを貴様が知恵を利かせた戦法で倒した、と。簡略すればこんなものか。それで、どこに違和感がある？』

いや、あるさ。

「——いいか、おかしな点は二つだ」

『二つ？』

フーが振り返り、その双眸が僕を貫く。揺れる蒼い光の中に、蒼いメルシングか。なかなか美しい。

まず、一つ。

「畑中が僕を助けに入らなかったこと」

『……何か不自然か？』

「思いつきり不自然だ」

僕はあの時、素人だった。いや、今もだけど。

「結論を得た今でこそその奇矯さは薄れているけれど、あんな鋭い十本の爪をまともに食らって僕がまともでいられるはずがない。少なくとも僕はそう思ったし、そう思ったからこそ細心の注意を払って奴からの攻撃を避けた。そうだろう？」

『だからそれは、あの猫耳男の性質を小娘が見抜いていたから……』

「二つ」

僕は強引にフーを遮って続ける。

「それでは何故、猫耳男はあの爪で僕に攻撃してきたのか」

小石一発当たっただけで、あの大人の身体を模したボディは消滅する。さらば、それは爪とて同じこと。僕の小石を空中で弾かなかったんだ、そうと見て間違いない。

「確かに髪を数本持っていかれた記憶はあるけれど、それは小石がぶつかった衝撃よりは少ないだろうし除外するとして。人の身体を斬るということは、刃物の側にもそれなりの衝撃があるはずだ」

それが如何に小さかろうと、小石と同程度の衝撃はあるだろう。

『……確かに、そう言われれば』

この二点は独立して不自然であると同時に、矛盾する。

「畑中が僕を助けなかったということは、僕が傷つかないということを確認していたということ。そしてそれは事実、彼女が奴の性質を把握していたということだ。それは猫耳男が確かにそういう存在だということを裏付ける。だがしかし、裏付けられ、強固になった事実とは反対に、今度は猫耳男はどうして僕を倒せると踏んでいたのか、その説明がつかなくなる」

フーは何も言わずに、端正な、傷一つない、本物の人形みたいな顔で一つ瞬きをする。

「さて、ここでもう一つ、話を飛躍させようか。一週間前の放課後、僕が畑中から逃げ回った後、いったい何があったのか？」

小さな爆発。強烈な光。常識を超越した衝撃。

『貴様の右手――魔手が、無意識のうちにマナを集め、そしてそれが小娘の魔術の発動を阻害し、小規模な術式暴発が発生。結果、貴様ら二人は気を失い、貴様に至っては前後の記憶までもあやふやになった』

「そう。そこで眠っている畑中の言い分だね」

一つ息を入れてふと見ると、フーはこちらをじっと眺めていた。
うん、なんというか、疑いの眼で。

「……いや、別に何の考えもなく適当に出来事の確認をしているわけじゃあないよ」

そりゃ、そう聞こえても今のはしょうがないかもしれないけどさ。

『では、何だというのだ』

「そう急かすなよ」

僕はフーから目を離し、再び正面の二人を睨む。

「ここでまた、話を本題に戻そう」

ジョーカーとの内通者は四十万か、それとも須原かという話だが。
「この際、もう回りくどいのはやめよう。結論から言ってやる」

内通者は。

言って、人差し指を、目の前の少女に、向ける。

真っ直ぐに。

「須原。君だ」

まず、音が消えた。続いて、動きが途絶えた。やってきたのは、何もない時間。いや、そこには時間すらもなかった。須原の漆黒と、僕の藍鉄が、繋がって、重なって、混じり合い、絡み合い。

「――ご名答」

そして、凜然とした彼女の声が、場の空気をしたたかに打つ。

目の奥底の精悍な色合いは、一つの糸で僕と彼女を接続し、そして彼女の眼は僕を解放しない。僕も、彼女の目を放しはしない。自

由にはしない。数秒間、すなわち永遠に、僕らは互いに、見つめ合う。

「と、言いたいところだけど」

そこで彼女は眼を瞑り、僕との結合を断った。

「何の証拠も根拠もなしにそんなことを認めるほど私は甘くないよ、八代」

「消去法だよ」

僕はまた一歩だけ前に進み出る。

「四十万と君のどちらかなら、四十万はあり得ない。そう思っただけさ」

『……何だそれは』

あからさまに呆れたフーの声だ。もっともその台詞は僕自身が一番言いたかったのだが。

「四十万は社交的すぎる。それどころか生徒会員だ。自分で自分を拘束しているようなもの。人間関係は多ければ多いほど、いざという時に動きづらい。実際、今彼女は中庭で空爆の準備に勤しんでいるし、本人も出演するらしいからな。それに、今この場所に、こんな異常な空間に四十万はいない、君はいる。……それが何よりの証拠じゃないか」

須原は少し垂れた目を笑わせる。

「それだけ？」

「……………ああ」

「アハハ、天才の八代とは思えないトンデモ論理だね」

「確かにな。僕だって」

僕だってね。

「そう………思うっ！」

言って僕は。

誰よりも速く、何よりも速く、ポケットに突っ込んだままだった右手を勢いよく引き抜いた。

掌は、煮えたぎる紅蓮の輝きを引きながら、真横へと振り抜かれ

る。

「魔弾！」

しばし口を噤んでいた初老の男が、関心したように声を上げた。僕の手を離れた紅の弾丸は、そんな声などものともせず、周囲を取り囲む青い薄壁へと瞬間に到達する。

そして、炸裂。ガラスが砕けたような、否、氷が割れたような、否そのどちらともつかない奇妙な破裂音が、轟く。

「……やったか？」

しかしその問いに答えたのは消え去った結界ではなく、須原の薄笑いだった。

「アハハ！ 結界を破ろうっていうんなら、無駄だよ。そんなのじやこの結界は絶対に壊せない」

彼女の言葉どおり。

依然として、僕をあざ笑うかのように、氷点下の冷たさをその青色に湛えて、結界はある。

「傷一つない……か」

ま、当たり前だよな。そもそも正面切って打ってみたところで止められることもなかったのかもしれない。

『いや』

そんな思考に割り込んできたのはフーの声だった。

『違うな、須原愛乃。椎奈は術式の本体を狙っていた。それも、かなり正確に。結界そのものではなく、その術式が記述された手すりを狙ったんだ。お前だってそれを分かっているはずだろう、この結界を張った本人なのだからな』

「……ありゃ、ばれてたみたいだね？」

僕は小振りだったとはいえ魔弾を放ったことでふらつきそうになりながらも、何とか両足で踏ん張りをきかせ、フーに同調する。

「あの術式、僕のうちの窓枠にもあるんだ」

言って右を向くと、数メートル離れた手すりの上部分に、薄らとだが青い光を放つ、あのうねりのある文字が書きつけられているの

が見えた。僕の記憶によれば、畑中の書いていたものと同じだ。

「ただ、畑中のやつのほうが性能はよかったね、彼女が書いた文字は離れれば目に見えなくなる仕掛けがしてあったよ」

そして再び、前を向く。須原は、まだ顔にうすら笑いを張り付けたまま答えた。

「どうかな？ 事実、八代はこの結界を壊せていない。だったら君の言うところの性能ってのはこっちの方が上なんじゃない？」

『それも違う』

しかしそれにまた割って入るフー。

ずいぶんと積極的だな。

『だんだん解ってきたのだ。全てがな。積極的にもなる』
ほう？

『通常、結界は術式を破壊されればそれだけですぐに崩壊してしまう。だから結界術というものは、実践に向いているように向いていないのだ。その弱点を丸出しにしてまでお前はこの結界に自信を持っている。つまり、お前のその自負は、もっと別のところに起因しているのだろう』

僕は、一息を吸って畳みかける。

「君が、何の不自然もなく畑中を監視出来たのは何故か」

『椎奈と穂波に起きた現象とは一体』

「猫耳のメルシングが僕を攻撃しようとしていた理由は何だ」

『そして、美鈴という女を殴ったという電話を椎奈がジョーカーへ入れたのはどうして』

「極めつけに、絶対に僕には壊されない結界」

僕は言う。

『全ては、一つの現実によって肯定できる』

フーが言う。

「その答えは――」

僕は言っただけポケットから、手を抜いた。

「これだ！」

34. 空爆開始

その手には、文明の利器を握りしめて。

「……携帯？」

須原の顔に小さく疑問の色が浮かぶ。

「ただの携帯電話じゃあないぜ」

今や、これ一つで何でも出来る時代だからね。

「じゃあどんな携帯なのかな？ 天才君」

「……僕をそんなふざけた呼称で呼ぶんじゃない」

僕は少しむっとして言い返し、携帯電話を開くと、ディスプレイを須原に向ける。

「知ってるか？ 携帯電話って」

ゆっくりと、見せつけるように。

そして、僕自身にもその画面に映ったモノが見えるように、微妙に角度を変えた。

「鏡にもなるんだ」

そこに映り込んで存在していた、反面世界の住人は。

僕と、初老の男。

――のみ。

「普通の間人は、鏡に映るものだろ」

ピースが、かっちりとはまった。完全に予想通り。僕はやりと、不敵に笑う。

「それじゃあ須原。どうして君の姿は映らないんだろう？」

鏡に映らない。どうしてだ？ そんなものは解りきっている。

「どうしてかなあ。でもさ、そんなもの、君の裁量で何とでも細工できると思うけど？」

当然、携帯の鏡に細工など施してはいない。それでも僕の問いかけに対し、須原は平然と、飄々と囁く。何かを弄ぶかのような調子にさえ聞こえる。別段それに対して何か感懐があったわけでもない

けれど。

「君が言わないのなら僕が言う」

そして、その穏やかで、和やかで、安らかな風を装った彼女をぶち壊すべく、僕は言葉の銃弾を撃ち込んだ。

「須原愛乃、君はメルシングだ」

須原は、何も口にしなかった。僕のその暴露的宣言に対して、何の反応も示しはしなかったのだ。しかし、沈黙は、肯定と認めるのが僕の主義である。それで場が凍りつくといったことはなかったが、髪をそよがせて吹く風は蒼く、心も身体も、上辺だけ見ればこれほど穏やかなことは珍しい。

メルシング。

精神生物。自分の存在の濃度を上げて、ただの人間であるかのように振舞っていた存在。

それが、須原愛乃の種明かし。眼の前にいる、清楚で純真な空気を漂わせる、ボブカットの少女の真実。猫をかぶっていたのは龍ちゃんでもなく、猫耳の男でもなく、勿論畑中ですらなく、このどこにでもいそうな、なんでもないような女子高生だったのだ。

全くもって、笑えない冗句である。

「それも君はおそらく、いや間違いなく畑中に憑いているはずだ」

『それさえ確認できれば、大方の事柄は解決可能』

僕とフーは並んで彼女らに詰め寄る。

「まず、畑中を監視する方法」

といってもこれは、君がメルシングであるならば呼吸するのと同じく容易だろう。

「畑中が眠っているうちにその日の記憶と思考を読んではまえばいいんだからね」

一度目のジョーカーからの電話で、僕が腕輪を手に入れたという事実を奴が知っていたのも、これで綺麗に合点がいく。そしてこんなのは実際に監視されているのとは全くわけが違う。そもそも畑中が監視に気づけるはずがなかったのだ。監視だとか観測だとか、見

張るだとか見張らないだとか、そんな表面的な物語ではなく、もっともっと、余りにも根本的なお話だったのだから。仮に気付いたとして、何にどれほど注意しようかと、睡眠をとらないなんてことはアーティストといえ無理難題だと思われる。

「二度目の電話。つまり、この携帯を使つての最初の会話の時、ジョーカーは僕にこう聞いた。『迷い猫はきちんと保護したかね』とね。これはその時点において、あの男には僕と畑中がちゃんと32号機関に猫耳のメルシングを持って行ったかどうか、確信がなかった、ということ。……理由は単純明快。畑中が起きていたからというだけの話だ」

加えて。

「三度目。これは僕からかけたものだけど、その時ジョーカーは僕が美鈴さんを殴ったことはおろか、32号機関を訪ねたことすらも知らなかった。さらに、あの男が僕に美鈴さんを殴るように頼んだ時の台詞を引用すると『気が進まないのなら別に行動に移す必要はない。君の任意だ』これが意味するのは、つまり、奴は僕が畑中の目の届かないところでそれを行動に移すと予測していた、ということ。だから強制はしなかったのさ。確認が取れない行動に強制は意味がないと踏んだんだ。だから僕はそれを確かめるために、ジョーカーへ三度目の電話を入れた」

二人の表情は変わらない。どこまでも曖昧で、限りなく無表情。須原はかろうじて笑みを見てとれるが、男の方はほとんど無表情の極致にある。

まあ、いいさ。

僕は大きく手を持ち上げて、辺りを見回しつつ口を動かし続けた。「そしてこの結界だ。まあ……ここから先はほとんど推測でしかないんだけど」

第一に、と次いで声を上げたのはフー。

『メルシングは自分が寄生する人間の導力を使い、魔術に似た力を扱える。勿論私もだ。だがしかし、それは導力を利用しマナを導い

ているのではない。自身の導力を用いてマナを使うのが人の回路ならば、自身の精神エネルギーを用いて導力そのものをエネルギーとして使うのがメルシングの回路」

マナは赤い。同じく、魔弾も赤い。さらにマナを変換して使う『術』は、視覚的には白を基調としている。一度身体の中を通せば、マナは変質し、白色化する、とか大方そんなところだろう。だが、この結界の色はそのどちらにも当てはまらない。

青。それは魔導師の根源、導力の色だ。即ち、メルシングの色でもある。

「導力が導力たる所以は、マナを通さないが故。だからこそ人という存在は導力を利用してマナを導き操ることができる。その力を網のように使用してね。しかし、人間はあくまでもマナを収集するためにしか導力を使えないが、メルシングにはそれが可能——だそうだ」

理屈なんざ知りもしないが、大切なのはそれが確かな事実だという一点のみ。

「だから、メルシングによって張られた導力の性質を強く受け継ぐ結界は、いや結界に限らずメルシングによる術というものは、マナを利用した術を扱うアーティストの力では破碎することが困難なんだよ。手慣れた結界術師でもない限り、ディスプレイするにはかなりの時間を要する……そうだよな？ 須原」

それが唯一できそうな畑中も今は、相当熱くなっているはずのコンクリートにうつ伏せになり、眠ってしまっている。美鈴さんの拷問のお話が一瞬、違反ギリギリのスピードで僕の目の前を過ったが、そんなものは過らなかつたことにした。

そして再び、話は出来事の解法へと舞い戻る。

『ここで取り上げるべきが、椎奈と穂波に起こったある種偶発的な現象——』

あの白と青の入り混じった爆発。

「まず、あの現象が発生するにあたって、いくつかの前提条件があ

る」

一つ目は、フーが僕に帰依したメルシングであるということ。

二つ目は、君——須原が畑中に帰依したメルシングであるということ。

「で、重要なのはその次」

『三つ目。人間の精神を拠所とするメルシングは、その力を駆使して出来得る限り宿主に危機が及ばないようにしているということ』

まあ、敢えて触れるまでもないか。今まで何度かフーが口にしてきたことだ。

「君が畑中に憑いた精神生物だったとするなら、猫耳の男がどうして僕を攻撃しようとしていたかの理由も含めて、一つの仮説を立てることができる」

『仮説どころか真実だがな』

フーに茶々を入れられた。まあ、実質そうだ。砂場に突っ込んだ磁石に砂鉄が吸い寄せられるのが当たり前なのと同じように、結果と結論の全てはここに集束することになる。

「放課後のあの暴発現象は、術の発動を阻害されたから発生したんじゃない」

それでは何故？ 答えは簡単。

「あれはメルシングによる術と術がぶつかり合ったから、発生した現象だったんだ」

そう、フーが僕を守ろうとして僕の周囲に張り巡らせていた術と、同じく須原が畑中を保護しようとした畑中の周囲に張り巡らせていた術。この二つがぶつかり合い、反発し合ったから、あの現象が発生した。

僕はまた嫌らしく笑ってから、須原の顔を窺う。しかし、もはや須原に確認をとるような真似はしない。無言の肯定も認識し飽きてきたところだ。

「したがって、いよいよ帰趨だ。この考え方により、出来事に関してはすべての辻褄が、合う」

そう、すべての辻褄が合う。それがそうあるべき姿へと、歯車を

かみ合わせる。

「猫耳のメルシングが貧弱なボディをしてリスクを冒してまで僕を攻撃してきた狙い。それは当然、あの暴発現象を引き起こすことにあったと言える。逆に、猫耳男が僕を爪で攻撃しようとしてきたことに裏打ちされて、メルシング同士の近接接触によって暴発が起きたという考えに行きつくのは実に容易い」

僕は隠すことなく「余裕」の字を大々的に顔面に展開させつつ、須原を窺う。

「どうだ？　これで疑問の余地がどんどん狭まってきたと思わないか？」

「ま、校長先生の文化祭開催宣言よりは興味深いお話だね」

彼女はからかうように大げさなかぶりを振った。

「……となると、だ。フーでもこの結界を壊せるんじゃないか？」

『無理だ』

即答だった。少し、拍子抜けする。

『できるのなら既にやっている』

「まあ、そりゃそうか」

お前がそんな即行主義だとは知らなかったが。

『いいか？　以前にも同じようなことを言ったと思うが、メルシングが使える術や魔力の量は基本的に宿主に依存する。その人間の使える術式を元に術式を編み込むからだ』

「……………」

つまり、なんだ。僕のせいということかな。

『端的に言うならば、そうだな。ただ、あの現象と同じように、外的要因に限っては、単純接触で破壊できる可能性は——ある』

僕がそれを聞いて再び笑みを形作ろうとした次の瞬間。

『みんなああ——っ！　ノッツツてるかあ——いっ？』

マイクを通し、頭蓋骨に共鳴してビリビリと響くそんな甲高い科白が、突如として背後から轟き渡った。

「！」

それに続いて、雪山でならその声だけで雪崩を起こしかねないような歓声が、境界のフィルタを通してくぐもってはいるものの、半端ない勢いで僕の鼓膜を強烈に揺さぶる。

「……空爆が始まったのか」

僕は一瞬だけ後ろ振り返ってから、事態を把握して前を向く。そろそろカタをつけなければ

「そしてえええええっ！ お前の意識はここで終わるぜええええっ！」

「っ！？」

僕の目の前に、顔。漆黒の瞳。

いや、拳。

いや、いや、いや、

ぼさぼさ頭の少年の体躯が、僕の眼前で浮いている、浮いて、いや、飛んできている、僕に向かって、ロケットみたいに、ひゅーんと、飛んで、きて、い

——だ。

——だめだ。

「っ！」

——これは、どうやっても避けきれない！

ゴムのようにしなった少年の腕は握り拳を僕の顔面に引き連れて来ていて、いつの間に？ なんて考える隙もなく、衝撃を受け止める覚悟をする間もなく、次の瞬間。世界が一瞬だけ止まったかのように見えてから。

鉄アレイでぶん殴られたかのような激甚な衝撃荷重が僕の頭部全体をぶち抜いた。

「がうっ！」

頭の中は刹那にしてペンキを何色もぶちまけた極彩色に染まり、虹色の火花が四方八方へ飛散する。視界は回転し、揺さぶられ、急激に、忽然と、瞬きする暇すら与えずに、猛スピードで吹き飛んで行った。

『っ、椎奈!?!』

世界が、回る。

一回転。

世界が、流れる。

二回転。

世界が、落ちる。

三回転。

そして僕の身体はただの玩具の人形みたいに、何のなすすべもないまま、肩から屋上の床へとダイビングした。無造作に投げられたバスケットボールが弾む如く、身体はコンクリートに叩きつけられてまた三回ほどバウンドする。

「……っ！」

だめだ、まずい、やばい。

意識が――飛ぶ！

『ちっ!』

馬鹿みたいに熱い緑のコンクリートの上を無様な恰好で転がりながら、かろうじてまだフーがそんな風に舌打ちするのだけは、耳に届いた。

そして気付いた時には、フーが後ろから僕を支えてくれていた。その人形の小さな体躯でもって。でも、眼球は惰性で揺れ続けている。平衡感覚だけが唯一まともに停止を知覚できた。

「止まって、る、みたい、だ」

『みたいじゃない私が止めたんだ』

そう、か。

「ありがとう、う」

フーの声が遠い。頭がぐわんぐわんして、脳みそが揺れている。ああ、脳みそって多分プリンみたいなんだ。だからこんなにプルプル震えてる、小刻みに、揺れているんだ。この弾力感、甘さ、見た目の美しさ、どれをとっても完璧だ。コンプリートリィにプリンなんだ。間違いない、プディングが僕の脳みそなんだ。なるほど、だ

頭が、冷える。絶対零度にまで、ただただ、真冬の冷たさを超えて、無機質に冷え込む。勿論頭は痛む。身体も熱い。だけどそんなことは些事だ。どうでもいい。気にするな。そんなものは僕の身体に何の関係もない。

世界には、僕しかない。

僕しかない世界を、思い出せ。

「……そうだ」

僕にはまだ、武器があるじゃないか。

思っ、片目は半開きで全身打撲と擦り傷だらけの僕は、ただ一つ、あんなにすさまじいフックを受けてもお握りしめて離さなかった右手の物体を、天に向けてかざした。

「……さっきで頭が痛いんだ。悪いけど、君みたいな小物に構っている暇はない」

35. 椎奈ギミック2

「小物おっ？ 失礼な奴だなあっ！」

言葉は無駄に威勢がいいが、彼とて無論只者ではない。ボーイソプラノで喉を痛めそうな大声をあげながらも、空中の少年は僕の掲げた物体から注意深く目を離さない。しかし、それは間違った行動だ。

「フー……支えは、必要ない。一人で……座ってられる」

片手は高く上げっぱなしのままなんとか胡坐をかき、重心を身体の前に置く。フーは無言のまま僕の背から離れたらしい。

ちなみに僕の携帯電話のディスプレイには先の仕掛けが施してあるままで、そしてここは燦然と輝く太陽のほぼ真下である。少年が光源と重なっているとはいえ、

「うおおおおっ!？」

彼が直射日光をほとんど直視するという結果に変わりはないのだ。少年、君には悪いけど。

「既に――ギミックは完成している」

そのまま少年は僕に攻撃を加えることなく、真正面に着地する。頭がクラクラしてお星さまとひよこが肩を組んで飛んだり跳ねたりするのでその顔を見上げるような真似は自重しておいたが、少年の動きは気配だけでその荒々しさを感じ取れた。

「へん、なああああんでなああっ！ そんなもん、蹴っ飛ばせばいいだけだっ！」

少年はすぐさま着地の態勢から立ち上がり、無邪気な、それでいて活発な眼で僕を見下ろす。

「だいたいよお、今日一日中お前のこと見てたけどおっ！」

続いて彼の右足が、シュートでもするかのように後ろへ高く振り上げられ、

「右手で頭を押さえるお前の癖っ！ これで一発まるわかりだぜっ、

お前右利きだろおっ！」

だったらよお、という少年の台詞と共にその右足は、振り上げた時と全く同じ軌跡をなぞって振り子のように、猛スピードで僕の右手へと向かった。

「どうせ隙を作るんなら左手で携帯を持つとくんだったよなあっ！お前みたいなのへっぽこアーティストじゃもうなあんにも出来ねえだろおおっ！」

右手で額を押さえるしぐさ。これは僕の癖。いつからのものかも分からない。でも、自覚は出来ている。

カン、という気の抜けるような軽い音が、あっけなく僕の右手のけーたいを上空へと吹き飛ばした。同じ衝撃がそのまま右手首にも伝わって、青い腕輪が蒼い尾を曳きながらぶらぶらと揺れる。

無意識のうちに出血してしまうから癖なのであり、癖というものは非常に厄介である。なにせ気付いた時にはもうやってしまっているのだ。

「ひゃっほおおう！　ちよろいぜっ！」

利き腕。畑中の説明には少し欠陥があった。いや、彼女として説明責任を全うしなかったわけではないし、僕に対しての説明としてはそれで十分であったには違いないのだが。

右手は魔手で、左手は術手。これは正確ではない。

ところで、魔術書から得た知識をいくらか引用しよう。今この状況に関与する情報をまず先頭に持つてくると、魔導師を志す子供らで左利きのものは、基本的に幼年期に右利きに修正されるのだそうだ。魔術なんてものは言ってしまうえば思い込みの成せる技、多人数の共通意識化に動作の統一を図るのもその為の方法の一つなのである。他にも右手で術を放つのは不吉だとか、縁起が悪意だとか、言い伝えや諸説は多くある、らしい。

「お前みたいなのへっほい奴は、そこでおねんねしてる姉ちゃんとは違ってよお、利き腕さえ押さえるときゃあどうってことねえぜっ！」

少年は山から降りてきた猿みたいに甲高く叫びたてる。

まあ何が言いたいかといえば、必ずしも右手が魔手と決まっているわけではないということ。

そして僕は一度、考えてみたことがある。どうして右手で頭を押さえるようになったんだろう？ と。それ自体は実にどうでもいい暇潰しだったのだが、その時はこんな結論に至った。

左手で作業をしながら、悩むから。

左手でペンを握りながら思考するからだ。

「別に僕は、苦肉の策を思いつくために冷静になったわけじゃあないぜ」

「ああ!？」

少年は驚く。素直に、目を丸くしている。ダイナミックにバク転し、僕から数歩の距離をとったところを見ると、おそらく彼の視界に入ったのだろう。

紅蓮の煌きに煮えたぎっていた、僕の――

「左」手の平が。

冷静にならなければならなかった。この左手の湛える熱された色とは対照的に、冷たい氷に心を襲さなければならなかった。だが、その理由は反撃の当てを探索するためなんかではなく、僕がまだマナを凝縮するという行為そのものに慣れていないから、それを実行に移すための余裕を欲したからに過ぎない。

残念だったね、少年。

「……僕は左利きだ」

携帯の鏡も、マナをかき集めるための時間稼ぎにはなってくれた。「なっ、なんでっ？ さっき右手で魔弾撃ってたじゃねえかよっ!」

大体が元々、利き腕なんてものは人が勝手に役割分担を腕に頼んでいるから生まれる「偏り」でしかなく、魔術にもそれはある。つまりは、別に右手だろうと左手だろうと、それが習慣化してしまう前に両方で「ソレ」を扱えるよう訓練していれば、

「どちらの手だろうと、マナを収集することなど容易いんだよ」

畑中と仲を違えたのはいい機転だったわけである。おかげで君た

ちに僕の内情が筒抜けすることはなかった。誰も訪ねてくることのない自室で僕は、何の気兼ねもなく堂々と魔術の練習にふけたのだ。大仰なボディランゲージで仰天を示す少年だが、しかし僕に食ってかかるのをやめるはずがない。

「だがよおっ、忘れてねえだろおな？俺には精度が第二現以下の魔弾は通じねえぞっ！お前のやつなんか第一現にも達しているかわかんねえへなちよこだしなああっ！」

怯む様子など些かも見せることのない少年の体軀は、Tシャツをはためかせながら我武者羅にスタートを切る。もう一度さっきの横殴りを繰り出すつもりだ。見た目にはなんてことのなさそうな、それこそへなちょこに見えてしまう拳だったがおそらくあれも何らかの魔術で強化が施されているに違いない。

だったらそんなものは、もう二度とまともに食らう訳にはいかな
い。

「そのままその姉ちゃんみたくなあ、あ、あ、あつ！」

まあ、食らうはずもないのだが。

その拳が届くまでもなく一瞬で、僕の勝利は確定するのだから。

「なあ少年……誰が魔弾を撃つ為にマナを凝縮したと言った？」

[illegible]

頭も、殴られた直後よりはよほどはつきりとしている。これなら行ける。

覚悟は、要るだろう。今僕がしようとしていることは、甘く見ても畑中への裏切りになる。

勇気も、要るだろう。今からやろうとしていることが、異常でないとは言えない。

だが。この期に及んでそんなものはや。

「――関係絶無だ！」

僕は左手に貯め込んだ魔力の塊が揺らぐ間も与えぬ速さで、それを右手と組み合わせる。乾いた、否、僕にとってはどこか湿ったみ

たいな、そんな奇妙な音が僕の手元だけで響く。

「何いっ!?! 馬鹿な、魔弾じゃねえっ!?!」

僕は起点にさえなればいい。ただの「きっかけ」で構わない。
だから頼む——上手くいつてくれ!

合わせた手と手の細胞の一つ一つが、ひんやりと接着していく。
液体とゼリー状の中間の、すーっと身体を冷やすそんな流体が、僕の両腕から入り込んで一筋の光のように全身をかけ巡り、頭を夕焼け色の輝きで埋め尽くす。気持ち悪くはなく、どちらかと言えばその逆で、なんて心地よい。入ってきたソレは巨大な輝きのうねりになって、全身の構成要素の分子の一つ一つまでが磨きあげられ、洗礼され、浄化されるような——果てには煉獄の炎で炙られるような心地さえ、絶妙な靈妙さを伴って僕を覆いつくそうとする。

そして一瞬、閉じたまぶたの裏に垣間見える。

銀と、橙の世界が。

——たぶんこれは。

——初めから僕の内側にあった世界。

——だからこんなにも、気持ち悪くて醜い「」の意識であふれている。

——ここにいるのは僕じゃない、僕なんかではなく。

——僕の「」なんだ。

——出来るのか。

——セイサンできるのか?

——いや、出来ない。出来るはずない。出来てはいけない。

——でも。それでも。

それでも。

「術なんて使えねえはずだが、万が一にも発動はさせねえええっ!」

「君は何か勘違いをしているな」
残り一步、少年の右ストレートが射程圏に入るまでの残り歩数が限りなく0に近づこうとしたその瞬間だ。

僕と少年の間に、タイミングを図ったように落ちてきた物体が一つ。

「え」

「……だから」

僕はきっかけ、なんだよ。

携帯電話なんてものは、そんなに都合よく頑丈には来ていない。だから、彼の蹴りを受けた時点でそれがそういう運命にあることは既知の事実だった。スローモーションの世界でゆっくりと落下運動を続けるそれは。

空中分解した携帯電話から外れた、「電池のパック」。

「電池のパックに――術式が!？」

傍観していたはずの須原の声が、驚きで満たされる。

「な……っ!」

続いて短く、少年のボーイソプラノ。

「いかん、離れろ!」

極めつけに、初老の男の叫び声。

僕はそんな面白い反応を見せてくれた彼らへと、冷たく、言い放つ。

「――残念、手遅れだ」

それから組んだままだった両手を瞬間に解除し、白銀の輝きを孕む左手を前へと突き出す。

その手に、体中に流れるマナを一点集中、そして落ちてきた電池パックへ、すべてを抽出し、注入するようイメージする。

「君には、時の狭間で世界を眺めていてもらおう」

後は、合言葉を入力するだけ。

「――『ダイヤの13』」

途端、身体から何か霊的なものが離れていく感じが僕に襲いかかった。どこまでも透明で冷冽なものが、指先から、魂ごともっていかれてしまいそうなものすごい勢いで流れ出ていく。その感じに僕は軽い恐怖感を覚えたが、感覚はあっという間に過ぎ去り、同時に、

無機質な電池パックに書きつけられた謎の文字列が眩いばかりの輝きを放ち始める。それも一瞬のこと。次の瞬間にはその術式を中心にして、幾何学模様を整然としかし不規則に書き連ねた白い魔方陣らしきものが、刹那にして放射状に展開される。

単純な驚きというよりも、何が起こっているのか解らない、といった感じの表情を湛えていた少年だったが、

「止まれ」

僕に殴りかかる、その動作が完了されようかというまさにその時、彼の拳が電池のパックを挟んで僕の顔の5センチ手前にまで到達したまさにその瞬間、

「……………」

ぼさぼさ頭の少年の動きは、あたかも本当に凍りついたかのように。

完全に止まった。

そのままの体勢で、僕を吹き飛ばす寸前だった拳の位置もそのままだに、僕に対して踏み込まれた軸足も、見開かれた眼も、全てが全て、ビデオを一時停止したみたいに「ピタリ」と止まってしまっている。同じく電池のパックそのものも、空中で浮いたままその所作を停止させている。

よく見ると彼は、どういうわけか、少し笑っているようにも見えたが。

僕の周囲数メートルの範囲内だけ、時空が停止していた。

どうやら——成功したらしい。

そして、これは僕を中心にした半径数メートル内だけで発生している現象だということをお願い出させるように、少し離れた位置に携帯電話の残りの部品が落下してカラカラと転がった。ふう、と一息をついて、立ちあがる。まだ気を抜いちゃだめだ。術式が元々組み上げられていたとはいえ、マナを扱ったのに変わりはない。僕はきっかけでしかなかったけれど、それでもいつ反動が来るかはわからないのだから。

だがしかし、問題はない。

これでジ・エンドだ。

『忘れてはいまいな』

僕は右を振り向き、そこでの光景を、目に入れる。

フーが、先ほどの少年の如く、蒼い長髪を振り乱して、須原と男の真横1メートルもない距離から、手に光を集めて、飛びかかっている、そんなエキサイティングな光景を。

「え……」

口を開けたままこちらを眺めていた須原が、反射的に小さく声を上げた。

『椎奈は今術を使った。貴様ら、その意味が分かるな？』

僕の力をそのままコピーして使えるような節が、メルシングにはある。さっきの術式を編んだのは僕自身ではなかったが、術を使ったことに変わりはないわけで。

そして例の現象が発生する危惧から、当然須原は反撃できない。反撃したりすれば二人とも諸共だ。そんなことになれば結界も消える。どちらに転んでも、僕にとって不利な判定ではない。

「やっちゃえ、フー」

『言われずともだ』

倒れた畑中の前に立つ二人の真横で無遠慮に、青白い光が、爆発した。

……はずだったのだが。

『きゃあっ』

ポテ、ポテ。

と。バウンドしながら僕の足元に転がってきたのは、蒼髪の人形。

「……なんだお前、そんな可愛らしい叫び声も上げられたのか」

『……………突っ込むのはそこじゃないだろうが、バカか貴様は』

地に突っ伏したまま、フーは力なく答えた。傷だらけ、というわけでもなかったから、そんな冗談を口にしてみたのだが。

『さっきの貴様の分のダメージも私は受けているのだぞ、既にギリ

ギリだ。……察しろ』

そう言えばそうだったかもしれない。感覚のほとんどを僕と共有してるんだっけ。

「そっか、ありがとう。もう寝てていいよ」

『言われずとも、だ。……おい、これ以上傷ついてくれるなよ。私まで痛いんだからな』

それだけ言い残すと、彼女はその姿を消した。まったく便利な奴である。

しかしどうやらこの作戦は失敗に終わったらしい。まだチェック・メイトとはいかなかったようだ。

「……黙って見ていれば、初心者とメルシング風情が調子に乗りおつて」

上げた右手に白い稲妻の余波を纏わせたまま、男は怒気を孕む口調で僕に語りかける。隣の須原はまだ驚きが抜けていないのか、果然としたまま彼につられてこちらを見た。どうやら初老の彼が、フーの奇襲に対応したようだ。まあもつとも、今の攻撃が通るなんて一ミリも思っただけじゃなかったが。

「おや、あなた、顔に似合わずそんな攻撃的な台詞も吐けるんですね。それにメルシングを従えているのはあなたも同じでしょうに」

僕は言いながら、彼の曖昧な眼光を睨み返す。

「そしてあなた方は今、その初心者とメルシング風情にやられかけたんだ。自分たちが常にセイフ・ポジションに居るなどとは思わない方がいいですよ……僕の得意技の一つはピンチをチャンスに変えることなんでね」

「ああ——それはどうも。御忠告痛み入る」

肉を切らせて骨を断つというわけか。と、初老のハスキーボイスは続けて呟いた。

「待って……ちょっと待って。何で二人ともそんなに落ち着いていられるの。八代はともかくとして、あなたはもう少し焦ってもいいんじゃない？」

僕らの煮え切らない会話が煩わしくなったのか、須原が少し急ぐ調子で割り込む。

「だってその携帯電話——八代が受け取ったその日の夜、穂波ちゃんがちゃんとチェックを入れたはずなんだよ。その時は少なくとも電池のパックにあんな高度な術式は見られなかった。それとも魔術書を読んだあなたが独力で術式を組み立てたとでも？ ……いくら天才の八代でもそれはあり得ないよね」

僕は天才という言葉だけ頭のなかで白く塗りつぶしてから、反応する。

「どうにでもなるんだよ、そんなことは。何せジョーカーからの贈り物だ、当然受け取った直後、僕自身でチェックを入れたのさ。そしてあの電池パックを発見し——その時点でおおよそ君のことは見当がついていたからね、畑中に調べられる前に美咲に頼んで電池のパックを交換してもらったんだよ」

機種が彼女のものとは一致したわけでは当然ないが、電池のパックだけなら案外取り換えが効くものらしい。目を丸くして、須原はまた黙りこむ。人の裏をかくということは僕にとってなかなか極上の楽しみになり得るのだ。つまり今、かなりいい感じに楽しい。

「……でも、その術式には条件があるはずだよ。一定以上のレベルの魔術を筆記伝達する場合、直接呪文を書き記せないという制約がある」

「ああ」

僕がその事実を知ったのは、美鈴さんから魔術書を借りて、そしてそれを読んだ時。

この手の術式を起動させるためには「パスワード」が必要らしい。そしてそれは直接的に記述できないことになっている。つまり、呪文を伝えるためには暗号化が必要なのだ。

「だから僕はそれを探して——そして見つけた」

「どこで、どうやって？」

食ってかかるような態度の彼女に背を向け、青い光が燦々と降り

注ぐ中横に両腕を広げて歩きだしながら、僕は話を続ける。

「案内簡単だったよ。使われていないパーツを探せばいいだけだったからね」

それはつまり。

「メールアドレスだ」

「メール……アドレス？」

そう。

「僕の受け取った携帯電話には、ジョーカーの電話番号と、彼のメールアドレスが既に登録されていた。結果的にジョーカーからメールが来ることなんざ一度としてなかったが……あの男が無意味なパーツを構成要素に組み込むはずがない」

だから、ヒントは必ず、一見して意味のないように見えるものに隠されているはず。

などという、ある意味ご都合主義的展開を信頼しきった詭弁を振りかざしつつも、僕にはやはり確信があったのだ。それはやはり一口に語れることではないのだが、僕の思い描いた答えは、この件に関しては的中率100%と言っても過言ではない。そしてそれについての確信もある。

核心を握っている確信が、僕にはあった。

まあ、それはいいとして。

「Fh2g6I8ial-bangle@kill.ne.jp」

僕は文字列をゆっくりと口にする。これが奴のメールアドレス。実際にこれにメールを送って届くかどうかはともかくとして。

「それが……何かあるのかな？ 無作為な文字列にしか思えないけれど」

「それがそうでもないのさ。いいかい？ 僕の携帯電話に、ジョーカーの名前はカタカナではなく英語で入っていた。jokerとね」
これをそのまま携帯電話に入力すると。

「その時に押されるキーは『5665533777』となる」

「……それで？」

「数字が十個。これは、さっきのメールアドレスの文字列の、よりも以前の、意味のよくわからない十文字、そのそれぞれにぴったりに対応する数だ。となれば次は、jokerの名前から導き出した数ずつキーをずらして入力してみたくなるだろう。でも、それを実際にやってみると『DgCHn via』となり、これではやはり何の意味もなさない不憫な文字列のままだ――しかしここで注目すべきなのは、この文字列の末尾にある、iとaとlの三文字」

この文字列だけは、数字を使ってスライドさせても、その以前と変化がないことに気が付く。

「他の携帯電話の文字列入力システムが全て同じなのかは知らないけれど、少なくともこの携帯電話はアルファベットの文字列入力の場合、大文字と小文字を含めて元の文字列に返ってくるまで、後ろにスライドさせても前にスライドさせても七文字分ということになっている。aから始まって七回キーを押せば、また元のaに戻ってくるという具合にね」

つまり、これで方法は間違っていないということだ。

「だからこの場合は、数字の分だけ文字を押し進めるのではなく、数字の数だけ文字を引き戻してやればいい。具体的に言うと、その数字の分だけスライドさせてその文字になる文字を探せばいいんだよ。最初の一文字を例にとれば、5回キーを押して、大文字の「F」になる文字を探せばいいわけだ。押してダメなら引いてみるってね」

そのやり方に従って、元の文字列を抽出すると。

「『diainitial』……この10文字が、浮かび上がってくる」

僕は結界に触れられるくらいの端まで歩き、そこから再び、青いフィルタにぼんやりと遮られている眼下を見下ろした。

人がせわしなく動いているのがぼんやりと、明滅する夏のホタルの動きのように、分かる。

「残念ながらこんな英単語は存在しない。だけど僕にはある程度予測がついていたんだ」

だから、その文字列を区切る「仕切り」が見えた。

「この文字列は、d i aとi n i t i a lで区切ることで意味をなすんだ」

そしてi n i t i a lとは勿論。

「頭文字を意味する英単語」

「頭文字……？」

須原はまだ半信半疑の声で僕にやじを飛ばす。

「そこで、の後に目をやるんだよ。……b a n g l eとはこいつを意味する英単語だ」

僕は振り返りざまに、招き猫がするような感じで、右手を須原へと見せつけた。

いや、正確には右手の腕輪を。もっと精確に言えば、その腕輪に刻みつけられた英文を。

b a n g l e——それは腕輪のこと。

そして、読み上げる。

「……K i l l e r i s n o w g o d」

僕が『裏』の世界の出来事へと巻き込まれることになった最初のきっかけ。その腕輪に刻みつけられた、意味のよく分からなかった英文を。

「言ったろ。使われていないパーツを探すだけだったってね」

ここにきて、僕は急速にこの英文の存在意義を感じ取ったのだ。英文に使われている単語のそれぞれの頭文字だけをとって読むと。

「K、i、n、g——K i n g」

王を意味する英単語になる。

「キング……」

「そうなってくると、その前のd i a、はダイヤだと解釈できるだろ」

やはりというのもおこがましい話だが。

「奴はトランプに準えてこのパスワードを暗号化していたんだよ」
だから合言葉は。

ダイヤの13。

「お分かり頂けたかな？ ハートの6……須原愛乃さん」

僕は嫌みたっぷりに口をゆがめて、彼女のフルネームを口にした。
「……なるほどね。私にはとてもじゃないけど辿りつけそうもない暗号だよ。ねえ、君は、一体いつから、何がきっかけで、何に気づいて……」

僕はその発言を言葉で遮った。

「今現在、その質問に意味はあるのか？ いや、ないね。残念ながらそんな無意味な質問に答えていられるほど今の僕は余裕たっぷりでもないんだよ、わかるかい」

僕はまだ彫刻や石像の如く、不自然なポーズで固まったままの少年を横目で見てから、彼女ら二人に対して一歩前へ出る。

「そしてここから、再びこの論題に入っていくことができるわけだ……ジョーカーの目的とは、果たして何だったのか？ という話だね」

そして僕は、全身黒尽くめの初老の男を、左手で指差し、平板に言った。

「あなた、『封じ屋』の人間だろ」

36. しすたーこんぷれっくす？

頭に白髪 of 混じる男は一瞬の間をおいてから唇を少しだけ動かして、無感動に答える。

「如何にも」

須原は何も言わなかった。

「なんだ、あっさり肯定ですか？ 張り合いがない」

僕は続ける。

「それでは何故、一体どうして、封じ屋に所属しているあなたがこんなところに居るのか。そしていかなる理由でそこに畑中穂波が横たわっているのか。教えてはいただけませんか？ ついでにあなたと、そこで停止している少年との関係も出来れば教えていただきたいのですが」

「君は知ることだ」

間髪入れず、鋭い返事が静かに返ってきた。

「ああ確かに、あなたに教えてもらう必要はない」

僕がおどけて笑うと、黒服の男は眉根に皺を寄せて不愉快そうに言う。

「……君の方こそ、自分が常にセイフ・ポジションにいるなどと思っ
てはいないだろうね？」

僕は男が発する刺すような空気を右から左へ受け流しながら、やれやれと首を振った。

「まさか。そんな風に考えるのはゴキブリかシーラカンスくらいじゃないですか？ 怖いなあ……」

あくまでも余裕を装ってみる。というのも、内心ビクビクが実情なのだ。そりゃあ僕だって多少は怖いし、今の言葉もあながち嘘ではない。だから。

「危険だよ、君は」

唐突なその言葉に、僕は面食らった。

「まず第一に聡明だ。頭が切れすぎる。それこそ、ジョーカーを彷彿とさせるほどに。さらに行動力もある。加えて勇敢だ。これで女性ならジャンヌダルクと例えたいところだよ。いや、その顔立ちなら存外女装も似合いそうだが、どうだね？」

「どうだね？　じゃねえよ。」

「……お褒めに預かり光栄です。しかし女装は遠慮させてもらいますよ」

「残念だが褒めているわけではないのだよ、八代少年」

小さな笑いを交えたその言葉に、僕は彼の表情を窺った。決して笑ってはいない。嘲笑も哄笑も苦笑も、一切がその影を潜めている。しかしそんな無表情の中に息を殺して潜む、物騒で獰猛で怪しげな野獣の色が、安らぎを持たせないようこちらをジロリと睨みつけてきているような気がして、無意識のうちに背筋が伸びた。

ジリジリと頭を焼かれる感覚が、ふつふつと蘇る。

「出る杭は打たれるという諺を知っているかい、少年」
「空気が、痛い。」

「……そんなものは三歳児でも知っているでしょうよ」

「それでは私の意図するところが、一六歳の君にはさぞかし筒抜けなのだろう。ジャンヌダルク少年」

だんだん、どんどん、僕にかかるプレスが強くなっていく。初対面時の、あの薄っぺらい感じが今や見る影もない。首が汗ばむ。いやな感じだ。

「……君は私が今ここで、処分する」
「！」

処分。処遇。処理。

最大限にまで張り詰められた空気の糸が、僕に巻きついて身体をぎちぎちと締め上げる。

それは、平たく言えば、つまり。

「本来はその少女だけの予定だったが、気が変わった。というより、君はここで潰しておかなければ間違いない近い将来、我々の脅

威になる。これはもはや規定事項といってもほとんど差し支えがないだろう。そう私が判断した。だからここで君を」

僕を。

「殺す」

ということ。だよな。

……おいおい。少々ストレートすぎやしないか？

「まさか、助けが来るのに期待したりしていないだろうね？」

「……」

「残念ながらジョーカーは勿論、美鈴も、牧埜宮も君を助けに来たりはしない。いや、出来ない」

「どういう意味ですか」

男は勝ち誇ったように嫌らしく笑う。

「今BGMとして流れているこの空爆とやら……この開始に合わせて、彼らを妨害するよう、事前に組んでおいた術式を発動させた。この空間に閉じ込められた時点で、君に助かる術はない」

「……」

「うまくあの猫のメルシングを逃がしたようだが……それも無駄になったというわけだ。惜しかったな、八代少年。だが君の考えは読めている」

無駄になった。僕は黙って唾を飲み込んだ。

「……まいったな。ここまで正面切って殺人予告されるとは思いもしませんでし」

「待って！」

僕の言葉の終わりを待たずに声を挟んできたのは、ボブカットの少女だった。

「待ってよ、話が違う。彼には手を出さないって約束だよ」

須原が、僕を庇っている……のか？

「残念ながら君は私に指図出来る身分ではないのだよ。いい加減理解してほしいものだ」

しかし初老の男は鬱陶しそうに首を振る。

「この状況、せいぜい記憶を消す程度で構わないはず。それで何も問題はないし、ここで彼を殺してもあなたに利益は何もない」

「少し静かにしていなさい」

「お願い、お父さん」

彼女がその単語を発したとたん、彼は固まった。黒のスーツの、動きが止まる。僕の数歩後ろの少年の如く、ぴたりと止まる。

お父さん。

「おや、あなた方はそういう御関係だったのですか？」

ここだ。小さな隙間に指を突っ込んで無理やりに広げるかのよう
に、僕は言う。

「……おべんちゃらはそこまでにしてもらおうか」

「いいえ、おべんちゃらはここからです」

半ば気合のみで彼の言葉を遮り、続ける。

「あなたさつき言いましたよね、その少女だけの予定だった、と。同業者の、いえ同業者どころか同じ組織に属するはずのあなたが、畑中を殺そうとしている。これは一体どういう訳なんでしょうね？」

僕は立て続けに、向こうには付け入る隙を与えないように言葉を積み立てた。

「しかもメルシングと協力してまでだ。いや——あなたの娘さん、と、ですか？」

「黙っていると言っているのだ……！」

急に男は目くじらを立てる。穏やかなままに聞こえる声も、水面下で荒れているのがよく分かった。ふうん、どうやら、ここを突けばいいらしい。

「いや、そんなことは何でも構わないんですよ。いや、構わなかった。しかし、あなたが畑中を殺すだなんて物騒なことを言い出すのなら話は別だ。何でも構わないという訳にはいなくなる」

僕は言って、ズボンのポケットからあらかじめ用意しておいた一枚の写真を取り出した。

「うちのクラスの学級写真です」

「それが何だというのだ」

おお、噛みついてくる噛みついてくる。

「この写真には、須原……君が写っていない。欠席者として写ってさえないんだ。おかしいとは思わないか？ いや、普通はおかしいと思うはずだよ。でも、ある意味これは当たり前のことだ。君は何せメルシングなんだからな。鏡に映らないような存在なら、写真に写らないのも納得できる。しかしそこじゃないんだ、注目すべき点は」

他のクラスの面々が、この異常に気付いていないことが問題なんだよ。

「あんなにクラスの活動に貢献しているはずの須原が、どういうわけか学級写真に写っていない。なのに、僕が聞いた話だと誰一人として気にも留めなかったらしい。先生も、生徒も、誰一人としてだ。そんなことがあり得るだろうか？」

僕はそれを再びポケットに仕舞いながら続ける。

「答えは——君がおそらく、記憶を操作する魔術を教師を含め、クラスの人々にかけていた、とかそんなところだろう。勿論、畑中にもね。畑中もまさか、自分に寄生して力を振るうような奴にそんなことをされるとは思ってただろうけど」

だから、畑中はあることを言ったのだ。記憶を消すような魔術は存在しない、だなんて。だが、いろいろなことをまとめ、考えていくうちに、それは存在しなければならぬ、存在しなければおかしい、という結論に至ったのである。僕とてハッターとあてずっぽうばかりを言っているわけではない。

「そもそも、君に当たりをつけた理由がこの写真なんだ。内通者が人間でない可能性もある……なんて考えからふとそんなことを思いついてね。調べてみたら案の定、写真には君の姿がなかった。そしてその時初めて、僕はそのことに違和感を覚えたんだ」

おそらく僕が意識的に「違和感を覚えようとした」から、それは起こった。

「ご名答だよ。簡単な記憶操作の術——まあ暗示的なものだね——を使って、私の存在に「ぼかし」をかけていた。……本当に簡単なほんのちょっとした魔術だった。ただ、君みたいに強いショックを受けたり、今までの日常が壊されるようなことがあると、その効果が薄れてしまうみたいだけど」

須原はずいぶんと冷静に返してきた。しかしまあ、便利だな、魔術。マジで何でもアリじゃないか。そんな風に考えながら、男に変な動きがないか気を配りつつも、僕は再び話し始める。

「……その理由の一つは勿論、君の存在が異常であることをごまかすためだ。写真に写らなかったり鏡に写らなかったりすることを指摘されたりすれば、それこそ困るしね」

でも、本当の理由はそんなことじゃない。

「須原愛乃——学級写真にも写っていない君だけど」

ここ二日。畑中に相手をしてもらえなかった分も含めて、僕だって何もしていなかったわけじゃあない。

「その名前は実在するんだ」

彼女について調べる時間は、たっぷりあった。

「七年前の、空が岬高校のクラス名簿にね」

「……………」

彼女は、俯きさえしない。男は、声を上げさえしない。

「そして、七年前、亡くなったことになっている。当然、同姓同名の人間なんて五万というが……君はそれでもやはり、教師に気づかれ、指摘されるのが怖かったんだ。須原愛乃」

僕だって、それを見つけた時は目を疑った。いくらなんでも、これはどういことなんだ？ と。だけど、考えていけば辻褄が合ってしまうのがこの物語なのだ。

「……メルシングっていうのがどういう存在で、どうやって生まれるかなんて、僕は知らない。知りたくもない」
だけど。

「君は本当は何者なんだ？ 須原愛乃」

「……………私は」

テレビのマイクでも拾えなさそうなくらいか細い声が、僕の耳に
かろうじて届く。

「どうなんだよ？ その辺詳しく頼みたいところだな、須原愛乃」

「この娘は」

何も口にしようとしなくなった須原を継いで、代わりに穏やかさ
を取り戻した男がゆるりと口を開いた。どこか哀しみに満ちた眼を
従えて。

「私の娘……だった」

過去形。その語尾は時として、決していい意味を孕まない。

「だが今は違う。こんな身体になってしまった。人の心の隙に付け
込まなければ、物にも触れない、人に認知してもらえない、こん
な身体に。それどころか所属していた『封じ屋』にまで追われるこ
とになった」

須原が、封じ屋に所属していた。

予想はしていたがやはりそういうことなのか。

「何です？ 急に饒舌になったりして、気味が悪い」

「メルシングとは、死に際に魂が上手く砕けなかった人間のなれの
果てなのだ」

魂が上手く、砕けなかった？

「どういう意味ですか」

「通常人の魂は、肉体が滅びた時、それと一緒に綺麗に砕け散る。
だが、メルシングはそれが上手くいかなかった存在――」

「要領を得ませんね」

僕の発言はどうやら無視される傾向にあるらしい。彼は少し黙っ
た後、ぽつりと言った。

「……喋りすぎたか」

「いいえ？ 全く喋り足りてませんよ」

僕は促すが、

「いや、やはり君は知る必要のないことだったな」

今度こそ会話を引き延ばす気はなさそうである。ならば、こちらから引き伸ばさざるを得ない状況に持ち込むまでだ。

「畑中勇^{いなかゆう}」

僕は唐突に、声を低くして一人の男の名を口にする。

「！」

老人の顔が、ハッと上げられ、その瞳が僕を捉えた。

「畑中穂波の兄……あなたもよくご存じでしょう」

須原と同じその漆黒が揺れるのを眺めながら、僕は言う。

「……………君は一体、どこまで……………」

驚嘆する男は、その細い眼を目一杯に見開いていた。

「僕は畑中から、彼女の兄は彼女が小学四年生の時に亡くなったと聞いています」

畑中が小学四年生の時。今彼女は高校二年生だから、畑中勇が死んだのは七年前。

須原愛乃が死んだのも、七年前。

この二つに相関がないだなんて、そんな風に見るのはもはやそれ自体がナンセンスだ。となると。

「七年前、何かがあったんじゃないですか？ 貴方の娘さんと、畑中の兄との間で」

そう考えるのが、必然である。

「ですよ？ 須原星屑^{せいせつ}さん」

「……………私の名までもか」

「そんなものはいくらでも調べられるんですよ、情報化社会なめてもらっちゃ困ります」

魔術は旧態依然としてコンビニエンスだが、時代は科学、現代の力はすさまじい。いや、嘘だけど。僕がこの足で聞きまわっただけである。言うなればアナログをなめるなということだ。

「何があったのか、教えてくれませんか」

いや、そんなことはどうでもよくて、とにかく。

「……………畑中勇は」

一つ嘆息した男の少しかすれた声は、諦めたように真実を紡ぎ始めたのである。

「裏の世界の麒麟児だった。所謂天才だったのだ。何をやらせてもそつなくこなし、それどころか何もかにもを完璧にやってのけるな」という噂が、奴が正式に『封じ屋』として任を受ける以前から、広まっていたくらいだ」

天才。畑中と同じ。兄妹同士でそういうものも似るものなのだろうか？

「だが奴はやはり特異だった。奴は正式に封じ屋の一員となっても、メルシングを世界から排除しようとしなかった。メルシングに罪はないなどと言ってな。実際、奴は出会うメルシングのすべてを説得しきっていた。弁の立つ男だったのだ。武力を行使することもあったにしろ、殺すことだけは絶対にしなかった」

それはまたすごい話だ。

「そんな姿勢に対し、当然のごとく奴はバッシングを受けた。だが私自身、その考え方は嫌いではなかったのだよ。表世界に明らか影響を及ぼすもの以外をあえて消そうとする必要はどこにもない。それが私の持論でもあったのだ」

どこか、あの畑中の兄らしいと言いたくなる逸話だった。

「だが、そのせいで私の娘はこんな有様になってしまった」

しかし男の表情は彼の服装に負けず劣らず暗い。見ていて痛々しいほどに。

「というと？」

僕が聞き返してから再び語り始めるまで、躊躇うようなタイムラグを残す。

「ある時、私の機関と32号機関とが協力して任務をこなすことになったのだ。二つの機関が連携して敵を討つなどというのはそれ自体が稀有なことだ。敵はそれだけ強かった。だがその任務でも、奴はやはり完璧だったのだ。完璧だったが故に、敵の――排除すべきメルシングの標的は、私の娘に回ってしまった」

そして、と彼は続ける。

「奴は初めてしくじった。メルシングを、どうしても始末しなければならなくなったのだからな。だが、行動を起こすには遅すぎた」

僕はただ見つめた、その語り様を。

「奴の魔術は、確かに討つべきメルシングの魂の欠片を、完全に打ち砕いた。だが、私の娘も同時に――死んでいた」

死んでいたのだ。彼はそんな風に、ただ一言だけ、同じことを呟いた。

「私の目の前で横たわっていたのは、何も宿らない、ただの人形だった。だがそれでも、娘の魂だけは奇跡的に生きていた……何故か？ 畑中勇が助けが間に合わないことを見越し、娘の方に魔術を施していたからだ」

しかし。そんな逆接が文をつなぐ。

「それはやはり半端な救済でしかなかった。所詮人の生命を弄ぶことなど、神にしか許されない行為。肉体はそのまま滅び、魂だけが残された。奴の魔術はまだ実験段階で、不完全だったのだよ」

「その魂が……今ここに居る須原だと？」

「そうだ」

しばらく言葉が出なかった。

衝撃的、と表せざるを得ないだろう。お世辞にも語彙豊かな回想とは言えなかったが、少なくとも予想していた以上に悲劇的な話だったのは間違いない。そういう経緯なら、確かにフーやあの猫耳のメルシングと比べて、須原はメルシングとしては一線を画していると言っている。いや、実際にそう感じる。須原はどこからどう見ても人間だし、何かそういった雰囲気も感じる。

魂に傷が付いているか、それとも完全なままなのか。その違いが顕著に現われている、ということなのか？ 果たして僕にはわからないが。

「で、そんな話で僕の涙を誘おうとでも？」

「何の価値もない君の涙など、誘ったところでどうなるというのだ。」

まさに冥土の土産だよ。大事に噛み砕いて、それから自分の愚かさを思い知ることだな、ジャンヌダルク少年。それにまだ話は終わっていない」

ノってきたのか、向こうから話したがっているようである。僕は何も言わずに耳を傾けた。

「畑中勇は、私以外の人間からは全くと言っていいほど非難されなかった。勿論非難してくれた人間もいた、だがそんなものは結局少数に過ぎなかった。奴は娘の命を救うどころか、敵であるメルシングにしてしまったというのに、そんなことよりも奴が成し遂げたメルシングの討伐のほうが大きく取り上げられたのだ。その上奴には依然として仕事が多く舞い込んでいた。有能。天才。私はそれだけで腹立たしくさえ思えたよ。私が被害者のはずなのに、私は畑中勇に命を救われた者としてだけ噂され、地位も瞬く間に落ちていった」

ある意味、現実社会の闇を見ているような話である。

「そして、奴は私が殺した」

男は、あまりにもあっけなく、実にあっけらかんと言った。

「……あなたが、畑中の兄を？」

これもまた、少し衝撃だ。

「娘をこんな姿にした人間を許せなかった、とでも動機づけすればいいのかね」

男の声は、わずかながら怒りにうちふるえているようにさえ聞こえる。

「もはや七年前の出来事だが――生々しいほどに覚えているよ。奴の、あの何を見るでもない無表情で無機質な眼差しを。だがそのおかげか、私は少しずつ地位を取り戻していった」

さぞかしトラウマがござるのだろう。

何と言っても、やはり他人事なので、僕は呑気にも適当にそんな感想を持った。

「そんなあなたが今、その妹である畑中穂波をも手にかけてようとしている。これはまた一体、どういうわけなんですか？」

「目障りなのだ、そうやって有能で居られるということは、私にとって迷惑以外の何物でもない。私は機関の一員で、機関は組織の所有物に過ぎず、詰まるところ私は私の意思でその娘と組まないということを絶対に選択できない。もう二度とそんなことは御免だ。だから、ここで消しておく。それに有能な人材は消えた方が私の仕事もうまく運ぶ。すでに経験済みだからなおさらな。同じ社内とはいえ部署が違えば競いたくもなる……そんなような心境も含まれてはいる」

有能すぎる、か。やはり半分は僕の思ったとおりだった。異端の排除、異質の除去。それによる商売敵の衰退。まあ、そんな現実的で陳腐なものなんかよりは『復讐』の方が動機として強そうではあるが。種をばらせばこんなもの、ということか。まあなんだ、B級昼メロドラマでも見ている気分だよ。

須原は、何も言わずに僕を見ていた。
しかし。

「それが七年前の話ですか」

「そうだ」

ずいぶんと扱いやすくなったものだ。自分の過去を話してしまうと、人間多少はおとなしくなると聞いたことがあるが、どうやらあながち嘘でもないらしい。そろそろ頃合いかな。

「七年前……七年前ね」

「……？　それが何だというのだ」

僕は。

「少し強引に話を戻しましょう」

切りこむことにした。

「君はおそらくジョーカーの指示を受けて畑中を監視していたのだろう、須原。だがしかし、その目的は結局なんだったのか？　考えてみれば、メルシングを監視につけるといふことのメリットは彼女を殺すことにはない。その真逆、むしろ君はその対象を保護し、危険から彼女を守るべき存在だったはず」

さらに。

「ジョーカーはなんだかんだ言って、僕を助けてくれる。電話の電池パックにしろ、アドバイスにしろ。彼から貰ったものはすべて僕の助けになった、これもまた事実」

おそらく、猫耳のメルシングもまた、この状況を見越して32号機関に寄越したのだろう。

「ついでに、あなた方は僕と畑中の敵と見なしてよさそうだ。となると、僕に託されたジョーカーからの指令とやらはおそらく『畑中穂波を護ること』……でしょうね」

しかしそれは須原星屑の一笑に伏される。

「ハッ、今更そんなことが分かったところで何になるというのだ？」
彼は自分で自分を欺いている。僕には分かる。人の先入観というものは、はいつも身勝手な夢をその人に見せるのだ。

「ところで、僕、七年前という数字に、たまたまもう一つだけ心当たりがあるんですよ」

「……何？」

七年前。それは当然。

「ジョーカーという組織が出現した頃……ですよ。これもまた、七年前」

だんだん、どんどん、僕の言わんとしたことが理解できてきたのだろうか。男は黙り込む。

「そしてジョーカーはこういうわけか畑中穂波の命を守ることに固執している」

勿論、証拠はない。残念ながら、確信もない。

「馬鹿な、そんな馬鹿な、あり得ない」

急に、突然、忽然、唐突に、男はそんな風にぽつりぽつりと、降り始めた雨の如く呟きだす。

だけど、可能性なら、なくはない。

「そんなはずは」

それは恐怖であり、驚愕であり、不審であった。

さあて。

僕は男のそんな不気味なつぶやきを遮って、言う。

「彼は一体何を考えているのか。それとも」

ここから導き出せる結論の中で、最もこの場にぴったりのものは、ただ一つ。

「ジョーカーが極度のシスコンだったっていう説はどうでしょう？」

「これで全てが解決できるとは思いませんか？」

僕は微笑みながら、彼の眼を見る。が、それは既に僕に焦点が合っていないかった。

「奴は――私が殺したのだ」

どこを見ているのか？ 分からない。しかしその声は震えている。脚も、手も、全てが恐怖に、震え、今にも崩れそう。いや、恐怖ですらないのだろう、その感情は。もっと恐ろしく、恐怖なんて生ぬるいものなんかでもなく、一言では説明のつきようもないもの。それを僕が付きつけた、あまりにもあっさりと、あまりにも一瞬で。

だから彼は震えている。

……堪らなく快感だ！

「果たしてそうでしょうか？」

「そうだ！ あり得ないッ！」

その狼狽しきった姿を見て、僕は満足した。

よし、こんなものでいいかな。

時間配分は我ながらばっちりである。彼が最も冷静さを欠いたこの瞬間、時は僕の勝利へとその色を塗りがえる。彼に証拠を提示して差し上げられないのは非常に歯がゆいし申し訳ない話なのだが。

ごめん、制限時間切れ。

「あー、そろそろテープが終わるんで、ケガしないように構えた方がいいんじゃないですか？」

「……テープ？ こ、今度は何を、ほざいているのだ？」

「ほら、そこ、あなたの死角になってるところです。そこにラジカセがあるでしょ」

僕が少年を知覚出来なかったように、校舎につながる扉の影には、お互いに死角がある。というわけで、だ。

「さつきから流れてるこの『空爆』は僕が四十万に去年の録音テープを借りて、家で音質を調整しただけのものですよ。ついでに、校舎の時計は昨日、僕が勝手に三十分進めておきました」

そりゃあ、四十万もメイド服のまま飛んで来るはずだよ。なんてったって、本来『空爆』が始まる時間よりも三十分早く観客が集まってしまうていたわけだ。それを捌くためにてんでこ舞いになっていたのは愉快だった。それに、時計には根本から巻き直さないとけないように仕掛けを施しておいたから、そう簡単に修正されるはずもない。

「ああ、あなたの施した術は大体三十分で解除し終わるって龍ちゃんが言っていましたから、勿論それに合わせて時間も調整したんですけどね。気付いてました？　って気付いてるわけないか。くっ。そろそろ猫耳のメルシングがこの結界を壊して飛び込んでくると思いますから、せいぜい身を守ってください、目の前で死なれるとさすがにショックがでかいのですので」

にっこり。

笑う。

「ふふ」

「……………そ、そんなはずはッ！　馬鹿な、あり得ない、馬鹿な、嘘だ、全部嘘だ」

「嘘じゃありませんよ、面白いなあ」

なんて滑稽な図だろう。端から全部僕の手の上で踊らされていたということにたった今気付いた哀れな男の姿は、実に哀れで、まさに哀れで、哀れで哀れで仕方なく、そしてその上僕の笑いを誘った。フフ。ふふふふふ、フフフフフフ。

「あんたの負けだよ！　っはははははははははは！」

次の瞬間。
バチッ！

そんな感電したみたいなチンケな音とともに、青い世界は——脆くも崩れ去った。

37. 32号機関

「ま、そんな、まさか、馬鹿な、本当にけ、結界が!？」

真夏の蜃気楼が消え去るようにして、青い障壁は震えながら砕け散っていく。揺らいでいた空間も正常な屈折率と色とを急速に取り戻し、僕は視界が一気に晴れたような錯覚を覚えた。

「ううん……手遅れだったみたいだね、お父さん」

そんな中、須原はもうだめだとばかりに観念した様子だ。しかし僕の意図を外れて悠然と構えている。

……ん、どういうわけだ？

「な、何を言っている愛乃! い、いやしかし……まさか今までの会話は……出来事も、いや、全て、全てが計算の上での時間稼ぎ……すべてが予定通りだったとでもいうつもりか!？」

対蹠的に、老人のほうは笑止の至りである。声を裏返らせ足元もおぼつかず、悪戯がばれた子供の如くまごつき慌てふためくこと、まさにその最上級を見事なまでに体現してくれていて、見ていて悲しいくらいに滑稽で、だけれど見ていて楽しいくらいに諧謔を弄していた。

勝利を確信する瞬間は確かに甘美な一瞬だが、勝利の余韻は酔うためにあるのではない。省みの為の猶予なのだ。その時間は自身の導き出した回答の検算に回さなければならぬ。彼にはそれが足りなかったのである。まあ、どれほど用心深いからといって今回ばかりは彼が勝利を手中に収めることなど不可能なのだが。

そしてそれは僕が関与できる問題ですらなかった。

ま、飲んでも飲まれるな、ということだ。

「僕を子供だと思ってなめてかかり過ぎなんだよ。僕は子供でも少年でも、ましてやジャンヌダルクでもない」

僕は。

「ジョーカーなんだからさあ」

言って、悪戯っぽく笑ってやる。とかいつの間にか素が出てしまい、タメ口になってしまっているが、気にする必要はないだろう。まあそれもあったか、男の目が怒りと痛撃の反動で痛いほどに見開かれる。

「だ、だがッ！　しかし、畑中勇は私が――」

「あんた、思考力もないようだな」

僕は言い捨てる。まあそれもこの状況じゃ無理もないことかもしれないけど。

「考えてみればいい。あんたの娘が今そこに居る理由はなんだ？」

それは畑中勇の魔術が未完成だったから……だよな」

だったら、さ。

「正義感の強い畑中勇は、次も他人を実験台にしただろうか？」

「……………！」

そんなはずはない、なんて僕は言いきれないけれど、しかしそれが一体どうなのかは、須原星屑本人が最も痛感したらしい。僕は生れてきてから一度として、自分以外がこんな表情を作るのを見たことがない。そんな、打ち負かされた顔。楽しい。

「あんたが奴を殺した時……その魔術が既に完成していたとしたら？」

しかし勿論、これは即席考えのハッター三昧だ。

「う……」

それでも彼は、まさしく世界の終わりを見たかのような顔をした。それは、僕にとつての答えでもある。

「くうっ！」

そんな男の口から出た声は言葉にこそならなかったが、彼の感情は実際、次の瞬間行動になって存分に現れた。男の左手が、僕に向かって突き出され、光る。

ああ、しまった。挑発しすぎたかな、これは。と。

「はあい！　そこまで！」

「!？」

風が、吹いた。馬鹿みたいに明るい風だった。

星屑がその光源を振り見る間もなく、彼の身体はふわりと浮きあがったかと思うと、僕の視界の右端へ残像を引きそうな勢いでフェードアウトしていく。彼はそのままの体勢で数メートル宙を舞い、手すりの際まで飛ばされてド派手に尻餅をついた。そして。

カッン。カッン。カッン！

男の吹っ飛んだ軌跡を少々あっけにとられて眺めていた僕の背後で、三人分の足音がタイミングもまばらに、停止。

振り返ることもなく、知覚する。

「……四九秒の遅刻。嫌みですか？　　というかちゃんとドアから出てきました？」

この立ち位置的にドアが開けばさすがに僕でも気づくはずだ。だからこそこの疑問であり、そして恐らくドアから出てきていないから、というのがそれに対しての専ら有力な理由である。まさかこの人たちも空飛べるとかいこうジョークはないだろうな？

ま、そんなことはこの際どうでもいいこと極まりない。

「ああ！　ごめんよ、この猫耳クンが反動でダメージを受けないような術をかけるのに思いのほか手間取っちゃってさあつ。ちよつとだけ遅れちゃった」

この底抜けに明るく、軽いはっちゃけた調子。

「まさかこの俺がお前の為に動くことになるとは思ひもしなかったぞ、小僧」

この自信たっぷりに見下す威圧感。

「さあて……鞭打ちがいいかしら、それとも電流責めかしら？　どちらにしろ吊るしは必須ね」

この不気味なまでに楽しそうに拷問内容を喜々と決定する暗黒の微笑み。

振り返ることもなく、知覚出来る。僕は。

「ハッターで時間を持たせるっていうのも案外疲れるんでね……後

はあなた方に任せさせてもらって構いませんよね『32号機関』の皆さん？」

言った。

カッソ。

そして足並みが、今度は揃う。僕と横列に一直線上、心強い味方が僕と並び立つ。向かって右から順に、美鈴さん、僕、龍ちゃん、猫耳。また、風が吹いた。夏の風だ。

「任せれちゃうよお！」

「不本意ながらだがな」

「私への貸しは高くつくわよ」

右から聞こえてきた最後の台詞だけに何故か鳥肌が立ったので僕は左を見る。そして龍ちゃん金髪と目を細めたその笑顔が、太陽みたいに煌めいているのを確認し、再び前を振り向けば。

男がいない。

「逃がすかあっ！」

と不意を打って僕の右隣から飛んだのは、美鈴さんのドスの効いた怒号だった。その左手が僕の頭をぶん殴りそうな軌道で大ぶりに振り回される。危ない。

「せええりゃあああああっ！」

そこは呪文じゃないのか。

という突っ込みはまあ、置いておくとして。その指先から白く輝く糸が飛び出し、それぞれが意思を持った生き物であるかのように空を切ってヒュンとなる。

「ぐっ！？」

次の瞬間、さっきとは逆に何も存在していなかったはずの空中から、その輝く糸に絡めとられて男が捕縛され、

「かはっ！」

屋上の床に思い切り叩きつけられた。

「私だって伊達に追跡術師やってるんじゃないのよ……あの程度の子供騙しでこの私を撒けるとでも？ 今も昔も考えが甘いわよ、こ

のクソジジイが」

氷の女王みたいなうすら寒い笑みを顔に張り付けた美鈴さんがその糸の絡みついた左手を握りしめると。

「……あぐ……」

五本の光のロープがピンと張られ、それはまるで磔刑にかけられた罪人の如く須原星屑を持ち上げ、締め上げる。

「ああ！　だめだよー、美鈴姉え。まだ殺しちゃだめ……だめだからねっ？」

まだ殺しちゃだめ。龍ちゃんはにこにこ笑いながら、そんなことを言う。親がその子供に対して、おもちゃは大切に扱え、とな風に諭すが如く。その楽しささえ垣間見えるような無邪気な声色に、僕は怖気を覚えた。一言で言い表すなら、ぞっとした。やはり、この人たちは普通じゃないのだと、あまりにも今更ながらそんな感懷を抱く。

「安心しろ小僧。貴様も相当『普通』ではない」

猫耳のメルシングがピンポイントで僕の心を読んだかのように、そんなことを口走ってくれた。……どいつもこいつも、心中ご察しいたしますってか？

「ふん、いい加減理解した方がいい」

何をだよ？

「お前の顔面は相当感情の起伏が豊かだという事実をな」

猫髭のついた凜々しい顔は、龍ちゃんの左隣で前を向いたままだ。「……言われるまでもなくこれはわざとやってるんだよ。口で喋るよりもずっと伝わり易いし、その分僕は楽ができる。表情ってのはペルソナだ、つけ替えるだけで抽象化された概念を簡単に扱えるんだから。僕はそれを実践してるだけさ。だから別に、心を読まれるっていうのは半分冗句として捉えてほしいものだね」

ま、それを除いても君らは僕の心をズバズバ当てすぎだ、と思わなくもないが。

「はっ、興味ないな。俺は抽象論は大嫌いだ」

そうかい。なら君は僕とは気が合わないね。

「おい、金髪。俺はもう用済みだろう？ この状況からの脱出を試みたとしてその存在を消されることはあるまいな」

「ああ！ わざわざ手を貸してくれてありがとうね」

龍ちゃんははきはきと返した。

「……よく言う。散々脅しておいて」

「んー？ なんのことかなあ、お兄さん全然覚えがないよう」

龍ちゃんははきはきとぼけた。こういうところがこの人の強みか。

「ま、そういうことだからね、お疲れ様っ」

そう言うが早いか、猫耳のメルシングはもはや僕の視界から消滅していた。そういえば龍ちゃんや畑中もこういう消え方するけど、あれはどうやってるんだろう。

と、ここで再び意識を美鈴さんらに戻す。

「貴様ら……ゆ、許さん、ぞ……、32号機関……またも私を、がああっ！」

恨みがましい台詞が故に、さらに男は縛される。苦悶の声が須原星屑の喉から絞り出された。

「黙れつつてんのが聞こえないの？」

いや、言ってるねえよ。

という突っ込みはまあ、置いておくとして。僕は美鈴さんのさらに向こう、未だ僕の発動させた術式によって固まったままの少年に目を遣る。

「……あれもどうかしてほしいものだけど」

なんというか、オブジェとして置いておくにしては少々不気味すぎる感がある。

「んー？ ああ！ 彼か。うーん、彼にも悪いことしちゃったよ」

龍ちゃんはライオンの鬣の頭をなびかせながら僕の後ろを回って少年の体軀へと近づいた。同時に、美鈴さんが一歩ずつ、縛られたままの須原父との距離を詰めていく。

「あら……逃げないのかしら？ それとも逃げられないの？ あるいは現在進行形で老体に鞭打って逃亡策を練っているのかしらね。だとすればその鞭は私が打ってあげるわよ、ほら、遠慮はいらないから」

他人に打たれる鞭は痛いだけである。

「あら、馬は喜び勇んで走り出すわ」

……それはいろいろと間違っていると思いますよ。

「愛乃、私を裏切ったな……いや、端から……二重スパイだったのか……既にジョーカーの手箆めにされていたというわけだな……ふふ、ふ……なんて愚かな」

二重スパイ。憔悴した須原星屑の口からは、そんな単語が漏れた。須原愛乃がジョーカーの下で動いていたのはそもそも星屑の命令だったが、しかしそれすらも逆にジョーカーによる指示——須原星屑に対しては味方であるように振舞いながらもその動向をジョーカーに伝える役目を果たしていた、ということだろうか。だから、二重スパイ。

……………。

いや。そうであるのなら、どうして。

「人聞きの悪いことを嘯くのはやめてくれるかな？ お父さん。私はこの通り、白旗を上げて降伏しているだけ。でいしゅかんぎょく泥首銜玉って感じ。それが裏切りだというのならあなたも耄碌したと言わざるを得ないね？」

須原は万歳するように両手を上げながら、飄々としている。

「……愛乃……」

「ごちゃごちゃと。往生際が悪いわね。ま、そういう男は嫌いじゃないけれど。やり甲斐がある」

ところでさっきから美鈴さんの台詞がいろいろとギリギリな気がするんだけど大丈夫かな。

「おっと！」

僕がそんな須原らのやり取りに気を取られていた時である。背後

から、いや正確には右方からそんな声が上がった。龍ちゃんだ。見れば彼の足下に、見たこともない幾何学模様が何やら赤色の輝きを放ちながら、這うようにして迫っている。スピードは速くないが、確実に拡大している様子だ。

その起点は、塑像のようになって固まっている少年の右足。

「ああ、こういう仕掛けだったわけだ。ぬかったね」

珍しくシリ阿斯で平坦な声音。龍ちゃんはそこから一步、大幅に飛び退く。

「時限式の結界術——それも転移魔法だね。どうやら八代君の使った術と呼応して完成した感じだよ」

果たして見ただけでそんなことが分かるのだろうか。しかしそれが真実なら、僕もさすがに呆れたと言わざるを得なくなる。彼はそこまで計算ずくだったということになるのだから。

ほんの数秒の間に三段跳びの要領（ただし後ろ向き）で僕の横にまで戻ってきてから、龍ちゃんは声を低く落とした。

「マナの総量と術式の拡大速度から見て——そうだね、この少年を除けば、後三人」

「何がです？」

龍ちゃんは僕を振り返ると、人差し指をピンと立てる。

「三人飲み込むまで拡大し続けるっていう意味。即式解除も厳しそうだし、このままだと一般人まで巻き込むことになっちゃうかもねえ」

「……何が言いたいんですか」

龍ちゃんは、にやりと笑った。だけれど、眼は笑っていない。あの僕の中身をえぐり出すような灰に緑の混じった眼は、ただただガラス球みたいになっている。

「今ここに居る人間が何人かこの結界術に飲み込まれる必要があるのさ」

飲み込まれるとどうなるんです。

「さあ。ここじゃないどこかに飛ばされることになるだろうねえ。」

所謂ワープ？ まあでも、そんな危険なことを君や穂波ちゃんにさせるわけにはいかないし。そうなると面子は、お兄さんと美鈴姉え、それから須原星屑さん、ということになっちゃう感じかもよ」

「……なっちゃう感じかもですか」

それはつまり、この場に僕と畑中を、いや一番問題なのは須原を残していくということ、だろうか。

え、ダメだろ。

「そういうわけなんで美鈴姉えー！」

「え、待って下さい！」

「聞いてたわよM男」

「とんでもない名称で龍ちゃんのこと呼びやがったよこの人！」

って、思わず突っ込んだけど問題はそこじゃない。

「んじゃあ、その女の子、愛乃ちゃん？ 逃げるなりなんなり好きにしているから。あ、ちなみに八代君に手を出しちゃだめだからね、そしたら後で美鈴姉えに追跡させちゃうから」

「わかったよ。そのお姉さんに追い回されるのは私も嫌」

……おお、なんだ。ちゃんと対策を打ってくれるのか。少し安心。

「ちなみに手を出すっていうのは性的な意味でだからね」

「普通に安心させてくれませんかね！？」

頼むからシリアスな場面にギャグを持ち込まないでください。

「面倒臭いわね……折角今からこの男を罅るところだったのに」

色々と言いたいところですが、あなたはまず罅るという漢字をもう一度確認すべきですね、美鈴姉え。

「私が二人の男を同時に拷問している図ね」

「斬新すぎる解釈だ！」

美鈴さんの人生は楽しそうだった。世界というものは、彼女にとってはほとんど全てが自分の意のままに作られているのだろう。

「ほら、真ん中のこの女という字、よく見たら椅子に座っている女王様に見えて……」

「こない！」

いくら何でもそれはあまりに酷過ぎる妄想だよ。

「ま、それはそれとして」

けろっとした顔で、美鈴さんはゆっくりと、左手から伸びる光の糸で拘束したままの須原星屑を宙に浮かせたまま連れて、魔法陣の方へと歩み寄る。そうしながら、彼女は口を開いた。

「おいガキ……あんたの夢つーか、目標つーか目的つーか、前言ってたあれ。あれはきちんと果たしなさいよ？　格好悪くても、なんでも、ね」

もう僕らの数寸手前まで範囲を拡大しつつあった赤い魔方陣の一步手前に立って、美鈴さんは振り返り。

「あんたはジョーカーなんでしょ？　だったらババらしく行動することね」

ババらしく。

「……わかりました」

美鈴さんは頷いた。

だけど本当は、この時僕には、その意味は分かっていたいなかったのだ。

「く、くそ……許さんぞ八代椎奈……次に会った時は必ず……」

「次はないよ、須原星屑」

そして僕の言葉を待たずして、美鈴さんが次の一步を踏み出した瞬間、彼女と須原星屑の身体は赤い光に包まれ、そしてなんともあつけなく、その後ろ姿が消える。

一瞬の、空白。

それから、黙って眺めていた龍ちゃんはふうと一つ息をついた。

「……さて、お兄さんも行こうかな」

「待った」

僕はそれを引きとめる。

逃げるように一步を踏み出そうとした彼を、ここにつなぎとめる。まだ、あなたには用があるんだ。

38. 種明かしの終わり?

「龍ちゃん……あなた、その結界がどこに繋がってるか、知ってるんでしょう。そうでなければそんな思い切った行動に落ち着きはらって出られるはずがない」

「はて、何の事かな？」

「とぼけても無駄ですよ。というかとぼけないでください、癪に障る」

一つお聞きしましょう。僕は言う。

「この計画は、初めから最後まで、ジョーカーが仕組んでいたモノ……」

それは薄うす感づいていた。彼の目的は、畑中穂波に対する危険因子を全て取り除くこと。そしてもう一つ。

「あなたがたも全員、実はジョーカーとグルだったのではないですか？」

32号機関の面子も、猫耳のメルシングも、黒髪の少年も、勿論須原も。

「ただ一人、須原星屑を除いて――」

勿論、畑中本人と僕自身が何も知らなかったのは言うまでもないが。

「んー」

それでもまだ、龍ちゃんは曖昧な返事だ。

「そうじゃなきゃこんなものがこんなに都合よくこんなに綺麗にこんな形でまとまるはずがない」

最初から最後まで。

僕が腕輪をはめられ、放課後の畑中に遭遇し、美鈴さんに回収され、龍ちゃんと出会い、畑中が家に押しかけ、ジョーカーの存在を知り、猫耳のメルシングを保護に向い、ジョーカーに電話を渡され、美鈴さんと台詞を交わし合い、畑中と仲を違え、始業前の屋上で須

原に出会い、文化祭が始まり、空爆が始まり、少年と交戦し、須原星屑を捕まえ、そして今まで。

人はこれを「全て」と言う。すべての辻褄が、合い過ぎるのだ。僕の考えた通りに、予想したとおりに、動く通りに、シナリオが進む。

都合のいいタイミングで助けが入り、都合のいいタイミングで僕に情報が流れ込む。

そんなことは、現実には絶対にあり得ない。

龍ちゃんが、美鈴さんが、はたまた猫耳のメルシングや黒髪の少年、ジョーカー本人でさえも、僕を巧みに誘導していた。そうしか考えられない。僕がミスを許されなかったのは、先の三十分間のみ。いや、それさえもある程度の筋書きに従って、僕は行動させられていたのだろう。他は必ず、確実に、どうしても絶対、僕に危険が迫ることはあっても、危機が及ぶことはあり得なかった。

まるでスイカ割りだ。目隠しした僕を、声や手で目標物まで誘導するかのごとく。

あるいは、僕は都合のいい駒だったのだろう。適度に頭がよく、適度に行動力もあり、適度に畑中とも仲がいい。そんな存在は、ちようどぴったり僕だったのだろう。

つまり。

「あなたたちは初めからこうなることを知っていた。否、計画していた。ジョーカーと32号機関のいざこざを演じ、須原星屑を誘いだした」

これが事の顛末。

本当の種明かし。

「違いますか？」

「……どうしてそう思うのかお兄さんに教えてくれたら、答えてあげないこともないよっ」

もうすぐそこにまで、それこそ龍ちゃんの足下にまで、転移結界は迫っているが。

「それはほとんど肯定してるのと同じだと思いますがね」
彼の口の端が、そっと持ち上がった。

「だから、り・ゆ・う。この世の全ては原因と結果で成り立ってるんだよお八代君。一説を持ち出すのならその理由と根拠をお兄さんにも教えてほしいな」

どうやら、畑中の頑固な一面は龍ちゃんから受け継がれているようだ。僕はそんなことをチラッと考えてから口を開く。

「この腕輪ですよ」

「腕輪？」

「そう。そもそも初めからおかしいとは思ってたんです。何の変哲もない腕輪。言ってみればそんなものの為に、あなた方32号機関とジョーカーは対立していた。しかし僕は当初、全く勝手がわからなかった。勝手というか、自分の置かれた状況すら把握しあぐねてましたから、いやだからという訳でもないのかもしれないですが、その事実に大きな不信感を抱くことはありませんでした。いや、正確には抱けなかった、と」

息づぎをして、もう一言。

「だけとおかしいと思いませんか。思いましたよ僕は。何がというわけではありません。だがしかし、あまりに茶番だ」

茶番。底の見え透いた、馬鹿げた芝居のこと。

「怪盗ルパンの予告状には成立条件がある。ひとつは、盗まれる対象が必ずなんらかの意味や価値を帯びている必要があるということ。さらに、怪盗にはそれを必ず一度で奪うだけの自信があり、実際に成功させなければならぬということ」

だが、この場合においてはこの条件の両方が満たされていない。

「あなた方は何の価値もないという腕輪をどうして守っていたのか。そんな必要はない。それこそご自由にお持ち去り下さい、ですよ。では、知らないだけで本当は価値があるのかもしれない、そう考えたからか？ いいや、違いますよねえ。あなた方の筋書きはそうじゃない。違っていた」

美鈴さんから聞き出した話を思い出せば、こうだ。

「この腕輪に与えられた役割は、餌。ジョーカーをおびき出し、倒すための。しかしそうするとやはり、この腕輪には何か価値があったということがある——そうでなければジョーカーは無価値な腕輪を狙っていたということになりますからね。だがしかし、畑中は思いついていた——その腕輪が無価値だと」

ほうら。だんだんチグハグな感じがしてきた。龍ちゃんは、目をつむったまま静かに結界から後退する。

「畑中はジョーカーと対面した際排除する役回りだったはず……なのにその畑中が計画のあらましをしらなかった。あり得ないお話です。あり得ないお話ですよ、龍ちゃん」

つまるところ、美鈴さんは僕の語りかけに対して肯定の意を示したけど、その内容の全ては僕が語りきったことだった。

「彼女は一言たりとも、腕輪に意味がありそれはジョーカーをおびき寄せる餌だなんて口にはしなかったんですよ。僕の発言に是と頷いただけ。この意味が分かりますか？」

「なんだろうねえ？」

「彼女は僕に合わせたただけだったということですよ。その上、あなた方はジョーカーを始末できてもいないし、ジョーカーも腕輪を手に入れ損ねている。全てが、おかしい」

整合性がなさすぎる。

「ふうむ」

「畑中を僕の護衛につけたのは、一般人への被害を恐れる『封じ屋』の方針から、須原星屑には手が出せないと踏んだからだ。空爆に合わせて奴が僕らを襲ってきたのも、そういう意図があったのでしょうしね」

「そうだねえ。で、決定的証拠何かはあるのかな？」

「愚問だなあ、これ以上は不毛だと思えますがね。強いてあげるとすれば、あの猫のメルシングが32号機関に預けられていたというのがおおよそ決定的な証拠ですよ」

ジョーカーがあなた方と協力していたというね。あの猫はこれ以上ないくらい、先ほどのワンシーンでしか用途がなかった。壊滅的なまでに決定的だ。

「ああ！ そうだ、そうだね。確かにそのとおり。認める、認めちゃう、認めざるを得ない。さすが八代君鋭いっ」

龍ちゃんは拍手しながら、やはり軽い調子で言った。

「……はあ」

急激に、時間を無駄にしたような落胆が僕を襲う。なんだかなあ。

「で、その理由はなんですか？」

ジョーカーと協力した理由。

それは勿論。

「畑中穂波を守るため……ですよね」

結局僕は、このセリフが聞いてみたただけだったのかもしれない。どうせ、そんな好奇心からだったのかもしれない。どうしてそんな気になったのかはわからない。だけど、だけれど、どうしても。確認したかった。彼女が、畑中が。

畑中が、きつと壊れてなんかいないって。彼女は。

——是が非でも、愛されているって。

僕は聞く。

「そうなんでしょう？」

だから、こんなことになったのだろう。

「違うねえ」

それは即答だった。

「は？」

困惑しなければならなかったのは、僕だ。

「いや、だって、畑中の兄がジョーカーで、あなた方はかつて仲間だったから……」

「ああ！ 違う違う違う。ぜーんぜん違うよ。お兄さんとジョーカーとは利害が一致しただけの話さ。穂波ちゃんは……まあ、言ってみれば彼女の方こそが餌だったって感じだね」

龍ちゃんは続ける。

いや、ちょっと待て。

「確かにジョーカーはそのつもりだったろうけどね」

ちよっと、待てよ――。

何か、赤いものが。熱いものが。煮えたぎったモノが。身体の中を駆け上がってくる。

「僕は違うんだなあ、これが。僕はね、須原星屑が鬱陶しかったんだ。僕らの商売の重要な要だった勇を殺しちゃうし、それからみやがらせが続いてね。そもそもあの機関は目障りだったのさ」

ああ、そうか。

あれが、複線だったわけか。

「僕は須原星屑を殺せばそれでよかったんだもんね。正当防衛っていう理由があればよかったんだ。それでジョーカーをたぶらかして、ちよいと今回の計画を練らせただけ。まあ、ジョーカーは穂波ちゃんをずっと見守っていられりゃあそれで満足だったんだろうけどさあ、僕としてはちよいと彼女の危険を告げ口するだけで済んだからね。しかしこれでまたうちは仕事が増えるよ？　すばらしいことだと思わ」

その細い体躯が吹っ飛んだのは、僕が彼を殴ったからだろうか。

頭の中に、一つの声がリフレインする。

『美鈴と牧埜宮清龍をそれぞれ、一発ずつ殴っておいてくれたまえ』人を殴ったことがない僕には、その感覚というものがよくわからない。

「……これも」

わからないけど、その代わり、僕は言う。

「任務なので」

最後に、一つだけ、目が合って。

緑色の宇宙が僕を見つめて、飲みこんで。

「じゃ、頑張ってるね」

そしてそのまま、龍ちゃんが魔方陣に接地すると同時に、彼の身

体は赤い光に包まれ、消えた。

一つ分かったことは、人を殴ったりすれば殴る側も少しは痛いということである。今後一切において参考にならなさそうな教訓を得たわけだ、僕は。何故ならもう二度と、僕は人生において人を殴ったりしないだろうからだ。ジョーカーに再び命令されない限りはね。
「……」

須原星屑を始末するため。畑中穂波を守るため。どちらも結果的に同じところに辿りつくとして、その過程が、根拠が、動機が、あまりにも違い過ぎていた。

あの言葉が、あの長台詞が彼の真意だったかどうかは、僕にはわからない。というか、龍ちゃんの真意なんて、それこそ最初から最後まで、全くもって理解できなかった。僕が目隠しされていたとするなら、彼は終始仮面をつけていた。ああいう人間は、僕が一番苦手とするタイプだ。

だけど。

だけど、僕は自分を抑えられなかった。

どうしてだ？

決まってる。

僕はここまで来た。ここまでやれた。

でも、どうしてこんなに必死なんだ？

僕のためじゃないのに。自分の為以外にこんなに必死になったのは何年振りだろう。少なくとも美咲の時以来なのは確かだ。

だけれどしかし、それとこれとはまるで質が違うような気がした。なるほどそれは自分で分かる、なんとなくだけど。

どう違う？

簡単な話だ。

それもこれも、僕が。

畑中を。

「……………」

馬鹿馬鹿しい妄想だ。

……僕らしくもない。

それからしばらく息を整えて、僕は魔法陣が排水溝に吸い込まれる水のように消えてなくなったのを確認する。驚くべきことに、とてもいべきか、少年の姿もそこからは消えていた。

「本当に三人飲み込んだら消えやがったな。ま、そりゃそうか、龍ちゃんは全部知ってたんだしね」

ああ。全く。

とんだ茶番劇だったな。うん。

今から思えばどれもこれも白々しい演技だったのだ。どれもこれも、この結末を招くための、布石でしかなかった。だとしたら少々、オチにインパクトが足りやしないか。まあ何にしろ、なんだかなんとも、歯切れの悪い終わりだったことに変わりはない。伏線も大体回収してしまったし。マジックで一番楽しいのは、種明かしまでと、その最中である。種を明かしてしまえば、こんなもの、というところだろう。だから通常、マジシャンは種明かしなんかしないのだ。理由は諸々あるとはいえ、観客の楽しみを削ぐからというのは重要なファクターに違いなかった。

思い返してみれば、一番ジョーカーの掌で踊らされていたのは須原星屑よりも、僕の方だったのだろう。だが、終わった今となってはどうでもいいことである。拘泥すべきはそんなことじゃあない。

「そして、だ」

僕は、視界を百八十度回転させ、視界にその存在を補足する。

「逃げないのか？ ……須原」

彼女はそこに居た。

須原愛乃は、そこに居た。

どうして逃げないのだ？ どうして消えない？

「さあ——どうしてだろうね」

ドクン。

彼女の唇が、そんな風に動いただろうと思う。言葉も、そんな風に聞こえたように感じる。

ここでこの物語は終わりじゃないのか？　ここでエンドロールが流れだして終了じゃないのか。心臓が、急にうるさくなる。少し静かにしてほしいと言っても、うんともすんとも言わず、むしろずっとドキンドキン言っているこの有様。

これだ。

これを僕は危惧していた。須原のあの余裕を見て、どこかがおかしな感じがした。それを僕は。

「……」

これは、違う。僕の思い描いていたチェックメイトじゃない。

決定的に、違う。僕の予想していた終わりでは、終焉ではない。

まだ、終わらない……？

「さあ八代君、種明かしを始めましょうか――」

おいおい、勘弁してくれよ。それは。

「僕のセリフのはずだぜ？」

39. 本当の種明かし

「そういえば空爆、本来の開始時間を過ぎたのに、始まらないね」
須原は、なんてことのない風に口を開く。その様子をうかがいながら、慎重に返答。

「……僕のせいで予定が狂ったんだと思う。一応関田にも時間稼ぎを頼んであるし」

その関田、今頃機械室の前ではた迷惑な生徒を演じてくれていることだろう。御苦労さまである。

何も言わず、何も聞かず、ただただ引き受けてくれた関田、ありがとう。だなんて、本人を前にせずこんな独白をするほど薄情な奴はいなかろうが、まあ、塩弁当のことを種にごねたというのが真実で、それ以上のものは何もないわけであり、事実手回しは多い方が助かった。不確定要素は極力排除しなければ、如何に動かされている僕といえど、いつどこでゲームオーバーに陥るかはわかったものではなかったからだ。

「人使いが荒いね君も……アハハ、苦笑を禁じ得ないよ」

須原は笑う。が、本当に笑っているのか？ 不穏で、不吉で、不透明な空気が、僕に纏わりついて離れない。結界は破壊したはずだ、なのに、この感じはなんだろう？ どうして、壊しきれない。ネタネタと、食べかけの飴を掴んだ指みたいなのこの感じを壊しきれないのは、何故だ。

そんな不安を振り払い、少しでも気を逸らそうと、僕は口を動かす。

「ことが終わったらきちんと礼を言うつもりではいるよ。どちらにしろ、僕は学校の人からお咎めを受けるだろうしね」

この学校の時計は全てが連動しており、一つのプログラムによって動かされている。機械室に忍び込んだ上、校内中の時計の針が12時に向うにつれて遅れるように設定した、だなんて悪戯の一言で

済ませるには少しやりすぎだ。しかし「八代なら大丈夫だな」などと出所不明の信頼を僕に寄せ、何の不信感を抱くこともなく鍵を手渡した学年主任にも問題はあるのではないかと思う。いや、これはただの責任転嫁だけどさ。

「君って手先が器用なんだね。携帯に不慣れだったから機械には弱いのかと思ってたけど」

「携帯は元々僕が毛嫌いしていたのもあったからさ。それに不慣れって言うっても、さすがにもう慣れたよ。もともと機械いじりは好きだったんだ」

親父の影響でな。

「手先も器用で運動も出来て、勉強は言わずもがな……か」
ドクン。

話題が、順調にスライドしていく。潤滑油を刺された自転車のチェーンのように、また非日常が回り出す。ゆっくりと、しかし繋がって、絶対に僕だけでは止まらない螺旋が再動し始める。

「何だよ」

何が言いたい。何がしたい？ 君は何故ここに居る。

「ねえ、八代」

声色が変わり。

「天才って何だと思う？」

滞りのない清涼な声が、僕の耳朵を打って。おかしい。そう思った。割れた瓶で黒板をひっかいたみたいな音が、頭の後ろでずっと響いている。

「……その質問は聞き飽きたぞ、須原」

「まだ聞き飽きるほどはしてないと思うけど？ ていうか二回目だし」

何がおかしいって、全てがおかしかった。彼女は、もう僕の視界から消えていなければならない。そうでないから、おかしい。我ながら、無理路整然であるが。

「僕の答えは変わらない」

異質。異端。孤独。

「答えが変わらないなら、質問のほうを変えようか」

「……なんだよ」

息苦しい。重苦しい。いや、それは僕だけだ。須原は。

微笑んでいる。

「どうして君は天才って呼ばれるのを嫌がるの？」

「……………」

何だって言うんだ？

「その質問も二回目だな」

「なんなら、答えなくてもいいよ。私が言い当ててあげるから」

ドクン。

それは、どういう、意味だ？

「……なあ、須原」

一步、畑中と須原に近づいて。

いや、近づいているのか？ 僕は。僕は本当に、近づけているの

だろうか。

「僕は君に聞かなければならないことが……あるんじゃないか」

言う。

あるんじゃないか、なんておかしい言い方だけれど。

ドクン。

心臓、うるさいぞ。もう少し静かにしている。

「奇遇だね、八代。私も君に言わなければいけないことがあってさ」

ドクン。

全身の血流の巡りがここまでいいのも久しぶりだ、というか初め

てかもしれない。

「君は別に構わないんだよね、八代」

ドクン。

だめだ。

稲妻のように早く、短く、だがしかし強烈に、そんな思いが頭を
駆け巡った。

「自分が天才と呼ばれるのは、構わないんだよ。ねえ、八代。……
そうだよねえ、八代椎奈君」

須原は僕の名を、繰り返す。ゆっくりと、一文字ずつ分解して口にする。じんわりと、僕は、黙って彼女の双眸を見つめた。

「……問5の(4)」

瞬間。

僕は突き落とされる。どこへ？ わからない。だけど、急激な落差。酷烈な明滅。目がチカチカして、僕の後ろでは宇宙が二度生まれ変わり、銀河が爆ぜて飛ぶ。ノルアドレナリンが脳内を交差し、交感神経と副交感神経が乱れ、神経伝達物質の花火がバチバチはじける。視界が回り、世界は閉じ、時間が狂い。

だめなんだ。

だめなんだよ。

これじゃ、だめなんだ。

だめだって、わかってたんだ。

「……僕は……」

口から洩れる声は弱弱しく。

頭では、スライドショーみたいに、ここ一週間の出来事が映し出されては消えるようにして、高速で切りかわっていった。

「……僕は……」

もはや、僕が僕たる厳然さはどこにも存在し得なかった。

僕は、蟬の鳴き声のプールの中で、自我がブロック状に裁断されて崩壊していくのをひしひしと感じる。

夏だった。

蟬が鳴き始めてまだ間もない頃、暑さでアイスクリームが溶けたみたいに揺らぐアスファルトを眺めつつ登校する僕の脇を、水着やゴーグルや、塩素の香への期待感でパンパンになったビニールバツクを力の限りに振り回しながら駆けていく小学生たち。彼らのほと

んど大半は、多分この先僕以上に苦勞することもないだろうし、苦悩することもないのだろう、だなんてその時の僕は生意氣にも人生を悟ったような冷めたモノの見方をしていたのだと思うし、そもそもそれは自分と他人の区別というよりも、侮蔑の意を込めていた捻くれた思想だったに違いなく、大目に見積もっても今の僕がこの時期の僕と出会ったら「うわ、なんて暗くて陰湿で性格の悪い最悪なガキなんだ」と寸分の違いなく思うはずだ。

とにかく夏で、暑かった。そして僕は水泳というものに興味がなかった。

時にその頃の僕、八代椎奈は、運動の点で言えばどっちつかずの少年だったと記憶している。上手くもないし、下手でもない。グレイゾーンに居て、脚光を浴びることもなければ、罵倒を浴びせられることもない、そんないい意味でも悪い意味でも目立つことのなかった少年だ。所謂陰キャラである。僕はそもそも外で遊ぶこと自体が好きではなかったのだ。

だけれどそれはセンスの問題で、頭でしっかり考えて動きさえすれば「出来る側」に入ることも不可能ではなかった。個体値的能力不足が否めなくとも、スポーツに必要なのは素質ばかりではない。運動が出来ない人間というのは、そもそも考えが足りていないだけ。それ以外には考えられない。などと、そんな極論を振り回しては敵を作っていたのも、今となっては懐かしい。敢えていい思い出とは言わないが。

僕が水泳ないし運動を好きになれなかった理由はそこにある。

半分は努力でどうにかなくても、もう半分はどうにもならない。これは高校生にまで成長した今でもほとんど変わらない考えだけど、やはりスポーツ（あるいは芸術でもいいが）という分野において常人と非常人の間には決定的な溝がある。

才能という溝。

それはおそらくもっと早くから、きっと頭で理解するよりも感覚的に掴んでいたことなんだろう。確かに、運動することは楽しい。

だがそれは発散的な楽しさであるべきだし、自己実現に費やされるべきものではない。たぶん、少年時代の僕はそんな風に、運動を切り捨てた。今から考えれば、馬鹿な考えだったとは思う。だが今更とやかく言ったからといってどうなることでもない。

とにかく問題は、その訳の分からない自意識が、勉強という一点に向いたことだった。キツカケなんてものは覚えてないし、いや、そもそもそんなものがあつたかさえも怪しいところだけれど、僕は小学生低学年で居ながらにして勉強に日々の大半を費やすというなれども非健全な子供だったわけである。

逆に、勉強はやればやるほど成果が出た。

それはどう考えても、スポーツとは異なったのだ。

ただ、小学生だった僕が愚かだったのは、その事実を僕が運動を上手くこなせないという現実と同列に扱ったという点に尽きる。これはただの推測でしかなく、客観的考察に基づいて過去の自分を分析した結果を述べるにすぎないのだが、僕は少なからず勉学に関して他の人間よりも本当にほんの少しだけ優れた頭脳を持っていた。しかし自身を無能だと思い込んでいた僕は、努力こそが勉強パラメータの絶対値だと勘違いをしたんだろう。

それはそれは、可哀そうな勘違いだった。

父親の影響もやはり、あつたのかもしれない。

僕の父もまた、決して頭の悪い人間ではなかったのだ。なかったというか現在進行形でそうなのであるが、幼い僕は父以外にこれが対象を持たなかった。持てなかった、と言うことも可能ではあるが、それはやはり母がいなかったことが原因というよりも、一人ですべてを完璧にこなす父が僕の目に相当の格好よさで映ったというこのほうが大きい。僕は彼に対して過剰なまでの憧憬を抱いたものだった。

まあ、それだけなら可愛い話なんだけど。抱きしめたいくらい可愛らしい坊やの話なんだけど。

多分、一日十時間、休日なら脇目もふらず十八時間程度、勉強に

時間を費やしていたと思う。

残念ながら、これは完全に、ただの頭のいかれた馬鹿だ。

当然、それだけの時間机に向かっていれば脳みそがお豆腐で出来ているような馬鹿野郎でも多少はマシな脳内回路を組みあげられる。ましてやなまじ、僕は頭の出来が良かったものだから、これが駄目だった。僕は思いあがり、中一、中二、中三、高一……という具合に受ける模試のランクをどんどん上げていき、そしてそのどこでも全国一位をとることに拘った。

結果から言うと、必ずしも上手くはいかなかったが、しかし実際とれてしまったのだから驚きだ。困ってしまう。とは言え模試にも難易度はある。僕の受けたものはレベルの高い私立の学校なんかは受けていないようなやつだったから、そこまで快挙でも……いや、快挙だな。自分で言うのも嫌だけど。

一言でいえば、勉強狂い。

回り回って、ただの馬鹿。

よく、頭がいいのと勉強ができるのは違う、と言うが、まさにその時の僕はその違いが理解できていなかった。しかし残念、それはとてつもなく楽しかったのだ。わくわく感というか、どこまでいけるかという期待感というか、そういうものが半端なかった。今思い返して比喻するなら、RPGゲームの主人公になったような気分だったのだと思う。もっと適切な比喻を用いるなら、世界を見つける行為——まだ狭い世界を、自分の手で広げていく感覚。自転車に乗って、世界の上を走っていることを自覚しながら、どこまでも広がっていきそうな坂道をどこまでも下っていく。そんな感じ。いや、そんな経験をするには結局なかったんだけどさ。これは本で読んだ正常な子供の感覚だ。

親父が心配して僕にあんな遊び——ピタゴラスイッチ的遊びのことで——を勧めてきたのも、全くもって頷ける。親父にはさぞかし心配をかけたのだろう。

それをクラスみんなに自慢するようなことはしなかった。これ

もまたおかしい話だけど、やっぱりおかしい僕だから、これは裏の裏、おかしいことではないのだ。自分でひっそり楽しむ。それにこんなことを他人に話しても理解してもらえないだろう、そう考えていたのかもしれない。

そんな時だった。

一人の天才の、噂を聞いた。

彼は、僕のように自分よりも上の学年の模試を受けてみたりすることはしていなかったけれど、それが僕にまで伝わってきたということはそれ相応に結果を残していたということだろう。そんなことはどうしてもよくて、重要なのは僕がそれを耳にしまったということ。

そして僕は、無謀にも彼に挑戦することを思い立ったのである。わざわざ、模試の会場が同じになるよう日程などを調整して。そして初めて彼を見たとき、僕は思った。

なんだ、こんな奴か。

細身で黒髪で、何の変哲もない青年。何のオーラもないじゃないか。ちょっとは格好いいかもしれないけれど、どこからどう見ても普通の奴だ。しかも、名字が『無才』などと言ったのだ。ふざけているのかと思った。

「君が……天才っていう人？」

人のいっぱい詰まった教室を縫って彼に近づき、そんな風に聞いたと記憶している。この辺だけ、いやに記憶の上澄みがはっきりしているのだ。

「……ん、なにか用でも？」

そう、こんな風に会話を交わして。

その男がこちらを向いて、そんな風に口を動かして。

僕の眼を見て。

この辺で確か、突発的に自覚したんだ。

ああ、僕は、天才じゃない。

特に何を確かめたわけでも、何を根拠にそう思ったわけでもない。

ただ、現前の存在はあまりに強大、いや巨大すぎて、僕はそれに圧倒されたのだと思う。林檎を手にとって、ああこれはリングなのだと思うのと同じように。

理由は分からない。だけど、彼のその言葉を耳にした瞬間、僕は僕の脆い世界が崩壊する音を同時に聞いたのである。

「……僕と勝負しないか？」

一瞬で全てが喪失されていた。

覚悟も自信も、自分自身の自己同一性すらも、もはやそこには存在せず。

訳が分からなかった。声も、多分震えていた。足はもっと震えていただろう。瞳だって震えていたに違いない。地震が起こったかと思った。怖かった。自分の存在がまるで紙切れのように薄っぺらいものだということを、本当に、トントン相撲の駒のように危ういバランスでなんとか起立の姿勢を保っていただけの、立体感の欠片もない張りぼてもいいところの存在なのだというのを、知りたくないのに知ってしまった気分だった。

でも、その男はにこりと笑って、柔和な声でこう言ったんだ。

「構わないよ。そうだな……普通に勝負するだけじゃ面白くない。

俺が負けたら自殺してやろう」

結果から言えば、僕は子供だった。

どうしようもなく子供で、少年だった。だから、そんな言葉で躍りになってしまったんだ。

「僕が負けたら、僕も死んでやる」

小さな騒動になった記憶がある。でもそんなことより、そんな屈辱的な言葉を放たれたことの方が僕には重要だったのかもしれない。とにかく、気づいたらそう言い返していた。端正に整った彼の顔が、少しだけ驚く。

「良い覚悟だ……ああ、今気付いた。君がそうか。噂は聞いてるよ。何でも天才小学生なんだってね」

もはやすべてにエコーがかかって聞こえていた。わらわらと人が

集まってきたて伸びたり縮んだりしていたけれど、僕はそれを掻き分けて自分の席に着く。初めて、自分を完全に超える生物に出会った。天敵、というのとも違う、完全に全てにおいて自分を超越していく生命体。そんなものを見つけた気分だった。

当然、そんな状態で小学生が高二の模試を落ち着いて解けるはずもない。

それでも、僕も死ぬ、だなんて啖呵を切った以上、点数を取らない訳にはいかない。僕は出来得る限り冷静になろうと努め、そして大半の教科を何とか乗り切った。生意気ながら、ほとんど百点の自信もあった。だからこそ。最後の最後、数学で僕は油断してしまっただのだ。

選択問題、問五の(4)。

今でも覚えている、確かベクトルと平面図形の問題。

ベクトル。逆ベクトル。

今なら2分で解けるだろう簡単な問題だ。でもその時の僕は。

……解けない！

焦れば焦るほど、マークシートは汗で滲んでいく。周りの人間全てが僕に死ねと囁いているようで、僕は声を上げて泣きそうになった。なんとかそれはこらえるも、急激に景色が色褪せていくのを切実に感じた。僕は死ぬ。僕は死ぬ。僕は死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ。それだけが頭の中をぐるぐるとメリーゴーランドのように駆けまわって、ついでに目までもくるくると回り出す。

『俺が負けたら自殺してやろう』

だけど、頭の中にその言葉が蘇って、僕はまたあの怒りを思い出し、そして。追い詰められていた僕は、その赤い感情も相まって。絶対にしてはいけない暴挙に出た。

そう。向こうも500点なら、二人とも満点になってしまえば。

どちらかがペナルティを負うことにはならない。

だから。どうして。僕は、なんて愚かだったのだろう。

気づかれなければ問題ないと、ばれなければ万事十全と、見つか

らない事実はそもそも事実として存在し得ないのだと、そんな風に考えたのかもしれない。

しかし、だとしたらなおさら愚かだったろう。

僕自身が一番の証人であることを見逃していたわけだから。

過程はいい。どうだっていい。大事なのはアウトプットだけ。

だから、結果。

ほんのちらりと一瞥をくれただけだったのに。

自分の答案以外の紙切れに、ほんの一瞬目をやったただけだったのに。

天才は死んだ。

模試の結果発表、その日の朝刊に、小さく自殺記事が載ったのだ

った。そのことは、小学校のクラス内でも話題になっていたのである。おそらく無才が彼らの姉か兄の知り合いだったとか、そんなところからお喋りが始まったに違いなかった。

疑問はあった。どうして、何を間違えたのか？　だけど、そんな陳腐なものは一切合財必要なかった。

僕の世界は、そこで終わったのだから。

何もない。

僕は、死んだのだ。

僕は、二人の天才をこの世から葬ったのである。

残ったのは、僕だった何かと、天才だった脱け殻。それは同値記号で結ばれる可能性もあったし、全く結ばれない可能性もあった。

それから僕がどういう日々を過ごしたのか、それは全くもって書くに値しない。

結果だけ言えば、僕は僕だった何かの上に天才の皮を被って生きることに決めたのである。

それでも、やっぱり、どうしても、悲しいくらいにどうしようもなく。

僕はやはり、死んではいなかった。

生きていたかと聞かれればその返事にはNOと返すしかないが、死んでない以上僕は僕であることを徐々に取り戻しつつあった。

僕は、僕の為に生きることが、勉強することを放棄した。無才の生きるように、彼の軌跡をなぞった。

何も満たされはしなかった。

だけど、そうするよりほかになかったのだ。

「お前は天才だ」

だから、そんな風に言われるのは最も辛かった。

その言葉は、僕に向けられてはいけない。絶対にいけない。何があってもどんなことが起こっても、たとえば地球が滅びようとも、宇宙が破滅しようとも、だめだ。そんな言葉を僕が受け取ることなど地獄の果てまで行っても許されないことだったから。その言葉を受

け取るのは僕じゃない。僕であつては、何が何でもダメなのだ。

許されるはずがない。それに何より、僕自身が許すはずのないことだった。

僕は、人を一人殺したのだから。

「勉強が出来過ぎて気持ちが悪い」

「孤高の天才だ」

そんな風に言われるのも、許せなかった。

何が許せないって、そんな風に言われる僕自身が最も許せなかったのだ。吐き気がするほど自分を刺し殺したくなった。脳みそに包丁を突き立てて調理して自分で食べたいとさえ思った。

無才は、絶対そんな風には言われなかっただろう。

根拠のない確信が、あった。だがそれは正答だったに違いない。

だから、僕がそんな風に言われるのはあつてはならないことだった。

僕は、人を一人殺したのだから。

僕自身、そんな言葉を差し向けられたってどうってことはない。

だけど。

だけど僕は、天才として、生きる振りをしなければならない。そうしなければ、僕は真っ先に死んでいたはずだ。

関田にはだから、感謝すべきなんだろう。

何も聞かずにいてほしい時には何も聞かずにいてくれた。傍に居て馬鹿笑いしてほしい時には、そうしてくれた。美咲だってそうだ。だけどそれは、あの天才がそうだったと思うから、僕もそうでなければならなかったというだけの話だ。

僕は、僕の為以外に生きることを許されない。僕は一人の天才の為に、僕を生きななければならない。

僕は、天才であらねばならない。天才として生きる僕は、死なずにいなければならない。

僕は。

は」

視界が反転して、白と黒が黒と白だった、空は白くて、雲は黒い。僕は。

「……？」

畑中が、顔を上げてこちらを見ていた。

僕の正面に横たわったまま。

こちらを、見ていた。

「……どうしたんですか、八代、君？」

40. 私はあなたのことが

目を薄く開けて、ちようど今お目覚めなのだろう、畑中はどこかぼんやりとした空気を纏って僕に顔を向けていた。何故、このタイミングで。いや、そんなこと言っても仕方がない。仕方ないがしかし。僕の世界が、ほんの少し元の正常な造形を取り戻す。しばらくの間集中し過ぎていたせいで忘れていた猛烈な暑さが、電光石化をもってして僕に襲いかかった。

「畑、中……」

言葉が、喉のあたりでつかえる。つうと唇のすぐ横を、汗が伝った。彼女は少し首を左右に振ってから、片手について上半身を起こす。そして若干気まずげに苦笑いを浮かべて、言葉を発した。

「……えと。私、熱中症にでもなったんですか？」

「……え、う」

どうしよう。

今度は喉につかえるどころか、言葉が何も、出てこない。台詞の貯水池は空っぽだった。

「……」

「……」

畑中は、寝起きのような、まだ半開き気味の目で僕をじい見つめる。それをしゃがんだままの僕は、びっくりしたように見開いた目で、唯見返すだけ。

「……あの」

「…………」

どうすればいい。

君は気づいているのか？ 畑中。須原が君の真後ろに立っていることに。それとも気付いていないのか。わからない、聞けない。いや、それよりも僕は――僕はどうすればいい、まだ心臓がばくばく鳴っている、冷静になれない、何もできない、いや、落ち着け、別

に何の問題もない、こんな状況だからといって僕にも畑中にも問題は
何一つないはずじゃあないか、しっかりしろ八代椎奈——でも、
僕は一体どうして僕なのか？ 僕は本当に、僕なのか？ ……まず
い、錯乱させられている、だめだ、一先ず忘れるんだ、自分のこと
は吹き飛ばせ、須原が何の考えなしに用もない場所へ残るはずがな
い、考えろ。

一息に、自分へ言い聞かせる。でも。

だめだ、くそ、全然、だめすぎる！ 五感が痺れて何だか身体の
先端部分の全てがじんじんしていた。頭が、完膚なきまでに回らな
い……！

落ち着け、素数を数えろ。そして深呼吸だ。落ち着け。1、吸っ
て、3、吐いて。5、吸って、7、吐いて。11、吸って、13、
吐いて。

……うん、さすがにこれ以上やると不審である。

そんな感じで半ば放心状態の僕を若干怪訝に眺めながら、畑中は
不思議半分に首を傾けて、口を開く。

「ひょっとして、なんですけど」

「……？」

そして伏し目がちに僕から目線を外して、頃合いを見測っている
ようだ。そうしてもう一度僕を見上げた時、彼女はその顔に全く曖
昧な笑みをたたえていた。苦笑とも微笑ともつかぬ、しかしそれら
に類する、どこか儚みを見てとれる笑み。微苦笑、といったところ
の、そんな笑みを。

「執行者が来たんじゃないですか？」

「……しっこうしゃ？」

なんだ、それ。

何かを行う役回りの人間ということか？ キョトンとした僕の顔
を見る畑中は、そのままの、どういうわけか痛々しささえ感ぜられ
る表情のまま、しかし僕を狼狽させるに十分な威力を持った台詞を、
何の気なしに振り回す。

「私を始末するための人間が、ここに来たんじゃないですか？」

「……！」

自覚、している？ 心の深淵まで届くような衝撃が、ただでさえドロドロに溶けかけている僕の足元を、これでもかと思わぬぐらりと揺らした。どういうことだ、待て、考えろ。考えるんだ、八代椎奈。

「……身体に残ってるこのだるさ、これはおそらく封印術の余韻です。私はこんな使い方したことないから本当にそうなのかどうかはわからないですが」

畑中は空いた手を閉じたり開いたりしている。

「執行者っていうのは……なんだ、なんなんだ？ どうして君が、その、命を狙われるなんて物騒な話になっているんだ」

「八代君には隠しておくつもりだったんですけどね」

なんだ？ 何を隠しておくって？

「これは私の話でもあります、私の兄の話でもあります」

また、畑中の兄貴の話か。

畑中勇。それはなんだかとても忌々しい名前に思えてくる。だが、そうとばかりも言っていられない。それは僕の存在そのものを奪いかねない——そんな名前だ。扱いには、割れ物を通り越して爆発物に対するような気遣いが必要だろう。

「少し長くなるかも知れませんが、あなたには聞いてほしい。お願いです」

畑中は訴えかけていた。

「私……私、まずあなたに謝らなければなりません。貴方の事を無視したりして、一方的に意思疎通を拒んだりして。理由はどうあれ、私とあなたの関係上、あんな態度をとるべきではありませんでした。それによってあなたに危険が及ぶこともあったでしょうし、実際今、そうだったのかもしれない。だとしたら私は……絶対にしてはいけないことをしてしまいました。馬鹿みたいに子供で、狭量でした」

僕に対して、少し震える小さな声と、少し揺れる大きな目で。

「ごめんなさい」

思わずドキリとしてしまうような、どこか艶っぽい、しかし多分に切なさを含む表情で。

「お願いです。こんな私でも、許してくれますか？ ……話を聞いてくれますか？」

僕は一つ息を吸って、応答する。

「……当たり前だろ」

ここまで言われて話を聞かないなんて、そんなのは男じゃないだろう。それに、あれは僕だって悪かったんだ。謝らなければならぬのは僕のほう。でも今は、少し傲慢になっただけ。それが彼女にとって一番楽なのなら。今は被害者面をしよう、それが彼女にとって一番安心できるのなら。

と。

『ん、八代、聞こえてるかな？』

「！？」

唐突に、僕の頭の中にぼんやりと響き渡る声。この感じ、フーとおんなじだ。だがその声はフーのそれではなく、上半身だけを起こして女の子座りで居る畑中のほんの数センチ後ろで、視線を一直線に僕へと送っている少女のそれ。

『あー、あー、こちら愛乃。こちら愛乃。本日は反吐が出るほど大晴天なり、どうぞー。……なんてね？ 返事はしちゃだめだよ、そのまま穂波ちゃんと会話を続けて』

なんだこれは……どうして畑中は気づかない。表情を変えないまま、思考する。

『ん、今私の声は限定的に、君だけに届いているの。残念だけど穂波ちゃんもそんなに疲弊してちゃ、精神濃度を落とした私の存在を感じ取ることはできないと思うよ。疲労困憊って感じだね。つてまあ、やったのは私とお父さんだけだよ』

僕は、何も言わない。いや、言えなかった。僕にはもはや、冷静で客観的な判断が効かなくなっていたから。ここは須原の言葉に従

うしかない、そう思ったからだ。じわじわと、頭が熱い。夏の熱線で素焼にされているせいもあるだろうが、どちらかというとこれは知恵熱に近いオーバーヒートである。畜生、今は何をするにも黙って見ているということか？

「私の兄が七年前に亡くなったというお話は以前ちらっとしましたよね」

「お……おう」

気持ち半分挙動不審な僕だった。ここまで来て演技を通せというのも辛いものがあるがしかし、畑中も畑中で僕の様相にそこまで注意を払えるような状態ではなさそうで、なんというか、だるそうだ。僕と会話などしていて大丈夫なのか。

「実はその理由——兄が死んだ理由ですが——は、私は詳しく聴いていなかったんです。大まかには、任務中の事故だと聴かされていきました。ですが、それ以上の説明はありませんでしたし、私も、突っ込んで聴けませんでした。何をどうしようと兄が帰ってこないのはもう、分かっていましたから」

同僚に殺された。とは言えなかったのだろう。そんな事を素直に明かしたりすれば、幼い畑中に少なからず悪い影響を与えただろうから。例えば——復讐。そんなものを思い立ってたかもしれない。大いにあり得る話ではないだろうか。まあ本当にそんな理由で龍ちゃんや美鈴さんが畑中に真実を告げなかったかどうかは、実際のところは分からない。

「私は、悲しかったというより、不思議でした。たった一人の肉親を失う……なんて、私にはわからなかったんです。いえ、わがろうとしなかったと言った方が正しいかもしれませんね。どちらにせよ、実感といったものは一切湧いてきませんでした。今は、素直に辛いと感じられますけれど」

畑中の目が一瞬、哀切の潤びに揺らいだ。

「その頃の私はまだ、魔術なんてものはてんで扱えませんでした。全くの素人で、魔導師の片鱗もなかったんです。兄に何度教えを乞

うてみても、頑として私に手ほどきしてくれることはありませんでした。その兄が亡くなってから、龍や美鈴姉もやっぱり、私に魔術を教えてはくれませんでした。だけど私は兄のようになりたかったんです。尊敬していたから。……だから」

畑中は続ける。

「私は探しました。私に魔術を教えてくれる人を。でも探すと言っても、小学生一人で出来る範囲なんて限られてたんです。そもそも探し方だって分かりませんでしたから、ほとんど手探りで、兄のことを知っていた人間を当たりました」

「それで？」

「だめでしたね」

彼女は遠くを見た。

「何の情報も入って来ませんでした。ガッカリでしたよ。結局、兄に近づくこともできないのかな、って。実のところ、私はそれで気を紛らせていたんだと思います。そんな風に思った途端、私は、気づいてしまったんでしょう。私は――世界でたった一人ぼっちなんだって。もうこの世界のどこを探しても、兄には決して会えないんだ……って」

畑中はきつと、見えない涙を流していただろう。

それが畑中の崩壊の理由。

世界でたった一人ぼっち、か。

なんだかんだ、人が生きて正常でいるということは、人との繋がりがあある、ということに他ならない。人の為に生き、人の為に死ぬ。それに当然、天才でもないただの人間が本当の意味で孤独になつたりすれば、人間は自分を保てない。壊れてしまう。驚くほどに、あっさりと。何故ならそれが人が人たる所以、その存在を支える最高に強固な柱だからだ。人間は一人では生きていけない。これは物理的、物質的意味を越えて真理を突いていると僕は思う。……言葉でうまく言い表すことはできないけど。

そういう観点から眺めれば、裏の世界、というものの説明に関し

てはすごく合理的に納得できた。裏の世界とは、表と一方的に『繋がれているだけ』の世界。表の世界が混乱に陥れば、消えてなくなる世界。繋がりを一度失くしてしまえば、もう二度と元には戻れない世界。

終わる世界。

魔導師はみんな、一度は壊れている。だけどそれでも、壊れている人間同士という共通項で括りだせば、まだかろうじて繋がりを作ることができる。しかしそんな人間ばかりが集まった世界は決して壊れていない人間と完全なつながりを持つことができない。何故ならそこには、もはや共通項と呼べるものが一つも存在しないからだ。裏の世界というのは、そういう世界だ。そういう危うい世界。繋がりのない世界。

そんな世界で暮らす畑中だから、彼女は自身をそんな風に評したのでろう。

壊れている、だなんて。

だけど、僕と畑中のそれは質が違う。どちらの方が優れているとか劣っているとかそういうことを言いたいんじゃない、そもそも彼女と僕では決定的に違うのだ。

畑中は、真に愛を注いでくれる人間を亡くした。それは受動的な孤立だ。

だが僕は違う。

僕は、自分から孤立した。天才を演じるために、そうならねばならなかったのだ。自発的な、能動的な孤立。尤もながら、もともとそういう人間だったことは否定しない。しないがしかし。僕は天才でなかった以上僕である為に世界との繋がりが必要だった。それが僕にとっての勉強だったのかもしれない。少なくとも僕は、そういう手段で世界と繋がっていた。そしてそれを断ち切った。だから僕は、壊れた。壊れる以外の選択肢を、ねじ切った。絶対的な孤独の底へ、等身大で落ちていく。それが僕の選んだ「生き方」だったんだ。

だから畑中。君は違ったじゃないか。そうだろう？

繋がりを求める限り、人は絶対に一人ぼっちになったりしない。少なくとも畑中みたいな美少女を放っておくはずがない。神は平等に不平等で、そして畑中には甘いはずで。だから君は、そう錯覚しただけなんだ。

受け皿の問題じゃない。

こちらから差し出すものがあるかないかが問題なんだ。

僕はそれを断ち切り、そして畑中はそれを失くさなかった。

ここに決定的な違いが存在する。

君はそれに気づくこともないのだろうけれど、僕は知っている。世界中で他の誰が気づいていないとしても、僕は気づいている。君は壊れてなんかいない。君は一人じゃない。君を一人ぼっちになんかしたりしない。いや、それに、僕以外にもそれに気づいている人間はいるだろう。だからきつと、そんな思い込みを無くすまであきらめない。

だから僕は君の――

……あれ……。

「……」

……何を考えてるんだろう、僕は。

「そんな時でした」

ハッとする。ハッとして、顔が熱くなった。

「……？ どうしました？」

「え、え、あ。いや、なんでもない。続けて」

「そうですか？」

『そんな時、穂波ちゃんは一人の女の子に出会ったの』
「！」

須原の声が、二人の声の間に割って入る。

「私は、一人の女の子に出会ったんです」

僕は顔面の筋肉が変に動かないようにするのに苦労した。まさか、畑中の喋る内容と一致しているぞ？　どういうわけだ。

『私は彼女にとりついたメルシングだよ。そんなのは知ってるの、全部ね』

「……」

なるほどね。

「それでそれは誰なんだ？」

『「須原愛乃」』

二人の声が、ぴったり重なって僕の耳朵を打った。

「……へえ」

正直、予想もついていたが、多少の動揺は仕方がないものかな。

「八代君は気づいていなかったかもしれないけれど……彼女はメルシングでした」

「……それは驚きだな」

「つて、それも思い出したんですけどね。気付いたのは猫耳のメルシングを捕らえた時。彼女は封印術と結界術を合わせて使って、私の記憶にフィルタをかけていたんです」

「ああ……そうだったのか」

ごめん、それ知ってる。

「とにかく、須原は私に近づいてきて、私を誘いました。魔法を学びたくはないか？」と」

畑中に魔術を教えたのは、須原だったということか。なんとまあ。しかしそれは一体どういうことだ？

『メルシングが術を使えないのは知識がないからじゃないんだ。もっと大事な何か欠けているから。だから知識を教えるだけなら、私にも出来るの。……可哀そうで、見てられなくなっさ。これからはもう天涯孤独だと勘違いした娘なんて』

それだけなのだろうか？

須原愛乃と畑中勇。同じ高校で、同じ二年生。そして男と女。となればそこに芽生えるものが必ずしも友情だけとは限らない。なあ須原。君が何故父親ではなく、畑中勇についたのか、今の僕にはなんとなく解る気がするな。

『ま、八代にはお見通しかな。アハハ』

「どうだろうね」

「はい？」

「え、あ。いや、なんでもない。続けて」

「……えと。それで。須原から、ことの真相を聞きました」

「……！」

なんだと？ 待て、それだとかおかしなことになるぞ……いろいろおかしなことに。畑中が真相を知っていたのなら、全てが崩れる。前提条件が狂った問題は解くことができない。

しかし次に、畑中はどう言った。

「兄は、メルシングを殺そうとしなかった。そのせいで、封じ屋にはいられなくなった、って。執行者はそういう存在だって、聞かされました」

「……………え？」

時と心臓の両方が止まったかと思った。

畑中は何て言った？ それは、まるっきり事実とは違うことじゃあないのか？ つまり畑中勇は、メルシングを殺せないⅡ役立たずとみなされ、そして執行人とやらに、殺された……こういうことになるのか。

いや、待て。待てよ。

頭が急激に冴えてくる。脳みその細胞一つ一つが白銀に煌めいて、フル回転し始める。

「だけど私も、もう須原を殺すことなんてできませんでした。メルシングだって生きていると思ってしまったらもう、彼女を亡き者にすることなんて絶対にできませんでした。だから、須原に忘れさせてもらっていたんです。そうすれば、他のメルシングを殺すことができるんじゃないかって……でも、それもやはり、出来なかった。もっと心の奥底で、メルシングと和解できると、そんな考えがあったのかもしれない。その腕輪のメルシングも、結局殺すことはできませんでしたから」

畑中はじゃあ、メルシングを殺さないということ、その行為自体が死につながると——そう須原から聞かされていたというのか？
しかしおそらくそう吹き込むように命じたのはジョーカーに違いない。だとすると畑中にそう思い込ませたのはジョーカーということになる。

急激に、輪郭がはっきりしてくる。全てが、見えてくる。俯瞰出来て、像がくっきりとしてくる。

まさか——まさか。

そういうことなのか？

まさかジョーカーは——畑中勇は、奴の狙いは。

「それで……この任務を任されたんです。八代君を守りきることができれば、あるいはジョーカーを捕まえることができれば。私が有用である軌跡を残すことができれば、執行者の裁きを受けることはない。でもそれもうまくはいきませんでした。貴方にここまで迷惑をかけてしまったし、それにジョーカーを捕まえることもできませんでした……」

じゃあ、それじゃあ、あの言葉の意味は——真実は。

『ねえ、八代。私、ジョーカーから君に対していくつか伝言を預かっているの。それじゃあ時間もないし、言うね』

「！」

待て、待てくれ。

まだ、まだだめだ。心の準備が全くできていないぞ。僕の中の「僕」は、七年前から一步も進んでいない……準備運動が必要なんだ！

「……ねえ、八代君。その腕輪ね」

「え？」

『こんにちは、無才尚未だ。いや、今はジョーカーと名乗った方が適切だがね』

「っ！」

く、二人とも勝手にぺちゃくちゃ喋りやがって。

「それ、私の兄の形見なんです」

え。

僕は、一瞬毒気を抜かれたように目を丸くする。

「……なんだって？」

「本当は……ずっと分かってました。本当にこれだけはずっと、覚えていました。その腕輪が兄の物だったってことは。けどなんだか恥ずかしくて。それを八代君がつけているのが」

「……そう、だったのか」

じゃあ、この腕輪にも意味はあったんじゃないか。彼女がこの腕輪に固執していた理由がやっとわかった。そういうことだったのか。なんだ、意味はあったんじゃないか。

『あんな風に私に声をかけたのは君が初めてだったよ。なんともスリリングだった。残念なことに当時の私はそれを利用する程度の能しかなかったが』

須原は僕が口を挟めないのをいいことに、滔々と続けた。一方で畑中にアッパーを食らい、もう一方で須原からフックを食らう。既に僕はボコボコである。

「ふふ……似合ってて、なんだか似てるんです」

「君の兄にか？」

それは——今となってはそうだろうと思う、としか言いようがない話だが。

『だから君には悪いことをした……私を『殺させてしまった』のだからな』

須原の発する一言一言が鋭い氷の刃と化し、どこか胸の奥の、焼きたてのグラタンの表面みたいにぐずってる僕の「僕」の部分を刺激して、ずきずきと煮えたぎるような痛みを誘発する。

「ええ。顔も声も全然似てないんですけどね……でも、どこか同じものを感じて」

畑中は僕を見つめながら、懐かしむような顔をした。

「そりゃ光栄だね……」

『だから君には、もう私の皮を被っているのはやめてほしいのだ。』

だからこれは命令でも何でもない、お願いだ、嘆願だ、懇願だ』

光が、目の裏をほとばしる。瞬きの間のほんのひと時の間に、数千万もの赤と緑の光線が瞼の裏を飛び交って僕に太陽の眩しさを感じさせた。

ジョーカー、それはどういう意味なんだ？

「私は……私はね、八代君」

『君は君を生きた。私を生きた。それは生きていないのと同じことだ。死んだ人間をも下回って君の存在をなく奪っている。いいか、勘違いをするな。……君は生きていいんだ』

頭を、脳みそごと強く揺さぶられる。ぐわんぐわんと、僕の人生が回転した。

「多分、単純に、その腕輪を守りたいとか、死にたくないとか、そういう想いだけでこの仕事をやってきたんじゃないと思うんです」

僕は、煙中に答えられない。

『君は、君の為に笑ってくれる人間の為に生きて。そして君の為に生きてくれる人間の為に、笑え。それだけが君の成すべきことだ。』

天才とは、そういう人間のことだ。君は天才になれ。そして君になれるのは君しかない。天才の君に、君がなれ』

心は、いろんな想いで溢れている。溢れ返っている。そんな熱い想いの洪水で、とっくの昔に床上浸水してしまっていた。

須原——いや、ジョーカー。あなたは……あなたって人は！

「私は多分……次の機会に執行人に殺されるでしょうね」

違う、いや、何を言っている、煙中。

間違っているぞ、何もかも違う！

『もう一度だけ言おう。君は、生きていいんだ。生涯、君の思う道化を思うままに演じろ、それが君に与えられた天命だ。君はそういう人間になって、そして生きて。下らないプライドは捨ててしまえ。プライドポテトにでもして食べてしまえばいい。以上だ。グッドラック、ジョーカー君』

須原はそうやって台詞を締めくくった。

ジョーカー。

ジョーカー、ああ。

プライドポテトには思わず少し、笑ってしまった。

道化。冗句を口にする人間、JOKER。それが僕。

でも、僕は僕、僕以外の何物でもない。けどそんなの当たり前。そしてそんな当たり前が、ほんの数十分前の僕にはなかったただけの話。新しい、当たり前だ。当たり前が、新しい。

僕は、僕は。

僕は生きていても、

いいのか？

「だから八代君、私は今ここで、あなたに言わなければなりませんね」

何を？ 何を言わなければならないんだ、畑中。

『それじゃあ八代。そろそろ時間だから』

頭がぐるぐる回る、目もまわる、耳もまわるし、口もまわる。命が回り、人生が回り、人間が回り、僕は世界を回る。

須原は、一步、畑中から離れて後ろに退いた。

「私は、あなたのことが」

そして、須原のその綺麗な手に握られていたのは――

チツ……やっぱりそういうことかよ！

「畑中！」

僕は。

僕は、変な体勢のまま、

思い切り畑中を抱きしめた。

この腕いっぱい彼女を感じた。彼女の温かみを、彼女の重みを、彼女の香を、彼女の鼓動を、彼女の存在全てを僕の存在全てで感じ取った。胸板に彼女の頭部が当たっているのを感じる。彼女の小さな息遣いが、聞こえる。

ぎゅ、と抱きしめて。

「……え、えっ？ え、や、八代君？」

ああ、恥ずかしそうにしている君もやっぱり可愛い。今ならナチュラルに。言わせられる台詞じゃなく、口から流れ出るだろう。そんな台詞が。でもそんなものを口にしていて暇はなかった。

僕はそのまま、彼女の身体を抱きしめたまま、ぐるりと。

二人の位置を入れ替える。

「ごめんな畑中」

「ややや、八代君？ え？ え？」

「ごめん……」

もう一度、その存在が砂のように崩れ落ちないように、風のように吹き去っていかないように、水のように流れ落ちていかないように、ぎゅっと、さっきよりもっと力を込めて、抱きしめる。

君が、愛おしい。だから。

「ごめん……」

すべてに。ごめん。

僕の為に笑ってくれて、ごめん。

僕の為に泣いてくれて、ごめん。

僕の為に闘ってくれて、ごめん。

僕の為に怒ってくれて、ごめん。

すべてに、ありがとう。

僕を守ってくれて、ありがとう。

一緒に居てくれて、ありがとう。

話を聞いてくれて、ありがとう。

僕を愛してくれて、ありがとう。

だけど。

「一番はやっぱり、いきなりこんなこととしてごめん——だよな」
トンネルは、途中工事で終わったようだった。

まあ、そりゃあそうだろう。

そしてああ、やっぱり痛いや。

「え、あの……八代君？ 苦しいですよ。放して……下さい」
熱いし、痛い。でも、彼女の代わりに僕が傷つくのなら、我慢で

きる。

チクシヨウ、最後までジョーカーの――畑中勇の計算ずくだったわけだ。わかっていたこととはいえ、やっぱり少し悔しいな。

「……え？」

畑中は、ようやくソレに気づいたのか、驚いたように声を上げた。

「これって、八代君……え、どういう、こと？」

僕の背中、正確には脇腹付近に開いた穴から、沸騰したみたいに熱い液体がどくどくと流れていく。その色は、龍ちゃんが見せてくれたマナのインクよりもずっと赤い、本物の紅だった。そしてやけどしそうなくらいに熱い。

ああ、痛いな。少し甘く見ていた。

やっぱり痛いものは痛い。気が飛びそうだった。

「悪いな……須原」

だけど僕は乱れてきた呼吸を整えることもなく、僕の脇腹に刺さったナイフを握ったままの須原に言う。

これだけは言う。

絶対に言う。

これは、僕の意味で言わなければならないことだ。

「君に畑中は、殺させない……………ッ！」

41. またね

もう道化は始まっている。

この瞬間から、最後の道化はもう、開始された。

「八代君、これ、血が！ な、なんで……どうしてこんな……！？」

急転直下、彼女の声は数秒前とは正反対の色で、それでいて同様に平静を失っていた。

彼女の視界は僕が塞いでしまっているからまだ須原の存在には気づいていないようで、状況がよく飲み込めていないらしい。彼女の手だけが、僕の身体から流れ出た生命の源のぬめった感触を得ているのだろう。じんわりと、鉄の香がする。いや、直接的に言えば、僕の血の匂いが漂っていた。

これでいい。これでいいんだ。

何故なら、『畑中穂波を護る』ことが、ジョーカーからの指令だから。

そして畑中の代わりに受けたこの痛みこそが、「僕」の人生の再始点になるのだから。

でも。

「……や、やっぱり、痛いな……これ」

結構、割りと、うん。我慢できないくらい痛い。そしてもう一つごめん、畑中。もうそろそろ、このままの体勢でいるのもつらくなってきた。僕はそのまま、畑中を抱く腕の力を緩め、身体の重さを重力に任せて、左の方へと崩れ落ちるように倒れこむ。

「八代君！」

衝撃で、小さなナイフが刺さったままの右脇腹がもう一つずきりと痛んだ。畑中の顔が倒れこんだ僕を覗き込む。困惑して、狼狽しきった顔。ごめん。でも『畑中穂波を護る』というジョーカーからの指令。これは、今ここで初めて果たされたと言っている。いや、むしろ、この状況のこの場面を想定した指示だったと言えるだろう。

この命令の真実は、ここに存在したのである。

「私を、庇って……？」

僕は畑中を守ると言ったのは言ったが、実際に彼女を守ったのは僕じゃなかった。それは龍ちゃん然り、美鈴さん然り、ジョーカー然りだ。僕は所詮便利なカードであり、しかしそれは戦略上の、たった一つの歯車に過ぎなかったわけで、だから僕は今こそ、ババらしく行動しなければならなかった。

「八代君、八代君っ！」

なんにでもなれる特別なカードなら、僕が彼女のジャックとなつて、彼女を守る剣と化せばいい。そんな使い方だって、アリだ。なんだってアリなんだから。それが僕という存在なんだから。美鈴さんが言っていたのも多分、そういうことなんだ。

そうだ、これでいいんだ。僕は僕以外の人間の為に、死の危険を冒している。そう。死ぬということは、生きるということ。逆に言えば、絶対に死ぬことのない生物は生きているとは言い難い。

僕は今——生きている。

この痛みが何よりの証拠。

「嫌です、死んじや嫌あ！」

畑中は何かを堪えるようにして、今にも水気を含みそうな声と共にただ首を横に振る。その柔らかくて白くて温かい手は、いつの間にか僕の手を握りしめていた。

「……馬鹿……まだ生きてるよ、このくらいで……死んでたまるか」

とは言うものの、ピントが合わず、視界は暈かしがかかったようにぼんやりと霞んでいる。朦朧とする頭で、とにかく考えた。考えてない意識の糸がプツリと切れて無くなってしまいうだから。そんなところで思考を右往左往させていると、上から息を呑む音が聞こえた。

どうやら、彼女の方もようやく、少し離れて傍らに立つメルシングの存在を知覚したようだ。

「須原……！」

多分予期していなかっただろう邂逅に、畑中の声が甲高く上がる。

「どうして……なんで、こんな、ところに」

「こんなにちは、穂波ちゃん。どうして私がこんなところにいるか、見て分らないかな？」

対する須原は、実に軽快に、しかし落ち着きはらった大人びた声で、彼女に返した。

「あなたが、八代君を？」

「うーん、八代を狙ったわけじゃなかったんだけどね。穂波ちゃんを庇ったりするから」

あまりに緊迫した空気が場を押しつぶそうとしていた。畑中に言葉はない。思考しているのか、それともただ単に絶句しているのか。おそらくその両方だろうが、彼女の顔からはほとんど何の感情も読み取れない。しかし、それは読み取れないだけであって、その下に一体どんな種類の溶岩が渦巻いているのか、それは簡単に予想が出来る。そしてそれがもはや噴火の寸前の状態にあるということも。

「……まさか、あなたが、執行者だったのですか？」

いや、畑中、それは違う。

「違うよ穂波ちゃん」

須原は――やはり須原だ。それ以外の何者でもない。

「私はただの傍観者だった。見ていただけだったんだよ。何故ならそうしていれば、あなたは消える予定だったから」

「……え？」

彼女のことを想うのなら、ここで止めるわけにはいかない。だが、心を痛めないという風にいくのも無理があった。

だからごめん、畑中。

「わからないかなあ？ 執行者は君の機関の人たちが退けちゃったんだよ」

「龍や……美鈴姉が」

「そういうわけなんでき、穂波ちゃん。君は私にはもう用済み。ていうか、逆にこのまま近くに居たら私が危ないの。執行者にやられ

たら私だって困るからね。だから君はここで消しておこうかと思つて、私が直接」

なるほどね、そういう筋書きか。

「でも失敗しちゃったみたいだね。……このまま八代を放っておくとあつという間に毒が全身に回っちゃうよ?」

あまり耳触りのよくない単語が聞こえた気がしたが。

「生成術で錬成した毒ですか……このナイフは第三現の魔塊……」
「そ」

短い返答は、またも明るい。

何かが、吹っ切れたかのように。

「全部君の魔術だよ。ま、元はと言えば私が穂波ちゃんに教えたわけなんだけど」

太陽が、馬鹿みたいに眩しい。世界は、クラクラするくらいに、光と影のコントラストがくつきりとしている。

「須原……」

「どうしたの? 早くしないと死んじゃうよ、彼。まあその前に君が死ぬ方が先かな? 穂波ちゃん」

そんな風な声が耳に降ってくるが、しかし、もう眼を開けていられない。太陽が眩しすぎるんだ。と。視界が、ふわりと浮きあがる感覚。

僕の身体が、あまりに唐突に吹っ飛んだ。

「八代君っ!」

「ほら、どうせ八代にも私のこと見られちゃったんだ。君たちは二人ともここで死んでもらうけど、それでいいかな?」

落下の際にまた脇腹を強く打ちつけて、身体の中の鋭利な異物が、さらに深く内部の柔らかい肉へと食い込む。キリキリと、僕の中をかきまわす。

「ぐああっ!」

痛え……!

「だめ、やめて、須原! 本当に死んじゃいます!」

「だからさあ、本当に死んじゃっていいんだって」

須原は楽しそうだった。

そうだろうな。僕だって、彼女の立場にいれば、そうだろう。でも痛いんだよな、これ。

「ほら、もう一回」

また、僕の視界で青い弾が炸裂する。

もう一度吹っ飛ぶ、僕。

「須原！」

飛び交うのは畑中の声。

そして、着地、転がり、痛い。

「かはっ……！」

血が出た。口から。大丈夫なのかよ、これ。

そんな風に独白するのも、もはや限界を迎えていた。意識はとつくに、その一線を越えているのだ。こうして保っていられるのが不思議なくらい、ただの気力と空元気で、僕は今畑中の顔を見上げている。

「……そんな顔……するなよ、畑中」

「だって、だって八代君！ 八代君っ！」

悲壮感たっぷり名前を連呼するのもやめてほしい、割と恥ずかしいからさ。

「そんな風に八代にばかりかまってる暇なんかあるのかなあっ？」

次、飛んできた青い閃光は畑中の背を打つ。

「うっ……！」

彼女の軽い身体が僕の上を飛んで行き、そして前のめりに倒れる。

「す、須原……どうし」

「どうして？ 決まってるじゃない。私がメルシングだから」

もう一発、青い弾丸が飛んできて立ち上がった畑中に追い打ちをかけた。

「っあっ」

僕の目で追える範囲を遠く離れて、畑中は成す術もなくぶっ飛ん

でいく。

「ほらほら、こんなものなのかな？ 畑中勇の妹は」

畑中勇の妹。なるほど確かに、そういう肩書もあっただろう。天才を兄に持てばそんな風に言われるのは不自然ではない。

「兄を……馬鹿にしないでください」

「違うよ、君を馬鹿にしているの」

またもや、僕の真上を青い稲妻が、今度は二本、尾を引いて飛んでいった。

「っ」

しかし今度は、カン、カン、と、そんな金属音が響いて終わる。畑中は避けたのだろう。

「須原——！」

頭のすぐ後ろを、ドスの利いた掛け声と同時に駆けていく足音。

「セツト！」

パン、という乾いた音が僕に告げるのは、畑中が臨戦体制に入っただという事実。僕はちよっただけ頭を傾けて、視界に映る画を物言わぬ入道雲から、二人の少女へと切り替えた。

畑中はもう、弱弱しい少女の顔をしていない。

それは精悍な、戦士の顔つきだ。

小柄な畑中は走りながら赤い弾丸を放ち、須原は最小限の動きで勢いよく頭部に向かったそれを横へ逸らせた。ボブカットが綺麗に揺れる。そしてその一瞬、須原が魔弾に気を取られているうちに、畑中は須原の懷に飛び込んでいた。躊躇なく突きだされた畑中の右手を、須原は反射的に左手で掴み、逆に須原が突き出した右手を畑中が左手で掴み返す。

「く……！」

二人が、それぞれの右手を左手で封じ、見つめ合った。

「君は甘いよ穂波ちゃん」

しかし次の瞬間須原は、畑中に掴まれていた右手をいとも簡単に解き、逆に畑中の左手を拘束する。

「ほら、隙だらけだ。甘過ぎる」

畑中は、両手を封じられた形になった。

「須原、やめてください……こんなこと、何の意味も……」

上半身をほとんど動かさない畑中は、足をもぞもぞと動かしている。

「意味はあるよ」

両手を左右に開かせてから、ぐいと、須原は畑中に顔を近づけた。

「そろそろ別の宿主を探そうと思ってたところだからさ。君たちが消えるのには暴力的なまでに意味がある。どうせ君ら人間は私たちにとっては都合のいいビジネスホテルくらいでしかないんだよ？」

「……リミテリアクス」

「！」

畑中の呪文をきっかけに、二人の足元に描かれた単純な図形――

一筆書きの六芒星が、赤い光を放ちだす。

「あちゃ、しまったね」

須原が少し焦燥した声を上げた。

「甘いのはどっちでしょう？」

「さすがは穂波ちゃん。普通脚で魔法陣なんて描けないよ？ アツハハハ」

そのまま、両腕の拘束を解いて須原は横っ跳びに跳躍する。本当に、ものすごい距離を跳ぶ。それはそれだけ畑中の魔術の威力を危惧しているということだろう。そして予想通り、時間にして1秒も経たないうちに、須原が数瞬前立っていた場所に、巨大な火柱が爆発的な勢いで上がった。天まで立ち昇るような、人一人くらいなら簡単に呑みこんでしまうだろう焰は、本物の炎かと紛うくらいの熱気を放散している。熱い。

畑中の本気が、垣間見える。

「プラスイテクト」

間髪入れず畑中は、低い声でまた別の呪文を唱えた。彼女の左手から光の糸が五本伸びて、バラバラに、それでいて統制のとれた動

きで即時に須原を追う。美鈴さんが使ったものと同じ魔術だろう。

「忘れたの？ 穂波ちゃんが使えぬ魔術は私も使えぬんだよ」

須原はそのまま地に足をつけず、屋上に突き出ているドアを一蹴りして再び弾丸のように空中に飛び出した。そしてその身に迫っていた白い光の糸を、同じように左手から伸ばした蒼く輝く糸で絡め捕る。畑中の正面に着地して須原は、絡みあつて繋がった糸ををグイと引っ張った。

「っ！」

畑中の脚が地面から離れ、左手の糸によって須原の元へと牽引されていく。しかしその華奢な体軀が須原の元へ到達する前に、輝き纏れる糸は畑中の手元でぷつりと切られた。畑中は着地と同時に、須原へ向かつて惰性でそのまま走りだす。

「セルチヴオーチェ！」

「ボルデロゼヴ」

二人が言うのが同時だったと思う。

畑中の左手が大きく振り回されると、その手から流れ星の如く眩い輝きを放つ鋭利な閃光弾が、数十発、ミサイルを思わせる軌道で須原へと迫った。しかしその銘々は、須原に触れるほんの数センチ手前で青色の壁のようになものに阻まれ、破碎音を立てて消えていく。

「チッ！」

畑中は須原の一メートル手前で停止、右手を大きく振りかぶり、振り抜いた。ダーツが風を切り、須原へ向かう。しかしそれも須原を囲む障壁に当たるとバラバラに分解して、砕け散った。

「マナを無駄遣いするのはやめた方がいいよ？」

「五月蠅いです！ ボルデルヴェスト・ディスペル！」

その声と共に畑中の左手が須原を守る壁に触れると、触れた場所からその障壁は青い粉になって煌めきながら崩れ落ちていく。

「それじゃだめだね」

須原は砂のように崩れゆく壁を前に一歩後ずさると、しゃがみ込

み、身体の周囲のタイルに半円を描くようにして右手を動かした。すると何枚もの緑色のパネルが床から剥がれて、ふわふわと浮きあがる。

「行け」

今度はその浮き上がったタイルが、回転しながら次々と畑中へと襲いかかった。

「……くっ！」

畑中は右手を振り回して、襲い来るそれらをすべて赤い閃光弾で撃ち落とす。薄いそれらは、全てが簡単に割れて、砕け散った。

その間に。

「畑中！」

僕は叫んだ。が。

「ほら、後がガラ空き」

須原は、畑中の後ろに居た。

だめだ、間に合わない。

「なっ!？」

畑中が振り返るよりも速く、須原の右手が畑中の首筋で青い爆発を起こす。

「あうっ」

畑中は頭から、前のめりに勢いよく倒れこんだ。

「天才の名を欲しいままにした君も、自分の影には勝てないかな？」

無様だね、穂波ちゃん。アハハハッ」

須原は高笑いした。

それはだけど、勝ち誇った笑いではなく、見下した笑いでもない。後がない笑いでもなく、先が見えていない笑いでもない。その笑い
は。

須原――。

いや、それよりも、そろそろ本当に意識が持たないな、まずい。

「う、うううう」

「立ちなさい、穂波ちゃん」

もう須原は、笑ってなんかいない。厳しい顔つきのまま、足元で立ち上がろうとする畑中に、彼女は言う。

「こんなもののなの？」

「うう、うううう」

手を突き、頭を持ち上げ、畑中は唸る。

「畑中穂波！」

須原は鋭く、彼女の名を口にした。

「うう、須原……ッ！」

淡い栗色の髪を振り乱して、畑中は四つん這いのまま振り返る。

そして右手から、赤い弾を須原へと撃ち放つ。だがそれは須原の青い弾に、簡単に相殺される。

「……だめだね。全然だめ。教えてあげたこと、何一つ守れていない」

呆れたように溜息をつく須原。

そもそも、須原がこんなことをする意味は何だ。僕は分かっている、知っている。彼女は龍ちゃんに約束したはずだ。僕を傷つけないと。だがそんな約束は既に反故にされている。

だったら。

「ちゃんと立ちなさい。穂波ちゃん。まずは自分の足でしっかりと立つの。そう教えたはず」

だったら僕も、立たなければならぬだろう。

「それが第一条件なんだよ穂波ちゃん」

畑中はゆっくり、須原を振り返りながら、立ちあがる。膝に手をついて、肩で息をしながら、彼女は目前に立ちはだかるかつての友を睨みつける。

「はあ……はあ……、須原……」

「色っぽい息切れだね、だけどそんなのは戦場じゃ必要ない」

須原が左手を振るうと、畑中の身体がゆっくりと宙に浮きあがる。彼女は手足をばたつかせたが、何の成果も成さない。

「だから君は甘いの」

そしてその手が振り抜かれると同時に、彼女の体軀はまるでゴミ屑のように飛んで行き、ドアに思い切り打ちつけられた。

「か、は……っ！」

「甘くて、甘過ぎて……胸が悪くなる。私、コーヒーにはスプーン一杯しか砂糖は入れないの」

須原はその左腕を再び前に持って行き、ぐっと握りしめる。

「あ、うああッ」

畑中の身体はドアに礫にされたまま、落ちることがない。それどころか、彼女の身体は見えない力によって締め上げられているように見える。畑中の顔が激痛を感じたように歪んだ。

「い、う、ああ……」

「結局君は、私に勝てないんじゃないんだよ」

須原は言う。

「メルシングを殺せないだけ。ただそれだけ。迷っている限り、本当の強さは生まれない」

須原は言う。

「だから君は甘い、穂波ちゃん。それは君の兄が持ち合わせていた自信と慈愛の心とは違う」

須原は言う。

「ただの甘さ。本当にただのそれだけ」

須原は、言いきった。

「うう、う、う……」

ギチギチと、そんな音が聞こえてきそうなくらい、畑中の身体のラインがはっきり分かるくらい、緊縛痕が服の上から見えてもおかしくないくらい、須原は畑中を締め上げていた。

「ほら……それで、こういう時はどうするんだっけ？」

「こうするんだよ、須原！」

僕の声だった。

なかなか格好良く割り込めたんじゃないかな？
なんてな。

「!」

須原が、その顔に驚きを従えてこちらを振り向き、時を同じくして、畑中の身体が床へと落下する。僕はそれを見届けてから、右手に溜めていたマナを、須原に向けて射出した。

須原の口が、ニツと持ちあがったように見えた。そして眉の端が、反比例するように吊り下がったように見えた。

「……やっぱ駄目か」

それは、須原の台詞。

勿論、そんな攻撃が通るはずもない。小さな魔弾は右手で軽く薙ぎ払われて、消滅する。

「け、けほっ、けほ……八代君……」

畑中は四つん這いで咳きこんでから、僕を見る。

ズキン。

その時右脇腹に、大電流に当てられたかのような酷く鋭い、頭が冴え渡るような痛みが走った。

「うっ!」

痛え……!」

精神力で痛みに耐えていた分、魔弾を撃ったりしてそれを削ってしまったからか。もう僕にこの痛みは耐えられない。

「そんなに死にたいなら……死に急ぐのなら、君から先に殺してあげるよ、八代」

僕も同じく、口だけで笑う。汗を滴らせている点で須原とは異なるが。だけど本当に、笑うしかない。噴き出さなかっただけ、まだマシだ。だって、こんな陳家なシナリオがあるか? 今時ジャンプにも載ってないだろうな、ここまでベタで、ベタベタで、王道な筋書きは。

本当に、道化だ。

「だ、だめ………だめです!」

「何が? 弱い娘は黙ってなよ。それじゃ、悪いけど」

須原はもう畑中を振り向くこともせずと言う。

そして次の瞬間。

彼女は僕の鼻先三寸に居た。

目と目が、至近距離で見つめ合う。

「消えて」

鼻息がかかりそうな距離で、須原は凍りつくくらい冷たい、何の感情も籠っていない声で。

僕の死を、宣告した。

ドクン。

世界が、スローモーションになる。

須原の右手は僕の胸倉を掴み。

須原の左手はコマ送りで後ろへと振り上げられる。

僕の藍鉄と、須原の漆黒が。

見つめ合い、絡み合い。

世界は、止まる。

雲も蝉も、夏の日差しも、全てが止まり、しんと静まりかえる。

僕の藍鉄と、須原の漆黒が。

見つめ合い、絡み合い。

ああ、やはり君も。

須原、君も。

ふりあげられた左手が、青白い光を放ちながら、僕の首筋へと迫る。

これでよかったのか？

……。

よかったんだろうな。

だって君は。

今の僕なら、分かる。

今の「僕」なら分かる。

この結末を望んだ、君の心が、分かる。

刹那。

飛び散った。

橙と、銀色の飛沫が。

僕の視界にもそれが清流の雫のように飛び散って、風をキラキラと、美しい琥珀色に染める。

「あ……………」

その声は誰のものだっただろう。わからない。少なくとも僕のはなかったけれど、しかしその声は、誰のものだっただろう。

須原の身体は、上半身と下半身との間、腹部に。

ぽっかりと大きな穴があいていた。

そしてそこから、輝く飛沫――燈色の星屑ほしくずが、太陽光を受けて金色に煌めいて、キラキラ輝く絵具で描いたみたいに、水分をたっぷり含んですうと伸びる線を空中に何本も曳いていた。

「……………アハハ……………やられちゃったか」

須原はふと、笑った。何もかも、吹っ切れた、最高の微笑みで。

世界中のどんな美人を連れてきても敵わないような、極上の笑みで。

「……………す、須原……………私……………」

畑中の左手が、須原の身体にあいた空洞の向こうに見えた。

「なんだ……………やれば……………できるんじゃない……………穂波ちゃん」

彼女は、その微笑みのまま、畑中を振り返った。

「なんて……………顔……………してるのさ……………」

畑中は、声が詰まって出てこない様子だ。

「……………わ、私……………」

おびえたような顔に、恐れるような声。

自分が絶対に冒してはいけない罪を冒しているかのような、そんな調子。

「これで……………八代も助かる……………生成術の毒は……………術者が死ぬと効力を失うからね……………」

「ええ、……………ですが」

畑中の声は、十分すぎるほど湿っていた。

「君は、君の強い意志に……忠実だった」

もう一度須原は、笑って。

「アハハ」

笑って、言った。

「君は……立ったんだ……！ 自分の意思で、自分の足で……立ったんだよ、たった今、初めて」

「須原……！」

いつの間にか。

彼女の身体に開いていた大穴は、広がって、須原の身体はそこを起点に、火のついた紙がメラメラと燃えるように、どんどん燈色の輝きを放つ細かな星屑へと変わっていった。鮮やかな色だった。薔薇よりも淡く滑らかで、しかし桜よりは華麗で可憐な、オレンジ色の光の粒子。須原の身体は、そんな風にどんどん細くなって、さらさらと崩れていく。

「こんな、こんな……私、私は……こんなつもりじゃ……」

畑中は、やはり、錯乱していた。だけど、これがあるべき結末。

「泣くな……君は、さ……これで……一歩、兄に近づけたんだから……」

須原は、どんどんその存在を失くしていった。あっという間に、瞬きする間もなく。もう、上半身しか残っていない。それすらも、今こうして独白している間にどんどん崩れ落ちて、光の砂になって消えていく。見れば、僕の脇腹からオレンジ色の流砂が流れ出ている。痛みも一緒に流れ出ていくようだ。

「須原」

僕は言う。

「いいんだよな、これで」

須原にしか聞こえない声で、小さく呟く。

「……後は、任せた、なんてね……一回言って……みたかったんだ、これ」

須原もまた、僕にしか聞こえない声で言った。

「そっか。じゃあ任された」

その時。

「みんな遅れてごめんな———っ！ 生っきてっるか———
———っい！」

四十万の声が、マイクに乗って飛んできた。身体全部に共鳴して響く声。

今年は、生きてるかいか。

ああ、四十万。生きてるよ。

「アハハ……いいね、……生きてるかいか」

須原もきつと。今、生きている。

「須原……」

畑中、君はさっきからその名前しか口にしていないんじゃないか？

「ごめんなさい、私を、許して」

「……君はこれからも……こうして生きていくんだからさ……胸を張りなさいな」

「……」

僕は須原を見る。見る。見る。

彼女の髪を、瞳の色を、その顔の造形を、目に焼き付ける。すべてが漆黒に染まった彼女の姿を、橙色のボールの中で幻視する。どこか流麗で儚げだったその立ち振る舞いを、思い出す。

実際はもう、首から下は、星屑になって地上に降り注いでしまっただが。

「……お疲れ様、須原」

僕は短く、別れを告げた。

須原愛乃という存在を二度生きた、須原を労って。
そして笑う。

「……うん、バイバイ。八代、穂波ちゃん」

須原もまた、笑った。

静かな笑みだった。

「またね」

須原は、最後までその笑みを絶やさなかった。

「さよなら……須原」

涙声に畑中が言っ

て、どこまでも果てしなく美しく、そして優しく、須原愛乃は消えていった。

キィ————ン

42. 燈屑の街

気付いたら僕は橙色と銀色の草原に立っている。なんだか懐かしい感じすらした。橙色の風に吹かれて、銀色の草が揺れる。僕もその風に頬を撫でられて、髪を揺らす。

そして。

「よお」

一歩先に、見慣れた黒髪を見つけて僕は、声をかけた。

「こんにちは、八代」

こんにちは、じゃねえだろ。黒髪黒眼の少女は、僕を振り返って慎重しく笑った。

「……結局、なんなんだ？ この世界は」
辺りを見回す。

ただ一面の、銀色の世界。橙色の空。

「一言で言っちゃうと、天国だね」

一言で言いすぎだろ。

「全然分かんないぞ」

「いいんだよ、わかんなくて。わかんないように言ってるんだからさ」

「……そっか」

「でも、君が初めてだ、生身のままこんな所に来たのは」

「だろうね」

「最初、勇から計画を聞かされた時、いくらなんでもそんな人間がいるものかって、私は思わず反論してしまったよ」

「そりゃどうも」

「だけど実際、探してみたら居たんだから驚きだよ。しかもこんなに近くにね」

それだけ僕は——生きていなかったということなんだろうな。
今なら分かる。いや、ずっと自覚はしていたんだ。ただ、それを

認めて自分が自分でないということを現実にしてしまうのが怖かっただけ。

しかし、勇、か。ずいぶん親しげに呼ぶんだな。

「うん、まあ、恋仲ってのはそういうもんでしょ？」

「……僕にはよく分からないけど」

「これから分かるよ。穂波ちゃんと一緒に居れば嫌でもね」

「……」

人をからかうのはやめてほしい。

「あー、八代顔真っ赤っかだよ。かーわーいーいー」

「うるさいな！」

「実際どうなのさ？ 思いっきり抱きしめちゃってたじゃないの。

感触とか、ほら、その辺」

「脇腹の痛みが勝ってて全然覚えてない」

「えー、嘘だあ？ 絶対嘘でしょ？」

「ていうか、君、キャラが若干変わってないか？」

「嘘じゃない」

「いやまあ、嘘だったけど。」

本当は、その。柔らかい部分が当たってるとか、若干そういうやましい考えも、まあ、なかったわけじゃない。ただ、あの時はそれよりも彼女を守る方に夢中だった。彼女を愛しいと、そう思う気持ちの方が上だったただけだ。

「ま、それも結局演技——フェイクに過ぎなかったわけだけど」

「穂波ちゃんを愛しく思う気持ちは演技じゃないでしょ」

「……やっぱキャラが変わってるだろ、君」

「そんなことないよ、ただ、自由になっただけ」

自由になっただけ、か。

「なあ須原」

「ん？ 何かな」

「僕はちゃんと『清算』出来たのかな」

「勇に聞いてみたら？ でもま、私としては上出来だと思うけどさ」

セイサンシャ、それはつまるところ『清算者』だ。

畑中勇と、32号機関の過去を、須原星屑とのいざこざを、清算した。

僕の過去を、無才未尚という影に縛られていた僕の空蟬を、清算した。

畑中穂波の過去を、一人では立てない娘の哀れな勘違いを、清算した。

須原愛乃の存在を、永遠という過去に縛られた彼女の生を、清算した。

「……畑中はさ、なんでメルシングが殺せなかったんだ？」

「単純に、お兄さん——勇の影に引っ張られてたんだと思うな」

兄の影に引っ張られていた、か。

「それは多分、本当に単純なことだ。無意識のうちに穂波ちゃん、やっぱりお兄さんを探してたんだと思う」

「探していた……」

「うん。それで、自分の中に見つけちゃったんだ。お兄さんを」

自分の中に、兄を見つける。

それが、メルシングを殺さないという行為。だけどそれは、根本から間違っていた、というわけか。

「そ」

「彼女のそれは、単なる甘えでしかなかった。そうしていることで、自分の平生を保つ手段でしかなかったんだろうな」

悲しいかな、それは僕と同じような低俗な過ちのようにさえ思える。まあ、本質は全然違うんだけど。

「うんまあ、そんなところじゃないかな」
だから。

「彼女にあんなデマを吹き込んだわけだ」

「あれは元々勇の考案だよ」

「だとしても、執行者なんて。少々お粗末じゃないか？」

「……あれでよかったんだと思う。やっぱり、合理的な理由っての

は必要じゃない。フロイトの防衛機制にもあるでしょ、合理化ってのがさ」

「何を合理化するんだよ」

「そりゃあ、勿論。私を殺しちゃったことをさ。君を守るため、でもいいし、執行者から逃れるため、でもいい。結局のところ、勇には前科があるからね、君っていう。穂波ちゃんと同じ過ちを繰り返したくなかったんだと思うよ」

「……」

僕を前科扱いしやがった。

「そりゃまあ、そうなんだろうけど。僕は確かに、合理化どころの騒ぎじゃなかったけどさ」

「何せこっちの世界に来るまでとことん死んじやってたわけだからね」

「まあ、でもこの際」

君の場合。

「殺しちゃった、ってわけでもないだろ」

「ん……そうかな？」

「そうだよ。君はこれで……解放されたんだからさ。むしろ、生かされた、とでも言うべきだよ」

須原はメルシングだった。いや、メルシングになってしまった。

「確かにね、出口のないトンネルはトンネルじゃないもの。私に出口を作ってくれたっていう意味で、穂波ちゃんは私の命の恩人かもしれない」

そしてその原因は畑中勇にあった。当然、畑中勇は自責の念に駆られたことだろう。恋人に、永遠の命なんていう重すぎるものを背負わせてしまったのだ。

「私はね……違うんだよ。君、お父さんの話を鵜呑みにしすぎだつて。勇が悪かったんじゃない。私が勇を庇ったの。そうするしかなかった。いや、私がそうしたかったの。八代、君が穂波ちゃんを庇ったようにね」

「……そうなのか？」

「そうなの。だから、私が責められることはあっても勇が責められることは絶対になかった。私がちよっと出しゃばりだっただけ。アハハ、傑作だね」

須原はまた笑う。

「だけど——そんな中途半端な永遠の命貰って、君だって嫌になったことがあっただろう？」

「………なかったよ」

少し大きな間を置いて、須原は否定の答えを口にした。

「本当なら、私たちはもっと前に、逢えなくなってたんだもの。勇ともうちよっとだけ長く一緒に居られる。それだけで私は幸せだったから」

「ポジティブなんだな」

「うん、まあそうかもね」

まあ、なんだろうな。

畑中勇。

ジョーカー。

無才未尚。

同一人物。

「全く、一人二役ならともかく、一人三役だもんな、天才は違うよ」

「アハハ、全くその通りかもしれないね」

「それにしてもよくやったと思うな、我ながら」

「うんうん。よくやったよくやった」

「でもこの清算って全部、結局畑中勇の清算じゃないか」

「ん、そうかな？」

「とぼけるなよ、どう見てもそうだろ」

「うーん、そうと見てとれないこともないねえ」

「それを何で僕がやらなきゃならなかったんだよ」

僕のも確かに含まれていたとはいえ、4分の3が僕とは無関係じゃないか。

「……それはさ、帰ってから君が直接聞きなよ。やっぱりそれが一番いいと思うしさ」

「……」

それだけ言って、須原は、僕から一歩引いた。

「そろそろ帰りなよ」

それから僕に小さく手を振る。それは追い払うような仕草にも見ええた。

「君はもう、生きてる。こっちに居ていい存在じゃない」

「……そうだな」

僕はもう、生きている。

「ほら、穂波ちゃんが心配してる。早く戻って、安心させてあげなよ、君は生きてるんだ、ってさ」

「……」

夢のような始まりで始まった夢のようなお話は、やっぱり夢のよ
うな展開をして、そして夢のような終わりを迎えるのだった。

「でも、これでいいのかもな」

所詮天才じゃない僕には、こんな夢みたいな結末が似つかわしい。
夢を見るのは凡才の特権だ。

「じゃ、そろそろ帰る」

「うん、それがいい。そうしなよ」

僕は最後に、須原に手を伸ばした。

「握手」

何の躊躇もなく、彼女はそれを握ってくれる。畑中よりも一回り
大きな、優しい手だった。

「ん、じゃ、今度こそさよなら。天才君」

「……………つたく。……………それじゃあな」

そして僕は。

僕の銀色の記憶は、そこで途切れた。

43. エピローグ

軽く後日談を語るくらいの権利は僕にだってあっていいだろう。だから軽い気持ちで、この蛇足は読んで欲しい。

さて。

夢は夢でもそれはやはり悪夢だったとしか言いようがなく、とはいえ僕にとってそれが全て悪夢たる悪夢だったかといえばそうでない部分も過分に含まれていて、とにかくそんな不思議な一週間が終わって、それから二日。

本日は日曜日だった。

『椎奈、私は腹が減った』

「わかってるって」

僕は今、ベッドの上にいる。自宅のベッドだ。

あの後僕は気を失って、そのまま文化祭を早退してしまったのだそう。まあ、自分のことながら、色々と無理をしたのだから無理もない。僕の脇腹に根本まで深々刺さっていたナイフは、後から推測してみると本当に小さいもので、それこそ銃刀法に違反しない程度、刃渡りは十センチなかったのだろう。その上刺さり所がよかったのか内臓もほとんど傷ついておらず、身体の方に残った傷も大したものではなかったらしい。だから、というわけではなからうけども、治療はなんと美鈴さんがしてくれた。ただそれは、ホ○ミのよくな呪文一言で、といった具合に治療してもらったわけではなく、本当に縫い合わせてくれたのだから驚きである。驚きというか、実のところかなりの勢いで不信感に満ちあふれていたのだが、それは彼女が医師免許を持っているということ——これも全く実しやかではないが——一応納得の終わりを見た。いつも身につけているあの白衣のような衣装は、そういう複線だったのだろうか。

そんなこんなで今朝目が覚めて、畑中に付き添ってもらってようやく、僕は我が家に帰ってきたというわけだ。今のところ、向こう一週間は安静ということになっている。自宅療養なのは「病院に行くといろいろ面倒臭いから」だそうだ。僕はそれでもいいと言ったのだけれど、そこはそれ、大人の事情というものがあるらしかった。とりあえず僕にはよく分からない話であるが。

「しかし畑中もさ、親父が帰ってきてるっていうのにな……」

『本人にそう言えばよろう』

「言えるかよそんなこと。追いつけそうとしたら阿修羅のような形相で睨みつけられたんだぞ……」

後始末はすべて、龍ちゃんらがやってくれたらしい。畑中と須原が派手に暴れまわった屋上は、まるで何事もなかったかのように綺麗になったのだそうだ。そして須原は、転校したことになった。ありきたりすぎる後始末の付け方に僕は少々拍子抜けしたが、しかしその手はずの良さも、考えてみるとジョーカーが全てを計画済みだったからという点に落ち着くわけで。

畢竟、何もかも、平和になった。

まるでこうなることが必然とでも言いたげに、時計の針は穏やかに時を刻む。

ま、そうなんだけど。実際、予定調和だったんだけどさ。

ひとつ問題があったとすれば、親父が畑中のことを何かそういう人として勘違いしているという点だが、それについては今考えるとただただ憂鬱になるばかりであるから、後回しだ。

ああ、ところで、これは今朝目が覚めてすぐの話だけれど、アロマの香りが微かに漂い、天井からいくつもぶらさがった白熱灯だけが照らす緩やかに薄暗い部屋で――僕の治療をしてもらっているときは頭上に強烈な光の球が浮いていた記憶が薄ぼんやりとある。多分魔法だろう――僕はベッドに横になったまま、傍らに白衣を纏った美鈴さんの姿を見つけた。長い黒髪が後頭部でくくられて、頭に花が咲いたみたいになっていたのを覚えている。大まかに状況把握

をした後で、まずは一番に気になったことを美鈴さんに、つまり須原星屑について、僕は聞いてみた。するとどうだ、割合軽い声が返ってきたのである。

「あん？ 踏んで縛って叩いて蹴ってじらして吊るして、で……、最後に放置プレイしておいたわ」

と。いや、軽く返されても困るような内容ではあるのだが。誰か彼にひらがなで復活の呪文を。

「まあ、つまり逃がしてあげたわけよ」

彼女はあっさりと、そんなことを言う。当然、疑問がないはずがない。そこで僕がどうして？ と聞くと美鈴さんは面倒くさそうに溜息をついてからこうも言った。

「もう十分、懲りてたのよ。生きる目的を失った……死を待つばかりの蟬みたいな目をしていたわ。Sってのは相手の反応を見て楽しむのであって甚振ること自体が目的じゃあないからね。ま、それは拷問に関しても同じだけど」

死を待つばかりの蟬、か。その比喩の是非は置いておくとしても、その意味がわからないということはない。美鈴さんも龍ちゃんも、なんだかんだ言って結局いい人なのかもしれない。とはいえそこは当分、曖昧にしておきたいところだ。

ふうん。感想は、ない。感慨も、ない。感懐も、ない。なにものもない。奴がどうなろうと知ったことではなかった。ただ、ある意味の同類として、多少の共感がないでもなかった。でもそれはやはり憐れみによる同情に過ぎず、いやそもそもそうでなければならぬ。だから、僕は何も言わない。

結末はいつも、そうなるべくして訪れる。

そんなこんなで。

「なあフー、聞いてもいいか」

とにかく僕は、持て余す暇をフーで潰しているのである。傍から見ればひたすら腕輪と会話する、いや普通の人間には会話にすら聞こえないわけだから、ひたすら独り言を言っているひたすら危ない

人間に見られかねないが。

『なんだ?』

「あの少年はさ、結局何者だったんだ? ああ、頭がぼさぼさの……」

『ああ、あの言葉使いが乱暴な奴のことか』

そうそう。

『まあ、雇われだな。昔ジョーカーに恩を買っていたこともあったそう。詳しくは知らんが』

「へえ……まあ、そんなところが妥当だよな」

何の捻りもない種明かしだった。つまらない。

『いや、どうも奴と同じところ出身だったとか、そんな話は聞いたことがあるような』

「同じ、ところ?」

『……いや、だめだ、思い出せん』

使えない奴だな。

「なあ、お前は結局のところ、最初から最後まで知ってたんだらう?」

『……うむ。まあ、そういうことにもなるな』

そういうことにしかないよ。

「だとしたら随分演技派だったよ、お前は」

『私は適度にアドバイスを与える役回りだったのだ。その役目は十分に果たしただらう。それにそれを言うなら貴様もだぞ、椎奈』

「何がだよ?」

『かなり初めの方から……お前は真相に気付いていただらう』

「……さあね。どうだろう。僕自身、須原があんなことになるとは予想できてなかったわけだけど、そのところどうなんだ?」

『どうもこうも——意図的に畑中穂波と仲違いした辺りから、見ている私としては心安からん状態だったぞ』

「そうかい?」

僕はそっけなく答えた。

『……それはいいとして。畑中勇の話は聞いただけだろう？ あいつは封じ屋としての現役時代、多くのメルシングに恩を売っていたからな。封じ屋はメルシングから嫌われていたが、奴らは畑中勇には良心的だった。私もその中の一匹に過ぎん。そして奴にとって便利な立ち位置にいたから使われただけ。それだけの可愛そうなメルシングだ』

「ふうん……あの猫耳の野郎もそうなのか？」

『そうなんじゃないのか？』

なんだ、その曖昧な返答。やる気が感じられないな。

『やる気がないからに他ならんな。テンションゲージ、ただ今ゼロだ』

「そうだろうとは思ったよ」

かのゲームでテンションゲージがMAXになることはなかったけど。やりこみ不足か。

全く。

黒幕かと思わせといて、でも実は違う……と見せかけて、やっぱり黒幕——なんて、ありきたりだけどころこん嫌などん返しである。面倒臭いにも程があるじゃないか。ジョークもほどほどにしてほしいところだ。

と、もう百万回はしたろう独白で思考を紛らわしていると。

傍らに置いていた携帯電話が、震えだした。

「！」

このタイミングでかけてくるか。須原なんかいなくても、ジョーカーには僕の思考と行動が筒抜けなのではないかと疑ってしまいたくなるな。

『でないのか？』

「でたくはないけどね」

言いつつ、それを手に取り、通話ボタンを押す。

「はい、もしも」

「こんにちはジョーカー君」

「……」

電話の主は、少し懐かしい、そして嫌に耳につく低音だった。

「御苦労さまだったね」

「ああ。まったく苦労させていただいたよ」

「君には……もう散々、言いたいことも言い尽してしまったからな。最後に、何か質問があれば受け付けよう」

「……」

なんだ、こいつ。本当になんなんだ。絶対聞いてただろ、僕と須原の会話。だが、そこに遠慮が介入する必要はない。僕は淀みなく口を動かした。

「なんで、この腕輪だったんだ」

「綺麗だったからだよ。私の所持品の中で最も慎ましやかな美しさを保持していたからさ」

「この文字列はなんだ」

「単なる落書きさ。誰でもやるだろう、暗号めいた文章を残すなんて」

「なんでフーだったんだ」

「可愛らしかったからだ。君には似つかわしいと思ってね」

「なんで男に猫耳が生えていたんだ」

「もののあはれというやつだ」

「それは違う！」

「くっ、そうかね？」

昔の人たちに謝れ。特に本居宣長に謝れ。

「須原はどうして、あの終わりを選んだんだ？」

「さあ。それは私には答えかねる。だが、彼女に選択肢を用意したのは確かだ。私にはそれくらいしかできなかったからな」

選択肢、か。死に方を選ぶ、ということだろう。

彼女は望んで、畑中穂波に生かされたんだ。

それは多分至極当然の結末で、何度やっても、何度繰り返しても、須原は同じところにたどりついたに違いない。そしてそれは、それ

だけ彼女が畑中のことを慈しみ、信頼していたということだ。

メルシングは欲望のままに行動する。須原だって例外なく、彼女の思うままに行動したに違いなかった。それなら救われる。須原も畑中も。二人は、結末を迎える前から、既に救われていた。

とか言って、こんなのはほとんど希望的観測って奴だけだな。

「……じゃあ、もう一つだけ教えてくれ」
どうして。

「僕はどうして、あんたの為の『清算』をしなくちゃならなかったんだ？」

なんだ、と。受話器の向こうの声は、そんな風に言う。まるで、何でもないかのように。

「そういうことなら、簡単だ。君は私を殺したわけだからな、その責任くらいとらせてやっても構わないと、そう思っただけに過ぎんですよ。くっ」

いささか上から目線のものの言いに聞こえたが。自分を殺した責任を取らせる、か。全く狂ったジョーカーだ。いや、ジョーカーというのはそういうものか。笑い声は相変わらず、くつくつと僕を苛立たせる。

「……やはり僕は、あんたに何も言う必要はないんだろうな」
それはやっぱり、そうあるべきだから。

「ああ、その通り。君は十分すぎるほど私の為に動いてくれた。勤労賞をあげても構わない。だけどそれは私の、君に対する気持ちだっただけだ。それだけだよ」

「勤労賞ならいらん」

「くっ、そうかね」

まあ、それ以外の気持ちなら、もうとつくに受け取ってしまったが。

とつくの昔に、享受してしまったが。

「今後は友好的に……そうだな、メル友にでもならないか、ジョーカー君」

「本気で言ってるとしたら軽く引くぞ」

ビックバンをもう一度起こすと言われてもお断りだね。このジョーカーなら実際起こしかねないところが厄介だが。

「やはり君は面白いな。ますます面白くなった。ますますジョーカーらしくなったよ」

「……はあ」

だめだ、やっぱり僕は、こいつには敵わない。溜息と共にそんな想いが口から漏れ出た。

「ああ、そうだ。最後に一つだけ言っておこう」

「……？」

「君の家の玄関の立てつけの悪さには、気をつけた方がいい」

「……なんだそりゃ。余計な御世話だよ」

「ふふ。それでは、コングラッチュレイション、ジョーカー君。いつかまた会う日まで」

ブツリと。

電話は切れた。

「……そんな風に締めくくるのはやめてほしいところだな」
なんだかまた会いそうな気がしてくる。

『いいじゃないか。奴はお前の敵じゃない』

「敵じゃなくても天敵以上の何かであることは間違いないんだよ」
って、あ。

あ。

「ああっ！」

腕輪のはずし方、聞きそびれたじゃねえか！

「……あちゃー」

……なんてこった。

僕は静かに、右手で頭を抱えた。僕を嘲笑うかのような青い装飾品のついた右手で。

まあ、いいか。しばらくはジョーカーからの餞別としてつけておいてやろう。どうせ龍ちゃんや美鈴さんに聞けばいくらでも回答は

貰えるだろう。

いいことにしとけ。
と。

僕が携帯電話を再び折りたたんで置いた時、部屋のドアが開いた。

「あ、八代君、身体起こしちゃだめだって言ったじゃないですか」

「……畑中」

今日は薄いたんぽ色のワンピースを着た彼女は、ウェイターさんがするみたいに手にお盆を乗せていた。オリーブオイルが香ばしいペペロンチーノが見える。

「……ちなみにそれは、誰が作ったんだ？」

「？ 八代君のお父様ですけど。どうかしましたか？」

「あ、そうか。いやいや、いいんだよ。僕は君の手料理が食べたいなんて決して思ったりしてないから」

この台詞に対して特に曲解は必要ない。ツンデレを装ったただの素直ちゃんだからだ。

「……まあ、いいでしょう。私、料理下手くそですしあれ？」

「怒らないのか？」

「怒られると自覚した上でさっきの発言をしていたのならそれに対して怒られても文句はありませんね？」

「ごめんなさい」

即行で謝って、僕はとりあえず横になっておいた。

「全く……」

言って、ベッドの縁に木製のトレイを置いてから、畑中はベッドに腰掛ける。

「具合、どうですか？」

「ああ、うん。まあまあかな。今はそこまで痛まない」

「ごめんなさい」

今度は、彼女が謝罪の言葉を口にした。しかしそれは僕よりも幾分か深刻な声だ。

「聞き飽きた……いい意味でね。君は謝りすぎだよ。一週間前僕に言った台詞を思い出した方がいい」

確か、八代君はすぐ謝る、とか。そんなニュアンスのことを言われた覚えがある。

「いいんですよ、美鈴姉と龍の分も一緒に言ってるんです」

「……そう言われると、何故かものすごく納得してしまう僕がいるよ」

「それと、須原の分も」

あまりに違和感なく付け加えられたその名を前に、僕は一瞬息をのんだ。ほんの一拍を置いて、僕はそれに答える。

「そうか」

畑中は、割り切っているようだった。

何かを抑えているようでも、堪えているようでもない。ただ、吹っ切れた。彼女から感じる少女らしさには、そんな面がチラチラと見え隠れした。

あれでよかったとは、さすがにまだ思っていないだろうけれど。

あんな結末が、ベストエンドでトゥルーエンドだなんて、僕だって認めたくはないけれど。

だけど、この娘は強いよ。

なんたって、あんたの妹なんだからな、ジョーカー。

僕はもう一度だけ、枕もとの携帯電話を見る。

……。

……メルトモはやっぱ、難しいかな。

「私、頑張ります」

畑中は言った。

多分、ここ二日泣きはらしただろう目に、決意の色を浮かべて。

「ん、何を？」

でもそれでいいんだと思う。僕が実行した仕事だったけど、僕の清算じゃない。これは兄妹の、さらにひいては須原と畑中の問題であり、そこには僕が土足で踏み入れる余地なんてものは、完全絶無、

空前絶後、存在しない。だから、彼女は放っておいていい。

畑中穂波は、強い。

「……全部！」

なんだかちよつとアホっぽくなった気がしないでもなかった。

まあ、そういうのもありかもな。論理的すぎる娘ってのもあんまり僕の好みじゃないし。

そしてしばらく、静かだった。

畑中が持ってきてくれたパスタを食べようという気にもならなかった。だけどそれは、決して心地悪い静けさではなく、間を埋めなければ気が済まないような、そんな気まずい沈黙でもなかった。なんだか、とても居心地がいい。そんな、静けさだ。今朝僕が一日振りに目を覚ましてから、畑中は頻繁にこの「間」を作る。どうしたんだろう？　そうは思いうけけれど、こちらからそれを打ち崩すには少し惜しい気がして、僕は口を開けない。

響いたのは、畑中の声だった。

「八代君」

「……んー？」

畑中はどこを見ているのか分からないし、どんな顔をしているのかもわからなかった。ただ、ベッドに腰かけたまま僕とは顔を合わせないで、彼女は言う。

「なんであの時、私を守ってくれたんですか？」

あの時。

それは勿論、須原が畑中を襲おうとした時だろう。

「……君は気づいてなかっただろう、須原の存在に」

「それはまあ、そうですね、でもそういうことじゃなくて、そういうことじゃなくて。」

僕はぼんやりと天井を見上げる。いつもと変わりのない、僕の天井を、ピントを合わせることもなくただぼうと見上げる。

うん。

使いどころはここかな。

「人が人を、同種の生物を助けたいと思う気持ちに」

少し息を吸って、続ける。

「理由なんて必要ない。だろ？」

「……！」

「畑中、君の言葉だよ」

僕は彼女に背に言葉を投げかけた。

「……覚えてたんですか、そんな下らないこと」

「下らなくなんてないさ」

下らなくなんてない。

「最高に下る台詞だったよ。僕の中では上半期ベストを取ったね」

「……そうですか」

「しかもこの台詞には確か続きがあったと記憶していてね」

「！」

畑中の小柄な背中がビクリ、と震えたのを、僕は見逃さない。というか、ベッドが揺れて分かったわけなんだけど。

「確かこんな風が続くんだった」

僕は言う。

「そこに何かあるとすれば、それは」

畑中の言葉は僕がそこで遮ってしまったから、ここから先は推測になるわけだが。

「それは……何ですか？」

僕はもう一度、人為的に沈黙を作り出した。イニシアチブは、僕にある。歯がゆいような、どこか気まずいような、でも何だか甘酸っぱいような、そんな空白の時間。こういう時間を、僕は今まで過ごしたことがない。だからそれを十二分に味わってから。

僕は口を開いた。

「マナ、かな」

部屋が、再び静まり返った。

「……………はあ？」

「ほら、どこにでもあるだろ、マナって。君はつまり、そういう二

ユアンスのことを言おうとしていたわけだよな？ 何にもない、あ
るとしたらマナだけだって……」

「……帰ります」

あれ？

「あれ、ちょ、畑中さん？」

彼女は立ち上がって、スタスタとドアの方へ歩いて行ってしま
しまった、怒らせてしまっただろうか？ だとしたらこれはかなり
手痛いミスということになるが――

「……馬鹿、包帯取りに戻るだけです」

「あ、ああ、そう」

そしてそこで振り向いて。

そこにあった顔は、少女の顔。少女が一番可愛く引き立つ表情で。
最大級の笑顔で、少し意地悪げに、僕へ言った。

「だから八代君のそういうところは嫌いなんです」

「む……どういふところだよ」

「一番大事なところで恥ずかしがっちゃうところ」

そりゃ、どういう意味だ。ていうか、前と変わってるじゃないか。

「そのまんまですよ」

そして畑中は、カラカラと笑った。本当に年相応の、一つの影も
差さない太陽そのものみたいな笑みで。

「ちゃんとご飯食べなきゃだめですよ、じゃないと私の手料理食べ
させちゃいますから」

「君の手料理も食べたいとは思っけど、ま、今はけが人だからな」

「どういう意味ですか？」

「すいません」

僕は横になった。

出しゃばり過ぎると、ダメらしい。須原から得た教訓である。

「それじゃ、すぐ戻りますから」

なんて、畑中はドアをパタンと閉めた。

『私は予言する。貴様は大そうな恐妻家になるだろう』

「……僕に嫁ぐ嫁がいてくれたらの話だろ？ 仮定の話に興味はないね」

『仮定、ねえ』

フーは少し不満そうに唸った。僕はとりあえず、起きてパスタを口に含む。おいしかった。

「どうやって作ってるんだろう……」

そうやって口にする独り言も、何もかもが新鮮で。当たり前の日が、まるまる全て、全部が新しく思えて。

こんなものかな、僕の生活は。

生きるって、こういうことだろうか。

「ま、しばらくは難しいことを考えるのもやめだな……」

少しくらい休養をもらっても、誰も文句を言ったりはしないだろう。僕はそれに相当するだけ働いたという自覚がある。

全く、こんなに順調に滑り出すなんてな。少し、疑い深くなってしまう。

だけど、完璧なチェックメイトだった。

僕はもう、詰まされている。

しかし僕は一体どこに何を忘れていたんだろうか？ 分からない。今となっては何もわからない。だからこんな時だけ、結果論を振り回す人の気持ち、少しだけ分かる気がした。だって今、こんなにすがすがしい。これ以上はないってくらいに。過去を振り返るのは、もう少し先でいい。

そうだな、そういう点で言うと、七夕の神様ってのは、案外気がいいのかもしれない。

僕は七夕が、ちょっとだけ好きに……

いや、やっぱならない。

ただ、七夕を嫌いになった僕を許してやれる気はした。今はそれでいい。

僕は僕を救助した。その事実があればいい。

「人が人を助けたいと思う気持ちに理由は必要ない、か」

あるとしたら。

そこに何かあるとしたら、マナだけ。

「はは……」

違うな。

「違うよ畑中、君は勘違いをしている……」

重大な勘違いを一つ。

僕は一本、スパゲッティをすすってから、ひとりごちた。

だけどそれは、また今度。いつか別の機会に、教えてあげること
にしよう。

「だってどこにでもあるじゃないか、愛^{まな}っていうのはさ」

43. エピローグ（後書き）

お疲れ様でしたー。

本当にいろんな意味で。

終わりました。

完結させたという意味では、この作品は処女作になったりします。

いろいろ書きたいこともあるんですが、それはそれ。今はいったん自重しておくことにしましょう。

ここまで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。一生分の感謝を……まだほんの少しの年数分しかありませんが、差上げたいと思います。

というか、ささげたいと思います。

よろしければ、感想や評価など、好きなようにお願いします。

がいあとは率直な意見をお待ちしております。

質問などもあれば、気軽に声掛けてください。

答えられる範囲でなんでも答えます。

それではまた会う日まで、あでゅー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5207f/>

燈屑の街

2010年10月8日13時24分発行